
可憐な王子の騒がしい恋の嵐

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可憐な王子の騒がしい恋の嵐

【Nコード】

N8060D

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

女顔でチビで面倒ごとに巻き込まれやすい王子様、アドルバード。彼の国ハウゼンランドにはたくさんの姫君がやってきている。しかもその中には大国アヴィランテ帝国の第三皇女の姿まであって！？ヘタレ王子と美麗女騎士の恋の行方は？最強姫君と気の弱い騎士は進展するのか？陰謀やら策略やらの中であちこちから恋の予感が！可憐な王子のどたばたラブコメ第二弾です。

1：結婚相手くらい自分で決める！（前書き）

この物語は「可憐な王子の受難の日々」の続編になります。

こちらだけでも読めるようにしていますが、よろしければ「受難の日々」もご覧下さい。

1：結婚相手くらい自分で決める！

ハウゼンランドのリノルアース姫は赤みがかった金の髪に、青く澄んだ瞳、肌は新雪のように白く、十五歳でありながらも立派な淑女だという。

そう噂されている『リノルアース姫』の半分以上がその双子の兄にしてハウゼンランド第一王位継承者であるアドルバードが扮したものだ知っている人は数少ない。

「レイ！」

少し高めの、中性的な声が背後から聞こえ、呼ばれた騎士は振り返る。

銀色の髪は以前よりもほんの少し伸びて、肩に触れそうで触れない長さで揺れている。

知人でいなければ以前は間違いなく男性だと思うであろう。しかし今はその少し伸びた髪のおかげだろうか、間違われる回数が少し減った。彼女にしてみればどうでもいいことなのだが、彼女の主であるアドルバードが激昂するのだ。

駆け寄って来たのは予想通り、ハウゼンランドの王子でありレイの主人である、アドルバードだった。

「……アドル様。確か今は政治の講義を受けているはずだと思いますが、私の記憶違いでしょうか」

記憶違いではないことくらいは分かっている。送り届けたのは他ならぬレイなのだから。

「い、いや。おまえが正しい。それよりも話が……」

レイの眼光に腰が引けながらも自分の主張するのはアドルバード

ドの昔からの癖みたいなものだ。

「お話ならば後ほど。私は逃げ隠れもしませんので、どうぞご安心ください。」

そう言いながらアドルバードの腕を掴み、教師がいるはずの部屋へと連行する。

いつもなら大人しくされるがままレイに連行されるアドルバードが、珍しく暴れまわった。

「嫌だ！ それどころじゃない！ 親父が俺を他国に売り渡すかもしれない！」

「何を親不孝なことをおっしゃってるんですか。国王陛下はきちんとアドル様のことを考えていらっしゃるじゃありませんか」

「あのな！」

アドルバードが腕を振り解き、立ち止まる。

「あの親父は俺に縁談なんか持つてきやがったんだぞ！」

ほんの一瞬だけ、レイが息を呑んだ。

そのわずかな変化を捉えられるのはアドルバードくらいなものだろう。

「……確かに、アドル様くらいの年齢になれば婚約者を決めるのが普通でしょうし」

というよりは、十五歳になるまで婚約者の一人もいなかった方が変なくらいだ。曲がりなりにもアドルバードは一国の跡継ぎなのだから。

「結婚相手くらい自分で決める！ それに人数が半端じゃない！」

「……どういことですか？ ハウゼンランドは一夫多妻制ではありませんよ。アドル様は法律でも変えるおつもりですか？」

「だから俺は関係ないし後宮なんていらないし妻は一人でいいしそれだってっ」

と言ったところでアドルバードが慌てて自分の手で口を塞いだ。

真っ赤になった顔からその続きなんて簡単に推測できた。

「……私の身長を越してから、と条件をつけたのはあなたですから

ね。アドル様」

別に、そんなこと私は気にしていないのに。

「わわわわ分かっている！ 別に俺は何も言っていないし結婚するのはおまえに決めてるなんて言っていないし！」

「言ってますでしたけど、今言ってます」

冷静にレイが指摘すると、アドルバードはますます顔を赤く染め上げた。

「アドル様、もうどうせお互いに隠すのも意味ないことですから気になさなくて結構ですよ。それよりもきちんと現状を説明してくださいませんか？」

隠すのも意味ないって、口から出してるのは俺ばかりじゃないか、とアドルバードはぶつぶつと不満を呟く。

「身長を越してから」

「ああもう分かってる！ 条件つけたのは俺だよ！ それまで俺はおまえの主だし、おまえは俺の騎士だ！ それでいいだろ！」

怒ったように言い切って、アドルバードは一度呼吸を整える。

「親父が、縁談を持ってきた」

「それは先ほど聞きました。人数が半端じゃないというのは？」

レイが質問すると、アドルバードは頭を抱えてしゃがみこんだ。

「……つまりは候補になったあちこちのお姫様を何十人と集めるらしい」

「正確な人数は？」

「今のところ……にじゅうさんにん……」

最後のほうが力なく、弱々しくなっていたのは精神的な問題だろう。

「それは随分とかき集めましたね。弱小国のハウゼンランドが」

「……この間のアルシザスとの同盟で、一気に大陸中に知れ渡ったからな。今じゃリノルの名前と一緒に大陸中の噂の的」

数ヶ月前に、アドルバードは大陸屈指の大国であるアルシザスとの同盟を結んできた。その裏事情はいろいろとあるのだが、まあそ

れはおいて置く。

「それで、姫君方はいつ？」

「来週から、続々と集まってくる」

「よくここまで隠せましたね、陛下も」

アドルバードだけならまだしも、レイにも今の今まで隠し通したのだ。いつもの穏やかな国王からは想像できないような行動っぷりだ。

「アドル様も、嫌なら嫌だと陛下に申し上げればよいでしょう」

「……もし嫌だと言っても叶わなかった時どうするんだよ」

まったく、子供みたいなことを言っているとレイはため息を吐き出す。

「その時は……そうですね」

駆け落ちでもしようか。

そんな冗談も思い浮かんだが、アドルバードだと実行に移しかねないのでレイは言わずにおいた。

「アドル様には女装癖があるので止めたほうがよいですよ、とお相手に進言します」

「趣味じゃないだろ！あれはリノルの為にしようがなくて……！」

「では妹の為に女装するほどのシスコンですとも言いましょうか？」

「女装から離れる！」

間髪入れずに怒鳴り返すアドルバードにレイは顔色一つ変えずに続ける。

「用は、相手全員にこんな王子との婚約は嫌だと思わせればいいんでしょう」

「なんだそれ！ 俺の評判ガタ落ちか！？」

それが一番簡単な方法だというのにアドルバードは不満らしい。

「……大丈夫ですよ」

たとえ相手が誰であろうとも。

あなたを害するすべてから。

「私が、あなたを護りますから」

「……………」

ふて腐れたような、気恥かしいような、そんな顔でアドルバードがそっぽを向く。

「アドル様？」

「……………たまには俺にそのセリフを言わせろ、馬鹿」

くすり、とレイが思わず笑う。

いじけていたのか、嬉しいのか、そのすべてが織り交ざったような表情で。

「駄目ですよ、私の特権ですから」

1：結婚相手くらい自分で決める！（後書き）

こんにちわ、はじめまして、またはお久しぶりです。

お久しぶりの方は大変お待たせしました。ちらほらと続編希望だと前作のコメントに書いてくださった皆様、どうにか続編始めます。番外編もちびちびと書こうと思ってるので見つけたら覗いてみてやってください。

苦労人のアドルバードの成長を皆様見守ってあげてください。

感想、批評などありましたら一言からでもお願いします。

2：どうして俺はこんななんだ！？

「世の中物好きもいたもんねえ」

一枚の紙にずらりと並んだアドルバードの婚約者候補達の名前を眺めてリノルアースがしみじみと呟く。

切羽詰ったアドルバードとは違ってリノルアースは優雅に紅茶を飲んでいた。双子の兄の危機だというのに手を貸そうという素振りはない。

「……リノル。それはどういう意味だ？」

「アドルのことじゃないわよ。こんな北の田舎国に嫁ごうってことが物好きって言うてるの。私ならごめんだわー。だってイルファンドの姫だったら選り放題だし、うわ、アドラスまで。凄いわねえ、ほんの数年前ならありえないようなお国からのお話よう」

リノルアースが上げたのはどれもハウゼンランドでは遠く及ばないような大国の名前だ。もちろんその分やってくる姫君も第八王女とか第十五王女くらいなものだが。

「南の国のお姫様じゃ数ヶ月ともたないだろ。極寒の地だぞ」
イルファンドもアドラスも遠い南の国だ。山に行けば一年のほとんどで雪を見ることができ、雪国のハウゼンランドでは生きていけない。

「凍死するかしら？ それはそれで見ものよねえ」

恐ろしいことをさらりと吐きながらリノルアースは美味しそうにケーキをつつく。

それこそリノルアースは結婚相手など選り放題の状態だ。大陸中に知れ渡る美貌のおかげで何十もの縁談が飛び込んできている。その手紙を読まずに暖炉の火に放り込んでいるらしいが。曰く、「私の顔も見たことのない、性格も知らずに噂だけで縁談持ってくる男なんて信用できない」だそう。本当の真意をアドルバードは知らない。

「……それにしても、縁談を持ち出すなんて陛下らしくもないですね。今まで随分と暢気にしていらっしゃったのに」

リノルアースの紅茶を継ぎ足しながら、彼女の騎士でありレイの弟でもあるルイが呟く。

彼の言うことも最もだ。野心のある国王ならば早々に大国へリノルアースを嫁がせるだろう。しかし手紙を焼き捨てているのを黙認している。アドルバードに関しても口うるさいことの言わない、温厚な父だ。母親も同様に。

「知るか。リノルは放置なのに俺ばかりこんな目に遭わせやがって。理不尽だ」

「それは今更でしょう」

アドルバードの婚約者候補についてまとめられた書類を持ってレイがやって来る。

両親は双子を分け隔てなく、平等に愛情を注いでくれたが、最近では女の子のリノルアースと男の子のアドルバードで違いが出てきた。簡単に言えば男の子だから多少の危険は平気だろう、とそういうことだ。実際は多分リノルアースの方が上手く切り抜けけると思うが。

「それに、アドル様は後継者でもありますし。婚約者がいないと王位争いで不利にもなりますし」

「王位争いって……物騒なこと言うな」

「暢気に構えてるのはアドルだけよ。ハドルスもルザードも皆腹の底では王座を狙ってるんだから」

ふん、と面白くなさそうにリノルアースが言う。

ハドルスもルザードも二人の従兄弟だ。

「暢気につて……一応分かってるよ。でも第一王位継承者は俺だし、それは父上でない限り変えることは出来ない」

「変えさせるつもりもないわ、誰にも」

リノルアースのそこ宣言はそこらへんの男でも叶わなくらいに男らしかった。こういう一面を知っているのに女の子だからと甘や

「レイの家系は皆背が高いもの……ってルイは養子だったわね。それじゃあ当てはまらないか。どこの国の人かも覚えてないし」

リノルアースがじっとルイを観察し始め、ルイは居心地悪そうに後退する。

銀髪に碧眼、色白のレイとは似ても似つかず、ルイは黒髪に緑色の瞳、肌はハウゼンランドの人間よりも濃い目だ。

「それこそ……南の方の特徴よね？ それなら余計に体格は良いはずだもの。アドルじゃあ足元にも及ばないでしょう」

「言われて見れば……そうですね。気にしたことがなかったのだから、ルイがまじまじと自分の肌の色を見て呟く。

物心がつく前にバウアー家の一員となって、当然のように成長したので自分の出身を気にしたことなどなかった。ルイにとってはハウゼンランドが故郷だし、バウアー家が育った家だ。

「……………これは……………」

書類を並べていたレイが呟く。その響きが驚いたようであったので、三人とも振り返った。

「どうした？」

「……………随分と物好きな方が」

レイが一枚の紙を持ち上げる。

三人がそこに書かれている国の名前を見て目を丸くした。

「アヴィラ！？ あのアヴィランテ帝国！？ なんてそんな大国のお姫様が来るのよ！？ しかも第三皇女だぁ！？ 狂ってんじゃないの！？」

「結婚ていうか侵略じゃあ……………」

アヴィランテ帝国 通称「アヴィラ」は千年以上の長い歴史を持つ帝国で、南一帯の広大な国土を持つ。ハウゼンランドも使い物にならない雪山などで国土だけはそれなりに広いが、アヴィラとは比べ物にもならない。

「シェリスネイア姫って……………あたしに並ぶ美貌の姫君じゃないの！」

「そこで自分を出せるあたりが凄いと思うぞ。俺」

アドルバードが呆れたようにリノルアースを見る。ルイも主人に気づかれない程度に頷いて同意する。

「何よ！！ 南の姫、北の姫って大陸じゃ区別されてんのよ！？

あたしの顔はそれだけの利用価値があるのよ！？」

「……それはつまり俺の顔でもあるわけだが」

なんて言っても双子なわけで。

男と女という違いを除いてはそっくりなのだ。さすがに微々たる違いが見え始めてきたが、他人では区別できないほどの差だ。アドルバードが女装すれば見事にリノルアースだし、その逆もまた然りだ。

「……少し、気にした方が良さそうですね」

今まで黙っていたレイが静かに呟く。

本気でアヴィラから縁談が出されれば、ハウゼンランドからは断りにくい というより、断れない。

「どという目的があるのか図りかねるわ。まさか大事なお姫様をこんな国に渡す気はないでしょうし、うちと繋がりが出来てもアヴィラに特なんてないもの。利益のないことで国は動かないわ。アルシザスの馬鹿な国王を例外として」

策略を見破ろうとするリノルアースの目つきは美しいだけの姫君などではない。獲物を狙う猛獣のごとく鋭い。

「なかなか面白い催しになりそうじゃない？」

相手の狙いを見抜き、さらにその上で自分に利益があるように立ち振る舞う それはリノルアースには面白いものなのだろうが。

「……………気が重い」

策略も、謀略も、この際政治戦略も何もかもどうでもいい。

穏やかで静かな日々を送りたいというアドルバードのささやかな願いは当分叶いそうに無い。

3：ハウゼンランドの女は強い

随分と熱心にアドルバードの婚約者候補の資料を読みふけるレイを眺めて、アドルバードはため息を吐く。

「……何だってそんなに真剣に読んでるんだ？」

二十三人分も。

「いつ何時アドル様に近づかれるか分からない方々ですから。どういふ方なのか頭に入れておくことは当然です。いざという時の優先順位の決定にも重要ですし」

「大国の姫なら俺を差し置いて助けると？」

おまえの主は俺だぞ、というアドルバードのセリフに、レイはため息を吐き出しながら「誰がそんなこと言いました」と呟く。

「私を守るべきはアドル様お一人です。それだけは世界が崩壊しようと揺るぎません」

きっぱりと言い切られると、後に続けない。

アドルバードは赤面して飛び出しそうになっていた文句をすべて消化しきった。

「お熱い愛の言葉ね」

アドルバードの隣で呆れたようにリノルアースが呟く。

「う、あ、あいつて……」

そんなんじゃない、レイはただ騎士として言っただけで
弁解したいのに口が上手く動かない。

「アドル様があまり気づいてくだらないので悲しい限りです」

「鈍感な男って駄目よねー」

世間話をするような気楽な会話にアドルバードは口をぱくぱくさせるだけで何も反論できない。

これはもう真意はどうでもいいとして、二人はアドルバードをからかうことを目的に会話している。

「くそう……」

ハウゼンランドで最強の二人が揃ってしまえば、たとえ王子であろうとアドルバードでは手も足も出ない。

「諦めた方がいいですよ。どうせ勝てませんから」
達観したようにルイがアドルバードの肩を叩く。

先ほどから給仕のようにお茶を注いでくれているのはルイだ。日ごろからリノルアースの給仕もしているせいかな様になっている。

「勝てなくても勝ちたいと思うのは男の本能じゃないのか!？」

「そんな無駄な本能はとうの昔に捨てました。勝ち目がないのに突っ込んでいくのは馬鹿のすることです」

きっぱりと男のプライドともいえる本能を捨て去ったルイは淡々としている。

こういう時の物言いがレイに似ているのはやはり血のつながりがなくとも共に育った姉弟だからだろうか。

「女を服従させたいなんて男は海の藻屑となってしまうなさい。従うだけの古い女はハウゼンランドにはいなくてよ」

「ふ、服従っていうわけじゃあ……」

微妙にいやらしい響きに感じてアドルバードは口籠もる。そこ到最后の一撃をレイが加える。

「形としては異なりますけど、私はアドル様に服従していることになるんですが」

剣を誓った騎士ですから、という後半の言葉はアドルバードの耳には届いていない。

冷静になろうと紅茶を飲んでいたアドルバードが一気に吹き出す。

「お、おま、何を急に言い出すんだ!！」

「主従関係なんですから間違いではありませんが」

「言い方があるだろうが言い方が!! それとも何か!？ 俺をからかってそんなに楽しいか!？」

逆ギレとも言えるアドルバードの行動に冷静に無視しながらレイはアドルバードが吹き出したせいで濡れたテーブルを拭き取る。絨毯の方は既にルイが吹き始めているが、少し染みになるかもしれない

い。

「主従関係以外の変な想像をさせたのなら申し訳ありませんでした。そんな趣味があるとは思ってもみなかったので」

「んな趣味無いわ！ ていうかそれ謝ってるつもりで俺を陥れようとしてないか！？」

「主人を陥れてどうするんですか。私が路頭に迷う破目になるじゃないですか」

「ああもうっ！ さっきから全然資料読んでないだろ！ そんなんで頭に入ってるのか！？ これは！？」

勝ち目は無いと悟った論争から逃げるためにアドルバードは一枚の肖像画をとる。全員ではないが、余裕のある国ではご丁寧に姫君の肖像画まで送って寄越したのだ。

「ジェラス王国第八王女エリス・カタリア・リリアーナ・ジェラス様です。髪は亜麻色で瞳は緑。身長は大体154cmで体重は未発表、ご趣味は詩作や刺繍だそうです。ちなみにジェラスはハウゼンランドより西にあるカナード山脈の向こう側にある温暖な気候の国で今回は姫君がいらっしゃるので山越えではなく遠回りですが海路を使っていらっしゃるそうです」

「じゃ、じゃあこれは！？」

「それはアルシザスの隣国であるルイザニア王国の第十一王女のリエネスティータ・ロロイド・リア・ルイザニア様です。髪は南国特有の黒で瞳も同様に黒です。肌はアドル様もよりも濃いです。趣味は音楽鑑賞で身長は162cm、アドル様よりも高いです」

「余計なことは言わんでいい……」

身長とか。

完全な敗北にアドルバードはがつくりと肩を下ろす。

「だから勝てないって言ってるじゃないですか」

呆れたようにルイが呟く。

勝てなくても勝ちたいんだよ、男としても主としても。さすがにそう言う気力はアドルバードには残っていなかった。

「…… どんだけ覚えてるんだよ」

「必要と思われる分だけです。どうせ皆様が帰国されれば予備知識として多少覚えていけばいいだけですし」

「それでも覚えとくのか……」

レイの記憶力に半ば呆然とする。

「当然です。どんな時に役立つか分かりませんから」

きつぱりと言い切ってるので、おそらく本気だろう。

その努力もすべて自分の為にやってくれているのだと分かるから、余計に居たたまれない。アドルは勉強嫌いだし、記憶力もないのでいつもレイに頼りつきりだ。

それではやはり駄目だとアドルバードは自分を叱る。

す、と何気なく一枚を引き抜き一読する。

「? どうしたんですか、アドル様。好みの方でもいましたか?」

「…… 肖像画でもない文章だけの紙でどうやったら好みだとか分かるんだよ。ていうかどうでもいいし、正直」

どんな姫君が来ても、アドルバードの中で一番は随分と前から決まっっていて、それは揺ぎ無い。

「おまえに頼ってばかりもいられないからな。俺も出来る範囲で覚えとく。長つたらしい名前と国くらいは、な」

彼女が自分の為に努力を惜しまないのなら、自分も同じように努力すべきだ。彼女に相応しくある為に。

「少しは成長したじゃない」

リノルアースが感心したように微笑む。

「双子のおまえにんなこと言われたくない。成長してないのはおまえもだろ」

「女と男じゃあ女の方が精神年齢は上よね」

精神年齢というよりも腹黒さだと思うが、それを口にすれば鉄拳が飛んでくるのは間違いない。

「どうせおまえには勝てないよ、レイにもな」

「男は須らく弱い生き物ですからねえ、ハウゼンランドでは」

ルイがしみじみと紅茶を飲みながら呟く。給仕は終わってやつと休憩できるようになったのか。

「バウアー家でもか」

「あの剣聖と称えられた父も母には敵いません」

レイとルイの父であるデーク・バウアーは双子の母親である王妃の騎士を務め、剣の腕前を評価されて貴族の位からも別格の『剣聖』という称号を与えられた。だからこそ弱小貴族である姉弟が双子の騎士として側にいることが許されているのだ。

「ハウゼンランドの女は強い……」

アドルバードは肩を落とし、ため息と共に吐き出す。

それはもはや遺伝子にまで組み込まれた覆しようなない事実なのだろう。

3：ハウゼンランドの女は強い（後書き）

とりあえず書き溜めた分だけ公開します。

更新は早めにを目標に最後まで走り抜けます。こいつらはいつも暴走するので飼い主としては一苦労ですが。

アドルの苦悩の日々はまだまだ終わりません。皆様どうぞ見守ってあげてください。

4：世間一般には一目惚れも存在しますから

「遠路はるばるようこそおいでくださいました。あるのは雪くらいで珍しいものなど何も無い田舎ですが、どうぞごゆるりとご滞在ください」

張り付いた完璧な笑顔のまま、アドルバードは慣れた口調で目の前の姫君に言う。ついでに手の甲にキスまで送るサービスぶりだ。慣れるのも当然、あちらこちらの国から姫君はやって来て、国王への挨拶の後にはもちろん『婚約者になる予定』の王子にも挨拶する。今言葉を交わしているのはどこぞの国の第五王女だか何だかだ。「王子のお噂はかねがね聞いておりますわ。優秀でいらっしゃいますのね」

「どのような噂かは存じませんが、私は平凡な人間ですよ。ご期待に添えなくて残念ですが」

社交モードなので『俺』ではなく『私』と使う。こうして挨拶する以上の交流は求めていない姫にはこれくらいで充分だった。

身長を気にしなければ、アドルバードは美少年だ。双子のリノルアースの美貌が大陸で噂的になっているのだから、それはある意味当然だった。王子としての仮面を被ったアドルバードはどの姫君の目にも悪い印象なく映っているだろう。それも、数分の間のことだが。

「ご歓談中失礼します。アドルバード様、まもなく政治の講義のお時間です」

「ああ、もうそんな時間か」

タイミングを見計らって、アドルバードの騎士は姿を現す。

すらりとした長身で、他の騎士とは一線を置いた王子専属の騎士服を着た彼女はどんな男よりも魅力的だろう。女性特有の身体の曲線を、わずかに大きい服で誤魔化している。

「……お、お忙しい中貴重なお時間をいただきましてありがとうございます」

ざいました」

一瞬レイに見惚れた姫君が慌ててアドルバードに退出の挨拶をする。

「いえ、こちらこそ慌しくさせてしまい申し訳ありません。ご滞在中不自由があればなんなりと」

につこりとアドルバードが微笑んでも、姫の目には麗しい騎士しか映っていないように見える。

にこにこ愛想を振りまく王子よりも潔白そうな騎士の方が好みの姫が多いらしい。これと変わらぬ方法でレイは見事に姫君の関心を自分に集中させていた。女だということはあえて言わずに。

「……嫌だとは思わないのか。おまえ」

政治の講義なんて本当はあまり受けたくないし受けている場合でもないのだが　姫君から逃れる口実に使った建前上、アドルバードは大人しく教師の待つ部屋へと向かう。

隣を歩くレイを少し見上げながら問いかけた。

「何がです？」

レイは分かっているのに時々こうしてわざとアドルバードの口から言わせることがある。

それに少しむっとしながらも　たとえ同性なのだと分かっているても惚れた相手に誰かが色目を使うのは喜ばしくないことも重なり、アドルバードの機嫌はそれほどよくない。

「女なのに女に好かれることが。俺は女装してる間近づいてくる男どもが気持ち悪くてしかたなかったぞ」

「特に嫌悪感はありませんね。熱心にアプローチされたわけでもありませんし。今回はこうしている方がアドル様は後々楽でしょう？」

下手にどこかの姫に本気で惚れられても困るので、関心がアドルではなくレイに向かうのは確かに好都合なのだが。

「たとえ私がどこかの国の姫に気に入られたとしても、引き抜かれる心配はありませんし」

レイは最近の騎士では珍しく、主人をただ一人と『剣の誓い』をたてている。

騎士は本来国に仕える者であり、個人に仕える者は特例だった。普通の騎士は国王に忠誠を誓い、王家の為、国の為に剣を振るう。一方剣をただ一人に誓った騎士は主人を生涯ただ一人と決め、いかなる時もただ一人の主人の為に剣を振るう。この国で剣の誓いをたてた騎士はおそらくレイだけだ。ルイもリノルアースの専属の騎士ではあるが、それは王宮騎士団の配属で決まったことであって誓いによる主従関係ではない。

大陸で、もはや風化しつつある風習であるとはいえその誓いは絶対だ。だからどこかの姫がレイが欲しいとアドルバードや国王に訴えたところでそれは叶わない。そもそもレイの性別を知れば諦めるだろうが。

「罪作りの奴……」

「気づかない相手が悪いんです。今の姫で十八人目ですね。あと五人ですか」

「増えなければな」

「増えるでしょうね、というレイの言葉が呪いのように聞こえる。

「それで、良さそうな方はいらっしゃいました？」

ガン。

と机に頭をぶつけたのはレイの一撃があまりにも強烈だったからだ。

だってなんでってそりやおまえ。

「おまえがソレを聞くか!？」

俺がおまえのことが好きでたぶんおまえもきつと俺のことを好きでいてくれてこんな面倒な縁談話早くなければいいのになーとか考えててやっぱり身長のことなんて気にしないでとつとと親に宣言しておけば良かったって思ってるのに!!

「一応。そういう目的のものですし。もしもそういう方が見つかった場合私には何もできませんから」

それはなんだつまり。

「俺が他の女に惚れるとでも思ってるのか!？」

「世間一般には一目惚れも存在しますから」

ああそうだろう。そうだろうとも。

でもそれって何だよ。そんなに俺は信用できないか。そんなに俺がおまえのこと好きでいることは変か。ていうか俺が他の誰かに惚れてもおまえは平気なのか!？」

言いたいことが頭の中で渦を巻く。

レイの表情はあまりにもいつもどおりで何を考えているかなんて読み取れない。

「……………無理だろ」

一目惚れなんてそんな。だつて。

「レイ以上に綺麗な人なんて見たことないし」

と、言ってしまったからアドルバードは思わず自分の手で口を塞いだ。

何を口走った俺!？」

ちらりとレイを見るが、やはり彼女の顔色は変わらない。表情もまるで揺るがない。ああやっぱりほとんどがこっちの一方通行かと泣きたくなるのを堪える。

「……………ちよいとそこのお二人さん」

親父臭いセリフを吐いたのは大陸中で注目されている美しい姫君のはずのリノルアースだ。柱にもたれてこちらを呆れ顔で見ている「リ、リノル!？」

今ももしかしてもしかしなくても聞かれていたか!？ あのと恥ずかしいセリフを!？」

「ちょっとレイを借りてもいいかしら。知恵が欲しくて。代わりに
しちや少し情けないけどルイを置いてくから」

するりと猫のように近寄り、リノルアースはレイと腕を組む。そ
のようになる二人にため息を吐きなくなるのは男側の約二名だ。

拒否権など初めからないとアドルはただ頷く。どうせ講義の間は
離れているから支障は無い。

「ああ、それとアドル」

くるりと首だけ振り返り、リノルアースはどこか冷めた表情で言
う。

「色ボケは人に見えないところでやりなさい。正直見てるこっちが
恥ずかしいわ」

「っ……！」

やっぱり聞いていやがったのか！

あれはだつて口が勝手に、という弁解をリノルアースは聞くつも
りはないらしい。すたすたとレイを連れて行ってしまった。

ああもう、結局レイは無反応か。

「……………レイ、そろそろ解凍してくれないかしら」

腕を組んだまま、きちんと歩いている騎士を見上げてリノルア
ースは呟く。

無反応ではなかったのだ。ただ、突然の言葉に驚いてすぐに反応
は出来なかったが。

「え、あ、すみません」

いつもよりもはつきりしない口調は、まだ衝撃から立ち直ってい
ないのだろう。

「アドルも天然だからなあ……さらつとあんなこと言われた日にはイチコロよねえ。あの馬鹿にもそれくらいの攻撃性があればなあ」
あまりにもヘタレ過ぎてつまらないわ、とリノルアースは愚痴る。その馬鹿の姉として申し訳なく思いながらも何も言えない。先ほどのアドルの一撃はかなり大きかった。

「……私はズルイですね」

ようやく回復し始めたレイが呟く。

うん？ と首を傾げながら見上げてくるリノルアースに苦笑しながら続ける。

「時々、こうして確認しないと不安なんです」

あの人の行動を見ていればそれは一目瞭然なだけけど。

それでも時々、わざと仕向けることがある。

「仕方ないんじゃない？ 恋は人から自信を無くさせるものだからその大人びたりノルアースのセリフに、レイは返す言葉がなかった。」

5：女が顔を使い分けるのは常識中の常識よ

他国の姫君が続々とハウゼンランドにやって来るなか、例のアヴイラの姫君だけは遅れていた。遠い道のりの上に砂漠を越えてやってくるのだから、他よりも到着が遅れるのは当たり前と特に気にするものはいない。

「よお、アドル。久しぶりだな」

城内の廊下で、そう気安く話しかけてきたのはハウゼンランドの西にある国・ネイガスの王子であるウィルザード・ディル・ネイガスだ。アドルバードやリノルアースより一歳上の、アドルバードの遠い親戚だ。年も近いということもあって、幼い頃はそれなりに交流があった。

「久しぶり、ウィル」

ハウゼンランドに姫君がやって来ている公的な理由はもちろんお見合いなどではなく、名目のパーティがある以上、近隣の王子も何人かは訪問する予定だ。ウィルザードはそのなかの一人というわけ。

「随分面倒なことになってるなあ、おまえ本気でどっかの姫さんと結婚するわけ？ その騎士さんはどうすんの？」

小さな頃からアドルバードの気持ちを知っているウィルザードは好奇心を隠そうとはせず不躰に聞いてくる。

「……関係ないだろ。どっかの姫君とどうこうってつもりは全く無いけどな」

「そりゃ残念。もしも見合いするなら騎士さんは俺が引き取ろうかと思ったのに」

「女嫌いの王子に引き取られるような状況にはなってますん」
きっぱりとレイが切り捨てる。

ウィルザードは根っからの女嫌いで、唯一の例外がレイだった。
もちろんそれは単純にレイが普通の女性の枠から外れていて、見かけも中性的、暮らしぶりは騎士そのもの、というのがおおよその原因だろう。

「ていうか、いつの間にか女らしくなったな。何かあったか？ アドルに襲われたとか」

「ウィル！！」

黙れという意味を込めてアドルが怒鳴る。

もちろんそれは後ろ暗いことがあるからだが。

「とりあえずは何も、と答えておきます」

「でもその髪、伸ばし始めてるんだろ？」

目ざといな、とアドルバードは思う。女嫌いのくせにそういうところにはよく気がつくのだ。

「アドル様が長い方が良さそうなので」

おまえの世界の中心は相変わらずだな、とウィルザードが呆れ果てる。レイが気にした様子は全く無く表情はまるで変化ない。

「ウィルこそよく来たな。おまえの嫌いな姫君がたくさん集まってるのに」

ウィルザードは典型的な『お姫様』が大嫌いなのだ。お淑やかに振る舞い、紳士のエスコートされ、そのくせ実は我儘で自分勝手に性格の悪い、お姫様らしいお姫様が。どうも女の陰湿さが嫌いらしい。

「いいかげん俺も親がうるさくてな。相手を見つけるとつと結婚しろって。三男だからもう少し自由にできるかと思っただけど」
「おまえもおまえで大変だな。他に来る王子はほとんどリノル目当てみたいだし……」

連日の王子からのアプローチを上手く交わしながらストレスをためていくリノルアースに、最終的には八つ当たりされるんだろっとな

とアドルバードはため息を零す。

「アレのどこがいいんだか。顔だけだろうが。性格は極悪だ」

もちろんウィルザードとリノルアースは犬猿の仲だ。なんと言おうと、リノルアースはウィルザードの嫌いなタイプの代表例なのだ。「他の人はリノルの外面しか知らないからさ……」

リノルアースの猫かぶりにはもはや遺伝子のなせる業だ。それに騙される王子達をつい哀れに思ってしまう。

「あら、ウィルザード。来ていたのね」

向こうからやって来るのは噂のリノルアースだ。

薄紅のドレスを着て、堂々と、そしてどこか優雅に歩く姿はまさにお姫様だ。

「うるさい。近寄るなこの魔性の女め」

「相変わらず成長しないのね。罵倒する言葉にももう少し在庫を増やしたらどうなの？ 聞き飽きたわ。まあ増えたところであんたに何言われても何も感じないけど」

くう、とウィルザードが悔しげに唇を噛む。

「女嫌いななんて言ってただのトラウマじゃないの。しかも人のせいにしてくれちゃって。気づかない男が馬鹿なんでしょう」

ふん、と悪びれもなくリノルアースは追加攻撃をする。

二人の戦いはリノルアースがいつも一方的に勝利している。

「女がいろんな顔を使い分けるのは常識中の常識よ。それが理解できないならいつそ神様にでもお仕えすれば？ 一生女に近寄らなくてすむわよ」

「……私は使い分けてるつもりはありませんけど」

常識と言われた行為に覚えのないレイがぼつりと呟く。レイが、性格の裏表がないことは誰もが知っていることだ。

「レイはいいのよ。そのままで充分素敵だから」

リノルアースがにつこりとレイに笑顔を向けて言う。

反論する余裕もなく黙り込んでいたウィルザードが、覚えている

よとありきたりなセリフを残して逃げていくのもいつものことだ。

「……ホント、成長しないわよね。あいつ」

「あいつも昔はリノル信者だったんだけどな」

アドルバードが可哀想に、と呟く。

ウィルザードがリノルアースの本性を知る前　それでも八歳くらいだと思う、それまではウィルザードはリノルアースにベタ惚れだったのだ。しかしある日リノルアースの腹黒で策略家で我儘で自分勝手な（アドルバード達にしてみればもはや慣れたことなのだが他人の目には傍若無人に見える）様子に、今まで築き上げてきた理想がものの見事に砕け散ったらしい。

女がいくつもの顔を使い分けるのは確かに事実かもしれないが、まさかそれが七歳の少女にまで適用されるなんて考えないだろう。

それ以来ウィルザードは女嫌い、または女性不信に陥り、現在にいたる。

「一方的に理想像を作り上げてそれが壊されたからってぎゃあぎゃあうるさいのよ。器の小さい」

リノルアースに非がないというわけでもないと思うが、そんなことをあえて言うほどアドルバードは愚かではない。

「そういえば、ついさっきギルコニアの姫が到着したそうよ」

それを伝えに来たんだったわ、とリノルアースが付け加える。

「それじゃあ……あとはアヴィランテのシェリスネイア姫だけか」
遅いな、とアドルバードが頭を掻く。

「一番気になる人がまだなんだもの、こっちも行動出来ないのよね」

「今度は何を企んでるんだよ……」

チャンスがあれば何でも自分の利益になるように策略する妹を呆れたように見つめる。

「今は、まだ何も？」

につこりと微笑んだその笑顔が黒々しく見えるのはアドルバードの目が可らしいのだろうか。

「……いいよう。好きにしろ。国際問題だけは作るなよ」

「やだ、私がそんなヘマすると思うの!？」

「やっぱり何か企んでんじゃないか。」

内心、そうツツコムが何も言わない。アドルバードが人生で学んだ教訓だ。

君子危つきに近寄らず。

口は災いの元。

6：俺のだ、触るなってか

「珍しいな、一人か？」

廊下を一人歩いていたレイに、ウィルザードが後ろから話しかけた。

振り返り、レイは立ち止まる。苦笑交じりに「いつも一緒にいるわけじゃありませんよ」と答えた。誰のことかなんて聞くことない。寝る時は隣室ではあるが別だし、もちろん入浴だってそうだ。今はアドルバードが講義を受けているのでレイが暇になっている。他の誰よりも一緒にいることが多いというだけで、朝から晩まで一緒だなんてありえない。

「だいたい是一緒だろ、昔っから」

遠い目をして過去を思い出しているだろうウィルザードは少し年寄り臭かった。

「いつつもレイレイレイって。リノルもだったしなあ。あんたホントによくあの双子に合わせられるよなあ」

それはもう二人が物心つく前からの付き合いなので。そう答えるのも馬鹿馬鹿しく、レイは苦笑するだけで何も言わない。

「小さい頃からあんたにべったりだったもんな、アドルのやつ」

大変だろ、という意味合いの込められた言葉に、レイは真顔になった。

「……その逆とは思わないんですか？」

レイの問いに、ん？ とウィルザードは首を傾げる。

「私が、アドル様に執着しているとは思わないんですか？」

もう一度繰り返すと、ああ、と納得したように頷く。

「お互い様だろ、あんたらは。あんたもなんだかんだでアドルに甘いし、過保護だし。でもアドルだってあんたに頼りすぎてるって感じはあるし」

……いけないんでしょうか、というレイの眩きははらしくなかった。お互いが、お互いに縛り付けているんだと言われたような気がした。

「いけないだろ。あんたらはそれが当然なんだ。アドルの隣にあんたがいて、あんたの隣にはアドルがいる。もう随分前からそうだから、あんたらのどっちかが一人でいるとなんか違和感あるんだよ」

「……そうですか」

レイはほっとしたように、一瞬だけ柔らかく微笑む。

すっかり女らしくなっちまったなあ、という眩きは口の中だけで声には出さない。

「つまり あんた不安なのか？ アドルが他の女に靡くんじやないかとか、そういうのが」

ぽんぽん、とレイの頭を軽く叩く。

ウィルザードはレイよりも一つ年下のはずだが 背はあまり変わらない。少しレイが高いかもしれない。

年下に慰められるとはな、とレイは苦笑する。

少し不安定だったかもしれないが、身内でもない人間に愚痴を零すなんて、自分らしくない。

「安心しろよ。あいつあんたにベタ惚れだから。今更他の女なんていって！」

ウィルザードの後頭部に分厚い本が見事にヒットする。

何しやがる、と怒鳴りつけようと本が飛んできた先を睨みつけると、そこにはアドルバードがいた。明らかに不機嫌で、ウィルザード以上の迫力を持って睨んでいた。

「……俺のだ、触るなってか」

ホント相変わらずだな、とウィルザードが呆れたように眩く。右手で本があたったところを撫でる。こぶになっていた。

アドルバードは無言のままつかつかと歩み寄り、レイとウィルザードの間に入る。

「アドル様、今は講義中では……」

「アヴィラの姫が到着したそうだ。だから講義は中止で、今から会いに行く」

むすつとした表情を変えないままアドルバードが手短に説明する。行くぞ、とも言わずに歩き出したアドルバードに、レイはそれが当然のことのようにして行く。

その二人の後ろ姿を見送りながらウィルザードはため息を吐く。

「あんだねえ、そのうち馬に蹴られて死ぬわよ」

呆れたような声が背後から聞こえて、ウィルザードは驚いて跳ねる。

「で、で、出たな魔性の女！」

後ろにいたのはやはりリノルアースで、今日はおまけにルイもついている。

「その言葉聞き飽きたって言ったでしょうが。馬鹿なのあんた」

「うるさい！ おまえの為に頭を働かせるのももつたいないわ！ 」と、文句を言ったその顔に短剣が突きつけられる。

「リノルアース様の悪口を言うのはこの口ですか？」

につこりと微笑みながらルイが短剣をさらにウィルザードの顔に近づける。

「ルイ、国際問題になっちゃうわ。見えないところにやりなさい」

確かルイとウィルザードは同じ年のはずだが、ルイは180cmを越えるほど背が高い。そんな男に短剣突きつけられて平気なはずがない。ましてリノルアースに負けるようなウィルザードではなおさら。

「ひ、ひきょうものおお」

ウィルザードの声は負け犬のように悲しく響いた。

「……どうしてそんなに仏頂面なんです」

前を歩く俺の顔が見えるわけないだろ、と言いつ返そうとも思ってたが事実仏頂面になっていているだろう自分の顔をレイに見せたくなかった。

「別に」

「別にじゃありません」

「何でもない」

「何でもないなら機嫌を直してください」

他の男に触られていたから嫌だったんだ。他の男の前で一瞬だけだったけどおまえが笑ったのが腹が立ったんだ。俺はおまえの主でおまえは俺の騎士だからそういうことをとやかく言う資格はないって分かってるのに。

醜い嫉妬を、レイに見せたくない。

あんなふうにはレイの頭を撫でようとしたってアドルバードとレイは二十cmの身長差がある。傍目から見てもかっこ悪い光景にしかない。

「……私は、身長なんて気にしませんよ」

「俺は気にする」

絵にならないだろ、と呟く。

「アドル様がドレスを着てくだされば絵になると思いますけど」

「ソレは何か。俺に男としてのプライドを捨てると？」

確かにアドルバードがドレスを着て、レイがいつものように騎士服を着ていればさぞ絵になる二人になれるだろう。性別は逆転してるが。

「そこまでは言ってますよ、外見を気にするならそういう方法もあるってだけです」

「却下だ。コルセットなんで拷問具だ」

「それは同感です」

即座に答えたレイと顔を見合わせて、二人で笑う。

「俺が好きか、レイ」

ズルイだろうか、こんな質問。

そう思いながら聞かずにはいらなかった。

「答えを知ってるのに聞いてくるのはあなたの悪いところですね」

だから、答えませんよ。

それだけで充分だった。

7：女は女に騙されない

黒曜石こくようせきの瞳。

夜の闇を集めて折り込んだような、艶やかな髪。

その肌は南国の者の証のように濃く、それが独特の色気を醸し出している。

それが、アヴィラのシェリスネイア姫。

赤い唇が微笑み、自分の美しさが最大限に出せる笑顔でアドルバードを見つめた。

「はじめまして、アドルバード王子。アヴィランテのシェリスネイア、ただ今到着いたしました」

それは小国の王子に対する挨拶としては最上のもだった。まして相手は大陸一といっても過言ではないほどの大国の姫だ。

男はこういう女の憤うづましい態度に弱い。

使えるにしろ、使えないにしろ、利用するだけ利用して捨ててしまおう。こんな田舎の国の王子なんて。

初めからアドルバードと結婚するつもりなんてない。アドルバードがシェリスネイアに夢中になって、自滅してくれればいい。王族は利用価値なんていくらでもある。

そのためにこんな北国まで来た。

なのに。

「はじめまして、シェリスネイア姫。遠路はるばる、こんな鄙ひなびた国までようこそおいでくださりました」

完璧な笑顔のアドルバードは、シェリスネイアに見惚れた様子はない。

普通なら見惚れて動けないでいるはずなのに、アドルバードは優雅にシェリスネイアの手の甲にキスまで贈る。北の方での習慣だということくらい、シェリスネイアの頭にもあった。

「何か不便な点がありましたらなんなりと。アヴィランテのような暮らし、とまではいなくても、不自由のないように便宜を図りますので」

「ご、ご親切に」

予想外の反応にシェリスネイアの方が困った。

どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてっ！

男なら私の美しさに見惚れるでしょう？ 自分のものにしたくなるはずでしょう？ どうしてそんな平然としてるのよ！！

内心は焦りと怒りでいっぱいだ。

今までシェリスネイアに見惚れない、心を動かされない男なんていなかった。なのにこの田舎の王子ごときが、シェリスネイアを一目見ても、最高の笑顔を見せても、ぴくりとも揺るがないなんて。

完璧な王子の笑顔の下に、一体何が隠されてるっていうの。

確かにアドルバードは美少年だった。おそらく、このまま遅く成長すればあちこちの姫の興味を独り占めするだろう。赤みがかった金の髪も、白い肌も シェリスネイアが幼い頃に憧れてやまなかった王子様そのものだ。

しかしこんな、自分と対して身長の変わらないような王子に心を動かされるシェリスネイアではない。今はそんなことよりもプライドを傷つけられた悔しさでいっぱいだ。

「……お兄様？ 今よろしいかしら？」

涼やかな声が扉の向こうから聞こえる。

アドルバードが返事をするよりも早く、ゆっくりと扉が開いて美しい少女が姿を現した。

緩く波打つ、アドルバードと同じ赤みがかった金色の髪。陶器のように滑らかで白い肌。青く澄んだ大きな瞳。完璧な人形のような少女だった。

「あ、ごめんなさい。お客様がいらっしゃったのね」

ぱ、と羞恥で頬を染める仕草さえも愛らしく、どれだけの男がこの姫に心奪われるのだろうとシェリスネイアは思った。

これが 北の姫、リノルアースか。

小国の姫があればどこまでに注目を集めるのか疑問だったが、なるほどと、納得せざるを得ない。これほどに可憐な、美しい姫は大陸のどこを探してもいないだろう。

「妹が失礼しました、シェリスネイア姫。もし姫がよろしければ同席させていただきますが……男の私よりも、話が盛り上がるでしょうし」
「……私は、かまいませんよ。リノルアース姫とおっしゃったかしら？ 噂はアヴィラまで届いておりましたわ。お会いできて光栄です」

お世辞を言うと、リノルアースはいやだ、と照れて赤くなった。

女だからこそ、そしてシェリスネイアだからこそ分かる。これは仮面だと。

女に計算はつきもの。このリノルアースの可憐さは全て計算されて演じられたものだ。女は女に騙されない。女の嘘を見抜くのは女だ。それも直感で。

「まさかあのシェリスネイア姫がこうしてハウゼンランドにいらしてくださるなんて、思ってもおりませんでしたの。私のお会いできて嬉しいです」

「あら、北には随分と興味がありましたのよ。アヴィラでは雪が降りませんから、ぜひ一度見てみたいものだ……」

「残念ですわね、まだ雪が降る季節ではありませんの。降ったら他国の方々が吹雪で半年近く祖国に帰れなくなってしまうものです」

「まあ、大変ですね」

「ハウゼンランドの者なら慣れておりますから、特に不自由はありませんよ。今も少し標高の高いところに行けば残雪が見れるでしょう。ご滞在中に機会があれば、ぜひ一緒に」

「本当に？ ぜひ見てみたいですね」

「それにしてもシェリスネイア姫は本当にお綺麗ですね。髪の毛はどんな手入れをされてるんですか？」

「まあ……私なんて、そんな。リノルアース姫の金の髪の方が羨ましいです。白い肌も」

「そんな、私の髪なんてくせつ毛で……絡まりやすいし、枝毛もいっぱい。真っ直ぐなシェリスネイア姫の髪が羨ましいです」

「無いものねだりですね、私達。どうぞ私のことはシェリーとお呼びくださいな」

「では私のこともリノルと、シェリー様」

様なんていりませんわ、でしたら私も　と、仮面を被った女同士で馬鹿馬鹿しい会話が続けられる。

アドルバードはリノルアースの隣に座ったまま、優雅に紅茶を飲んでいて、会話にも混ざらない。時々相槌をする程度だ。

うふふ、おほほ、とシェリスネイアからすればわざとらしい会話がしばらく続き。

ふう、とリノルアースが一息つく。

冷めてしまった紅茶一口飲んで、その笑顔ががらりと変わった。

「それで？ いいかげんにこんなメンドクサイこと止めない？ 疲れるのよねえ、猫被った相手に猫被って対応するの。お互い気づい

てんだし、無駄でしょ？」

今までの可憐なリノルアースはどこにいったのか。
演技だと分かっていたシェリスネイアでさえ愕然としそうになっ
た。

「見え透いたお世辞言い合ってもアドルが固まるだけだしさあ、さ
つさとカード見せあいましょうよ。シェリー？」

「……それが本性ですか？ リノル。言葉遣いが随分と雑になりま
すのね」

「ふーん、そっちは綺麗なままなのね。ご立派なこと。まあそんな
んどうでもいいでしょう？」

リノルアースが微笑む。

その顔は決して可憐ではない。けれど 目が離せないほど、眩
しい。

「目的は何かしら？ シェリスネイア」

8：雑草結構

艶やかに　大人の女性すら勝てそうにもない美しい笑顔で、リノルアースに見つめられる。

「も、目的なんて……」

リノルアースに威圧されて、シェリスネイアは口籠もる。

このお姫様は、ただの可愛らしいだけの少女じゃない。そう感じ取らせるだけのものがあつた。

「何の目的もなしにこんな田舎までいらしたの？　それはご苦労様」
皮肉だとすぐに分かるセリフだった。

声の調子は先ほどとまるで変わらないのに、口調だけが丁寧になっている。

そのリノルアースの様子にさすがに腹が立つたシェリスネイアも臨戦態勢になる。

「あつたとしてもそれを軽々しく言うほど愚かではないわ。どこかのお姫様と違って！」

「あら、そんなことも言えるのね。素敵だわシェリー。だけどこつちはね、あえて腹の中を見せ合ってお互いに妥協できるところまで話し合いましうって提案してるのよ？　悪い話じゃないでしょう？」

返された言葉は倍以上の攻撃力を持っていた。

大して年の変わらない少女に馬鹿にされたことがシェリスネイアをさらに腹立たせた。

黒曜石の瞳に明らかな怒りが宿る。大国で蝶よ花よと育てられた姫君が、同じ年頃の姫にこれほど馬鹿にされたことはないだろう。

「妥協？　話し合い？　馬鹿馬鹿しいお話ね。それらはすべて対等の者同士だからこそある言葉でしょう？　こんな北の田舎の国とアヴィラでは雑草と薔薇以上の違いがありますわよ？」

「雑草結構。悪いけど雑草っていうのは踏まれても踏まれても生え

るんだから。薔薇なんて手入れが面倒だし繁殖も大変だしいいことないじゃないの。お高く振舞うだけしか芸の無いお姫様と一緒にしないでくだらない？」

「しつ失礼ね！！」

大して意味をなさないであろう言葉で抵抗するが、リノルアースの強い物言いに、シェリスネイアは泣きそうになった。

「失礼なのもお互い様。言ってしまったえば敵陣に乗り込んできたのはそちらでしょう？ 多少の向かい風は覚悟の上なんじゃないの？ それともお気楽な小旅行気分でこんなとこまで来たわけ？ いいわね、大国のお姫様は苦労知らずで」

勝てるわけ無い　そう悟った時にはもう遅かった。

シェリスネイアのプライドがここで負けを認めることが出来ない。泣きそうになりながら、唇を噛み締めることしか出来ない。

泣くものか。アヴィランテの姫として、こんな国の姫に言い負かされたくらいで泣いてたまるか。

「……リノル、少し言いすぎ」

そこで思わぬ援護が入った。

涙を堪えようと唇を噛んだシェリスネイアに気がついたアドルバードがリノルアースの攻撃を止める。

「言いすぎ？ 自分の国を雑草呼ばわりされたんだもの、これくらい許されると思うけど？」

ふん、と文句を言いつつ続けて攻撃してこないのので少しは反省しているということだろうか。

「すみません。シェリスネイア姫。リノルは強気なもんだから」

そう言いながら苦笑するアドルバードは最初の印象よりもずっと素敵に見えた。

もともと容姿はそれなりに好みだったのだ。それでも興味はなかった。こんな小国では自分とつりあわない　初めから対象外だったのだ。

でも今は　それこそ結婚してもいいと思えるくらいに、シェリ

スネイアの瞳にはアドルバードが素敵に見える。

それは単純に危機を救われたために美化されているに過ぎないが、本人が気づくはずもない。

「……私、あなたと結婚してもよろしくてよ」

「はぁ!？」

突拍子もないシェリスネイアの言葉に声を上げたのはアドルバードだけではない。言い負かしたリノルアースもこれは予想外だ。

「思っていた以上に素敵なもの。身長が低いのが少しアレだけど、そうね、それはもう少ししたら解決するでしょうし。アドルバード王子、アヴィラに婿入りするつもりはおあり？」

身乗り出しながらアドルバードを見つめてくるシェリスネイアの熱い視線から逃れようとアドルバードは顔を引き攣らせて上体だけ下がる。

「む、婿つて……一応俺は跡継ぎなんで無理です。アヴィランテみたい王子や姫がいっぱいいるわけじゃないから王子は俺だけだしっ」

もちろん他にも王位継承者はいる。第一位がアドルバードただで。

一方アヴィランテ帝国は一夫多妻制なので王子も姫も腐るほどいる。二桁は軽く越えるだろう。

「それって先に言うことかしら。ホントかつこ悪いんだから」

アドルバードの隣で平静さを取り戻したリノルアースが紅茶を飲みながら呟いた。

「王位なんてその生意気な女に与えておしまいなさいな」

「ええと……ハウゼンランドでは一応よほどの場合じゃない限り、女性は王位を継げないんです。だからリノルにあげるのはちよつと」

過去に女王がいなかったわけではないが、それは王家の血縁がただ一人で、それが女性だった時だけだ。アドルバードという男子が生まれている以上、リノルアースは王位につくことはない。

「アヴィラは本当に良いところですよ。ここよりずっと暖かいし」

「いやあ、暖かい通り越して暑すぎるんで北国育ちの俺には無理です」

「慣れれば平気ですわ」

「慣れればとかいう問題ではなくてですねっ」

ああもう人生でそんなにもてたことないからこついう時にどうしたらいいのかさっぱり分からないっ！

軽くパニック状態に陥っているアドルバードに、シェリスネイアを撃退できる言葉はなかった。

「ねえ、シェリー。人の兄を困らせないでもらえないかしら？」

ようやくやんわりとリノルアースが援護してくる。

「黙りなさい。人の恋路を邪魔する人なんて毒沼にでも落ちればいいわ」

「それってアヴィラ風の言い回しなの？ 普通馬に蹴られるとか豆腐の角に頭ぶつけるとか」

「そんな品の無い言葉は使いませんの」

馬と豆腐は品の無いものか、とアドルバードはシェリスネイアの矛先が変わったことに安堵してソファに深く腰を下ろす。

「毒沼ってそんなに高潔なお言葉だったのねえ。じゃあそこのお姫様、ちよつくら毒沼まで行って頭まで浸かってきてくれないかしら？」

リノルアースは相変わらずにつこりと極上の笑顔で凄いことを言う。

「なっなんてことおっしゃいますの!？」

「んー。ちよつといいかげんに鬱陶しいのよね、シェリーって」

「うつ鬱陶しい!？」

いつの間にか立ち上がって言い争いを続ける二人を見上げながら、意外に気が合うんじゃないだろうかと思った。

口をつけた紅茶はもう冷め切ってしまった。

もう帰ってもいいだろうかと二人に聞くことは恐ろしく、アドルバードは静かに冷たい紅茶を飲み干した。

9：そついうお趣味でしたの？

30分くらい口喧嘩を続けたリノルアースとシェリスネイアは息を切らしながら、一時休戦とソファにどざりと腰を下ろす。

アドルバードが口を挟む余地もないほどに長々と言い争っていたのだ、喉は渴いているだろう。

「……新しい紅茶を頼んできますね」

ぐったりとしている二人を見て苦笑し、アドルバードは立ち上がる。

「お菓子も追加してくれないかしら。甘いケーキがいい」

リノルアースの甘えるような声に、兄馬鹿のアドルバードは素直にはいい、と頷く。

「……羨ましい」

ぱたん、と扉が閉まる音がして、シェリスネイアの言葉は上手く聞き取れなかった。リノルアースは首を傾げて何？ と聞き返す。

「羨ましいと言ったのよ。あなた達は仲が良いのね」

「そりゃ、双子だもの。生まれた時から一緒だし。シェリーだってたくさん兄弟がいるじゃない」

あんな兄なんて要らないだろう、とリノルアースが笑う。

しかしシェリスネイアは冷たい紅茶を見つめて、悲しげに微笑んだ。

「血の繋がっているだけの他人よ。ほとんど母親は違うんですもの。アヴィラの王宮はいつも戦場よ。いかに勝ち上がるか、いかに陛下に取り入るか。そんなことしか考えていない人間ばかり」

リノルアースは黙った。

それは、彼女には理解できない世界だ。

幼い頃からアドルバードと共に、両親からありったけの愛情を受けて育った。争いごとといえばアドルバードをおやつを取り合うことくらい。必ず夕食には家族全員が揃った。仕事の多くない日だと

父でも中庭で一緒に過ごした。双子が成長して、城下町まで抜け出して怒らない、温厚な両親だ。

「私の母はね、それほど優遇されてないの。母の子供は私だけだから。アヴィラの後宮で地位を得るには皇子を産むしかない。でも何十人もいる側室の中で、陛下の目にかかることなんてそうないわ。まして、母はもう美しかった頃とは変わってしまった。あとは影へ影へ、追いやられるだけ」

シェリスネイアの瞳は、唯一の家族を案じる優しい色だった。

「……なんだ。この雰囲気」

部屋を出た時とは打って変わって静かな様子に、アドルバードは訝しげにリノルアースを見る。

「何もないわよ、別に」

「ええ、何もありませんわ」

二人の姫は口をそろえて同じことを言う。こういう時だけ息が合うつてどういうことだ。

「ところで王子。お返事はどうなりますの？ ハウゼンランドとしてもアヴィラと結びつくのは悪いことでは」

ああ畜生、それがまだ残っていたか。忘れてくれると助かったのに。

世の中そう上手くいくはずもなく、シェリスネイアは熱い目でアドルバードを見つめてくる。

普通の男なら簡単にくらりときてしまいそうな美しい姫に、アドルバードはあまりときめかない。理由は簡単　目が慣れてるのだ。双子の妹のリノルアースに始まり、騎士のレイやら　アドルバードの周囲には、種類は違うが最悪でも二人ほど絶世の美女がいる。まして片方は自分と同じ顔で、もう一方は世間を知るよりも早く、

幼い頃から見慣れた人だ。

基準がもともと高いのだ。こうなると生まれながらの面食いと言われても可笑しくない。

「王子！」

詰め寄るシェリスネイアから顔を逸らし、あーとかえーとか言いながらアドルバードは頬を掻く。

なんか上手く断る常套句があったらうと頭の中を引っ掻き回し
ああ、そうだアレだ。

「俺、好きな人がいますから！」

それを言うのが先でしょ、という呟きが隣から聞こえてくる。だ
ったら教えてくれよ！！

シェリスネイアが目大きく開いてアドルバードを凝視する。

や、やめてほしい。何か吸い取られそうで正直怖い。

「……でしたら、どうしてこんな茶番を？ 本当はそんな方いらっ
しやらないんでしょう？」

「ちゃ、茶番って……確かに矛盾してますけどそれは父親命令で仕
方なく」

「都合の良いように物事を解釈する女って愚かよね」

すました表情のまま、リノルアースはアドルバードが運んできた
新しい紅茶を飲む。

「たくさんの男を誑かしている女もどうかと思いますわ」

「失礼ね、求婚の手紙を全部暖房に使ってる私が男を誑かしてるで
すって？ 冗談じゃないわ」

男が勝手に騒いでるだけじゃないの、とリノルアースは心底迷惑
そうに眉を顰めた。

再び矛先が変わってほっと一息ついていたアドルバードをシェリ
スネイアはその大きな瞳でもう一度見つめる。

「王子、私の」

「アドルバード様、失礼します」

シェリスネイアの声を遮ったのは、涼しげな声。

それが誰なのか　アドルバードは考えるまでもない。

「レイ」

助かった、という響きがその一言に込められていた。

控えの間ですつと待っていたレイがいずれ救いの手を差し出して
くれるだろうとは思っていたが　予想よりも随分遅い登場だ。

いつもの決まり文句でアドルバードをこの部屋から連れ出してく
れるだろうと、レイを見上げる。

「……………」

その視線に熱い何かを感じ取ったのか、はたまた女の勘か。

シェリスネイアはその美しい眉をひどく歪めて、恋人同士のように
見つめあう（ように彼女には見えている）二人を穴が開くほど凝
視する。

「……………そういうお趣味でしたの？」

「違う！！　ていうかどんな趣味だ！！」

明らかに誤解されているのでアドルバードは即座に否定した。

そういう趣味って何だ。男色か！？

「別に私は気にしませんわよ。女の方が相手だと間違いがあつては
困りますけど、ええまあ男の方ならば大目に見て差し上げます。で
も世継ぎが必要な女の相手もしなくてはなりませんでしょう？」

「だから違う！！　俺は男なんか惚れない！！」

完全にレイを男だと勘違いしたまま先走るシェリスネイアに、つ
いいつものように声を荒げて否定する。シェリスネイアは特に気に
した様子は無く、きょとんとしてアドルバードを見つめる。

「あら、でしたら今の熱い視線は」

「いやそれは違わないけどそんなに熱くは……………」

「アドル様、論点がずれてます。シェリスネイア姫、お初にお目に
かけます。アドルバード様の騎士を務めております、レイ・バウ
アーと申します」

そう挨拶しながらレイは優雅に礼をする。

普通ならばその後当然のように手の甲に口づけを贈るのだろうが

シェリスネイアはもちろんそのつもりで手を持ち上げたが

レイはそれを無視した。

「……シェリスネイア姫、レイは女です」

自己紹介するならついでにそこまで言えよと憎たらしく思いながらアドルバードが咳払いとともに説明する。

「女性？　この方が？」

訝しげに見つめてくるシェリスネイアが納得していないの是一目瞭然だった。いつもの騎士服ならまだしも　今はあえて男に見えるように大きめの服で曲線を誤魔化している。

レイは嘆息し、上着の釦を外す。

「レレレレレレ、レイ！？」

いきなり上着を脱ぎ始めた自分の騎士を見て声がひっくり返っているアドルバードはかなり情けなかった。

大きめの上着が脱がれ、薄めのシャツ姿だけになったレイの身体は明らかに女性のそれだった。

「……………嘘では、ありませんのね」

少し呆然としたままシェリスネイアは呟く。

レイはにつこりと、お得意の作り笑顔で言う。

「ご理解いただけただけでなによりです」

10：口説き方がなってますんわ

「つまりアドルバード王子はあの騎士に恋をしているということなの？」

すっかり打ち解けたシェリスネイアとリノルアースは仲良く午後のお茶を楽しみながら談笑していた。この場に無粋な男集団はいない。

「そうよお、なっがい片思いなんだから。邪魔しないであげてね、シェリー」

「あら、片思いならまだ私が入る隙もあるんじゃないくて？」

「無駄よ。両思い目前の片思いっていうか両思いなのにアドルが無駄なこだわりを見せてくつついていないだけだもの」

それは両思いなんじゃないの、とシェリスネイアが面白くなさそうに呟く。

別に、本気の恋なんかじゃないけれど。

「いい男とかそのへんに転がってないかしら」

ふう、とため息とともに本音を零す。

「シェリーならすぐに見つかると思うわよ。幸いお姫様だけじゃなくあちこちの王子も集まってきたるし、物色すれば？」

「皆あなたを狙ってきた男達でしょう。そんなの願い下げですわ」

「あらそれは敗北宣言をみなしていいの？ 世界で一番綺麗なのはこの私ってことよね？」

「誰がそんなこと言いました！？ あなた程度の女を狙ってくるような低レベルの男はごめんって言っているのよこちらは！！」

誰もが目を奪われるような美しい姫が二人、温かな温室の中で花に囲まれながら低レベルな言い争いを続ける姿はかなり奇妙だ。

まだ外は寒いハウゼンランドだが、温室の中ならばたくさんの花が咲き乱れている。とても手入れの行き届いている温室はリノルアースのお気に入りだった。

「やあ、リノル。こんなところにいたのか」

ぎゃんぎゃんと騒ぐリノルアースとシェリスネイアのもとに、一人の青年がやって来る。

蜂蜜を固めたような金の髪に、緑色の瞳の青年だ。年はだいたい十八歳くらいで、すらりと背も高い。服は見るからに上等のもので、立ち振る舞いも優雅だった。一国の王子だと言っても遜色ないほどに。

「……気安く呼ばないでくれる、ハドルス」

リノルアースから発せられたとは思えないほどに低い、不機嫌そうな声だった。

シェリスネイアはその変貌ぶりに驚きながらも、リノルアースとハドルスの二人を交互に見る。

「従兄弟なんだから、いいじゃないかこれくらい。久しぶりに会った、もう少し喜んでくれてもいいんじゃないか？」

「従兄弟だろうがなんだろうがあんたに愛称で呼んでいいと言った覚えは無いわ。二度と会わなくても私は困らないし」

親しげに近寄ってくるハドルスを追い払うかのようにリノルアースが手でしつしと振る。

その小さな手を掴み、ハドルスはお伽噺の騎士のように跪き、手の甲に口づける。リノルアースの肌が粟立ったのがシェリスネイアでも確認できた。

「まだ婚約者を決めてないみたいだな。どうせなら俺の妻にならないか？」

「冗！ 談！ 触らないでよ気持ち悪い！！」

ハドルスの手を振り払おうとするが、強く握り締められたままり

ノルアースはその憎い拘束を解くことができない。

ルイを連れてくるんだった　後悔しても遅い。ルイには別の仕事を頼んでいる。

「そうすりゃリノルは一国の王妃だ。悪い話じゃないだろう？　見知らぬ国に嫁ぐよりもさ」

ハドルスは王座を狙っている　そんなことくらい、リノルアースも分かっている。そのために自分が利用されようとしていることに気づかないほど愚かなお姫様じゃない。

「馬鹿なこと言わないで！　ハウゼンランドを継ぐのはアドルバードよ！　あんたの出る幕じゃないわ！」

「あのチビに何が出来るんだよ。運良くアルシザスとの同盟が成立したくらいがなんだっての。俺だってあれくらいのことできるさ」

あんたのどこに、アドルが負けるっていうの。

ハドルスは分かっているのだ。

アドルバードは自他共に認める見事なシスコンだ。しかし。

リノルアースもまたブラコンであるのだ。ただ分かりにくいだけで、程度はアドルバードと大差ない。

共に生まれ、共に育った大切な片割れだ　当然だろう。

空いているほうの手で思い切りひっぱたいてやろうと　手を振り上げようとしたその瞬間だった。

ぱしゃ、と。

そんな音が聞こえたと思ったときにはハドルスは濡れていた。

「口説き方がなってませんわ。一昨日いらっしやいませ」

ずっと傍観していたシェリスネアが少し冷めた紅茶をハドルスにぶっかけたのだ。

片手には空になったティーカップがある。

「なっ……何しやがる！」

「あら、私に手を上げますの？ 私はアヴィランテ帝国第三皇女、シエリスネイアですわよ。それなりの覚悟をもっておやりなさいな。全力であなたを潰しますわ」

シエリスネイアに掴みかかるうとしていた手が空を掴む。

ハドルスの顔が青ざめ、ちらりとリノルアースを見た。

それが確認なのだというくらいリノルアースにもわかる。それでもこいつに助言する必要はないと、リノルアースは無視した。

「見る限りあなたはリノルの従兄弟でいらっしゃるようですけど、たとえ縁戚であろうとも王族には敬意を払うべきですわよ。臣下であることに違いはありませんもの。まして国賓の前でこんな醜態本当に馬鹿馬鹿しいこと」

ふう、と色っぽくも感じるため息を零しながら、シエリスネイアは空のティーカップをわざと音をたてて置く。

「馬鹿なのはこいつとこいつの弟だけよ、ごめんなさいねシエリー。不愉快にさせて」

「お互い様ですわ。そのあなた。今回はリノルに免じて見なかったことにして差し上げますけど、次はありませんわよ？ 私のお友達を困らせないでいただけるかしら？」

につこりと微笑むシエリスネイアに、ハドルスは一瞬だけ見惚れて 慌てて頷く。

「し、失礼を その、アヴィランテの姫とは知らず、挨拶が遅れました」

「あなたからの挨拶など必要ありませんわ。礼儀知らずとは知り合になる価値ありませんもの。早く出て行つてくだらない？ 私はリノルと楽しくお話をしていたんですの」

そのセリフを聞いたハドルスの青ざめた表情を、アドルバード達に見せられなかったのは実に残念だ。

何度か弁解しようと口を開きかけていたが 無駄だと思ったのだろう。ハドルスは肩を落として温室から去っていった。

「ありがと、シェリー」

助かったわ、とリノルアースがお礼を言つと、シェリスネイアは照れて顔を逸らす。

「何のことです？ 私はただあの男が不愉快だっただけです」

「いやあねえ、シェリーったら照れちゃつて。可愛い奴う」

「……結局、あれは何なのかしら」

あれというのはハドルスのことだ。

二人の会話から従兄弟同士だということしか分からなかった。

「んー……自信過剰で野心家で下心見え見えの最低の従兄弟つてとこかしら。今十八歳であのとおり王座を狙つてる愚か者よ」

「どこにでもいるのねえ、そういう男」

シェリスネイアにはリノルアース以上の心当たりがあるのだろう。腹違いの兄弟が山ほどいるアヴィラでの王位争いなんてハウゼンランドの比じゃない。

「あんなんでも継承権は第二位なのよねえ。その下のルザードつて弟が第三位。まあアドルが死なない限りアドルが継ぐことになるんだろっけど、どこから湧いてくるんだか、自信満々なのよ、あの馬鹿」

「……だから、王子には力が必要なんでしょう」

シェリスネイアが小さく呟く。

もしもハドルスが有力な貴族や、他国の姫君を妻に迎えると弱小貴族のレイを妻に迎えようとしているアドルバードが不利になるのは目に見えている。

王家の結婚が政略なのは昔からの決まりごとのようなもので
本当に愛する人と結ばれる人はそれほどいるだろうか。

「アドルだけを、不幸にするつもりはないわ。力をつけて、あの子
が一番幸せだと思える未来まで導くの」

「分かりにくい子ね、あなた」

お兄様が大好きなら大好きって言えばいいじゃない。

くすりとシエリスネイアは微笑む。

その笑顔は少し大人びていた。

10：口説き方がなってますんわ（後書き）

更新が遅くなつてすみません！

展開も遅くてすみません！

嫌なキャラが出てきました（笑）シェリーナイス。

ご意見ご感想などありましたらどうぞ一言でも。

11：できる限り俺の側にいる

「ハドルスに会ったんだって？」

出会った一番最初にそれを心配そうに聞いてくる兄が、やはりリノルアースは好きだった。

あの鬱陶しい従兄弟のことが嫌いで、リノルアースが苦手になっていることを充分に彼は理解してくれているのだ。

「シェリーが追い返してくれたわ。まさかあんたのところにまで来たの？」

「それこそまさか。ありえないだろ。たまたま廊下でルザードの方と会ったから」

「……それはそれで災難ね。レイはまた口説かれたの？」

リノルアースは苦笑して問いかける。

兄のハドルスはリノルアース狙い、弟のルザードはレイ狙い

随分と面喰いな兄弟だ。

「見事にあしらってたよ。あいつも相変わらずしつこい」

「アドルに言われたらおしまいよねえ、一体何年越しの片思いよ」
うつ、とアドルが言葉に詰まる。

年数で言ったら それこそ誰にも負けないほどだろう。これが相手に少なからず思われているから良いのであって、相手に何とも思われていないのにそれほど思い続けているんだとしたら かなりしつこい。

「ま、まるっきりの片思いってわけじゃないし。今は」

「そうねえ、早く伸びるといいわね、身長」

うるさい、と言いながらアドルバードはリノルアースの頭を小突く。

その時の感覚がいつもより少し違っていて リノルアースはまじまじと兄を見上げる。

「……少し、伸びた？」

「ええ！？ 牛乳の効果が今ここでやつと！？」

今にも小躍りしそうなアドルバードを冷ややかに見つめ、リノルアースは嘆息する。

「いや、気のせいみたいね」

「期待させておいて結局それか！？」

いつものリノルアースの嫌がらせだと認識したアドルバードはがつくりと肩を落とす。

本当の本当は、少し伸びているみたいなのだが。

くすくすとリノルアースは笑いながらアドルバードと腕を組む。

「……なんだよ」

「なんでもないわ。温室まで一緒にしない？ お兄様」

「悪いけど、この後ウィルと約束してる」

ああそういえばそんな男いたな とリノルアースは記憶の片隅に追いやっていた存在を思い出す。

「ならウィルも一緒に。シェリーはとつても素敵な子よ？」

「……リノル、何を企んでる」

嫌な予感がしてアドルバードは妹を見る。

につこりと鉄壁の微笑みを浮かべたリノルアースの心情は読み取れない。

「何も？ とりあえずシェリーとアドルをくつつけようとは考えてないわ。そうならなつたで面白いけど、今更アドルがレイを諦めるとか考えられないし」

逆は多少ありえそうよねえ、と不吉なことを言い出され、アドルバードは青ざめる。

「……ところでレイは？」

ここで一緒にアドルバードをからかうと面白いのに、という呟きながらリノルアースが辺りを見回す。

他国にいるときとは違い、ハウゼンランドにいるときは別行動をとる事が多くなる。慣れた城内ならばアドルバードもリノルアースも人目につかずに逃げ出すことができるし（幼い頃から脱走を繰り返

かえてしてきた成果だ）穏やかな国柄か、危険も少ない。

「今ちよつと……………」

不自然に言葉が途切れ、アドルバードは突然立ち止まる。

腕を組んでいたリノルアースは首を傾げながらアドルバードを見上げ、そしてその視線の先にあるものを見る。

「あ」

背が高く、美しい銀髪 of 騎士。

それに言い寄るあの忌まわしい金髪。

「あんの野郎昨日に続いて今日もか！！」

火花が飛んでくる前にリノルアースはするりとアドルバードから手を離す。

疾風のごとくアドルバードは走り去り、リノルアースはその後ろ姿を見守った。

「いいかげんアドルバードなんて見放したらどうだ？ 今からでも

俺のところに来いよ。不自由はさせないぞ？」

「剣の誓いを違えるつもりはありません。今も不自由しているとは思いませんし」

「でもあんなチビっ子だとさ…………夜とか満足できないだろ？」

どうして気づかないのか。

その一言でレイが明らかに殺気立っているのを。

何よりもレイは潔癖な女性なので、下品なことは大嫌いなのだ。

「ルザード様」

低く、冷たい声。

その声は明らかに警告だった。これ以上近寄るな、触るなという。それに気づかない愚かな男はレイの顎を持ち上げる。抵抗という抵抗は出来ない。レイが抵抗すれば、それはおそらく大怪我に繋がる。

無意識に手が腰の剣に触れる。それを理性で食い止めた。ここで剣を引き抜けば、アドルバードに責任がのしかかる。

レイが抵抗できないのを知っているルザードは面白そうに笑う。顔に息がかかるほど近づく前に 何かに遮られる。

「俺の騎士に勝手に手を出すな」

遮ったものは アドルバードの手のひらだった。
ルザードが舌打ちする。

「……………アドル様」

零れた声は思いがけず、弱々しかった。

「いいかげんにしろよ、ルザード」

「恋は自由なもんだろ？ 自分の騎士にはそれすら許さないってか？」

「どの口がそれを言う。レイは既にはつきりと断ってるだろうが」
アドルバードには少し似合わない 人を馬鹿にしたような笑みを浮かべて、レイの手を握る。

「これ以上はもう許さない。言い寄るのが目的なら彼女に近づくな行くぞ、と短く呟いてアドルバードはレイの手を引く。

しばらく無言のまま、歩き続けて アドルバードは小さな資料室に入る。

「……………アドル様？」

大人しく着いてきたレイが不思議そうに見つめてきた。

「すぐ済む」

そう言いながらアドルバードは扉を閉め、相変わらず自分よりも背の高い騎士を見つめる。

「……………レイ」

名前を呼ぶと素直にはい、と答えてくる。

その彼女の顎に そつと口づけた。

ほんの一瞬、触れるだけだ。それ以上はしない。

不意をつかれて反応を返せずにいるレイを見上げて、アドルバードは至極真剣に言う。

「……消毒だ。文句あるか」

そこは、つい先ほどルザードが触れた場所。

確かに触れられるのはレイも嫌だった。しかしあのままアドルバードが来なかつたら、ルザードの本願は叶っただろう。たかがキス程度と、齒を食いしばって堪えただろう。その覚悟からしてみれば、触れられたくらい

「……………いえ」

消毒するためだけに、一目のない所に行きたかったのだろう。

「ルザードがいる間は絶対にもう一人になるなよ。できる限り俺の側にいろ」

一応釘は刺したけどな、とアドルバードが呟く。それがそれほど効果のある人間じゃないことが充分に分かる。

「仰せのままに」

淡く微笑みながら答える。

アドルバードは満足したように頷き、入った時と同じようにレイを手を引きながら部屋から出る。

「随分と短い逢瀬だったけど、もうよろしいのかしら？」

突然降りかかる声にアドルバードがびくりと身体を震わせた。

「リ、リノル！！」

部屋を出てすぐの廊下でリノルアースが壁にもたれながら待っていた。

「あーあーあーもう暑苦しいわー。どうしてかしら、もうすぐ冬なのにー」

「ううううううううるさいっ……!」

茶化す妹に怒鳴りつけながらも、レイの腕を放さなかったのは
せめてもの意地ともいえよう。

11: できる限り俺の側にいる（後書き）

長い間放置してしまっただけすみませんでした!!

もう一つの連載が終わりましたので、これからはこちらに本腰を入れて頑張りたいと思います!!

ハドルスもルザードも作者嫌いです……ウザイ。書いてて腹立ちます（笑）

嫌な奴を書こうと思って作ったのである意味成功してますけどね。

12：味方のふりして実は最大の敵

「密室に女連れ込んでどうのこうのっていう不名誉な噂を流されなくなかったら大人しく妹の言うこと聞いて欲しいんだけど？ お兄様」

につこりと微笑みながらリノルアースは堂々と脅迫する。

「……それはアレだよな。結局俺に拒否権はないっていうアレだよな」

「あらやだアドルってば話が分かるうー！ だから大好きよ！」

「本当におまえ良い性格してるよな……」

密室（と言えばそうなるかもしれない）に女（とはいえ騎士の格好をしている）を連れ込んで どうのこうのといっても顎にキスしただけなんだけど とにかく半分以上は事実なのでアドルバードも抵抗できない。

ただでさえあちこちの王子やら姫やらが集まっているこの時にあらぬ噂を流されては面倒だ。リノルアースの場合すると言ったらなにがあるうと実行する。

「今回は実に控えめで可愛らしいお願いだからそう身構えなくても大丈夫よ。シェリーが雪が見たいっていうからバルトス山まで行くうと思つて。それについて来て欲しいなーってお願いしようと思つてただけだよ」

「おまえはアレか。俺とレイの恋路を邪魔したいのか。味方のふりして実は最大の敵だったりするわけか」

「レイが男だったら全力で略奪愛上等だけど、女だもの。シェリーとくつついても面白いけどレイが可哀想だから、その場合アドルを簀巻きにして冬の川に投げ込んでやる」

最初から最後まで真剣な顔でそう答えられるのでアドルバードも絶句する。

「ただ単純にシェリーとは仲良くなって欲しいしその方が得だから

お願いしてるんじゃないの。お姫様二人で外出は危ないしー」

「リノル一人なら平気そうだけど」

「なんか今むかつくこと言われた気がするんだけど気のせいかしら？
それともこの私が可愛い上に腕が立つって褒められたのかしら？」

「褒めた褒めた」

紙一重だけど。

アドルバードはわざとらしい笑顔を作ってとりあえず難を逃れる。

「……まあいいわ。付き合ってくれるでしょ？　可愛い妹の頼みだもんねえ？」

「別にいいけど……ちょっと待て。そういえばルイはどこに消えた？　まさかおまえどつかに捨ててきたのか！？」

本来ならばリノルアースの護衛についているはずのルイが最近姿が見えない。雪を見に行く云々にしろ、ルイの同行は至極当然のはず。

「ああ、ちょっと別の頼みごととしてね。側にいないの」

「頼みごとって……まあおまえが良いなら構わないけど」

「といってもルイの所属は一応、国に仕える王宮騎士団なのだが

もはやリノルアース専属の騎士になりつつある。

「じゃあ早速シェリーのところに行きましょう。まだお昼にもなっていないし、今日出発！　もちろんオプションのレイは大歓迎」

言うに事欠いて国でも凄腕の騎士をオプションか。

確かにアドルバードにレイは当たり前のようについてくるのだが。

「……今日は今から何か予定入ってたっけ？」

一方的に明日を予約してしまったのだが、あちこちの王子やら姫やらと会談してばかりの最近では暇な日などない。

「これからウィルザード様とご予定が」

「ああ……ウィルならいいや。ていうか一緒に連れてけばいいだらいつそ。どうせ世間話だ」

「一応国賓なんですから、そう蔑ろにははいけませんよ」

一応なんてつけてるレイの方がよほど蔑ろにしないだろうか、というつつこみは心の奥底にしまいこむ。言い返せば倍以上になって返ってくるのはいつものことだ。

「今日出発つてそこには何も異論ないわけ？」

少しそこには大きな反応を期待していたリノルアースがつまらなそうに問う。

「おまえが突拍子もないのはいつものことだからな」

アドルバードがそう勝ち誇ったように言うのでリノルアースは少し面白くなかった。

移動は馬車で　とはいかなかった。

何しろ急遽連れ出されるウィルザードを含めた五名中四名は馬に乗れるのだ。唯一乗れないシェリスネイアだけがレイの馬に同乗している。リノルアースもアドルバードも体格的にシェリスネイアを乗せるのは無理がある。ウィルザードでも良かったのだが　出会ったばかりの男と一緒に馬に乗りうなんて考えるお姫様はそういないだろう。

「　大丈夫ですか」

落ちる危険性も考え、シェリスネイアはレイの前に　腕に包み込まれるように座っている。

「特に問題はなくてよ。馬車よりも面白くて良いわ」

馬にも速さにも怯えることなくそう笑えるシェリスネイアはやはりどこかリノルアースと似通ったところがあるのだろう。リノルアースは小さい頃から乗馬をやっているので一人で堂々と手綱をさばいている。

「バルトス山まではそう遠くありません。しばらくご辛抱いただければすぐに着きます」

「そこまで行けば雪があるのね」

その声には少女らしい好奇心に満ちた響きがあり、レイも思わず微笑んだ。

「山の方が寒いですから、早く雪が降るし、なかなか溶けません。雪を見るのは初めてでしたか」

「アヴィラで雪が降ったら恐ろしいですわ」

シェリスネイアの真面目な返事にレイはそうですね、と答える。レイの綺麗な顔を見上げながら、シェリスネイアが問う。

「……あなたは、王子のことを愛していらっしゃるのよね」

言うてから自分らしくないと思った。どうしてこんなことを聞いているんだろう。

アドルバードにはそれなりに好感がもてる。結婚してもいいだろうと思える。良い人だとも思う。けれど 恋にはなっていないのに。

「現時点では忠誠を誓っておりますとしか答えられません。主が変なこだわりのある人ですので」

「こだわり？」

観察してきた限り、アドルバードは柔軟な人だと思う。何をこだわっているのか。そういえばリノルアースもそんなことを言っていた。

「ええ 私の身長を越すまでは、主従関係のままでいると」
なんだそれは。

シェリスネイアは馬鹿馬鹿しくて口をぽかんと開けて呆然とした。くだらない。くだらなさ過ぎる。

「なんなのそれは。男の見栄？」

「さあ……私はもちろん気にしてませんし、アドル様のお気持ちは見てる限り分かりますので。アドル様がそうなさりたいというのなら別に」

確かに聡そうなこの騎士には気持ちなんて昔からバレバレだったんだろう。

面白い話だ 馬の上でなければ聞けないような。アドルバード

とレイは始終共にいるから、レイからこういう話を聞きだすなんて容易ではない。

「そんな悠長に構えていると、どっかの馬の骨に奪われますわよ」
「うっかり自分がその馬の骨になりかけたのだが　やはり人から奪ってまでアドルバードが欲しいという気持ちは湧いてこない。彼にあるのは恋愛感情というよりも家族に対する愛に近い。あんな兄がいれば、きっと少しはマシな生活だっただろう。」

「その時はその時です。奪われるものならどんな状況でも奪われま
すから。私にとって重要なのはアドル様の幸せです」

なんて潔いのか。

なんて凛々しいのか。

なんて

「……あなたの方が男らしいんじゃない？」

レイが苦笑して、よく言われますと答える。

その青い瞳が前を向き、つられるようにしてシェリスネイアも見た。
た。

白いベールをかぶった山だ。

「もう着きますね。あの白いのが雪ですよ」

シェリスネイアはその白に目を奪われた。あれが。

息を吞んで目の前の光景を見つめるシェリスネイアの為に、レイは馬をゆっくりと歩かせる。

ハウゼンランドは何もない小国だ。

けれどこの自然の美しさだけはどの国にも負けないだろう。

「　　ようこそ、ハウゼンランドへ」

なぜかそう言っのが相応しいと、レイは思った。

12：味方のふりして実は最大の敵（後書き）

本当にすみません（土下座）

本腰入りたいのに学校がー！！ バイトがー！！ 気がついたら寝てたー！！

というわけで土日のできる限り書き溜めようと頑張ってみたりします。

更新が遅れてお待たせしている方々には本当に申し訳ないです。見捨てないでください。

13：むしろ肉食獣の子供？

バルトス山には新雪が積もっていた。

最初はおそろおそろ、といった感じてシェリスネイアは雪に触れ、その柔らかさに思わず微笑んだ。

「……すっかり取られたな」

女三人で和気藹々と話しているのを遠めに、ウィルザードが少しふて腐れたアドルバードに話しかける。

もともと二人は同行者というよりは見栄えのいい護衛のような役回りと一緒に来たのだが、護衛の一人であるはずのレイはリノルアースとシェリスネイアに独占されている。彼女の主人を無視して「……レイはああ見えて人の懐に入るのが得意だから。すぐに懐かれるんだよ」

口数はむしろ少ない方だが、ここぞという時にびっくりするくらいにぴったりな、その時に欲しい言葉をくれる。

どこか一線を引いていたシェリスネイアが心を開くとしたら、リノルアースでもアドルバードでもなくレイだろうとは思った。ただこれまで接する機会が少なかっただけだ。

「誰も手に負えなかったおまえら双子を手懐けたんだもんなあ」

「人を野生動物みたいに言うな」

「むしろ肉食獣の子供？ 見た目は可愛いのに凶暴」

凶暴なのはリノルアースだけだ、とアドルバードは心の中で抗議する。小さい頃は二人で悪さをしていたりもしたから、強く否定はできない。

二人に囲まれながらレイがちらりとアドルバードを見る。主人を放置していることに少なからず罪悪感を抱いているのだろう。

目だけで気にするな、と合図すればかすかに微笑んだ。

だから。

「……そついうの不意打ち……」

赤くなつた顔を隠そうとアドルバードは俯く。

意識が他に移つたからだろうか　どこか空気が違う気がする。

殺気　？　視線を感じる？　しかしいつもなら一番に察するであろうレイは何も気づいていないようだ。

分厚いコートの下に隠している投げナイフに触れる。

「……………ウイル。何か感じないか？」

暇そうに女性陣を眺めていたウイルザードが眉を顰める。

「不覚」

気づかなかつたと言いたいのだろう。二人の様子に気づいたレイも、周囲の異変を感じ取つたようだ。

放たれた矢をレイが素早く切り落とした。

それが合図になつた。

「アドル様！！」

「来るな！　そつちにいろ！」

命じなければすぐにでも駆けつけて来てしまいそうなレイにそう言い放つ。そんなことはない、彼女はリノルアースと　国寶であるシェリスネイアを守るだろう。心の底で望んでいることは異なつていても。

一、二、三　　全てで七人。どれもが雪に隠れるように白い服装だ。木や岩陰に隠れていたんだらう。

馴染んだナイフを投げる。それは想像していたとおりの線を描いて刺客の首に命中した。

アドルバード、リノルアース、ウィルザード、そしてシエリスネイア。狙いになりそうな人物ばかりでどう行動すればいいのか判断を鈍らせる。

ただ人を殺すことに躊躇する暇がないということだけは容易に分かった。躊躇ったら最後、屍になるのは自分だ。運が良くて捕らわれ、国に身代金が要求される。

「きゃあああああ!!」

シエリスネイアの悲鳴が耳を貫いた。目の前の惨劇に彼女は身体を震わせている。その身体を抱きしめているリノルアースの顔も蒼白で、唇を噛み締めていた。

二人に危険は及ばない。レイが乱れぬ剣捌きで誰も、何も彼女達には近づかせないから。

ウィルザードも足手まといになるほど弱くない。一人を切り伏せ、もう一人と剣を結ぶ。

これなら勝てる　アドルバードがそう油断した時だった。

「きゃあ!」

いなかったはずの八人目がシエリスネイアに剣を向けていた。

狙いは彼女か　そう判明したと同時にアドルバードは舌打ちした。咄嗟に短剣を投げ、見事刺客の背中に命中したのにも関わらず動きを封じるまでには到らなかった。

「シエリスネイア様!」

一番近くにいたレイが走る。

切り結んでいた敵に左腕を斬られた。

「レイ!!」

出血からしてそれほど深くは無い　レイは振り向き様に相手の胴を斬り倒す。

けれどももう間に合わない。

剣は今にもシエリスネイアと、それを守ろうとするリノルアースに振り下ろされる。

「ルイ!!」

こんな時にリノルアースが助けを呼ぶのはやはり彼女を守る騎士だった。

それは悲鳴にも似た声で。

それはもう劇的に。

黒い何かがリノルアース、シェリスネイアの前に立ちはだかり、二人を斬ろうと下ろされた剣を弾き飛ばした。

得物を持たない敵を容赦なく切り捨て、顔すらも隠した黒衣の男

ルイ・バウアーは主に問う。

「お怪我は」

ちらりと見えたその緑色の瞳は間違いなく彼のものです。

「……ないわ」

まさか本当に助けに来るなんて思わなかった。そもそも彼はここにいないはずなのに。

幻でも見ているのだろうかとりノルアースは呆けたような間抜けた声しか出なかった。

他の刺客も三人によって倒されていた。

真っ白な雪を染める血の赤に眉を顰めつつ、ルイを見上げる。

「……あまり、無茶はなさらないでくださいね。今俺は都合よく側にいないんですから」

ルイらしくない、少し怒ったようなその声に負けて素直に頷きながら「ごめんなさい」と子供のような返事をしてしまった。

そんなの、私らしくもない。

「では仕事に戻ります」

そう言つてろくに顔も見せないままにルイは去っていく。

そんな、お伽噺か何かの王子様じゃないんだから タイミング良く助けて、そんなにすぐ立ち去らなくてもいいでしょう？

「大丈夫か？」

本来ならすぐに駆けつけてくるであろうアドルバードではなく、嫌そうな顔を隠しもしないウィルザードにそう問いかけられた。

「平気よ」

アドルバードは敵を一掃してすぐにレイのもとへ駆けつけた。こちらの唯一の負傷者だ。

リノルアースに寄りかかったままのシェリスネイアはまだ顔色が悪い。狙われたのはほぼ間違いなく彼女だった。一番可能性が高いだろうとは思っていたが。

「ここはまだ危険だ。城に戻るぞ」

レイの手当てを終えたアドルバードが彼女に寄り添いながらそう指示する。

誰もそれに異論を唱えず、馬を繋いだ場所まで戻る。

「シェリスネイア様、申し訳ありません。帰りはウィルザード様の馬にご同乗願えますか」

レイがそう切り出すと、シェリスネイアの顔色が一層曇る。

「……怪我は、そんなに深いの？」

怯えた表情のシェリスネイアに、レイはいいえと答える。

「そう深くはありません。私は騎士ですからこの程度の怪我には慣れています。けれど帰りまた刺客に襲われるようなことがあれば自分の身を守ることは出来ても、シェリスネイア様を守りながら戦うことは難しいかもしれません。ですからより安全な方法を」

低い評価だと誰もが思うだろう。レイは片腕を負傷していたとしてもこの中で一番強い。けれどシェリスネイアが狙われていると分かった以上は彼女を守る為の陣形でなければいけない。

「ウィルザード様も、お辛いかもしれませんがご辛抱ください」

レイが丁寧な頭を下げる。

女嫌い（しかもシェリスネイアはどちらかと言えば嫌いな部類）のウィルザードにとってではなかなか苦痛だろう。

「気にするな」

しかしここで駄々をこねるほど子供でもない。

ウィルザードは丁寧にシェリスネイアをエスコートして、自分の馬に乗せた。

その厚い上着の中で鳥肌がたっていたことは本人しか知りようが無い。

14：あなたの目的は何？

「ごめんなさい」

もう城まで残りわずかとなり、一度休憩しようと馬を下りた時だった。

らしくないともいえるほどにしおらしく、シェリスネイアがぼつりと呟いた。

襲撃にあつた原因は彼女だというのはもはや分かりきつたことで、彼女がそれを詫びたいと思う気持ちも分からないでもない。

「気にしないでいいのよ、シェリー。私たち友達でしょう？」

優しい微笑みを浮かべたままりノルアースはシェリスネイアに歩み寄る。

その微笑みが心の底からのものでないということに他の三人はすぐに気づいた。

「なんて、言うと思う？ 謝ると言うことはシェリーは予測していたということよね？ それでも私たちを危険に曝したんでしょ？」

真っ直ぐに見つめてくる瞳にシェリスネイアは返す言葉がない。

「……否定しないわ。私を殺したい人間なんて山ほどいるもの」

苦笑しながら顔を逸らすシェリスネイアの手をリノルアースが掴む。

「誤魔化さないで。それが許される立場でもないわ」

突然襲われた。その結果アドルバードの騎士であるレイが負傷した。もしもシェリスネイアが事前に一言言っておきさえすれば回避できたであろうことだ。

「あなたの目的は何？」

南の大国の姫がこんな小さな国にやって来る理由。

どう考えても利益なんてどこにもなかった。疲れるし金にかかる

しむしる損ばかりだ。

「……アヴィランテで生き残ろうと思うのなら、王子を産めと。昔からそう言われてきたわ」

シェリスネイアはリノルアースから顔を逸らしたまま、ぽつりと呟く。

「女系の国で姫がいくら生まれても意味は無い。王子を産んだ妃は優遇され、高い地位を得て、死ぬまでの生活が保証される。私の母にはもはや私しか子供がいない。このまま私がどこかに嫁げば母はきっと後宮の影で生きていくしなくなる」

「もはや？」

ずっと傍聴していたアドルバードが問う。

それはつまり、一人では シェリスネイアだけではなかったということか。

シェリスネイアはアドルバードの問いに曖昧に微笑んだ。南国の大輪の華が散りゆくその瞬間のような微笑みだった。

「私にはね、兄がいたはずなのよ」

王子さえいれば。

母がいつまでも呪詛のように呟いていた言葉。

「兄は赤ん坊の頃に、北の大地へ向かう途中の砂漠で嵐に巻き込まれ、行方知れずとなったの。王子がいなくなってしまった私たち母子の生活なんて急落していったわ」

それでもシェリスネイアが美しく成長し、父の目に留まるようになってからは楽になった。男達からの貢物もあった。

しかしシェリスネイアはいつまでも母の側にいるわけではない。

「だからね、リノル。私は兄を探しにここまでやって来たのよ」

「王位につける人間が増えればそれだけ面倒ごとが増えるからな。

それにシェリスネイア姫が嫁ぐ場所によっては、その行方不明の王子が王位につく可能性は大いにありえる。もともと目障りな姫を殺して、さらに不安の芽を摘み取るうって魂胆なんだろうな」

あれから特に問題なく城へと戻り、シェリスネイアは疲れたと言つて部屋に籠もってしまった。リノルアースもなんだか怖い顔で自室に籠もっている。

レイが淹れた温かい紅茶を飲みながらウィルザードが暢気に要らぬ説明する。

「どこの国も似たようなもんだなあ」

「そりやそうだ。小さいのも大きいのも関係ないだろ」

それはつまりハウゼンランドが小さいと言いたいのか　とアドルバードは思ったが、どう足掻こうと変えることの出来ない事実なので大人しく口を噤む。

「起死回生の一手、つてところかね。限りなく望みの薄い話だが」
十年以上も前行方不明になった王子が生きているなんて思えない。まして当時赤子だったというのだからなおさらだ。

「そう思っているけど、縋りたかつたんじゃないのかな」

叶わないと分かっているけど、敵だらけの生活の中で唯一の家族である母のために。

「なんだよ、随分と肩を持つな。惚れたか？」

「なんでそうなる！？　俺は別にそういう意味で言ってるんじゃない」

「ムキになるあたりが怪しい。騎士さんどうするよ？　浮気されてるぞ」

さっきから甲斐甲斐しく紅茶を淹れたり上着を片付けたりしてい

るレイにウィルザードが話をふる。

「浮気もなにも。私とアドル様はそういう関係ではありませんので」

「……そうきっぱり言われると傷つくぞ俺も」

そりゃ確かに事実だけれども。少しは気にかけてもいいんじゃないのか。

「……って……おまえ何普通に仕事してるんだよ!! 手当てにいけ手当てに! 応急処置のままじゃねえかソレ!？」

レイの腕にはアドルバードが急いで巻いた布が縛られているだけだ。その布もうつすらと赤く染まっている。

「特に支障がなかったのだ」

「あるだろ大いに! 今すぐ医務室へ行け! コレ命令!」

扉を指差しGOサインを出す。命令するのは正直好きじゃないのだがこういう場合は仕方ない。というよりこのままだと本気で放置しかねない。

「しかし」

「城の中で危険はそうない! ウィルもいる! おまえが手当てしてくる程度は支障ない!」

いいから文句言わずにとつと行け!」

レイはまだ何か言いたそうにしていたがアドルバードが睨むとため息を零して部屋から出て行った。

「なんていうか相変わらず自分のことは後回しだなあ」

呆れるというよりも感心してウィルザードがレイを見送る。

「そうなんだよ嬉しいんだけどそれってどうよっていうか傷跡残ったらどうすんだよもう少し気をつかえていつも言ってるのに別に傷なんて残っても俺は全く気にしないけどさホントいつも俺のことばかり……いや嬉しいんだけど、嬉しいんだけどさ!」

「鬱陶しい」

ノロケとしか思えないアドルバードの言葉をウィルザードはぼつさりと切り捨てた。

「あー……ごめん。つい本音が……で、リノルはどうするつもりな

んだろ。まさか途方も無い兄探しの手伝いなんかするって言いだすんじゃないだろうな！？ それってつまり俺も強制参加だろ！？」
「……ホントおまえらの力関係がよく分かるよ。たぶん 手伝うんじゃないか？」

アレも相当なブラコンだし。

ウィルザードの呟きにアドルバードは首を傾げる。自分がシスコンだということはもはや否定しようがないが、リノルアースまで？
「そもそも砂漠で消息が絶ったっていうのにハウゼンランドに来たってことはそれなりに情報があるんだろうよ。そのうち聞いてみりやいい」

「手伝う気は？ どうせ暇だろ？」

一人でも多くの生贄を提供して自分への負担を減らそうとするアドルバードに、ウィルザードは苦笑する。魂胆が見え見えだ。こいつは腹の探りあいには向かないだろう。

「国寶に雑用させる気が。悪いがごめんだね」

「なんで」

珍しい とアドルバードが素直に驚く。ウィルザードはなんだかんだで付き合いいい奴だ。

「苦手なタイプの女×2はさすがに嫌だ」

ああ……とアドルバードは妙に納得した。

あの二人が今日のような調子ではなく、いつもの通りの様子ならばウィルザードにとってそれは生き地獄だろう。

「でもまあ、暇で暇で仕方なかったら少しくらい付き合ってやるよ」
そう言いながらウィルザードが退室しようと立ち上がる。

タイミング良く手当てを終えたレイも帰って来た。随分と早いのできちんとやってきたのかとチェックを試みたが 問題なかった。

「じゃあなアドル。無事を祈る」

「……そりゃどうも」

アドルバードは苦笑いで手を振りかえす。

「……何の話です？」

レイが珍しくきょとした顔で二人を見ていた。

15：自分の武器が何であるか知っていた

兄のことは覚えていない。

生まれる前に行方知れずになった人のことを知るはずもない。母も兄に関しては口を噤んでしまつて、シェリスネイアに話してくれることはなかった。呟く言葉といえば、兄さえいればの一言だけだ。リノルアースやアドルバードのように、家族に対する絶対的な愛情があるわけではない。むしろシェリスネイアの中にあるのは冷めた感情だけだ。

それでも 自分がいなくなった後に母が生きていけるだけの手立ては用意しよう。それが自分を産んでくれたことに対する恩返しだと そう思つてシェリスネイアは生きているかも分からない兄を探しにきた。

もしかしたら それすらも言い訳かもしれない。

閉鎖的な王宮から少しだけ出てみたかった。外を見てみたかった。空から降る氷の結晶はどれほど美しいものだろうか。

だから目的という目的も存在しなかった。兄を探しているなんてそんなことを口にしてしまったのはたぶんきつと。

「……少しだけ、羨ましかったのよ」

お互いがお互いを思いあうあの双子が。
妹を見つめる優しいあの兄の瞳が。

それがもしかしたら自分にもあったものだったかもしれないと、
そう思えて。

らしくない 本当に自分らしくない。

家族の愛情なんて、とうの昔に望まなくなっていたはずなのに。

『ああ　あの子さえいてくれれば、こんな生活送っていなかったのに』

『陛下は今でも私を愛してくれていただろうに』

『どうせ生まれるなら王子であれば良かった。いくら美しくても姫では意味が無い』

『どうしてあの子はいないの』

物心がついた頃には、呟かれる毒を持ったその言葉たちに慣れてしまっていた。

母に心のそこから愛されていないことに気づいたのも早くだ。

それでもシェリスネイアには後宮の中で生きていけるだけの美しさがあった。自分の武器がなんであるのか幼い頃から知っていた。

家族なんてただ血が繋がっているだけの他人だと　そう考えてきたシェリスネイアの生き方をこの北国の人間は悉く潰してしまっ

た。

同じ王族なのにどうしてこうも違うのだろう。

あの二人はあんなにも両親に愛されて、周囲から守られているのに、自分の惨めさといったらなんだろう。

羨ましい。

そんな感情を、シェリスネイアは今まで知らなかったのに。

「それで、シェリスネイア姫の兄君が本当に生きていると思うか？」

古い資料を掘り出しながら、同じ作業に文句一つ言わず淡々とこなすレイに問いかける。

「さあ、どうでしょうね。まるで望みがないわけでもないと思いますが　なにしろ随分昔のことですし、生きていたとしても本人がアヴィラの王族であったことを覚えているとは思えないので」

なにしろ行方不明になったのは話すこともできない赤子の頃だ。

「砂漠で行方不明ねえ……確かにうちの南の方は中央砂漠との行路もあるし、近隣の国に比べて国境の警備も厳重じゃないから入りやすいかもな」

「国境の警備がなっていないということに少しは危機感を覚えたらどうですか」

ため息と共に吐き出されたレイの忠告をアドルバードはさらりと聞き流す。

ハウゼンランドは攻め入ってもそれほど利益のない小国で、今では大国アルシザスの後ろ盾もある。まして冬になれば他国の人間では凌げないだろう大雪の壁があるのだ。攻略しにくい国ではあるだろう。

「えーと……十五、六年前か？　俺達が覚えているわけないしなあ」

「アドル様もリノル様も生まれてませんよ　ああ、確かに中央砂漠で大きな砂嵐が相次いだみたいですね」

手元の資料に目を落としながらレイが呟く。彼女も幼すぎて記憶にはないのだろう。

「どれ。ああ、ホントだ。これのどれかに王子が巻き込まれて、行方知れずになっただってことか。それにしただって何の情報もないけど」

「……亡命であった、ということは考えられませんか？」

「　　亡命？」

アドルバードが眉を顰めた。

他国からの侵略の心配もないような大国、アヴィランテの王子が？
「アヴィランテには既に何人かの王子がいます。どれも生きているかもしれないシェリスネイア姫の兄君より年上です。確か王子は皆

年齢は近かったと思います……当時たくさん生まれた王子は邪魔者であつたとしても排除するのは難しかったでしょう。しかし、その後何年かして生まれた王子は……先に生まれた王子、または王子の後ろ盾によって暗殺されていたとは考えられませんか？」

「しかも送り込んでくる敵は王子の数だけいるってことか？」

「ごくりと、アドルバードは息を飲んだ。」

王家というものはけっこう血生臭いものだ　知識として知つていてもやはり実感が無い。自分がどれだけ優しい世界で生きてきたかを思い知らされる気がした。

「おそらくは。シエリスネイア姫に聞いて確かめてみましょう。生まれてすぐ死んだ王子はいないか、いたしたらそれは何人か」

レイは持っていた資料を閉じて、脇に置いて、必要のなくなった資料だけ片付け始めた。

「推測として、シエリスネイア姫の兄君はそういった人間から逃れる為に　いや、逃がされて、たぶんハウゼンランドあたりを目指していた。そして中央砂漠を越える際に砂嵐に巻き込まれた？」

「それほど無理のある仮説ではないと思います。シエリスネイア姫もここまで辿り着いて、ハウゼンランドへやって来たのではないでしょうか」

頭の切れる人みたいだからな、とアドルバードは呟く。

「じゃあ、シエリスネイア姫のどこへ」

「今日はそつとしておいたらどうですか。行っても会ってもらえないかもしれません」

行こうかと言おうとしたアドルバードの言葉をレイが遮る。

「それよりも、行きたいところが」

話しながら出した資料をほとんど片付けたレイは、何冊か目ぼしい資料を手に取り立ち上がる。

「ああ、別にいいけど　一体どこに？」

立ち上がりレイの後ろに続いて部屋を出る。

思い出したんです、というレイの呟きにアドルバードは首をかし

げた。

「十五年くらい前に、父は中央砂漠まで調査に向かっています。おそらく多発した砂嵐の件でしょう。行けば何か聞けるかもしれせん」

「デイクが？」

当時はまだただ王妃の騎士であつたはず　今は騎士と共に王宮騎士団長まで兼任しているが。

「ええ。今頃はたぶん団長室にいますから」

「ああ……じゃあ俺も一緒に行くよ」

「……嫌なら別に部屋で待っていて下さってもかまいませんか？」

アドルバードの空気の变化に敏感に気がついたレイがちらりとアドルバードを見て言う。

「嫌ってわけじゃないけど。デイクは会うたびにやれ肉を食えだの牛乳を飲めだの稽古をつけてやるだのうるさいから……」

小さな頃から好き嫌いだのには両親よりもうるさかった。デイクに稽古をつけてもらった次の日には筋肉痛で一日中動けなくなる。「あれでもアドル様を心配してるんですよ。稽古はむしろつけてもらった方がいいんじゃないですか？　最近怠ってますよ」

ばれていないと思つたが、やはりレイには隠し通せるはずもなかったか　とアドルバードはしどろもどろに言い繕う。

「いやそれはホラ、ちょっといろいろ忙しくて」

「適度な運動した方が身長は伸びると聞きますけど」

「筋肉が悲鳴を上げるまでの運動は適度なのか？」

さすがにそのアドルバードのぼやきにはレイも苦笑する。

最近はおさら　彼の一人娘に手を出してしまったことが後ろめたくて顔を合わせずらい。親馬鹿というわけではないのが救いだろつか。

「いざとなつたら助けますよ。たとえ父からでもね」

そう微笑むレイが心強い。さすがに剣聖と讃えられる男に立ち向かうほどの勇気はアドルバードにはなかった。

16：男なら黙ってこの顔に騙されればいい

アドルバードとレイが城から出た頃、事件は起きた。

「きやあああ！！」

若い女官の悲鳴が響き渡り、一人物思いに耽っていたシエリスネイアは現実に取り戻された。

「何かあったの？」

寝室から出て騒ぎの中心であろう女官に問う。彼女の手には色鮮やかな布があった。模様に見覚えがある。

「……それは」

シエリスネイアよりも先に駆け付けた女官が涙ぐむながらボロボロになった布切れを握り締めている。

「……シエリスネイア様のご衣装です」

それは確かにシエリスネイアが国から持ってきた衣装だった。

「すべて切り裂かれてます……誰がいったいこんなひどいことを」

シエリスネイアは苦笑した。心当たりがありすぎて犯人など見当もつかない。衣装を盗まらずに破いたあたりハウゼンランドに来た王族の誰かからの差し金だろう。

どこに行っても結局自分が生きてる場所は汚いのだと思い知らされたように、シエリスネイアは密かにため息を零した。

短い悲鳴が聞こえて、ウィルザードはその部屋まで駆け付けた。女嫌いとはいえ、悲鳴を無視するほど非道ではない。

そして辿り着いた先が城の客間の中では一等豪華な部屋だということに気付いて、自ずとその部屋の主が分かってしまった。

「何かあったんですか、アヴィラの姫君」

開け放たれた扉からウィルザードが話しかけると、シェリスネイアは顔を上げ、驚いたように目を丸くした。

「……失礼しても？」

返事のないシェリスネイアにウィルザードが入室の許可を求める
と、シェリスネイアは慌てて頷いた。

「どうぞ、ネイガス王国の王子　とてもお茶を出せるような状況
ではありませんけど」

ウィルザードはゆっくりと部屋に入り、泣いている女官から切り
裂かれたシェリスネイアの衣装を受け取る。

「これはまた　派手にやられましたね。とりあえずリノルアース
にでも衣装を借りてはどうですか？」

ため息まじりのそのセリフにシェリスネイアは眉を顰めた。

「……言われなくともそうさせていただけますわ。お嫌なら無理に
気遣っていただくなくても結構ですよ」

ウィルザードがシェリスネイアに対して良い感情を抱いていない
だろうことは容易に想像できた。他の男とはまるで違う反応を

逆の反応をするから分かりやすい。他の男が好意を寄せているのだ
から、逆のウィルザードは嫌悪だ。

「ああ、誤解させたのなら謝罪しますよ。俺は確かに女は苦手です
し気の強い奴なんて尚更です。けど今はむしろこんな子供じみた馬
鹿なことをする奴の方が不快ですね」

さらりとした口調に毒気を抜かれてシェリスネイアは黙る。気の
強い女　シェリスネイアがそれに当てはまるだろうことを隠さな
いあたりがいつそ清々しい。

「……リノルのところへ行きますわ。エスコートしてくださいさる？」

「謹んで遠慮させていただきます。俺はあいつが一番苦手なんで」

「絶世の美女の頼みをそう簡単に断るなんてどうかしてるんじゃない
くて？」

「怖いからどうしてもとおっしゃるなら扉の前まで一緒にしますが
？」

シェリスネイアはさつと顔を赤く染めた。凶星をつかれて余計にこの男が憎らしくなる。

男なら黙ってこの顔に騙されればいいのよ！

「怖くありませんもの、結構ですわ！ 女性の頼みを無下にする男など始めからあてにしておりませんもの！」

赤く染まった頬を隠すようにシェリスネイアは顔をそらす。女官に美しい衣装であったものの残骸の片付けを命じて、シェリスネイアはリノルアースの部屋へと足早に歩く。

その数歩後ろに、ウィルザードが着いて来る。

「……………」

「……………」

ただ黙々と歩くシェリスネイアを追い越せばいいものの、一定の距離を律義に守ってウィルザードは歩く。その様子にシェリスネイアの苛立ちは募る一方だ。

「いい加減にしてくださらない！？ 後ろを歩かれると鬱陶しくてたまりませんわー！」

シェリスネイアの限界の壁は簡単に崩壊し、振り返ってウィルザードに怒鳴る。

「大国の姫なら人を率いて歩くななんて慣れてるでしょう。お気になさらなくて結構ですよ。たまたま、偶然、行く方向が一緒なだけです」

見え透いた嘘を、と思いながらシェリスネイアはまた歩き出す。

嫌な男だ。嫌な男だけれど シェリスネイアに騙される馬鹿な男よりも、ずっと面白い。こんな男はいなかったと思わず楽しんでいる自分をどこか感じていた。

「あらま、大変ねえ。でも私の服じゃシェリーが着るには小さいんじゃないかしら？ それにアヴィラの衣装にはコルセットはないでしょう？ コルセットはそれぞれ特注で作るものだし」

リノルアースの部屋へ行くとリノルアースは暢気にそう説明した。ウィルザードはリノルアースの部屋まで辿り着くと素知らぬ顔で立ち去った。

「あんなものをしていてよく息ができるわね」

「慣れよ慣れ。一応コルセットをしなくてもいいドレスが何着かあるから、それを持ってくといいわ。私は着ないし」

そう言いながら侍女に命じてドレスを持ってこさせる。

薄紅、水色、赤、色とりどりの美しいドレスが何着も運び込まれ、シェリスネイアは首を傾げてリノルアースに問う。

「あなたが着ないドレスがどうしてこんなにあるの？ 見たところあなたが着るには少しだけ大きいみたいだし」

「あー、これはアドルのだから」

さらっとリノルアースが零した言葉にシェリスネイアが硬直した。

「……………アドルバード王子が？ 着るの？ ……これを？」

「そうよ？」

リノルアースがきよとした顔で答える。
ちよつと待て。

「……………王子には女装癖があるの？」

シェリスネイアの真剣な顔を見てリノルアースが頬を掻く。

「あー……………いや、そういうわけじゃなくてね。まあ色々あってさ。私に変装してもらった時のがそのまま取っただけ。ホラ、双子だからさ、服装変えると親しい人以外は結構騙せるもんなのよ。普

段着るんじゃないから。むしろアドルは女顔なのがものすつこいコンプレックスだから」

説明し忘れるところだったとリノルアースが笑う。そこはぜひとも忘れないでいて欲しい。

「そう……ではお借りするわ。ありがとうリノル」

色々なことにほっと一安心しながらシェリスネイアが微笑む。

「どういたしまして。後で部屋に運ばせるわね。作りは単純だから簡単に着れると思うけど、朝にうちの女官に行かせるから着付けてもらって」

アヴィラから連れてきた女官じゃ着せられないでしょう？ とリノルアースに指摘されてシェリスネイアも苦笑する。

「心配しなくても嫌がらせの犯人はこっちで突き止めるから。何となく予想は出来てるけどね」

「こちらにしてみれば日常茶飯事なもの、急がなくてもかまわないわ」

アヴィラではむしろもつと危険な目に遭っている。迂闊に食事が出来ない時期だってあった。

「こつちの問題でもあるのよ、シェリー」

リノルアースが苦笑する。国寶を危険な目に遭わせたともなれば本来なら責任問題は免れないだろう。

「ならお任せするわ。それじゃあ失礼させていただきますわね」

ハドルス山でのこともあり、正直あまり面と向かって会話するのは辛い。リノルアースは本当に人の心の奥底まで見透かしてくるようだ。

「シェリー」

呼び止められて、シェリスネイアはぎこちなく振り返る。

「……本当に見つかると思うの？」

誰がとも何がとも言わなかった。シェリスネイアの兄のことかもしれないし、嫌がらせの犯人のことだったのかもしれない。けれどシェリスネイアは前者に思えた。だから。

「思わないわ」

初めから望みの無い賭けだと知っている。
だからそう答えた。希望なんて初めからないのだから。

17：物分りのいい人間のセリフ

デイク・バウアー。

若くしてその実力から王妃の騎士となり、その剣の腕は誰もが疑うことなくハウゼンランドーである。功績を讃え、国王から『剣聖』という特別な称号を与えられるほどだ。誰も知らないような弱小貴族であったバウアー家はそれ以来誰もが知る貴族となった。家柄としては弱小のままだが。

四十三歳になるデイクは衰えを感じさせない。筋肉は若き時よりも洗練され、剣の腕は一日経つごとに上へ上へと昇っていく。

その人を一言で表せば、岩だ。とにかく身体がでかい。小柄なアドルバードからするととてつもなく圧迫感がある。繊細な美しさを持つレイの父とは、とても思えない。

「お久しぶりです。殿下。お元気そうでなにより」

騎士団長室を訪れるとデイクは娘に声をかけるよりも先にアドルバードに挨拶する。お互いに仕事申中だという意識があるのだろう。「アルシザスから帰って来た時に挨拶に行っただろ。まあ、それも大分前になったか……少し話があるんだけど、今時間は？」

「ないとしても殿下からの頼みならば」

デイクは立ち上がり、アドルバードに応対用のソファに座るように勧める。アドルバードが座ってからデイクも腰を下ろした。

「レイ、おまえも座れ」

後ろに立っているレイにそう命じる。デイクを相手にするならレイに任せた方がいい。昔のことを聞くにしろ、彼女の方が覚えているだろう。

レイは素直にアドルバードの隣に腰掛ける。

「……なんだ。ついに殿下のところに嫁にでも行くのか」

アドルバードとレイの真剣な様子にディークはあっさりと誤解した。

「いやまだだから！ 早いだろ俺まだ十五歳だし！ ていうか知ってたのかディーク！」

アドルバードが動揺を隠しきれずに大慌てだ。

「アドル様、落ち着いてください」

「そりやまあ昔から見れば嫌でも気づくでしょう。ばればれですよ。特に殿下が」

冷静な親子につつまれてアドルバードは居たたまれない。

「とりあえずそういう話はアドル様が私の身長を追い越してからだそうです」

羞恥で二人の顔が見れないアドルバードは俯き、そのアドルバードの横でレイが律儀に説明する。

お願いだからそんなに言いまわらないでください。そりやあもしかしたら未来の義父なんだから仕方ないのかもしれないけど！

「そりやあと何年かかるんだ。とつと結婚しちまえ」

「それが父親の反応ですか、普通は一人娘が嫁ぐ時は一番嫌がるものでしょう。そろそろ本題に入ってもいいですか」

おう入れ入れ、とディークの態度の気安い。

「十五、六年前に中央砂漠に調査に行きましたよね？」

レイは持ってきた資料を広げながらディークに問う。

「ああ、それがどうした」

「話を始めると長くなるんですが」

シェリスネイアの事情と目的、そのうえで考えられる推測をレイはかいつまんで説明した。

アドルバードは緊張で口が渴いた。おそらく父と向き合うよりも、ディークとこうして向き合うことのほうが緊張する。

「なるほど、悪くない推測だな」

一通りレイから話を聞いたデークが微笑みながらそう言う。

「多発した砂嵐は、何十年かに一度はあるどうってことのない自然現象だ。それに巻き込まれて死んだ人間は山ほどいるだろう……それよりもレイ、おまえは結論に辿り着いているんじゃないのか？」

デークはレイを見ながら笑う。奥底に何かを隠し持ったような顔だ。

「……憶測にすぎません」

レイは躊躇ったようにそう呟く。アドルバードだけが置いていかれたまま、親子二人は結論らしきものを掴んでいるようだった。

「もう少し他の人間に分かりやすい会話をしてくれないか」

馬鹿にされるのは重々承知でアドルバードが控えめに主張する。

「殿下、もう少し柔軟になられた方がいいですよ」

「持っている知識をすべて統合すれば分かる話ですよ」

案の定二人同時につまれる。頭の回転が速い奴らについていけない自分が情けない。

「……まず、このハウゼンランドで南国出身のものは目立ちます。容姿がまるで違いますから」

レイが丁寧に説明を始めて、アドルバードも素直に頷く。

「そしてシェリスネイア様が探している兄君は十五年くらい前に、ハウゼンランドに近い中央砂漠で行方不明となった……ここまではいいですか？」

「それくらいは分かる。それで？」

ここから応用です、とレイが呟く。

「十五年前に、砂漠で拾われたおそらく南国出身であろう人を知りませんか？」

そんなに都合よくいるわけがないだろうと言おうとして たっ

た一人、当てはまる人間を思い出す。

濃い肌、黒髪、十五年くらい前彼は赤子の時に拾われた。

まさか、と呟いていた。

信じられるだろうか？　こんな偶然がそう転がっているわけがない。

「……………ルイ？」

口の中が渴き切っていた。

アドルバードの呟きに、ディークもレイも何も言わない。当たっているとも、外れだとも。

「…………父上は気づいていたんではないですか。ルイの出生についてだから父上が保護をした。ハウゼンランドで城の中に次いで安全であろうバウアー家に。養子にしたのも追っ手などから誤魔化すためでしょう　違いますか？」

レイの淡々とした口調が何故か重かった。

ハウゼンランドの剣の腕前のディークの側にいることは、もしかしたら城内よりも安全だったかもしれない。加えてバウアー家は名はそれほど知られていなかった貴族だ。他国の者の目を欺くにはうってつけだろう。

ルイは幼い頃はあまり家の外に出ることを許されなかった。だから、アドルバードやリノルアースと幼い頃から一緒だったレイとは違って、初めて出会ったのは随分と大きくなってからだ。

それが、ルイの身の安全のためだとしたら？

「…………拾った時に側にいた男が、ただ守れと言っていた。追ってくだるう輩に渡してくれるなど。その男はそう言っすぐに死んでしまったがね。ルイを拾い、育てながら調べたさ。おまえと同じ憶測にも辿り着いた　しかし、証拠はない」

「……ルイは、このことを知っているんですか」

レイが静かに問う。

ディークはゆっくりと首を横に振った。

「話すつもりなどなかったさ。こんなことにでもならない限りは。あれがもし本当にアヴィランテの王子だとしてどうする？ 命の危険があつて逃げてきたというのに、アヴィラに戻すのか？ 俺は助けた命をむざむざ殺すつもりはない」

あれはもう俺の息子だ、とディークが呟く。その言葉に嘘偽りは感じなかった。

「ですが、もはや話さなければならぬ事態です。ルイにも、シェリスネイア姫にも。ルイはもう赤子でも子供でもありません。選択する権利は彼にあるべきです」

冷静だな、とディークは呟いた。

アドルバードもそう思う。レイにとって、ルイは大切な家族ではなかったのか？

重い空気のなか団長室を出て、アドルバードの部屋へと帰る。

レイの言うことが間違いではないのは分かっている。ルイがもしアヴィラの王子だとして、その可能性に気づいているのに隠そうとすればそれは国際問題になる。

けれど。

「……おまえは辛くないのか」

アドルバードは小さく呟いた。

それでもレイには聞こえているはずだ。今は二人の足音くらいしか音らしい音は存在しない。

「何を、辛く思うんですか」

レイも小さく答える。

「ルイの生まれがどうであれ、この話を聞いたルイの選択がどうであれ、ルイ・バウアーが私の弟であり、父上の息子であることに変わりはありません。彼が私を姉と慕ってくれることも、父を尊敬している気持ちも、消え去るわけではないんですから」

物分りのいい人間のセリフだ。

それでもアドルバードもそれで納得してしまう。いつもと変わらない日常となっても、遠く離れる結果が訪れても、彼が彼であることに変わりはない。

「彼にとって最良の道を選ぶべきなんです。そしてそれを祝福し、応援するのが家族の務めというものでしょう」

アドルバードはレイの横顔を見上げる。

何もかもを、覚悟しているような、そんな顔をしていた。

18：今ここで誓いなさい

何も考えない。

何も思わない。

あらゆる可能性をこの脳から排除する。

それでもなお思考しようとする脳をどうにか制御する。

知りたくない。

気づきたくない。

リノルアースは明かりを消し去った部屋の中　寝台の上で膝を抱えながらじっとしていた。

女官は皆下がらせた。リノルアースを氣遣う彼女達の存在は時に鬱陶しい。一人になりたい時もある。

否、本当は一人でいたくない。ただ一人の人に側にいて欲しい。たぶん彼はリノルアースが黙ったままでこんな暗い部屋の中にいたら大いに動揺して、右往左往するのだろう。そんな光景が容易に想像できて少しだけ笑えた。

そして彼に仕事を言いつけていた自分に感謝し、同時に恨んでしまふ。

「……ルイ」

呼んでも返事なんてあるわけがないのに、何故かリノルアースの唇は騎士の名を紡ぐ。

闇がりノルアースの鈴の音のような声を吸い取る。小さな声は飲み込まれたままだ。

当たり前かとリノルアースはため息を吐き、膝に頭を預ける。

「呼びました？」

いつもの低い声を聞いても、空耳だろうと思った。いるわけないという意識がそれを幻として処理した。

「……リノル様？」

暗闇の中、彼の緑色の瞳と目があつて　現実だと認識される。

「ル、ルイ　どうしてここにいるの!？」

仕事しなさいよとリノルアースはつい照れ隠しでいつもの憎まれ口を叩いてしまう。

「いえ、その……一応リノル様の安全を確認しておこうかなと」

「怪我なんてしてないわよ。昼間も確認したでしょう?」

「……そうですけど、呼んだでしょう?」

柔らかな微笑みを浮かべてルイが言う。

ああ、もう　まさか本人がいて聞かれているなんて。一生の不覚だ。

「……何よ。呼んだら悪いの?」

リノルアースが照れ隠しに睨み付けると、ルイは優しく微笑んだまま、いいえと答える。

「いつ、どんな時でも俺を呼んでください。あなたの声が聞こえたなら、何もかもを投げ出しても参上します　俺はあなたの剣であり、盾ですから」

こんな時にそんなこと言わないでよ。思わず縋りつきたくなるよ　うな。

「……聞こえないほど遠くにいたら?」

返事は分かっていた。けれどリノルアースはふて腐れたようにそう呟く。

「命令でもない限り、そう遠くには行きませんよ」
即答するルイを見つめてリノルアースは黙り込む。

迷いなくきつぱりと言い切ってくれる彼が好きだと思う。本人には決して言わないけど。ルイにしてみればなんの含みもない言葉だったんだろう。リノルアースが密かに不安に思うことにも鈍感な彼は気付いていないに違いない。

なんとなく、嫌な予感はしていた。だからルイをシェリスネイアには会わせなかった。

分かってしまった。

こんな時は自分の回転の早い脳を恨みたくなる。

どんなに考えないようにしても自分の頭は答えを導き出す。

たぶんルイは、シェリスネイアの兄だ。

アヴィランテの王子だ。

ハウゼンランドなんて小国の姫では手も届かないほどに遠い。

「なら今ここで誓いなさい。いつまでも、私の側にいて私を守ると」

真剣なりノルアースに若干の違和感を感じつつ、ルイはリノルアースの足元に跪く。剣を掲げて頭を垂れた。

「誓います。いつまでもあなたの側で、あなたの剣となり盾となると」

ああ、なんてズルイんだろう。

彼に選択の余地も与えずに忠誠という見えない鎖で縛り付ける。
不意に零れそうになった涙を堪えた。

差し出したリノルアースの手の甲に、ルイは自然な動作で口づける。唇が触れた部分が甘くて痛い。

「……誓いを破ったりしたらどうなるか分かってるわよね？　タダじゃすまないわよ」

「破りませんよ、命は惜しいですから」

そう言いながらルイは苦笑する。

「報告を。その後で仕事に戻りなさい。客人に変わった様子は？」

「他国の方々には特に目立った動きはありませんよ」

そう、とリノルアースはひとまず安堵した。

ルイには少し前から隠密にも似た仕事をしてもらっている。国賓の動向などを探ってもらっていたのだ。万が一にも面倒事が起きないように。

「では、ハドルスとルザードは？」

リノルアースの悩みの種はむしろそっちだった。

随分昔からアドルバードが座るべき王座を狙う従兄弟達。野心家で自信いっぱいだけれども実力を見誤っている比較的凡人。それに気づかずにいるということも愚かな証拠なのだが。

「そのことでご報告が」

低いルイの声がいつそう低くなる。

話なさい、とリノルアースは小さく命じた。人払いが済んでいたのは幸いだった。

「 シェリスネイア姫が嫌がらせに？」

城に戻った途端にウィルザードから話を聞かされてアドルバードは重い息を吐き出す。

「……どうしてこう次から次へと問題が起きるかな」

「誰が犯人かまだ分らないが、まあ目障りな敵だったんだろうなあ」

報告しにきたウィルザードが暢気に呟く。

シェリスネイアのことをなぜウィルザードが知っているのか問いたかったところだったふが、聞くタイミングを逃してしまった。

「それで、姫のご様子は？」

やはり少しは心配なのだろう、レイがウィルザードに問いかける。「まあ、強がれるくらいには平気みたいだったぞ。嫌な話だが、慣れるんだろうな、ああいう人は」

女の世界で美人は敵を作りやすい。それは本人の性格関係なしだ。男も美醜を気にしないわけではないが、女は特に敏感だ。何よりこういう王族貴族の世界は顕著に現れるだろう。女性にとって美しさだけが己の武器だから。

つまりリノルアースやシェリスネイアのような絶世の美女は格好の的なのだ。徒党を組んだ女性達によって徹底的に叩かれる。

「……そういう生き物ですから」

苦笑交じりに呟くレイを見上げ、アドルバードは控えめに問いかける。

彼女も的になりそうな美人であったことを今更思い出して、少なくとも自分の記憶には彼女が攻撃されていることはなかったような気がする。あつたにも関わらず気づかなかったのだとしたらよほど

馬鹿だ。

「……………おまえもあつたのか？　そういうこと」

「　まあ、小さな頃に少しだけ」

やっぱりあつたのかとアドルバードは自分を殴りたい衝動に駆られる。誰よりも一番側にいて気づかない俺は何様だ。

「ごめん」

気づかなくて。助けてやれなくて。支えてやれなくて。

いろんな意味の謝罪が混じり混じって結局そんなことしか言えない。

「アドル様のせいではありませんよ、本当に幼い頃だけですし」

貴族のお嬢様からすればレイは目障りな存在だったに違いない。

特に高い地位の貴族でもないのに王子と誰よりも親しい。ましてこの外見だ。小さな頃から男の格好をすることもあつたが、髪は長かったし普通にドレスを着ていることもあつた。

「むしろ十歳を過ぎた頃の私にそんな真似をするような勇敢な方はいないでしょう」

おどけたレイの言葉にアドルバードは思わず笑う。

「ホント、女の世界は黒いよなあ」

心底嫌そうにウィルザードが呟いた。

存在をすっかり忘れていて「まだいたのか」と口から零れてしまった。

ウィルザードはアドルバードの言葉に気分を害した様子もなく立ち上がる。

「そろそろ出てくよ。いちやつくならそれからしてくれ」

ひらひらと手を振ってウィルザードは部屋から出て行き、彼の言葉を飲み込むのに若干時間のかかったアドルバードが顔を真っ赤にして怒鳴る。

「いちゃついてないんかない!!」

19：あげないわ

「はあいお兄様。お元気？」

気の抜ける声で登場したのはもちろんアドルバードの妹、リノルアースだ。

「おまえ今度は何を企んでる？ 悪いけど今はそんな暇じゃないぞ」
リノルアースがアドルバードを兄と呼ぶときはいつも何か思惑があつてのことだと身に染み付いている。

「別に何も。どうせシェリーの件は動いてくれてるんでしょ？」

「そりや無視できないだろ」

「優しいわねえ、アドルは。八方美人とも言っけど。そこんとこ嫌になつたりしないの？」

レイ

そんな話を振るな！ とアドルバードはリノルアースを睨みつけたが無視された。

「そういう方だと知っていますから」

レイは嫉妬なんて言葉は微塵も感じさせず、さらりと言い放った。いつだか嫉妬深いんだと言ったのはどこにいったとアドルバードは少しだけふて腐れる。

「寛大ね。とても真似できないわ」

苦笑してリノルアースはレイを見つめる。

いつもとは違うその微妙な変化にアドルバードは妹の側まで歩み寄った。

「……なんか、あつたか？」

少し躊躇いながら、アドルバードはリノルアースの髪を撫でた。自分のそれとは違ってずつと柔らかくて心地よい手触りだ。昔はそ

う変わらなかったような気がするのにな、とアドルバードは少しだけ寂しく思う。

「……………なにも」

ない、とリノルアースの唇が紡ごうとしていた。

しかしそれは声にならず、リノルアースは黙って俯く。

小さい頃よくしていたように、アドルバードは妹を優しく抱きしめる。身長もいつの間にかアドルバードの方が少しだけ高くなっていた。

他人には滅多に甘えないリノルアースも、兄にはやはり、時折こうして甘えてくる。

「……………リノル？」

大丈夫だろうかと呼びかけると、リノルアースは顔をあげた。

ほっとしたのも束の間、次の瞬間には柔らかい何かが頬に触れていた。それこそ小さい頃で卒業したはずの　ほっぺにキスだ。

「こんなことも許せちゃうわけ？」

と、リノルアースは意地悪げにレイを見る。

「　兄妹で、双子でしょう。あなた達は」

レイは呆れ顔でそう答えた。アドルバードは依然思考が停止したまま固まっている。

「あら、あなたもルイとするの？」

「うへええええええええええ！？」

それは妬けちゃうかも　というリノルアースの声はアドルバードの叫び声でかき消された。

「しませんよ」

即答されてアドルバードはほっとする。

「……………アドルは小さい男ね」

「小さい言っ！」

「身長も小さくて器も小さいんじゃないんじやないんじやない？」

うつ、と言葉に詰まる。

器が小さいと言われようと惚れた女が他の男にキス（たとえ頬で

あつても）するのは許せないだろう。弟といつても血は繋がっていないわけだし。」

「……まあ、私も他の女にそんなことされやがったらぶん殴るけど」
ぽつりと隣でリノルアースが呟く。おまえもじゃないか、とアドルバードは心の中でつつこむ。

あれ？

つまりそれはリノルアースが　。

「……………おまえまさかルイが好きなのか？」

妬けちゃうだのぶん殴るだの　どれも主従というより恋愛による心情の気がする。

「……やっぱり気づいてなかったんですか」

「そうきつぱりはつきり言わないでよ恥ずかしい。気づいてないのなんて本人とアドルくらいよ」

二人同時に呆れながら呟かれる。

ああ確かに本人はこれっぽっちも気づいてないぞ少しくらいそういう素振り見せてやれよルイが報われないだろうが

「はいいいいい！？　いつから何で！？　ていうかなんでアレ！？
いや別にどこの馬の骨かも分からないような男よりはマシだけど
さあー！」

「どこの馬の骨かは分からないでしょ。拾われて養子になったんだし」

リノルアースのつつこみに、アドルバードは言葉を詰まらせた。
どこの馬の骨か　今はもう検討がついている。それをルイに惚れてしまっているという妹に伝えるべきか否か。

「……その反応からしてルイがシェリーのお兄さんだってことには気づいたのね。思ったより早かったこと」

「うん、実はそう……って知ってるし！」

流されて答えたアドルバードは驚くはずだったリノルアースに逆に驚かされた。

対するリノルアースは「ああ、レイか」と兄をサポートする存在に気づく。鈍感のアドルバードが気づくとは思っていないらしい。

「当たり前でしょ。私を誰だと思ってるの」

ふん、と胸をはるリノルアースを前にアドルバードは脱力する。

「……だったら、どうするつもりだ？」

もし本当にルイがアヴィランテの王子ならば。

彼はどうやっても、王子として国に帰らなければいけない。

「あげないわ」

きっぱりとリノルアースは言い切った。

その潔さにアドルバードは何故かほつとしてしまう。これでこそリノルアースだと。

「ルイは私の騎士よ。剣の誓いこそはたてないものの、私を守り続けるとこの私に誓ったのよ？ それを破ることは絶対に許さないわ。アヴィランテにだろうとシェリーにだろうと譲るつもりはないわよ」

完全に物扱いだよなあ、と苦笑しつつ、アドルバードはリノルアースの頭を撫でた。

「……………何よ」

「別に？」

嬉しい、なんて言ってもリノルアースには理解してもらえないだろう。

リノルアースは昔から本当に欲しい物を欲しいと言わない子供だ

った。それは一番一緒にいたアドルバードだからこそ知っている。
どんなに欲しいと望んでもそれを求めたりしない。いつも「欲しい」の一言を言えずに後で唇を噛み締めていた。

アルシザスとの同盟も話をつけたのはリノルアースだが、それは全てアドルバードを王座に座らせるための策略に過ぎない。彼女が望んだものではないのだ。

おそらく、アドルバードが知る中で生まれて初めてリノルアースは本当に欲しいものを譲らないと言った。

なら。

「俺は、おまえに力を貸すよ」

振り返り、アドルバードはレイを見た。
いいだろう？ と目で問う。

レイは何も言わない。ただ優しく微笑むだけだった。

20： 宣戦布告だ

皮肉なことに、嫌がらせを受けることに慣れているシェリスネイアの対応は的確だった。

怯えている姿は見せない。強がりだと言われようと不敵に微笑み続ける。

矛先が自分に向いている間は何をされようと心は痛まない。辛くても顔に出したりしない。

部屋の前が水浸しになっていたり、暖炉の中に不審物が入れられていて煙が凄いことになったり 嫌がらせはアヴィラでは想像も出来ないことだった。まず水浸しにしてもアヴィラでは炎天下のなかすぐに乾いてしまふし、涼しくてむしろ嫌がらせにならない。そして暖炉なんてものとは無縁なので後者はまず思いつかないだろう。

どれも今まで受けてきた仕打ちに比べれば可愛いものだった。

可愛がっていた小鳥が殺されたわけではない。

毒を盛られたわけではない。

そう、いくらでも我慢できたのだ。

標的が自分一人なら。

「腕、どうしましたの？」

国から共にきた侍女の腕に巻かれた包帯を見てシェリスネイアは問いかける。

びくりと一瞬だけ身体を震わせて、それから何もないうちに微笑みながら「何もありませんよ」と答える。

「ちよつと転んでひねっただけですよ。大事ありません」
それが嘘だということは先ほどの反応で充分に物語っている。

宣戦布告だ。

どんな嫌がらせがあろうとも、何が起きても反応せずに傍観した。けれどその矛先を自分の周囲に向けられるというのなら 話は別だ。受けてたとうではないか。

これはもはや戦いだ。

ずっとシェリスネイアは立ち上がり、慣れない北国のドレスを苦もなく着こなして部屋を出る。

「シェリスネイア様？」

「……王子とリノルの所へ行ってくるわ」

先にリノルアースの部屋に行くと、彼女はアドルバードのもとへ行っているという。仕方なくシェリスネイアはアドルバードの部屋へと向かった。

足が止まる。

前方に最近妙に苦手を感じる男がいた。相手はこちらに気づいていないようだから、無視するなり別の道を通れば良いのだが、それはそれで逃げているようでシェリスネイアのプライドが許さない。そうこうしているうちに、相手はシェリスネイアに気づいてしまった。

「これはアヴィラのお姫様 そんな格好されると気づかないもんですね」

男 ネイガス王国の王子・ウィルザードはわざとらしい作り笑

いを浮かべながら近づいてくる。

「気づかないままでよろしかったのに。目ざとい男ね」

「随分と口が悪くなってきましたよ。どこぞの姫の悪影響でも受けてるんじゃないですか」

くすくすとウィルザードは笑う　　たぶん、この顔は本当に笑っているんだろう。作り笑顔ではなく。

「本当にリノルがお嫌いなのね。ならハウゼンランドに来なければよろしいでしょう」

「親戚なんでそうもいかないですよ。嫌いというよりは苦手なだけなんで」

シェリスネイアは嫌いと言手はどう違うの、と聞こうとして止めた。どうしてこの男とそんな話をしていなければならない。

「どちらへ？　姫一人で動き回るもんじゃありませんよ」

さりげなくエスコートを申し出たウィルザードに驚かされた。この男がこんなことを言い出すとは思わなかったのだ。

「王子の部屋ですわ。もうすぐそこですもの、平気です」

「帰りはどうするつもりで？　どうせ俺も用があつたんですよ」

ついでだから一緒にしましょう、とウィルザードは続ける。口調こそは丁寧でも、この男にはいつも馬鹿にされているような気がする。

他の男なら、あの手この手とシェリスネイアを口説こうとすると
いうのに。

「何かあつたんですか」

一瞬の沈黙の後、ウィルザードが躊躇いがちに口を開く。

心配してくれているということか、とシェリスネイアは少し気恥ずかしくなりながら別に、と素っ気無い返事をした。

「あなたには関係のないことです」

「そうですね、そうですね　　どうせアドルに話すなら俺も聞く

話ですよ」

「ならなおさらですわ。同じ事を二度言う必要はないでしょう?」
知りたいのなら黙ってアドルバードにする話を聞いていればいい、
シェリスネイアの言葉にウィルザードも黙り込む。

らしくないなあ、という呟きが隣から聞こえ、シェリスネイアは
ウィルザードを下から睨みつけた。

「あなたじゃないですよ、気にしないでください」

いつもなら、あなたのようなお姫様の悩みになんて興味も持たない
んですよ、俺は。

そんな言葉は心の奥底へとしまいこむ。ここでこのお姫様にそう
言う自分が想像できない。むしろ冗談じゃない。
それではまるで婉曲な愛の告白じゃないか。

「おい、入るぞ」

そんな乱暴な一言だけでウィルザードはアドルバードの部屋へと
入る。

「……失礼いたします」

その男の後にただ続いて入るほど礼儀知らずでもないシェリスネ
イアは一礼して入室した。どちらもアドルバードは大差なく迎え入
れる。

「何か御用ですか、シェリスネイア姫」

「おい俺は無視か」

ウィルザードのぼやきを「うるさい後でだ」と切り捨て、アドル
バードは微笑みながらシェリスネイアの為に椅子を引く。流石は王
子というべきか動作には無駄がない。

ウィルザードはぶつぶつと文句を言いながらシェリスネイアの向かいに座る。

「……以前から続いている嫌がらせなんですから、少々悪化しているようですの」

「悪化、ですか……すみません。俺の力不足で」

アドルバードは素直にシェリスネイアに頭を下げる。

「いえ、短期間でのことですし、仕方ありませんわ。慣れていきますから、私だけならばこうして出向くこともないのですけれど」

「他にも手を出したってこと？ まったく考えることが幼稚よねえ」
ため息まじりにリノルアースが呟く。彼女もシェリスネイア同様、そういうことには慣れてしまった人種だ。

「それで？ ドレスが破かれた、水をぶっかけられた、暖炉に変なもの入れられたの他に何があったの？」

ドレスが破かれた以外のことはリノルアースにも言っていない。どうやら被害にあった二つは、ハウゼンランドでは一般的な嫌がらせなのかもしれないなんてシェリスネイアは苦笑する。

「侍女が怪我をしました。本人は転んだだけだと言っておりますけど」

「あらまあ傷害までやらかしたの？ そりゃもう極刑ね」
それを待っていたただけだね、とリノルアースが不敵に微笑む。

「リノル、おまえ誰が犯人か知ってるな？」

兄の勘とでも言うべきか、アドルバードが痛む頭を押さえながら聞いたです。

「私を誰だと思ってるの？ これを理由に目障りな蠅は徹底的に叩き潰すわ」

「……本当にずる賢いわね、あなたは」
ため息を吐き出してシェリスネイアは呟く。ウィルザードはもはや傍観者にすぎない。

「シェリーならある程度我慢できるだろうと思って。利用してごめんなさい？ でもお互い様でしょ？」

そうね、とシェリスネイアは答える。

女に計算はつきもの。ましてリノルアースやシェリスネイアのよ
うな女ならなおさら。

「むしろ感謝してるわ。これでアドルの未来の王座は安泰」

ここまで言われればアドルバードでも犯人が分かる。

王座を狙っている人間は知る限り二人だけ。そしてその二人なら
ば共犯は充分にありえる。

彼らにしてみれば、事件をアドルバードの汚点にしようとしたの
だろう。犯人が見つかる。

らず、シェリスネイアから声高々に被害を訴えられれば国の問題に
なる。

「ハドルスとルザード、か」

まったくもって面倒な従兄弟だ。

21: やっちゃいましょう

「というわけで、やっちゃいましょう」

アドルバード、ウィルザード、シェリスネイアが座るテーブルの前で仁王立ちになってリノルアースが宣言する。

「……心なしか殺っちゃいましょうに聞こえるんだが」
ウィルザードがリノルアースから目を背けて呟く。

「……俺もそう聞こえた」

隣に座るアドルバードも小声で同意する。おおっぴらに彼女の犯行声明に異を唱えればまずは自分に向かう。

「人聞きの悪い解釈をしないでちょうだい。いくらなんでも親戚を堂々と抹消しようなんて考えないわよ。一応今はまだ相手は王位継承権を持つてるんだし」

「……それはつまり王位継承権も持つてなくて親戚でもない人間なら抹消するということですよわね？」

そう呟くシェリスネイアもリノルアースを直視できずにティーカープへと視線を落とす。

「やだもうシェリーまで！ あんたらが変なこと言うからよ！？」
リノルアースが心外だとしても言いたげにアドルバードとウィルザードを睨みつける。

「話が逸れていますよ。……それでリノル様は何をお考えで？」

今まで黙ってアドルバードの側に立っていたレイが軌道修正する。放っておくとこのまま変な方向へ話が飛びかねない。

「分かっているのに私に説明させるつもり？」

リノルアースは美しい微笑みを浮かべてレイを一瞥する。レイは何のことですか？ とさりと交わして、リノルアースは頬を膨らませた。

「まあいいわ。こつちとしてはハドルスとルザードが王位継承権を剥奪されるようにしたいわけよ？ もともとそれだけ大きくなりうる問題だしね。それでシェリーには我慢してもらったんだけど」

「その話乗ってもよろしくてよ。あの男には腹が立ちましたし、これ以上嫌がらせに耐えるつもりはございませんもの」

うふふ、と黒い微笑みを浮かべる大陸一、二の美姫に男二人は青ざめる。

これだから女は嫌いなんだと呟くウィルザードを憐れに思いながら、アドルバードは紅茶に口をつける。

まあ、これも自分の為に使ってくれていることだし。
と静観できるくらいの器はある。

「というわけでシェリー。貸してるドレスを一着返却してくれない？ そうね、赤いのがいいかしら」

につこりと微笑みながらそう言い出した妹にここで食いついておかないと後悔する。それはもうアドルバードが生まれ持った機器察知能力だろう。

「ちよつと待て!!」

ガタツと立ち上がってリノルアースを睨みつける。

「なんでそこでそんな話になる？ シェリスネイア姫に貸したのは

……俺の、その」

自分のドレスだと断言するにはいささか抵抗があつて口籠もる。

敗因を挙げるならまさにここで勢いをなくしたことだろう。

「アドルの女装用のドレスよ？」

「そう！ だからなんでそれが必要になるんだ!？」

「アドルが着るから」

きつぱりと断言されてアドルバードはがくりと肩を落とす。

「なんでそうなる!？」

「作戦上必須事項なのよう」

「その作戦を細かく話してからにしろせめて!!」

最近では女装することも少なくなつて、ほつとしていたこのタイミングで爆弾投下か!?

「私としてはね、あいつらのたっかいプライドまで木っ端微塵にしたいわけ? お分かり?」

そのためには女に負けたというこの上ない汚点をあいつらの心に刻み込みたいんだけども生憎私はそこまで腕力ないしー」

だからこの際、アドルが私のふりしてぶん投げて? とリノルア
ースは小首を傾げて可愛らしくお願いする。それに騙されるほど愚かな兄ではない。兄馬鹿ではあるけれども!

「それはおまえの個人的恨みだろ!?!」

「私の恨みはアドルの恨み、アドルの恨みはアドルの恨みでしょ?」

「なんだその解釈は!!」

「いいじゃないついでだし」

ふう、とため息を吐きながらリノルアースが呟く。

「いやっ! ていうかばれるだろ!?! 一応はあいつらも親戚だぞ

!?! 血縁だぞ!?!」

「……あれを見破れるのは私達姉弟か、どこぞの国王陛下だけだと思えますよ?」

うわぁ、それはどんな賛辞だ。レイの言葉も素直に受け取れずに
アドルバードは涙を堪える。

見破れると断言してくれることは嬉しいが、それはつまりやつぱ
り俺が女顔だつてことか?

レイの鋭い一撃にすっかり勢いをなくしたアドルバードの肩にリ
ノルアースがそつと触れる。なんだと顔をあげると、すぐそこに自
分に似た、けれど自分よりも愛らしい顔があつた。

「……ルザードがレイを口説くこともなくなるかもよ?」

リノルアースに耳元でそう囁かれて、アドルバードの抵抗は確実に弱まった。さすが妹。兄の急所はどこであるのかをよく知っている。

ちらりと背後の彼女を盗み見れば、レイは首を傾げて見つめ返してくるだけだ。

「やってくれるわよね？」

にっこりと微笑むリノルアースに反駁する意思はもうない。肩を落とすように、頷く。

「あら、楽しみですわ。実は少しだけ見てみたかったですの」

「まあ俺も間近で見たことなかったし」

傍観していた二人がアドルバードの味方をしてくれなかったのはそのためかと、ウィルザードに対しては儚い友情を悲しく思う。

「作戦としてはとりあえずあいつらの長い鼻をへし折るのが先。その間にお父様にシェリーが嫌がらせを受けていることを報告させてもらうわ。本人もいればかなりの罰が期待できるんじゃないかしら」

「個人を罰する代わりにハウゼンランドを責めないと言えば二割り増しくらいにはなるんでなくて？」

もとより国単位の問題にするつもりはありませんけれど、とシェリスネイアが付け加える。本当に末恐ろしい女だ。

「即日実行か……？」

シェリスネイアが侍女にドレスを持ってくるように命じているのを見てアドルバードが若干青ざめる。

不本意ながら女装には慣れたが、さすがに今まで見られたことのない人にまで変装前と変装後を見られるのは恥ずかしい。

「膳は急げって言うじゃない」

「急がば回れとも言っぞ」

「今回は違っの。このままにしておいたらシェリーが危ない目に遭うかもしれないじゃない」

そう言われれば黙るしかない。

「……アドル様、どうせリノル様には勝てないんですから」

「それ慰めてないよな？」

むしろ兄としての威厳とか否定する言葉じゃないか、と自分の騎士に向かって呟く。

「シェリスネイア様、お持ち致しました」

侍女が真つ赤なドレスを手に戻ってきたのを見てアドルバードも腹をくくる。

女装がなんだ。

ドレスがなんだ。

コルセットがなんだ。

そして同時に一刻も早く男らしくなりたいと心の底から思った。

22：女王様にでもなった気分で！

「……………まあ」

シェリスネイアのため息を聞いてアドルバードは肩を落とす。

長く背中を覆う髪の毛は実物のものよりは艶がない。けれどそれ以外はまさしくリノルアースそのものといってもいい。アドルバードの女装は相変わらず完璧だった。

「驚きましたわ。まるでリノルが二人いるよう」

「……………素直に驚かれてもこっちとしては結構辛いですけどね」

きらきらと輝く瞳で見つめられればなおさら痛い。

アドルバードはリノルアースの指示のとおり、真っ赤なドレスに身を包み、完璧な化粧を施されリノルアースに化けた。

「うわー。間近で見たの初めてだけどすごいなあ。長い付き合いの俺でも一瞬わかんねえ」

ウィルザードの感心したようなその言葉には純粹な殺意が湧く。

人事だと思って楽しみやがって。

「双子なんだから当然でしょう。アドルが大きくなるまでの期限付きの手ではあるけど」

「小さな頃に比べればまだ分かりやすいですよ」

アドルバードの長い髪を梳きながらレイが呟く。

「今は個人の性格が顔に出てるので。アドル様。いつものように理想のリノルアース様を演じるとすぐにバレますよ？」

いつもは理想的なお姫様をやっているのならば良いので楽だったのだが、本物のリノルアースの真似をするとなると、アドルバードの性格的に難しい。

「……………いちいちうるさいわね。わかってるわよ」

むす、とした表情のまま妹の真似をすると、横から鉄拳が振り下ろされた。

「いった！ 何すんだよ兄にむかつて！」

犯人であるリノルアースを睨みつければ、その倍以上の迫力をもって睨み返される。

「何じゃないわ！ それは私の真似のつもり！？ もっと見下すように、徹底的に踏み潰すように！ 女王様にでもなった気分で！！」

「おまえレイにむかつてそんな顔してるか！？」

「練習よ練習！！」

練習って言われても……と渋ると、リノルアースは再び鉄拳をちらつかせる。

逃げ腰の主人に対して救いの手を差し伸べたのはやはりレイだ。

「……アドル様。真似ようと思わずに、いつものリノル様を想像してください。試しにウィルザード様を相手に」

「え？ 俺？」

突然矛先を向けられたウィルザードが自分を指差し、どうしたものとアドルバードに近づく。

「この私に何か御用かしら？ ウィルザード」

リノルアースにしか見えないアドルバードはにつこりと微笑みながらウィルザードに話しかける。

その瞬間 鳥肌が立った。

「アアアアア、アドル！？」

「あらやだ何言ってるの？ ついに頭を打って馬鹿になったの？ それとも私の顔見て頭が混乱してるのかしら？」

「しょ、正気に戻れ！！ 頼むから！！」

「失礼ね。私のどこが異常だって言うの？ あんたこそその頭どうにかしたら？ ていうか近づかないで馬鹿がうつるから」

ウィルザードはアドルバードの変貌ぶりに顔色も悪くなる。この世にリノルアースが二人 どんな悪夢だそれは。

「この性悪女！ 実の兄に毒でも盛ったのか！？」

「失礼千万ね。海の藻屑になつて消え去りなさい」
本物の方が数倍斬り返しが痛い。

「……もう充分でしょう。ご協力ありがとうございました。ウィルザード様。だから言つたでしょう、アドル様」

身体が覚えてますよ、とレイが呟く。日頃から見慣れすぎているリノルアースの言動行動が身体にまで染み付いてるとは。

「……恐ろしい」

「俺は本当におまえが怖かった」

リノルアースにしか見えなくて、と付け足され、少しだけ自信もつく。

「八十五点つてとこかしら。これならハドルス達も騙せるでしょう」
合格点ということなのだろう、リノルアースが頷きながらGOサインを出す。

「俺を実験台にするなよ……その騎士さんにやらせりゃいいじゃん」

レイを指差しながら脱力するウィルザードに、リノルアースが馬鹿じゃないの、と冷たく言い放つ。

「レイは目を塞いでも騙せないわよ、たぶん。今から二人でドレスを着替えても無駄だろうし」

リノルアースとアドルバード（作り声）は寸分の差しかない。本人ですらその差を明確には説明できないかもしれない。おそらくそれが出来るのはレイくらいだ。見た目が加わればルイも騙されはしないだろうが。

「嘘つけ。やってみろ」

信じられないウィルザードが言い出して、ささやかなゲームが始まった。

目隠しされたレイをリノルアースとアドルバードの二人で呼び、レイは自分の主人のもとへ行けば良いだけの単純なゲームだ。

距離としては数メートルしか離れていないし、周囲に邪魔なもの

はそれほどない。下手に気配を読まれないように、リノルアースとアドルバードは立った場所から一步も動いてはいけけない。

「……本当にやるの？ 無駄だと思っけど？」

リノルアースが面倒臭そうに呟く。

しかしシェリスネイアとウィルザードには面白い余興となつて中止を言い出す気配はまったくない。

「レイ」

仕方なくアドルバードとリノルアースは二人同時に、レイを呼んだ。それはリノルアースの声が重なり合つたようにしか聞こえない声だ。

無理だろ、とウィルザードが呟いた。シェリスネイアも同意して頷く。

重なり合つた音なんて聞き取りにくい。これから一人一人がレイを呼べば良い。しかし双子はどちらもレイを呼ばない。

これじゃあゲームにならないぞ、とウィルザードが言おうとする

と
すつ、とレイが一步踏み出した。

「……………おい、冗談だろ」

ウィルザードが苦笑しながらそう声をかけるが、レイはそれを無視して迷うことなく一人のもとへ歩き、その足元で跪いた。

そしてまるで見えているかのように、その人の手をとる。

ほつとしたような息が吐き出され、もう一度、名を呟いた。

「レイ」

「はい。アドルバード様」

そうレイが答えれば、目の前に立つ人の手によって目隠しがはずされる。

レイの視界に飛び込むのは真紅。

そのドレスを身に纏っているのは 紛れもなく彼女の主である
アドルバードだ。

「だから言っただじゃない、馬鹿馬鹿しい」

リノルアースがため息を吐き出してそう言い放つ。

「いや、ですけどまさか本当にできるとは思いませんでしたわ」

感嘆のため息と共にシェリスネイアが答える。アドルバードとレイはすっかり二人の世界だ。

「できちゃうのがあいつらのよ」

ほんの少し羨ましいと思うから、こんなことしたくなかったのに。
あの二人ほどの絆は、まだない。

23：敵に回したことが最大の失敗ね

「……なんで分かるんだ」

化け物でも見るように、ウィルザードはレイを凝視した。

「お二人が小さな頃から相手をしているのに、区別できないわけないでしょう。そもそもアドル様の方が声が低いですから」

わずかな違いですけど、とレイが付け加える。そのわずかな違いを本人達も分らないというのに。

「愛の力というやつですわね？」

シエリスネイアが至極真剣な眼差しでそう言い出し、アドルバードは飲んでいた紅茶を嘔き出す。

「やだ、汚いわよアドル」

いつものことだけど、と冷静にリノルアースがハンカチを兄に差し出す。そのハンカチで口元を拭いながらアドルバードは動揺を隠しきれていなかった。

「ああああああああ愛って！！」

「愛の力でしよう？」

さらにリノルアースに言い返されて、アドルバードは赤面する。「せめて忠誠心にしていただきたいところですね」

愛だの言い出すにはまだ早いようなので、とレイに言われればなお顔は赤く染まっていく。

レイが双子の見分けがつくのも、聞き分けができるのも昔からだ。それを愛の力だなんて。

「レイの忠誠心はアドルへの愛の力でしょう？」

「……それとこれとは別の話ではないですか？ というより別にしてください。そういう浮ついた気持ちで仕えているわけではありませんから」

アドルバードはレイがこうも冷静に対応しているのを見て、自分だけがこれほど動揺しているのが恥ずかしくなってくる。

「ま、いいけど。アドルもいいかげんに落ち着きなさいな。さっさとハドルス達に一泡吹かせてやらなきゃ」

「……あと五分くれ」

早鐘のように脈打つ心臓をどうにか落ち着かせようとアドルバードは深呼吸する。

ああもう本当に心臓に悪い。

赤みがかった、長い金の髪の少女を見つけて、ハドルスは早足になる。

大陸でも有名な美少女にして、従兄妹のリノルアースだ。あの珍しい髪の色ですぐに分かる。

最近はこのように、城の中だからなのだろうか、騎士を連れて歩いていないことが多い、それはつまりハドルスにとっては都合だった。

「リノル」

充分に距離を詰めてから、そう呼びかける。

美しい少女は振り返り、ハドルスを見た。深紅のドレスが華やかなりノルアースにはよく似合う。

「愛称で呼んでいいと許可した覚えはないけど？ いいかげんにしてくれない？」

につこりと、微笑みながらそう拒絶されるのもいつものことだ。
「いいだろ？ なあ、いつになったら心を開いてくれるんだ？」

「あんたに開くほどあたしの心は安くないの。はつきりと言わなきゃ分らない？ 大嫌いなものって」

「嫌い嫌いも好きのうち、って言うだろ？」

リノルアースは眉間に皺を寄せながら、触れようと手を伸ばしてきたハドルスの腕を振り払う。

「あんたは例外よ。自信過剰な男って鬱陶しいだけじゃないの。器の小さい男はなおさらね。ねちねちみっちり嫌がらせて」

懲りずに伸ばされた手が不自然に止まる。

リノルアースは相変わらず冷めた顔でハドルスを見上げていた。

「……なんだって？」

今までとは違う低い声。

リノルアースは勝ち誇ったように微笑み、そうして続けた。

「気づいてないでも思ったの？ お気楽ねえ。あんたがシェリーに……アヴィランテの姫君に嫌がらせしていることくらい、こっちはお見通しなのよ？ 何の為にこんな忙しい中ルイが護衛についていないと思ったの？」

ぎり、とハドルスが歯軋りする。いなくて好都合だと思っていたが、逆だったらしい。

「それで？ 知っているのがリノルとあいつだけなら……」

「馬鹿ね。それだけだと思うの？ もうルイにはお父様に報告するように言ってるわ。残念でした。このままじゃ王位継承権は取り上げられるかもしれないわねえ？」

味方の弟君も同罪よ？ とリノルアースは微笑む。

ルザードが絡んでいたことまで知られているとは 焦りか、怒りか、頬を汗が流れる。

「あたしを敵に回したことが最大の失敗ね。ご愁傷様」

美しい微笑み　今だけは、それを見て殺意がわく。

「このクソ女っ！！」

あの鈍感な王子にはこんなこと思いつかない。

この姫さえいなければ　将来の地位も、安泰も、約束されていたというのに。

ハドルスが振り上げた拳を、リノルアースは片手で受け止めた。

「な　」

呆然としている間に、ハドルスの身体は宙に浮く。

どん、と勢い良く背中を床に叩きつけられた。

何があつた？

何が起きた？

あんなに華奢なりノルアースに、投げられた？

「一体何が　！」

騒ぎを聞きつけた使用人やら衛兵やらが集まってくる。

その目に映るのは、無様に寝転がるハドルスと、それを見下しているリノルアースだけだ。

「リ、リノルアース姫？」

おずおずとリノルアースに話しかけた使用人に、リノルアースは極上の笑みで答える。

「ごめんなさい。何でもないので。私がちょっと驚いて、ハドルスを投げちゃっただけだから」

一瞬目が点になった周囲の人間も、状況を再確認して納得する。

ハドルスは羞恥で顔が赤くなっていくのが分かった。こんな小さな女に負けた、だなんて。

そんなハドルスをリノルアースは冷たい眼差しで見下し、そして微笑む。

「さようなら、ハドルス」

それはまるで、悪魔の囁きにも似た声だった。

部屋に戻り、アドルバードは深くため息を吐き出す。そうしてリノルアースの仮面を外す。

「ご苦労様。なかなかの演技だったじゃない？」

本物のリノルアースが満足そうに微笑んだ。

「どうも。あとはルザードか？」

まだもう一戦あるな、と呟くと、リノルアースに腕を捕まれた。

「そっちはいいわ。もともと王位に興味のない奴だし。継承権は剥奪確定なんだから」

「でも」

むしろ俺としてはそっちを完膚なきまでに叩き潰したいんですけど、とアドルバードはリノルアースをじつと見る。

「ルザードの退治はレイが行ったし」

「それを早く言え　　！！」

すぐにでも駆け出しそうなアドルバードを再び止めて、リノルアースはため息を吐き出す。

「王子様がその格好で駆けつけるつもり？」

24：どうにもならない仮定だ

その一報は、兄よりも先にルザードのもとへ届いた。
曰く、

アヴィランテからはるばる来た姫君に対する行為に関して。
重要な賓客に対し、ハウゼンランド王家の血統に属する者として
相応しくない行動がどうのこうの。

その処罰として王位継承権を永久に剥奪し、王城への立ち入りを
五年間禁止する　とのことだった。

正直兄のハドルスのように王座に興味はなかったのでどうでも良
い。兄の手伝いをしたのが失敗だったなあ、とそれくらいにしか思
わなかった。
ただ、

「　　五年、ねえ。これじゃあ勝ち目はないかな」

苦笑しながらそう呟く。

呟いた相手はすぐそこにいた。

銀の髪の毛、美しい騎士。もうとつくの昔に他人のものだけど。
「……ご自分のなさったことを少しは反省したらどうです？」

レイにため息まじりにそう言われて、ルザードはまた苦笑した。
「多少は反省しておくさ。でもまあ俺としては大して困らないし」
寒い廊下の風が髪を揺らした。こういう時に必ず隣にいてくれる
人がいればいいと、ずっとそう思っていたのだが、今現在もそんな
存在はいない。

……だから、ずっと羨んでいた。

「ちっちゃい王子様との勝負は完敗みたいだし。そろそろ諦め時かなと思ったところだよ」

いつも彼女が側にいるのは、昔からたった一人だ。

「ルザード様ならば、他にたくさんいらっしやるでしょう」

もう少し真面目にすればの話ですが、とレイは苦笑した。

「欲しかったのはたった一人だ」

いつになく真剣な声で 真剣な表情で、ルザードはレイを見つめた。手を伸ばせば触れられる距離でも、どうしても今日は手が伸ばせない。

「 どうして、俺が王子じゃなかったんだろうな？ 王座なんてどうでもいいけど、俺が王子だったなら、あんたは俺のものだったのに」

どうにもならない仮定だ。

生まれた時には俺は俺で、あいつはあいつだった。

彼女は初めて会った時からあいつの側にいた。

「……無駄な仮定ですよ、ルザード様。私は王子であるアドル様に仕えているではありませんから。私は私の意志で、アドルバードというあの方に仕えているんです。あなたが王子でも、私はあなたのものになりません」

真剣な思いには、彼女は真剣に応えてくれる。

その答えもどこかで分かっていたような気がして、ルザードは苦笑する。

出会った時から彼女は彼女だった。

もしも彼女が傍らにいてくれたらなんて、そう思っていたけれど
そんな彼女に、自分はこれほどまでの思いを寄せただろうか？

「……あんな頼りない王子様がそんなにいいわけ？」

「私には、必要な方ですから」

あなたがどんな風に思おうとも、どんな評価を下そうとも。

そうきっぱりと言い切れる彼女が潔くて美しい。

「もっと早く あいつよりも出会えていたら、と思うのも無駄か？」

「……それでもやはり、結果は変わらなかったと思います。ルザード様、あなたはもうやってもアドル様にはなれません」

本当に、きっぱりと言い切るよなあ、と呟く。結構心にぐさりと刺さる言葉だが、なんでもない風に振り舞うだけの甲斐性はある。

「まあ……分かってたけどな」と、王子様のご登場みたいだな」
遠くから息を切らしながら、小柄な王子が駆け寄ってくる。

そんなに大事ならしっかり捕まえておけよ、という助言は心の中にしまっておくことにした。

「レイ！」

当然のように彼女の隣に並んで、ルザードを見上げて睨みつけてくる。

小動物みたいだな、と可笑しくなつてルザードは笑いを噛み殺した。

「俺の騎士に手を出すなと、言わなかったか？」

騎士、ね。

ルザードはそのセリフを嘲笑う。

「せめてそこで俺の女だとしても言っとけよ。情けねえぞ」

「なっ……うるさい!!」

「ルザード様」

レイの制止に、ルザードは降参する。恋敵を 敵わない相手をこの程度いじめるくらい、許されるだろう。

「……何してねえよ。話してただけだ、なあ？」

威嚇してくるアドルバードにルザードは両手を挙げて戦う意思がないこと表明する。

レイがええ、と頷くのでアドルバードは素直に威嚇を止める。実に分かりやすい王子様だ。

「せいぜい手放すなよ、お互いにな」

くしゃ、とアドルバードの頭を撫でて、ルザードは寒い廊下から温かい部屋へと帰る。

誰もいない隣は相変わらず寒い。

繋ぐ手もないてのひらをポケットに突っ込み、窓の向こうの空を見上げてため息を吐き出す。

「……………寒いなあ」

「 本当に何もなかったんだな？」

しつこいほどにアドルバードに尋問され、レイはため息を吐き出しながら変わらぬ返事をする。

「ご心配するようなことは何も」

「心配しないようなことはあったのか!？」

「お話していただけます」

「どんな!？」

これではまるで浮気を問い詰められる亭主ではないか という

言葉は飲み込んでおこう。立場がまるで逆すぎる。

「プライベートですよ、アドル様」

そこまで説明する必要もない。

まして本気で口説かれていたなんて言ったらどんな反応をするか分かったもんじゃない。

「あ、う、それは、その、そうだけど……」

レイに強く言われれば、アドルバードがこれ以上尋問できないことは分かりきっていた。

それでもこの人は知りたいんだろうな、とレイは思う。

「改めて口説かれただけです」

仕方なくレイがそう言っていると、案の定アドルバードは食いついてきた。

「だけ！？ だけじゃないだろう！？ 何もされてないよな！？」

「ですから、ご心配するようなことは何も。指一本触れられてません。真剣に口説かれてただけです」

「だからそれってだけじゃないし！ おめいこ 大事だろ！」

ぎゃあぎゃああと騒ぎ、そしてアドルバードが冷静さを取り戻してから、窺うようにレイを見上げる。

「それで、その……」

そんなことを確認してくるところも、分かりやすい人だとレイは微笑む。

「大丈夫ですよ」

ああまた自分ばかりがこんなことを言う破目になるんだな、と少し思いながら、少しでも婉曲な答えを探し出す。

「私はこの場所を離れるつもりはありませんから」

つまりは、あなたの隣を。

24：どうにもならない仮定だ（後書き）

ハドルスⅡ どうしようもない馬鹿

ルザードⅡ 良識が多少ある、まだ救いがある馬鹿

という感じです。

ハドルスは顔と地位だけでリノルに言い寄ってたけど、ルザードは結構本気でレイに惚れてました。

25：これは賭けだ

リノルアースの目論見どおり、ハドルスモルザードも王位継承権を剥奪された。

思い通りに事が進んでいる　なのにどうしてだろう。どこか胸の中の不安が消えない。

リノルアースの願いどおり、このままアドルバードが王位を継ぐだろう。そうしていつまでも平和なハウゼンランドが保たれる。

ぼんやりと寒い廊下に、一人佇む。

城内は数日後に控えたパーティの準備で忙しい。アドルバードは結局大勢の姫君をどうするつもりなんだろう、と考えて、どうでも良いとさえ思う。

大勢の姫君と、何人かの王子　ハウゼンランドは各国の王族に出会いの場を提供したようなものだ。

アドルバードとの見合い、と公言して集まってきたわけでもないから問題も起きない。アドルバードがこれからやるべきなのはたくさんの方々の信頼関係を作ることだ。

だからもうリノルアースが口出すことはない。

策略なんて必要ない。

あとはただ、姫も王子も皆いなくなつて、静かな日常に戻るのを待つだけ。

「……いつまで、そうしてるつもりですか？　風邪をひきますよ？」

そんな優しい声と一緒に、肩にふわりとかけられる。

「ルイ……いたの？」

ルイは自分の上着をしっかりとリノルアースの肩にかけ、そして微笑む。

気配を消すのは姉同様に得意なんだな、とリノルアースはわずか

に微笑む。

「言いつけられた仕事も終わりましたから。一人になりたいのかも
しれませんが、ここは寒いですから、その」

心配で、影から見ていたのだろう。

「部屋に戻るわ。久しぶりにお茶でも」

優しくされたから、その分だけリノルアースも優しい声になる。

今日はルイをからかう気分になれない。

自分の部屋で、久しぶりにルイが淹れてくれるお茶でも飲もう、
とそう言おうとした。

その先に。

「リノル？」

美しい、艶のある声。

リノルと呼ぶことを許した者のなかで、そんな声なのはただ一人
で。それは、ルイには絶対に会わせたくない人だった。

「……シェリー」

綺麗なドレスを着た、アヴィランテの皇女。

「ちょうど良かったわ、あなたを探して。どちら、様？」

シェリスネイアの視線がリノルアースの後ろ。ルイに注がれる。
見ないで、と叫びたくなるのをリノルアースは堪えた。

「私の騎士よ。レイの弟なの。この間までハドルス達の行動を見張
ってもらってたから……」

あなたに会わせないために、とは言わない。

「ルイ、アヴィラの姫君よ」

挨拶しなさい、と短く、震えそうな声で言う。

気づかない。気づくはずない。

二人は初対面で、そして。互いが兄妹かもしれないなんてこと、
知らないのだから。

「お初にお目にかかります。ルイ・バウアーと申します。アヴィラ

ンテの姫君」

レイには及ばないながらも　凜々しく、優雅に騎士の礼をする。
シェリスネイアがじ、とルイを凝視していた。

「初めまして。シェリスネイアです……あの騎士殿、お姉様とはあまり似てないのね？　ハウゼンランドの人というより、むしろ」
びくり、とリノルアースは身体を震わせる。シェリスネイアも、ルイも、まるで気づかないほんの一瞬。

南国の人のようだわ。

シェリスネイアの純粋な感想に、リノルアースがどれだけ動揺したことだろう。

ここで会話を止めなければ。

たぶん、ルイは　。

「私は、養子ですので」

苦笑しながらルイは答える。

それ以上話さないで。

そう願ひ、ルイの服の裾を掴む。驚いたようにルイがリノルアースを見た。

「シェリーが美人だからって鼻の下伸ばしてるんじゃないわよ。横にこんな美少女がいるでしょうが………少し、寒いわ」

二人に感づかれないように、完璧にいつもの自分を装う。そしてそれは見事に成功していた。

「だから、ここは冷えると　大丈夫ですか？　早く、部屋に……」
心配そうに顔を覗きこんでくるルイと目を合わせずに、ただ頷く。
「ごめんなさいね、シェリー。お話はまた今度」

リノルアースは微笑み、そう言っつてシェリスネイアの脇を通り過ぎる。

「いいえ、風邪をひかないようにお気をつけて。この国は寒いから」
リノルアースはその国で育ったのよ、と苦笑する。

弱ったふりをしてルイにもたれかかる。ルイはそれが演技だなんて気づかずに、心配そうにリノルアースを支えた。

「歩け、ますか？ 無理なら俺が」

「平気かもしれないけど、歩きたくない」

リノルアースがそう言えば、ルイがそっと抱きかかえる。まさにお姫様抱っこだ。本当は、全然余裕で歩けるけれど。

ルイのぬくもりが優しく心の緊張をほぐす。寒いのは身体じゃなかった。

「部屋に戻ったら暖炉の火にあたって、お茶でも飲みましょう。熱はないみたいですから、やっぱり少し廊下に居すぎたんですよ」

「ルイがお茶淹れて。最近飲んでないから」

「……不味いつて文句言うじゃないですか」

「いつまでも上達しないでしょう。今なら何飲んでも美味しいわ」

寒いからね、と付け加えてリノルアースはくすくすと笑う。本当は言うほど不味いわけじゃない。からかうのが楽しかっただけ。

ルイの首に腕をまわす。その方が安定すると、そう思った。

ルイの顔がすぐ近くにあった。レイや、アドルバードとは違うけれど綺麗な顔だと、リノルアースは思う。

それはそうだ。あの、シェリスネイアの兄なのだから。

「ルイ」

静かにリノルアースが口を開く。

二人は会ってしまった。

齒車はもう止まらない。

隠し続けることは、彼にも失礼だ。隠し、偽り、その選択肢を見せないのは。

これは賭けだ。

リノルアースはルイの耳元で囁くように言う。

「あなたは、アヴィランテの王子なのよ」

さあ、どちらを選ぶ？

26：その前に、お茶を

耳に甘い吐息がかかる。

ああもう、またこの人は、自分をからかって　そう思っていた。

「あなたは、アヴィランテの王子なのよ」

静かな声。

真剣な声。

それはいつものリノルアースのそれではなく　。

「なにを、言ってるんですか」

動揺がそのまま声に出た。

アヴィランテなんて大国、自分には縁のないものだと思ってきた。自分はこのまま、ハウゼンランドで、騎士として、穏やかに生きていくと、そう思いこんでいた。

自分の出生なんて気にしたことはなかった。

気にしなくてもいいくらいに　恵まれた人生を歩んでいたから。……私個人で、随分前から調べていたわ。確証はなかったけど……あのね、ルイ。シェリーはたった一人のお兄さんを探しに来たんですって。十五、六年前、中央砂漠で消息を絶った、まだ赤子だったお兄さんを」

偶然に思える？　とリノルアースが微笑む。

その笑顔がどこか悲しげで、ルイは何も言えない。

「アドルとレイがディークにも確認をとったらしいわ。誰もがあな

たが王子じゃないなんて否定できないくらい、状況証拠はそろつて
るの」

自分がまるで知らないところで、随分と大きなことが動いていた
。

確かに、外見の特徴といい、ディークに保護された状況といい
出来すぎたくらいにぴったりだ。

何も言えなかった。

何を言えいいのか分からなかった。

ずっと、ただの騎士として生きてきたのに ある日突然大国の
王子だったなんて。

「……まだシェリーには話してないわ。でももう、限界ね。会わせ
ないようにしてたのに、遭遇しちゃうんだもの」

呆然と、話を聞いているうちにリノルアースの部屋まで辿り着く。
淡々としたリノルアースの声が、ただ耳に入ってくる。そこには
寂しさも、悲しさも、感じられない。

「アドルのところで詳しく話をきいてくるといいわ。レイもいれば、
もつときちゃんと説明してくれるでしょう 」

「……リノル様」

そつとリノルアースを椅子に座らせ、ルイはその顔を見つめて言
う。

「その前に、お茶を」
淹れると約束した。

いつも不味いと言いながらきちんと最後まで飲み干してくれてい
ることくらい、ルイも知っている。

「……本当に、アヴィランテの王子だったなら、私なんかそんな
ことする必要はないのよ？」

あなたの方がずっと偉いんだから、とリノルアースは俯きながら
呟く。

「そうかもしれません、でも 今ここにいるのは、ルイ・バウア
ーですから。あなたに仕えてきた、ただの騎士です」

説明を聞きに行くのは、お茶のあとでもいいでしょう？ とルイは微笑む。

なぜか今のリノルアースを一人にさせたくなかった。

結局リノルアースが就寝するまで、ルイは側から離れなかった。いつもなら追い出されるが、リノルアースが寝台に入って眠りにつくその時まで、そつと傍らに立つ。

暗くなった部屋をそつと出て、ルイはアドルバードの部屋に向かった。まだ二人とも起きているだろう。

案の定、部屋の前まで行くと中から話し声が聞こえた。

「失礼します。アドルバード様」

ノックと共に、ルイは入室すると、夜着に着替えたアドルバードと、未だに騎士服を着た姉のレイがいる。

「ルイ？ どうしたこんな夜遅く」

「こんな夜遅くに姉さんを部屋に入れてるアドル様にお聞きしたいことが」

この人に限って問題はないと思うが 姉も妙齢の女子であることをたまには主張しておかなければ。

「な、なんだよ」

厭味を言われていることに若干押され、アドルバードはルイを見上げた。

「俺が、アヴィランテの王子かもしれないと、リノル様から聞きました」

しん、と部屋の中が静まり返る。

アドルバードなんて全部顔に出ている。レイは何を考えているか、

まるで読めないが。

「……リノル様が、おっしゃったのか」

レイが静かにルイに問う。

「ええ、アヴィランテの姫君に会った直後に、もう隠しきれないからと」

「そして、説明を聞きに来た」

リノルアースが話さなかったのは たぶん、辛いからだろうと、アドルバードもレイも推測する。

「リノル様がそうするのが良いだろうと。父上からもすでに話を聞いているそうですね？」

こくりと、レイが頷く。

そしてちらりとアドルバードを見てから、説明役を買って出た。正直上手く説明する自信がなかったアドルバードとしては感謝だ。

説明といっても、おおよそが憶測に過ぎない。しかしそのあまりにも合致しすぎる状況に、ルイもため息を吐き出す。

「黙っていてすまなかった」

すべてを説明し終えてから、申し訳なさそうにレイが呟く。

「気にしてません。俺にはどうでも良いことですから」

「どうでも良いって けっこう大事だぞ？ おまえ本当にアヴィラの王子なら一生苦労しないで生きていけるだろ」

黙っていたアドルバードが思わず口を開く。

「楽に生きるなんて教育受けてないので。このままアヴィラの姫君が帰るまで素知らぬ顔をしていれば良い話でしょう？ 証拠はないわけですし」

「いやー……ばれたら国際問題に」

「十年以上も前に行方不明になった王子のことなんて、アヴィラの人間でも忘れているでしょう」

確かにそうだが、とアドルバードは口籠もる。

「一応、妹かもしれないんだぞ?」

シェリスネシアのことだ。ルイの反応はあまりにも淡泊すぎる。

「俺の家族は両親と姉だけです。俺はこのままハウゼンランドに骨を埋めるつもりなんですから」

そのきつぱりとした言葉を、リノルアースにも聞かせてやりたいな、とアドルバードは思う。

「……それが、許されれば良いけれど」

レイが静かに不吉な言葉を呟く。

「レ、レイ? そんなこと言うとき、ほら、悪いことが」

「起きるでしょうね。シェリスネシア様はリノルアース様並みに頭の回る方ですから。ルイと顔をあわせた段階で、ルイが兄である可能性を考えるでしょう。そしてルイはもう養子であることを言ってしまった」

決定打を言っていないのが幸いですが、とレイは付け加える。

「遠からず、探られるでしょう。その時上手く隠し通せるとは思いません」

顔に出やすい人がいますから、と誰かは言わなかったが、誰のことかはその場にいる者なら分かってしまった。不幸なことに本人でさえ。

27:こいつには前科がある！

偶然だろうか、必然だろうか。
シェリスネイアは頬杖をついてぼんやりと窓の向こうの景色を見つめる。

あの人の容姿は、どう考えても北国のそれではなかった。
どちらかといえば　そう、南国のもの。いや、南国の人間そのものと言っても過言ではないだろう。

黒い髪に、濃い肌。瞳の色は確か緑色だった。

『あの騎士殿とはあまり、似てないのね？』
『私は、養子ですので』

つまり、この国の人間ではないということ？

南国の人がどうしてこの国に　しかも年頃もシェリスネイアの兄と同じくらいだ。

これは偶然だろうか？
偶然にしては出来すぎている。

優しそうな瞳をしていた。気遣わしげにリノルアースを見ていた。
彼が兄であったなら　あの双子のように、なれるだろうか。

「……確かめてみる価値は、あるわよね？」

自分の願望と言われればそれでおしまいかもしれない。
当初は兄が生きているなんて露ほどにも思っていなかったのだから。

そこで可能性の高い人を見つけて、すがり付いてしまつのは都合の良い話なのかもしれないけれど。

それでも。

とりあえず一番顔に出るアドルバードは今後シェリスネイアと接触を避けるように、バウアー家の二人からきつく言い渡された。

「……今日は、リノルアース様の部屋で休みます。アドル様、くれぐれも迂闊に部屋から出たりしないでくださいね。シェリスネイア様に会っても平常心で」

レイが突然そう言い出し、アドルバードは大慌てだ。

「ちよちよちよちよと待て！　なんでおまえがリノルの部屋に行くんだよ！」

大抵レイはアドルバードの部屋の隣室で就寝する。同性の騎士ならばそれが当たり前だし　レイの場合もあらゆる意味で危険はない。アドルバードにはそんな甲斐性は存在しない。

「今夜はたぶん一人では心細いでしょうから。レイが添い寝するわけにもいかないでしょう？」

「ねねねねね姉さんっ！！」

当たり前だと言いたいのにも関わらず、冷静な姉のセリフに動揺を隠せないレイは顔を真っ赤にして慌てる。

「レイが代わりにアドル様についてくれ。隣にいつも私が使ってるベットがあるから」

「おいこら待て！　レイがレイのベット使うのか！？」

「そこでどうして過剰反応する必要があるんですか。姉弟ですよ？　それでも心の狭いアドルバードには許せない事態であって　そもそも惚れた女の残り香がするベットに、弟であろうともどうして侵入を許せようか。」

「こいつには前科がある！　昔はレイが好きだったっていうし！！」

「そこでバラしますか普通！ 人の初恋を踏みにじらないでくださいー！」

ルイが顔を赤くしたり青くしたりしつつ、アドルバードの口を塞ごうとする。

「……ではアドル様の寝台で二人で寝ればいいでしょう」

ふう、と呆れたようにため息を零しながらレイが新たな提案をする。

「誰が男と添い寝して嬉しいか！！」

「それはこっちのセリフですよアドルバード様！」

ぎゃあぎゃあと喚く二人を見て似たもの同士だなという感想を思い浮かべながら、レイはさらなる提案をする。

「ではルイが長椅子なりソファで寝ればいいでしょう……それとアドル様」

「は、はい？」

少しだけ怒ったようなレイの声に、自然とアドルバードは背筋を伸ばす。

「了見の狭い男はもてませんよ」

それが痛恨の一撃だった。

結局アドルバードはルイがレイのベットを使うことを泣く泣く許可し、レイはアドルバードの部屋を出てリノルアースの部屋に向かうことにした。

「姉さん」

その後ろをルイがついて来て、レイは振り返る。

「……いくら私がいたとしても、この時間にリノル様の部屋に入ることは許可しないが」

「いや、別にそんな理由では送ります。姉さんも強いけど女性だし。それに」

話が、と呟かれて、レイは静かに頷く。

「……姉さんは、俺がアヴィランテについての方が良いと考えてるで

しょう？」

隣を歩く姉を見ることが出来ずに、ルイはただ床を見つめた。

レイは何も言わず、ただ黙って歩く。

「俺としては、このままりノル様の側にいたい。それがハウゼンランドを危険に曝すことになっても　姉さんは、どうして」

たぶん、同じ立場になったら、この人も同じように願うだろうに。

「……………ルイ」

静かに、レイが口を開いた時だった。

ばっしやりと、どこからかともなく水が降ってきた。それこそバケツをひっくり返したくらいの水が。

その大半がルイにかかり、上半身だけでなく全身がびしょぬれだ。

「……………はい？」

何が起きたのか飲み込めず、ルイはただ呆然とそう呟く。

「もももも申し訳ありません！！　躓いたら水差しが物凄い勢いでそちらにいつてしまつてええええっ！！」

瞬間移動かと思えるほどの速さで女官がルイに駆け寄ってきて白々しいまでに頭を下げる。

「　シエリスネイア様のお付きの方ですね？」

レイが静かに女官を見下ろす。特徴は南国の者のそれとしては地味で、一見どこの国の者か見分けは出来ないはずだが　レイは人の顔を覚えることが得意だ。

「え、ええと、その。姫様が喉が渴いたとおっしゃいまして、それで眠れないとおっしゃるものですから　ってそんな場合ではありませんっ！　早くお脱ぎください！　風邪を召されたら大変です！

！」

「つてえ！　ちょっと！　人の服を剥がないでください！」

女官の手がルイの服に伸び、あの手この手と服を脱がそうとするが。

「こんなところで服を脱いだ方が風邪を引きます。暖かな部屋に向かう途中でしたし、身体を鍛えた騎士ですのでご心配なく。それに若い女性が男性の服を脱がそうとするものではありませんよ。夜とはいえ、ここではどこから誰に見られているかも分かりませんから」

レイが静かな声で女官を止める。

その声に圧倒され　女官もしぶしぶといった態で下がった。

「シェリスネイア様がお待ちなんでしょう？　主人を待たせるのは関心しませんよ……失礼します」

そう言ってレイはルイの腕を引き、少しだけ歩調を速めてその場から去る。

「　姉さん？」

ルイは首を傾げて、前を歩く姉を呼ぶ。

「黙って歩け。リノルアース様の部屋で話す」

ここでは駄目だ、と呟かれ、ルイも口を閉ざした。

窓の向こうには、今にも折れそうなほどにか細い月が夜空の中で懸命に自分の存在を主張していた。

28:どちらもは無理だ

静かに、音をたてないようにレイはリノルアースの部屋へと入った。

寝台の上ではリノルアースが大人しく眠っている。

「……不測の事態ということで許可はするが、寝台には近づかないように」

レイはため息と一緒にそう忠告して、レイと共にリノルアースの部屋に繋がる隣室へと移動する。

「姉さんは弟を信用してないんですか……」

がつくりとうな垂れながら、レイが呟く。それなりの信頼関係は築きあげてきたつもりだが。

「男は時に豹変するものだ^{あるじ}と、主からきつく言われているから仕方ない。早く着替えないと本当に風邪をひく」

ふわりと頭にタオルがかけられ、レイは自分でも出来るというのにレイは髪を拭き始めた。

「どうしてこんなに急いだんです？ 別に廊下で脱^だごうとここで脱^だごうと」

話しながら上着を脱ぎ、特に支障はない、とそうレイが言おうとすると、

「あの水は、故意にかけられただろう」

というレイの静かな声で遮られた。

レイの手が抜き出しのレイの右肩に触れる。冷えた肩にその手はとても温かく感じた。

「……うちに来た時には既に、ここに火傷があつたな」

レイが触れるその場所は、ひどい火傷が今も痕を残している。

「それが、見られてはいけないものだとても？」

何も分らないレイは首を傾げながらレイを見下ろす。レイはた

だ真剣な瞳で、ルイの右肩を見つめていた。

「……アヴィランテの王族は、右肩に王印おういんをつけると聞いている。

おまえの右肩も、かすかだが何か描かれていたように見えなくもない」

「

」

初耳だった。

そもそも遠い南国の知識がある姉が異常なのだとしても。

「おそらく、それを確認したかったんだろう。そしてこれを見られたら、シェリスネイア様の中でおまえは兄と確定しただろうな」

「……俺には、死の宣告にも感じますけどね」

ルイは苦笑して、呟く。

王子が亡命するために、王印を隠した。幼い 幼すぎる王子にそんな仕打ちをしなければならぬ事情があったと考えるのも、不自然はない。

ルイは自分の右肩に触れ、苦々しく呟く。

「やはり、俺はアヴィラの王子なんですか」

姉に答えを求めるのは間違っていると、分かっている口は勝手に動いていた。

そんな弟をレイは静かに見つめ 右肩に触れる弟の手に、自分のそれを重ねた。

「……………おまえは聞いたな、アヴィラに行くことに賛成なのかと」

ルイは俯いていた顔を上げ、美しい顔立ちのレイを見つめた。

「正直、そうなれば良いのかもしれないとも考えているよ、私は」
分かっていた答えに、ルイは心が痛んだ。どうして、という問いが同時に浮かぶ。

そんなルイの心を読み取ったかのように、レイは続けた。

「おまえはリノルアース様が好きで、そして私はアドルバード様が好きだ。そしてアドルバード様も、同じように思っていてくださる

んだろう。……昔は、ただ側にいるだけでよいと、そう思っていた。私は王妃になれないと」

だから、良かったんだ、とレイは呟いた。

アドルバードの名前を一切略さずに話していることに気づいて、姉は真剣なんだとルイは気づく。レイがアドルバードの名前を略さない時は、真剣な時か、本気で怒っている時だけだ。

「もしおまえとリノルアース様が結ばれても、私とアドルバード様が今のままなら、それで良かった」

そこまで言われて、ルイも気づく。

たった二人の王の子供が、同じ一族と婚姻を結ぶわけにはいかない。それはハウゼンランドの政治に偏りを作り出してしまうだろう。貴族からの反発は大きいことなど容易に想像できる。他国の王族、またはハウゼンランドでも有数の大貴族ならまだしも　バウアー家は弱小貴族。

どちらかだけなら、可能性はある。

けれど、どちらもは無理だ。

レイはずっと前からこのことに気づいていた。だから　自分の恋を、叶えようと思っていなかったのだ。

「それでも、私ももう引き返せない。ならば、周囲を納得させる術^{すべ}を考えるしかない」

だから今まで以上にアドルバードの為に尽力した。周囲を黙らせるだけの才覚がアドルバードにあれば、婚姻など小さな問題だと。

「……でも、俺がアヴィランテの王子となれば」

ルイが自然と呟く。

状況は一度で解決する。

所詮は行方不明だった第九皇子だ。アヴィランテでの扱いは重い

ものではないだろう。けれどハウゼンランドにしてみれば、大国との繋がりだ。

「リノルアース様が嫁ぐことなんて簡単に決まる。その繋がりを作り出したアドルバード様の才能も認められる」

そしておそらく、お互いの恋が実る。

「……でも俺が、リノルアース様への思いを諦めれば」
そもそもレイとアドルバードのように相思相愛でもないのに、とルイは呟く。

真実を知るレイはため息を零しながらルイを見つめた。
「おまえはアドルバード様並みの鈍感じゃないだろう？」
それはある意味でひどい言葉だ。

ルイが心外そうにレイを見つめ返す。その心の底まで見通してしまいそうな青い瞳に、押される。

「少なくとも、可能性がゼロだとは思わないが。リノルアース様は気に入らない人間は側に置かない人だからな」

それは、もちろん知っている。

側にいると、命じるくらいにはルイに対して好意を持っているのだろうと。その命令に、ほんの少し期待してしまったことも嘘ではない。

「私は、自分の恋の為におまえを切り捨てようとは思えない。……おまえも同じように思ってくれるだろうと、信じてもいる」

レイが優しい、綺麗な微笑みを浮かべてそう言う。

だから、諦めるなど、そう言うてくれる優しさが胸に染みて、ルイもつられて笑った。

気高く、澄んだ、凜とした強さを持つ姉に、憧れていた。

容姿があまりにも違いすぎることから、実の子でないことは幼い頃から教えられていた。それでも変わらない愛情を与えられたと思えるほどに愛されていた。

だからこそ、姉に対する憧れが恋になったことにも違和感はない。ただ、

幼い頃の、狭い世界の中でそれはたぶん必然だった。

そしてその彼女が誰を見つめているかも、すぐに分かっていた。

もはや恋ではない。

家族に対する愛情だと、胸を張って言える。

けれど大切な人であることに変わりないから。

その人から差し出された選択肢に、手を伸ばそうとする自分がいる。

それが誓いを破るものと分かっているのに。

29： ずっと、一緒にいられるのに

「……………ルイ？」

暗闇の中で人の気配を感じて、リノルアースは目をこすりながら、わずかに差し込む月光を頼りにその人を探す。

こんな真夜中に、ルイが自分の部屋にいるわけがないと分かっているのに、一番最初に名前が浮かんできたのが彼だった。

人影が動く。

「……………ルイではなくて、申し訳ありません」

苦笑するような、涼やかな声。

その声には、幼い頃から馴染みがある。付き合いだけならルイよりも長い。

「レイ どうしたの？」

暗闇に慣れ始めた目が、レイの表情を読み取る。珍しい顔をしている。

「今夜は、お一人では心細いかと思ひまして。ルイの方が良かったみたいですが」

「べ、別にそういうわけじゃ 大体あの男がこんな時間に部屋にいたらいくらんでも叩き出すわよ」

そもそも寝顔なんて そんな無防備な顔を、ルイにそうそう曝すわけにはいかない。

「つい先ほどまでは隣室にいましたが」

「んなつ……………どうして!？」

寝顔を見られたという羞恥心と、その時に目を覚まさなかった自分に対する憤りが交じり合っけてリノルアースは思わず声を荒げる。

「いえ、少し奇襲に遭いまして」

「奇襲？」

首を傾げるリノルアースに、レイは「明日説明しますよ」と答え、

再び眠るように促す。

「……わざわざ来たんだもの、ここで寝るんでしょ？」

甘えるような声になったのは、やはり今日はどこか疲れたからかもしれない。

レイは優しく微笑んで、もちろんと答える。大きな寝台に、二人眠ることはたやすい。

「こんな風に寝るの、何年ぶりかしら。小さな頃はアドルと三人並んでお昼寝とかもしたわね　夏に、芝生の上で寝たりして、レイがデイクに叱られたこともあった」

懐かしいですね、というレイの声が、まだ眠い脳に心地よく響く。プライドの高いリノルアースが甘えられる人は、そう多くない。兄でさえ素直に甘えることは滅多にない。

その中でレイという人は　昔から立ち位置が変わらない。こうして甘えたい時に、そつと側にいてくれる。

「こんな毎日が、ずっと続けば良いのに」

それは大人になりたくないという、リノルアースの本音を零していた。

「そうすれば　ずっと、一緒にいられるのに」

政略とか、そんなもの関係なかった小さな頃のように、何も気にすることなく、未来を憂うこともなく。

「……リノル様」

レイが優しく、リノルアースの髪を撫でた。

その手が嬉しい。けれど同時に、その手じゃないとも思う。本当に触れて欲しいのは、違う人だ。

「本当は国政とか、どうでもいいわ。アドルがいて、レイがいて
レイがいてくれれば、いいのに」

立場がそれを許さない。

ただ状況に流されてしまえば、リノルアースはどこかの国に嫁ぐことになるだろうし、アドルバードは美しい姫君を娶るのだろう。

それが嫌だった。

嫌だつたから あらゆる手を使って掴もうとする未来に手を伸ばしたのに。

「ルイが」

リノルアースは耐え切れずにレイにしがみつく。

その声が震えて、大きな瞳から綺麗な雫が落ちたのは たぶん
気のせいじゃない。

ルイが、いつちゃう。

遠くへ。

その切ない声に、レイは何も言えなかった。

ただ優しく抱きしめてあげることしか出来ない。ついさっき、ルイに言った言葉ばかりが頭の中で繰り返される。

欲しい未来を手にするには、そうするべきだと、そう思った。

しかしそれしか道がないわけじゃない。

道を選ぶのはルイだ。彼が選ぶ道を、姉として応援するだけだ。

そしてたぶん、レイはもう分かっていた。ルイがどの道を選ぶのか、その結果誰が傷つくのか。

レイはただ、リノルアースを抱きしめる力を強めた。

それしか、出来なかったから。

「では、確認はできなかったのね？」

ふう、というため息と一緒に、シェリスネイアが失望の色を含んで呟いた。

「申し訳ありません。その、邪魔されてしまつて」

「仕方ないわ。あの騎士は一番手ごわそうなもの。その反応を見れただけでも良しとしましょう……明日あたり、王子カリノルに、それとなく探りを入れればいいのよ」

王子あたりは顔に出るでしょうしね、とシェリスネイアは微笑む。そして無意識に自分の右肩に触れた。

アヴィランテの王族である証。それはアヴィランテの王族の象徴である鷲が描かれた王印。生まれて間もなく、刻まれる痛み。

兄なんてどうせ見つからないと思っていた。嫁ぐ前の最後の悪あがきだった。

なのに どうしてだろう。もしかしたらという人を見つけただけで、こんなにも自分は躍起になっている。

この北国にきて思い出されるのは仲の良い双子。その傍らに立つ、綺麗な騎士。普段ならおそらく、その輪の中にあの騎士も加わるのだろう。

思い描いてきたような幸せな光景。

温かな日差しの中で微笑む人々。他愛ない語り。

どうして？

どうして自分が望んだものが、こんなにもここは溢れているんだろう。

欲しいと切望して、今まで叶わなかったものが。

「ずるいわ、リノル……」

同じように王族として生まれ。

同じように大陸でもてはやされてきたというのに。

手にしているものはこんなにも違う。

アヴィランテはいつも寒い。この北国のような温かさなんてどこにもない。あるはずの、母親の側でさえ、シェリスネイアにはなかった。

「わけて、くれてもいいでしょう?」

その呟きは闇の中に溶けていく。

だって、あなたは他にもたくさん持っているじゃない。

私にないものを、私が欲しくてたまらなかったものを、そんなにたくさん持っているじゃない。

ならば 本来私のものだったはずの人くらい返して。

30：迷いのない答えに、心が決まった

アドルバードの部屋に行くと、部屋の主は不機嫌そうに仁王立ちしていた。

「……まだ、お休みになってなかったんですか」

もう夜は遅い。朝早くから色々なことに奔走しているアドルバードならばもう休んでいるだろうとルイは思っていた。

「おまえの帰りが遅いから、もしやレイカリノルに手を出したんじゃないかとヤキモキして、それでもレイに部屋から出るなど言われているから追いかけることも出来ずにこうして大人しく待っていたわけだ」

「……どうやってそんな想像できるんですか。あの二人に俺が勝てるわけありません」

四人の中では最弱だと自覚している。

そしてそれも、アヴィラのことを含めれば一転するんだなと頭の隅で考えてルイは黙り込んだ。

「レイには実力でも負けるかもしれないが　力押しだったらリノルには勝てるだろ」

そんなことしたら生きていられると思うなと言いたげな目でアドルバードはルイを睨む。

「その後が怖くて力押しも無理です。こちららキスの一つもしてない清い関係なんですよ。どこかの王子様と違って！　そもそもそんな関係にすらなれてませんけどね！」

言い返すと、アドルバードは「う」と口籠もる。前科があるのはどっちだ。

「大体姉さんのことをいつまでも引きずらないでくださいよ。純粹に今は姉としてしか見てませんから」

ため息を零しながらルイは上着を脱いだ。先ほど着たばかりだが、どうせもう寝るしかない。

「その点については少し興味があるんだが　いつ、惚れてた？」
何でそんなことに興味を持つんですかと言いつ返そうとして、止める。

「アドル様にはまだお会いしてない頃ですよ。俺が家から出ずにいた頃ですから　八歳前までですかね。あの頃は世界そのものが狭かったんで」

八歳で、王城に入ることを許可されるまでは基本的に家の近所しか出歩かなかった頃だ。姉は物心ついた時から王城に出入りしていたのだから、随分な差がある。

「それで？」

尋問ですか、とルイは苦笑する。

年頃の乙女でもあるまいし、どうして男二人で就寝前に恋話に花を咲かせないといけないのか。
しかしまあいいか、という気分も味方して、ルイは昔を思い返した。

厳しい父と、今は亡き優しい母、そして美しく強い姉。

それしか存在しなかった頃。

血が繋がっていないということを、今はもちろん気にはないが、幼い頃にはそれがどうしても負い目に感じていた時期は少なからずあった。

そのせいで両親に素直に甘えられずに距離を置いていた。

そんな中で、つい母に対して癪癪をぶつけてしまった。実の子供じゃないのだからと、優しくしなくてもいいと。そんなことを怒鳴

り散らして。

叱ろうとする父を無視して飛び出した。

このままいつそ放り出してくれればいいと、そう願う心があった。

「ルイ？」

逃げ出して 庭の片隅で蹲っているところを見つけたのは、レイだった。

いつも小さな癩癧の後でルイを見つけるのはレイだった。だから今回もそうだろうと、ルイは思っていた。レイはいつもルイが落ちて着くまでただ黙って側にいるだけだったのだが 今回だけは違った。

頬に痛みを感じると同時に、ルイの身体は飛んでいた。

芝生の上に倒れこんで、呆然と姉を見上げる。

レイは 怒っていた。

「母上に謝りに戻れ」

拳を握り締めたまま、レイは低く言った。

でも、と呟くと、また拳が飛んできそうで怖かった。

「父上も母上も、おまえをどれだけ愛しているのか分からないのか。分からないのは、おまえが分かるうとしてないからだ。どうしておまえがルイって名前をつけられたと思ってるんだ」

聡い子供だったレイと違って、ルイにはその言葉のほとんどが分からなかった。

ただ怒っているレイが同時に泣きそうなのだけは、馬鹿な子供だったルイにも分かる。

両親に謝りに戻ると、先に父親のお説教が待っていた。

小一時間のお説教の後で、両親に一度に抱きしめられてから

ルイの中の重い目はなくなったのかもしれない。

もう少し成長してから知ったことだが 母は、レイを産んだ後

で子を成せない身体になったのだという。跡継ぎを、と望まれる立場で女の子を一人産んだだけの母は親戚連中の中で肩身が狭い思いをしたのだという。

父がルイを拾ったのも 両親にとっては天の導きがあつてこそだったのだと。

そして、この名前の意味も。

「レイとルイっていうのは、砂漠の民の言葉で白と黒っていうんですよ。なんとも安直な名づけ方ですけどね」

苦笑しながらルイは久しぶりに自分の名前の由来を口にする。

レイが名づけられたのは偶然としか言いようがないが 砂漠でルイを拾ったのは、もはや運命に近かった、と父に昔話された。

「……そのどこでレイに惚れるんだ」

殴られたただぞ、と言われてルイは苦笑いする。

「いつも黙って側にいてくれた時から惚れてたんでしょうけどね、泣きそうな顔見た時から、完璧に意識は変わってたのかも それでも、姉さんの眼中に自分はまるで入ってないことに気づいて儂く散りましたけどね」

恨めしそうにアドルバードを睨みながらルイは言う。

「……そういえば俺はいつからレイが好きだったんだろう」

ルイの視線に気づかず、アドルバードが首を傾げていたので、ルイはさすがにため息を隠せなかった。

「そんなことも分からないって、やっぱりアドル様はヘタレですよ
ね」

「おまえに言われたくない。少なくとも剣の誓いをたてた時には既に」

そう呟きながら逆算を始めるものだからますます姉が不憫に感じ

てきた。

そもそもこの二人は、いつからなんて考えるのも馬鹿馬鹿しくなるくらい昔から、無自覚に相思相愛だったのだ。それはレイをずっと見てきたルイが保証できる。

この二人はたぶん、世界が終わりを迎えようとも、その瞬間までお互いの傍らにいるのだろうと。

それが羨ましかったのだから、その二人を引き裂こうなんて考えられない。

「アドルバード様、姉さんのことを愛してますか？」

気がつけば口が勝手に動いていた。

はっとしてルイが自分の手で口を塞いだ時には遅い。

「愛してるよ」

あっさりと即答されて、むしろルイが呆氣にとられた。

それがそのまま顔に出ていたのだろう、アドルバードが「なんだよ」と笑う。

「弟のおまえが心配しなくても、レイを不幸になんてしない。それくらいの甲斐性は期待していいぞ」

期待していた答えを、簡単にアドルバードに言われて呆然とする。迷いのない答えに、心が決まったのは確かだった。

「それにしても姉弟だよな」

アドルバードはくすくすと笑いながらそう続ける。

意味が分からずに首を傾げるルイに向かって、アドルバードは指摘した。

「口癖だよ。真剣な時とかはおまえも俺のことアドルバードって呼ぶ。絶対な。たまに普通の時もそう呼んでるけど」

肝心な時は絶対だ、と言われて自分の言動を思い返す。あまり愛称を使わないように気をつけていたはずなのだが　やはり気が抜けてしまっていることが多いらしい。

しかし今回は都合がいいか、とルイは苦笑する。

「姉さんをお願いします」

ルイはそう言ってアドルバードに頭を下げる。

驚いたアドルバードは、ただルイを見下ろしていた。声をかえる余裕もなく、俺は、とルイが続ける。

「王子として、アヴィランテに行きます」

31：嫌な予感はいつも当たる

急にアドルバードに呼び出されたりリノルアースは、一人で兄の部屋に向かう。同じ寝台で眠ったレイも、朝目が覚めるとすぐに身支度をしてアドルバードのもとへと帰った。

アドルバードが呼び出すなんて珍しい　それが少しだけ、何かの前触れのように感じてリノルアースは自然と足が重たくなった。

アドルバードの部屋の扉を、ノックもせずに開けた。

いつもならそれをとにかく言うアドルバードが、静かにリノルアースを迎え入れる。

部屋の中には何故かシェリスネイアとウィルザードまでいた。ウィルザードはリノルアースと目が合うと分かりやすいほど嫌悪が顔に出ていた。

「……一体、何の騒ぎ？」

ため息まじりに、いつものように堂々と、リノルアースはアドルバードに問いかける。強がってなければ、足が震えそうだった。

いつもいつも、嫌な予感は当たる。

「皆様に集まっていたいたのは、俺の都合です」

どうぞ、とレイがリノルアースの為に椅子をひきながら、そう答えた。

「レイがわざわざ私を呼びつけたって言うの？　随分偉くなったわねえ？」

リノルアースの厭味に、レイはすみませんと苦笑するだけだった。「それで？　どうして私やネイガスの王子まで呼ばれたのかしら？」

先に座っていたシェリスネイアが紅茶を飲みながらレイに問いかける。

「全員集まったことですし、始めますか、アドル様」

レイがリノルアースの前に紅茶を用意して、アドルバードに言う。

アドルバードがちらりとルイを見て　ルイは、気まずそうに頷いた。それを確認したレイが、一番最初に話し始める。

「まずは、昨夜は弟に水をありがとうございました。シェリスネイア様」

丁寧な声に、シェリスネイアの顔色が曇る。

「あれは、うちの女官が失礼いたしましたわ。風邪などは召されませんでした？」

「ご心配には及びません。はつきりとお聞きます。……あれは、故意でしょう？」

当本人のルイは黙ったまま、リノルアースの側に立っている。

シェリスネイアは若干動揺しているのだろう。いつもの雄弁さがない。

「な、なんのことですかしら。あれは女官が転んで」

「あなたが確認したかったのは、ルイの右肩でしょう？」

レイの静かな問いに、シェリスネイアの肩がびくりと揺れた。図星だったのだと、その場にいる誰もが分かる。

「右肩……」

リノルアースはその単語に、自分の知識を掘り出した。アヴィラントの王族ならば誰もが持つ、王印。

リノルアース自身は、ルイの右肩を見たことはない。王印の位置は正確には背中に近い、右肩だ。そんな場所、上半身裸でもなければ見えないだろう。

「アヴィラントの王族である証、王印の有無を確認したかった違いますか？」

レイの重ねた問いに、シェリスネイアはしぶしぶといった感じで頷いた。

「残念ながら、王印はありませんよ。別のものならありますが」

レイの答えに、シェリスネイアもリノルアースも、ルイに注目する。普段こんなに注目を集めない本人は、美少女二人からの視線に居心地悪そうにしていた。

「……正直、年頃の姫君の前で服を脱ぐのは抵抗があるんですが」
周囲の無言の要求に、ルイが弱々しく抵抗の意思を見せるが
それは無意味だった。

「騎士団の中では簡単に脱いでいるんだから、今更氣にする必要もないだろう」

レイがさらりとそう言つてのけると、過剰反応する人間が一名いる。

「……ちょっと待て。それはおまえがルイの裸を見たことあるってことか！？ 騎士団はそんなに羞恥心がないのか！？」

「戦場に出れば手当てでも必要ですし、稽古をすれば汗もかきますからね。男性はかなり露出してることもありますよ」

「そんなもん見るなあぁ！！ 目が腐る！！」

レイ自身は随分と前からそういう環境で育ったので、大して気にしてはいない。さすがにレイの存在を気にしてか、下まで脱ぐ男はいない。アドルバードの着替えすら手伝うレイにそれは今更だろうと周囲は呆れたようにアドルバードを見つめた。

「目が腐るほどのものじゃないですよ、いくらなんでも」

ぶつぶつと呟きながら、ルイが上着を脱ぎ始める。女性の視線を気にしてか、後ろを向いているが。

だから、それはすぐに見つかった。

上着の中のシャツまで脱いだ、上半身は何も纏っていないルイの引き締まった背中の中 右肩ともいえるその場所にある、古い火傷の痕。

「ルイ、それは……」

リノルアースが驚いたように呟いた。

「赤ん坊の頃の火傷ですよ。記憶にすら残ってないので、他には説明しようがありません」

苦笑しながら、ルイは自分の右肩に触れる。

「……わずかにですけど、王印のようなものも見えますわね」
シェリスネイアが確かめるように、じっとルイの火傷の痕を見て
呟く。

「ここにいる人はもはやご存知でしょう。俺はバウアー家の血筋で
はなく、拾われた子だと。そしてその当時の状況が、アヴィラの王
子の失踪と重なり合うと」

暖炉の火がついた部屋の中でもさすがに寒いと、ルイが厚い上着
だけを肩にかけた。

「状況証拠にあわせて、肩の火傷の痕。これだけで俺は王子と認め
られるでしょうか？ アヴィラの姫君」

何を、言っているのか。

リノルアースは即座には理解できなかった。

「……拾われた当時、身に着けていたものはありますかしら？ そ
の品によっては、納得させることは可能だと思います」

「屋敷にまだあります。かなりぼろぼろになってはいますが」

シェリスネイアの問いも、それに答えるレイの声も、どこか遠い。

「……………ルイ？」

呟いたリノルアースの声は、掻き消えてしまいそうなほどにか細
かった。

しかしその声にルイは気づく。リノルアースを見つめ、複雑な表
情を浮かべた末に、優しく微笑んだ。

「……アヴィラに、行くつていうの？」

ルイはリノルアースのもとまで歩み寄り、その足元に跪く。リノルアースの小さな手を握り、ルイはリノルアースを見上げて、まるで神聖な儀式のように、言う。

「そのお許しをいただく為に、リノルアース様をお呼びしたんです」

頭を殴られたような、衝撃だ。

嫌な予感はいつも当たる。

許しなんて、そんなもの　もう必要ないと、分かっているだろうに。

ルイがアヴィランテの王子ならば、リノルアースの方が格別に地位は下なのだ。同じ王族でも、アヴィランテとハウゼンランドでは国力があまりにも違いすぎる。

何より、リノルアースの頭に浮かんだのは

「……………嘘つき」

泣きそうになるのを、必死で堪えた。

リノルアースはルイの手を振り払い、椅子を倒す勢いで立ち上がる。ルイは跪いたまま、リノルアースを見上げていた。

「ずっと、私を守るって約束したじゃない!!」

そこまでが限界だった。

リノルアースのプライドが、それ以上を許さなかった。リノルアースはそう叫ぶと、部屋を飛び出した。

それ以上にルイに怒鳴り散らせば、たぶん、その場で泣いてしまっただろう。

32：あなたが、好きだからです

走り去ったりリノルアースを追おうとして、ルイは一瞬躊躇う。

自分に追いかける資格があるのかと自身で問いかけ、その答えを見つけれずに、ただ扉を見つめた。

「っ！ リノルっ！！」

躊躇いもなく追いかけようとしたアドルバードを、レイが止める。

「なんだよ！ あの様子じゃ絶対っ」

泣いている、と。そう言おうとして、レイを振り返るが、アドルバードはその顔を見て大人しく引き下がった。

「……いい加減、妹離れしてください。どう考えても、今駆けつけるべきなのはアドル様じゃないでしょう」

レイの静かな声だけが、広い部屋に響く。

部屋が静まり返り、時計の音が嫌に大きく聞こえた。

「ルイ」

沈黙を破ったのは、やはり涼やかな声で。

怯えたように姉を見たルイは、何も言わずにただ立ち尽くしていた。

「ここで言われなければ行動もできないのか」

静かな怒り。確かにレイは怒っていた。

その言葉でルイは躊躇った自分を、叱り付ける。

「すみません」

「それを言う相手を間違えている」

レイはさらに追撃し、ルイは苦笑して扉へと向かう。

そして何も言わずに走り出し、リノルアースの姿を探し始めた。

部屋から飛び出し 自分の部屋まで逃げ込もうとして、リノルアースは断念した。

広い中庭の植え込みの中に隠れ、堪えていた涙を溢れさせた。人に泣き顔を見せたくなかったから、本当は自室に籠もりたかった。けれど、もう我慢できない。

それでも大声で泣くことはできず、声を必死で堪える。そうすると随分情けない、子供のような泣き声が漏れた。

なんとなく、予想はしていたことだ。

ルイの選択を拒むことは許されない。

そしてその選択肢を与えずに誓わせた言葉で、彼を非難することも、できない。

分かっているのに。

「
ルイ」

漏れる泣き声が、時折勝手に彼の名前を呟く。

命令でも約束でも何でも良いから、彼が側にいて欲しいのに。

「はい」

呼んだわけではない名前に、答える人はただ一人だ。

驚いてリノルアースは思わず顔をあげてしまった。泣き濡れた顔を、見られたくない人に見られてしまう。

「こんな所にいると、風邪をひきますよ。リノル様」

そう言いながら、ルイは上着を脱いで膝を抱えて座り込むリノルアースにかける。咄嗟のことに反応できなくて、しばらくリノルアースはルイを見つめていた。

その手が優しく、リノルアースの涙を拭うまで。

「なっなんでここに……っ」

羞恥で顔を赤く染めたりノルアースが動揺して声を荒げる。

部屋にも行かずに、中庭に隠れていたのに。リノルアースがそう簡単に見つかるような所で泣くはずがない。

「部屋に戻ったのかなと思ったんですが 途中ここを通った時、なんとなく」

困ったようにルイが微笑み、リノルアースの濡れた頬を撫でるのは、止めない。

その手が心地よいのに、恥ずかしくて、振り払うこともできずに逃げることもできない。ただ泣き顔を見られ続けるのだけはプライドが許さず ルイの胸にそのまま顔を埋めた。

「……あなたは、私の騎士でしょう」

吐き出した言葉はやはりルイを責めるものでしかなくて、そうしてしまふ自分がリノルアースは心底嫌になった。

「そうです」

ルイはリノルアースの身体を支えながら、静かに答える。

「だったら命令よ。ずっと、ハウゼンランドで、私の側にいて、私を守りなさい」

引き止めたいという気持ちだが、リノルアースに言葉を紡がせる。

こんなことを言っただけだと冷静な自分が頭の中で騒いでいるが、それすら気にならないほどに、願望が強い。

「……すみません。その命令は聞けません」

静かに、しかしはっきりとルイは答えた。

その声がリノルアースの耳に痛いほどよく響く。

「私の命令よ!? どうして聞けないなんて言うの!?!」

最早それは泣き声でしかなかった。リノルアースがルイの胸を拳で叩きながら、泣き叫んでも、ルイは前言を撤回しない。

「……………どう、して」

嗚咽と共に零れるのはそんな言葉だけだった。どうして、どうしてと、ただそれだけを繰り返す。

リノルアースをただ支えていただけのルイの腕に、力が籠もった。強く抱きしめられ　リノルアースは息を呑む。枯れることを知らないように流れていた涙が一瞬止まった。

「あなたが、好きだからです」

耳元で聞こえるその声を、幻聴ではないかとリノルアースは思う。ルイが自分に好意を持っていることくらい、ずっと前から分かっていた。気づかないほど鈍感じゃない。けれど、どうしてかずつと聞きたかったその言葉を聞いた時には、嘘だと思った。

「我儘で、お転婆で、強がりで、実はブラコンで、寂しがり屋なりノルアース様が好きです。他の誰よりも」

何度か好きだと繰り返され、リノルアースはようやくこれが現実なのだと理解する。

そして同時に、どうして、という問いがまた浮かんだ。

「でも俺はただの騎士で、あなたに釣り合うものなんて何も持っていない。拳句、この思いは姉さんやアドル様の障害にもなりかねない。何か問題が起きて俺はあなたや姉さんに振り回されてるばかりだ」
何の力にもならない、とルイが自嘲気味に思いを吐露する。

リノルアースはいつもの雄弁なんて忘れてしまったかのように、ただルイに抱きしめられていた。寒い外気が、まるで寒くない。互いのぬくもりだけでこんなにも暖かいのだ。

「だから俺は力を手に入れます。俺がアヴィラの王子になれば、事は随分と楽に運ぶでしょうから」

「そんな、こと」

必要ない、私がどうかしてみせるから。

そう続けようとしたが、それはルイの言葉に遮られた。

「たまには、俺にもかっこつけさせてください」

苦笑しながら、ルイはそつとリノルアースを解放する。涙なんていつの間にかに止まっていた。それなのにルイの手が優しく頬を撫でる。

「俺はいつでもここにいても、ルイ・バウアーです。いつまでも、あなたの騎士です。長い人生の中の、ほんの少しの時間、側から離れるだけです」

だから、大丈夫です。

そう言いながら微笑むルイを見つめて、リノルアースもいつもの調子が戻ってきた。

「……………五年、いえ、三年しか待たないわ。分かってるでしょ？
いつまでもあんたを待つてるなんて出来ないんからね！？ こちらとら大陸中から求婚が来るんだから」

心なしかリノルアースが頬を赤く染めて、続ける。

ルイはきょとんとした顔で、ただリノルアースの言葉を待った。

「それまでに、私を迎えに来なさい」

その言葉の意味を、分からないわけがない。

ルイは頬の筋肉が緩むのを感じながら、精一杯真剣な表情を保つ。

「はい。我が姫」

必ず、あなたのもとに帰ります。

そう答えたルイを、リノルアースは満足そうに見つめる。
寒い風に肩を震わせ、二人で部屋に戻りながら、ルイは「それにしても」と突然切り出した。

あなた達兄妹は、人をじらすのが好きですね。

32：あなたが、好きだからです（後書き）

さて今回はどこのセリフをサブタイトルにしようかなー……（いつもその話の中からセリフをひっぱってきてつけるのですが）と悩んだところで、決定には数秒しかかかりませんでしたね。だって、アレ以外のどこに名セリフがつ！？

とまあ最近ルイを鼻屑にしてる作者です。

個人的には同じヘタレのアドルより良い男なんじゃないかなあ、と（笑）

雑談失礼しました。スルーして大丈夫です。

ご意見、ご感想、誤字脱字等の報告ありましたらお願いいたします。特に誤字脱字は多々あるかと……（汗）読み返しているんですけど、なかなか気づかないもので。すみません。

33：行かないください

リノルアースを追いかけて、ルイが走り去るのを見送った四人の間には、妙な沈黙が漂う。

誰も呼んで来いと言わないのはやはり、誰も馬に蹴られたくはないからだろう。

「……………シェリスネイア様、紅茶のおかわりはいかがですか？」
何とも言えない沈黙の中で、レイが静かに問いかける。

「……け、けっこうですわ。もう充分」

色々なことでお腹がいっぱいだわ、とシェリスネイアはカップを置きながら答える。

ウィルザードはどこか居心地悪そうにきよろきよろしているし、アドルバードにいたってはリノルアースを追いかける役をルイに譲ったのが果たして正解だったのか否かぶつぶつと自問自答している。
「ていうかいくらなんでも遅すぎだしあいつまさかりノルに手え出してないだろうなんなことしてたら問答無用でぶっ飛ばしてやる……」

……
最近はまだだと思っていたが、アドルバードの兄馬鹿ぶりはやはり尋常じゃなかったな、とレイは冷静に判断を下す。久しぶりにあんなに弱ったりリノルアースを見たからかもしれない。

「では、そろそろ解散しましょう。待っていても戻ってこないと思いますから」

そうだな、とウィルザードは同意して、立ち上がる。

シェリスネイアも頷いたので、レイはウィルザードにシェリスネイアを送ってくれるように頼んだ。分かったとやけにあっさり承諾する。

「……なんていうか、俺はここに呼ばれた理由はあるのか？」

正直完璧に部外者なんだが、とウィルザードが頬を掻きながらレイに問う。

「どうせ後で知られることでしょうから、初めからお話しておく方が面倒がないでしょう？　色々のご協力もいただきましたし、アドル様やリノル様のご親戚でもありますし」

「まあ、そっちの都合が悪くないならどうでもいいけど。口は軽くないから安心しろと後ろの馬鹿に言っといてくれ」

話ができるような状況じゃないみたいだしな、とウィルザードが笑う。

「確かにお伝えします」

レイがそう答えて二人を見送り、扉をゆっくりと閉めて振り返る。目線の先には　かなり情けない姿の主が一人。

「　戻ってこないってまさかあいつ本気でリノルに手え出してたりして！？」

レイのセリフが脳内に届くまでに時間がかかったのだろう。今更にアドルバードが過剰反応を示して、レイは呆れたようにため息を吐き出す。

「そんな甲斐性はないと何度言えば分かるんですか。今行けばリノル様に恨まれますよ」

「妹の窮地を救って何が悪い！？」

「窮地に陥ってもいけませんから。今が良いところなんですから、大人しくしててください」

「大人しくなんてしてられるか！　あいつを一発殴る！！」

「純粹に力勝負なら負けますよ。アドル様」

あれでも騎士ですからね、とあくまで冷静にレイは切り返す。

「まだ早い！　やっぱリリノルに愛だの恋だのはまだ早すぎる！！」

「どの口が言うんですか、それは」

今にも走り出しそうなアドルバードの腕を掴みながら、レイが冷静に止める。

じたばたと暴れる主を見つめ、どう止めたものか、と思案し

「 アドル様」

なんだ、とレイに呼ばれば律儀に答えたアドルバードが悪かった。

ふわりと、甘い香りが鼻腔をくすぐる。花に囲まれているみたいだとアドルバードは考え　　レイに後ろから抱きしめられていることに、数秒後に気づく。

「行かないください」

それは惚れた女の口から吐かれればかなりの威力を持つ兵器になるのだと、アドルバードはこの場を持つて思い知った。

「レレレレ、レイ!？」

崩壊寸前までに脈打つ心臓の音が頭にまで響く。ここまで密着することがいまだかつてあっただろうか。しかも彼女の方から。

いやしかしセリフはともかく立ち位置は逆じゃないかとアドルバードは思うが　　レイよりも身長の高いアドルバードが同じことをしても、これほどまでに絵にはならないだろう。

ああごめんリノル。おまえの危機も大事だけとお兄ちゃんとしてはこれはかなり見逃せないチャンスなんですけど。

心の中で可愛い妹に懺悔する。

「 落ち着きました?」

その声と共に、吐息が耳にかかる。

アドルバードは顔だけではなく首筋まで真っ赤に染まり、こくこくと頷く。

その反応を確認して、そうですか、とレイはゆっくりと身体を離す。ぬくもりが離れていくことを惜しく感じながら、アドルバードは首を傾げた。

「……もしかして、これは、罨ですか？」

何故か敬語で、アドルバードは振り返りながらレイに問いかける。
「罨とは失礼ですね。……でも、頭は冷えたでしょう？」

いや別の理由で頭に血が上ってますけど！？

レイの微笑に、アドルバードは悲しくなったらいいのか怒ったらしいのか。

「……おまえ、俺以外にこんなことするなよ？」

「するわけがないでしょう」

そうやって即答するところも男としてはかなりくるんですけどね。
はあ、とアドルバードはため息を吐き出して、肩を落とす。レイの行動は天然なのか計算なのかさっぱり分からない。

「あー……リノルは大丈夫かな？」

意識を別に移そうと、とりあえずアドルバードは話を変える。

「レイが追いかけてきたから、あの二人なりの妥協点を見つけてしょう」

「……妥協、ねえ」

あの我儘な妹が折れるだろうかと不安になるのは仕方ないことだろう。

「もう子供ではないんですから、リノル様も理解していると思いますよ？」

苦笑しながらレイは不安そうなアドルバードに言う。

「そうだろうけど　ごめん、レイ。俺は、個人的にリノルの味方をしたかった」

レイ本人から頼まれたから、仕方なく協力したけど、とアドルバードが俯く。

リノルアースは我儘で、自分勝手だけど　本当に欲しいものを欲しいと言えない、人間だったから。それを今まで共に育ってきたアドルバードが誰よりも一番よく知っていたから。

「分かってますよ……分かっていたけど、私は味方になれなかった

んです」

少しだけ悲しそうにレイが眩き、アドルバードの肩に額を押し付ける。アドルバードはその肩を抱きしめようかと手を伸ばしかけ止めた。

「だから、あなたはそれ良いんです。あなたはリノル様に優しくしてください」

私はたぶん、無条件にはそれができないから。

そう辛そうに眩くレイが愛しくてたまらなかった。

彼女がアドルバード以外のものを 例えばそれがリノルアースでも 犠牲にして守ろうとするのは、たぶんアドルバードとの繋がりだから。

そして今、レイは繋がりに以上のものも手に入れようとしてくれているから。

それを求めたのはアドルバードだ。彼女が頑なに引いていた一線を無理やりに越えたのは自分だ。

「おまえは悪くない」

そつと、レイの髪を撫でる。

さらさらとした触り心地に、少しだけ目を細める。

「俺が悪いんだよ、全部」

誰よりも我儘なのは 他ならぬ自分だ。

34：女は須らく強い生き物

シェリスネイアを部屋まで送り届けることに異論はない。

彼女と友好的な関係でないことは確かだが、それを理由にシェリスネイアをないがしろにしたことは一度もないとウィルザードは断言できた。

だから、この沈黙はキツイ。

アドルバードの部屋から出て、二人でただ黙々と歩いているだけだが、空気が明らかに重い。シェリスネイアは床を見つめたまま顔をあげないし、女性との付き合いが苦手なウィルザードでは声をかけていいのかさえ判断できずにいる。

いつもの威勢はどこにいった。

リノルアースにしろ、シェリスネイアにしろ、いつもの覇気がないところらの調子が狂わされる。

「……いったい何が不満だっというんだ？お姫様」

気を遣うことができる力量もないので、ウィルザードは素直に問い掛けた。

シェリスネイアの黒い瞳が揺れて、ウィルザードを映した。

「……あなたは本当に嫌な男ね。ここはそつとしておいてくださるところでしょう？」

ああ、やはりそちらが正解か　と内心では苦笑しつつ、ウィルザードはシェリスネイアを見つめた。

「俺にそんなこと期待されても無駄ですよ。言いませんでしたか？」

俺はあんたに好かれないと思って行動しているわけじゃありませんから」

そこらへんの男と違ってね、と答えるとシェリスネイアは微かに笑う。

「そうでしたわ。あなたは例外ですものね」

それはどういう意味だと一瞬間いたたくなり、ウィルザードは口を閉ざした。

こんなわがままなお姫様苦手なはずだろう？　ともう一人の自分に問い掛ける。

「不満は、ないのよ」

シェリスネイアの声が耳まで届く。

「ただ、自己嫌悪で身動きがとれなくなっているだけで」

「自己嫌悪？」

ウィルザードが繰り返す。その言葉を他人の声で聞いてやつと、シェリスネイアは自分の中の感情が整理できそうだった。

「……汚くて、本当に嫌になる」

シェリスネイアの静かな呟きは、確かにウィルザードの耳にも届いた。

彼女としては、ウィルザードに愚痴を零しているつもりでもないのだろ。ただ言葉にして、誰かに聞いてもらいたいただけなのだ。

「自分の為に、他人から大切なものを奪いとるなんて野蛮人のすることだわ。それでも前言を撤回するつもりもないのよ。だってリノルは私がずっと欲しかったものをたくさん持っているんだもの」

友人だと思う。気の合う人と巡り会えたことに感謝している。けれど同時に妬ましい。境遇は似ているのに、環境はまるで違う。

「私だって、誰かに守って欲しかった。誰かに側にいて支えてもらいたかった。アヴィラなんて華々しいのは外面だけよ。中身はもう腐敗して、人間の汚い部分しか見えない。そしてその中には私も含まれているのよ」

ウィルザードはただ黙ってシェリスネイアの言葉を聞いていた。

彼女は返事も、相槌も求めていないはずだ。

ただ傍らに、当たり前のように誰かに居て欲しいだけなのだと。

間違えて、いたかもなあ。

自分の中のシェリスネイアのイメージを、否定したくなる。

目の前にいるこの少女はただのか弱い、守ってあげたくなるようなお姫様だ。

ほんの少し前から垣間見せる彼女の弱い部分に、目を逸らせずにいた自分は確かにいた。放っておけないと、そう思っていたことも事実だ。

「あんな人間にはなりたくない、ずっとそう思っていたはずなのに、結局私は骨の髄までアヴィラに染まっているんだわ」

痛々しい声に、思わず手が動いた。

細い、力を込めれば折れてしまいそうなほどに細い腕をに触れる。一瞬だけ、シェリスネイアの身体がびくりと震えた。

「月並みな言葉だし、あんたは俺に慰めて欲しいなんて考えてないんだろうけどな。本当に性根が腐っている人間は、自分のやったことに対して後悔はしない。そして苦しむこともしない」

ウィルザードを見上げてきたシェリスネイアの黒い瞳濡れていた。その瞳から一滴でも涙を零さないのは、たぶん彼女の意地なんだろう。

その意地を、崩したいと思ってしまった。

「つまらないプライドなら捨てた方が楽だぞ。泣ける時には泣いちゃ」

彼女の腕を捕らえた手は離さず、空いた手で頬を撫でた。

かぁ、と赤くなつたその顔を見て、失敗したかなとウィルザードが内心苦笑する。これは照れたのではなく、どちらかといえば怒り

で頬を染めている。

「あ、あ、あ、あなたなどには死んでも泣き顔なんて見せませんっ！ ええ、絶対にです！」

屈辱以外の何ものでもありませんわ！」

可愛くない女に逆戻りだ。やっぱり女は分からない。

はあ、とウィルザードがため息を零し、シェリスネアの腕を放す。

「人が親切にしてやってるっていうのに。可愛げのないお姫様ですねホント」

「あなたからの親切なんていらないと言っているんです！」

「はいはい。分かってますよ」

まあ、落ち込んでいるよりは怒っている方がいい。その方がずっと彼女らしい。

なおも怒りながらウィルザードに怒鳴り散らすシェリスネアを軽くあしらって、ウィルザードは頬が緩むのを感じた。

「リノルアースは思っているほど弱くはないですよ。あなたが心配することでもない。すぐに浮上します」

シェリスネアの部屋について、ウィルザードが別れ際にそう残す。

普段通りの丁寧な言葉遣いに、シェリスネアは少しだけ胸に痛みを覚えた。「あんた」から「あなた」に。大きな違いなどそれだけなのに。

「女は須らく強い生き物ですけど 恋は人を弱くさせるものでしてよ？」

リノルアースはあの騎士に 自分の兄かもしれない人に、恋をしている。そんなことはあの場にいた誰もがわかった。

「そうですか？ 俺の説としては逆ですけど？」

ウィルザードが笑いながら振り返る。

その笑みは確信を持ってそれを告げた。

「女は恋をすると強くなる。男なんて敵わないくらいにね」

男はもともと、女に勝てないように出来ているのかもしれませんがけどね、とウエルザードは苦笑する。

「なら私も 恋をすれば強くなれるかしら？」

くす、と微笑みながらシェリスネイアは問う。ウィルザードは少し困ったような顔をして、そうでしょうね、と呟いた。

さすがにもう誤魔化すつもりはない。
認めよう。認めたくはないけれども。

落とされた。もう目を逸らせないくらいに。

35：だから、たぶん特別になったのよ？

部屋に着くなり、リノルアースはいつもと変わらず、お茶を淹れて、とルイに命じた。

照れ隠しだろうか　なんて考えて、ルイは思わず頬の筋肉が緩む。「あとで、アドル様のところへもう一度行って来ますね。心配されているでしょうから」

茶葉を選びながら、ルイがそう言つと、リノルアースが目丸くしてじつと見ていた。

「？　何か？」

「……アドルもてつきり私を探してるんだと思った。部屋で大人しくしてるの？」

ああ、さすがに双子だなと苦笑しつつ、ルイが説明する。

「俺より先に追いかけてようとしてましたけど、姉さんに止められました」

「それで、あなたはレイに叱られて私を追ってきたってこと？　リノルアースがじろりとルイを睨みながら問う。反論の余地もない事实に、ルイは思わず黙り込んだ。

「このヘタレ」

ふん、とリノルアースがそっぽを向いて吐き捨てる。

「……すみません」

「そんなんじやアヴィラでやっていけないわよ？　もともと王族なんて汚い生き物だらけだし。あれだけの大国ならなおさら」

行くの止めとけば？　と自然な流れでリノルアースがまだ引き止めてくれることが嬉しくて、ルイはにやける顔を懸命に制した。

「それでも、行きますよ。大丈夫です。精神は周囲の人達から鍛え上げられてますから」

「……どおいう意味かしら？　それ」

「いえ、その。リノル様のことではなくてですね」

リノルアースに詰め寄られて、思わずルイは後退った。

「どうして私を好きになったのか教えてくれたら許してあげる」

「……今の流れでどうしてそうなるんですか」

「私が聞きたいから」

きつぱりとした、潔い答えにルイも抵抗できない。少し前まであんなにしおらしくて可愛かったのになあ、と泣きたくなった。

「……そもそも俺は好きだなんて言われてないのにこれまで追及されるのって少し不公平って気がしないわけでも」

「何か、言った？」

「イイエ。何も」

ぶつぶつと文句を呟くとリノルアースに睨まれたので、ルイは素直に降参する。長年生きてきて身に着けた技能とも言えよう。

「……ルイって、私のこと褒めないわよねえ」

無言で抵抗しようとしているルイをじいっと穴が開くほどに見つめながら、リノルアースがぼつりと呟く。

「何ですか突然」

ルイが蒸らした紅茶をカップに注ぎ、リノルアースに差し出しながら問う。

「だから。あんたって私のこと褒めないのよ、いつもいつも。口説かれたこともないし。初めて会った時も」

「騎士として仕えるのにどうして口説く必要があるんですか」

口説きたいなと思ったことはあっても、あくまで主従関係なのだからと我慢してきたっていうのに。

「……あんたの前にいた騎士連中は皆口説いてきたけど」

「はあああああっ!？」

寝耳に水なりノルアースの発言にルイはポットを落としそうになった。

小さな頃はレイが二人の警護を引き受けてきたが、二年前　そ

ろそろ三年になるか、アドルバードとレイが剣の誓いを交わしてから、リノルアースを守る騎士が必要になったのだ。今でこそルイで定着しているが　当時入れ替わりは激しかった。

「綺麗だなんて言葉は当たり前。どいつもこいつも隙あらばって感じで」

まあ結局は貴族の子息なんだから、淡い夢を見てたのねー、なんてリノルアースがまるで他人事のように語る。

「そ、そ、そんな連中を騎士だなんて思わないでくださいっ！　騎士道精神をどこかに置いてきたアホです！」

懸命に騎士団の弁護をしながらルイは頭痛で眩暈がしてきた。

「分かってるわよ。だから全員一週間もせずにクビにしてきたんだもの」

ああ、何度も入れ替わっていたのはそういう理由ですか、とルイが納得する。

「でもルイは、会った時に褒めることもなかったし、改めて専属の騎士になる時も普通に挨拶したのよねえ」

初めて会った時は見惚れてて気の利いたことを言えなかったんですよ。

なんて言ったらどうするだろう。

苦笑しながらルイはリノルアースの話に耳を傾ける。

「だから、たぶん特別になったのよ？」

ともすれば聞き逃してしまいそう　そんな言葉だった。

「え、と。はい？」

聞き間違いか何かだろうと、ルイが思わず聞き返すが　リノルアースは顔を赤くしてルイから顔を逸らす。

「別に、なんでもない」

その様子にどうやら聞き間違いではないようだな、と嬉しくなつて、ルイは微笑む。

ほんの少し身を乗り出して　リノルアースの額にそつと、口づけた。

「なっ」

リノルアースの顔がもつと赤くなって、ルイを睨みつける。照れ隠しだと分かりきったそれに、ルイはもう怯えない。

くすくす、と笑いながらルイは立ち上がる。

「アドル様のところへ行つて来ますね」

「つつつ勝手にすればっ!!」

リノルアースの怒鳴り声にも思わず頬が緩み、にやけた表情のままで廊下を歩く。冷たい廊下の風は適度にルイの頭を冷やしてくれたが、顔の筋肉は緩んだままだ。

そのにやけた顔が戻らないまま、リノルアースの無事を伝える為にアドルバードの部屋に入ると。

「てつつつめえ！　リノルに手え出してないだろうなああっ！？」

リノルアースの実の兄からの鉄拳が待ち構えていた。

背後に何か別のものが見える気がするんですが。

冷や汗が背を伝い、ルイは思わず身体を震わせた。リノルアースも連れてくれば良かったと後悔してももう遅い。

「アアアアアドル様！？　誤解です！　何もないです！　むしろアドル様だつて姉さんに手え出してるくせにそこは棚上げですか！？」

「それはそれ！　これはこれだろうが!!」

「横暴でしょう!？」

「横暴結構！　シスコンだと笑えば良い!!」

「言ってること滅茶苦茶ですけど!？」

助けを求めて姉の姿を探すが、目が合っても諦めると合図されるだけだった。

これも予想できたことか、とルイは諦めて三発だけは義兄の鉄拳を受け入れた。

それ以後はそれなりにやり返したことは言うまでもない。

36：ギャップか！？ ギャップのせいか！？

「……レイ。ほんつとうに着ないのか？」

「着ません」

ルイがアヴィラへ行くことを決意してから、三日が経った。

各国から集まってきた姫君やら王子やらの滞在も後半になり、後は面倒なパーティが盛りだくさんだ。

「ぜったいに？」

「絶対にです」

「……どうしても、着ない？」

「着ません」

「どーしても着ない？」

「着ません。しつこいですよ、アドル様」

レイがいささかうんざりしたように答える。

ふて腐れたようなアドルバードの手には、青いドレスが握られていた。数日後にあるパーティでレイに着てもらおうと思ったのだ。

いつもの格好だつてそれはそれでいいんだけど、やっぱりたまには綺麗に着飾った姿が見たいと思うのは当然の心理なわけで。

「せっかく髪も伸びてきたんだしいいだろ少しくらい！ 今回だつて結構俺頑張ってるんだからご褒美を……」

最後の抵抗とまでにアドルバードが騒ぐと、レイが少し冷たい目で睨んできた。

「アドル様？ 大半の姫君は私が男だと思っていらっしゃるですよ？ それであなたから遠ざけたというのに、ここで女とバラしたら意味がなくなるでしょう？」

う、とアドルも言葉に詰まって肩を落とす。

下手にここで躓いて、どこかの国から縁談を持ち込まれても困るのはアドルバードだ。そうならない為の予防線でもあったのだから、ここでアドルバードが喜々としてレイを女装させるわけにはいかな

い。

「それに今回はあまりアドル様は活躍されていない気もしますが、功労賞はルイのものでしようし」

リノル様には特別賞をあげても良い気がします。そう続いた言葉にアドルバードはますます肩を落とす。それはつまり、俺は褒めるような働きをしてないと……？

「ご褒美が欲しいなら、これから頑張ってください」

くす、と笑う声が聞こえて、アドルバードは猛スピードでレイを見るが、時既に遅し。数少ない笑顔だったろうになあ、と涙を堪える。

「ご褒美欲しさに頑張るのはレイの思う壺だと分かっているのに、結局釣られてしまっただろうなあ、とアドルバードはため息を零す。

「
で。いつもならそろそろ誰かしらつつこみが入るはずなんだが」

いつもなら部屋にいる誰かが早々につつこんでくるべきところで、今日はあまりにも静か過ぎる。

リノルアースやルイは珍しくないし、そもそもシェリスネイアはアドルバードの部屋には用がない限りやってこない。結果、ここにいるのは暇なウィルザードだけなのだ。

「……ウィル。何があっただ」

ただ静かに黙り込んでぼんやりしているウィルザードを見て、アドルバードが若干怯えたように問いかける。

昔から付き合いがあるが、こんな様子を見たのは一体何年ぶりか。それこそリノルアースに完膚なきまでに振られた日以来だろうか。無反応のウィルザードを見て、困り果てたアドルバードはレイを振り返り見る。

レイもなす術がないようで、ただアドルバードを見つめ返すだけだ。

部屋には妙な沈黙が漂い、アドルバードも自分の部屋だということに居心地悪く感じる。

「……あのさ、何か悩んでるなら微力ながら協力するぞ？」

ぽん、とウィルザードの肩を叩きながらアドルバードが呟く。

「ん、で」

ウィルザードの口から零れた言葉を聞き取れずに、アドルバードは「ん？」と言いながら耳を寄せる。

「なんつつつつつであんな女なんだよっ！！ 学習能力がないのか俺は！？ 馬鹿なのか！？ 馬鹿なんだな俺！！」

突然叫んだウィルザードの声に鼓膜が振るえアドルバードは眩暈を起こす。

倒れそうになるアドルバードを慌ててレイが助け、二人はわなわなと震えるウィルザードをただ見つめた。

「ギャップか！？ ギャップのせいか！？ 確かにまあちよつと可愛いなあとかは思ってしまったけれども！！ 落ち着け俺！ 本性は魔性の女に違いはない！！」

ウィルザードの取り乱しように呆氣にとられながらも、言葉の端々からウィルザードの身に起きたことを推測し、アドルバードなりに答えを出す。

「つまりおまえ、誰かに惚れたのか？」

アドルバードの指摘に、ウィルザードが奇声を上げる。

「そんでアレだろ？ おまえが取り乱すほどの相手で、しかも最近知り合ったのっていつたらシェ……」

「死にたくなかったら頼むから黙れ　　！！」

物凄い速さでアドルバードはウィルザードに口を塞がれる。

「つまりはシェリスネイア様に惹かれてしまっている自分を肯定できずにいるんですね？」

聞きたくない言葉を聞かないようにとアドルバードの口を塞いだものの、レイからあつさりと指摘されてウィルザードはなおも奇声を上げる。

暴れだす前にウィルザードから脱出したアドルバードは乱れた服を直しながらため息を零す。

「残念なことにそういう手の話は苦手なんだよなあ」

人様の恋愛ごとに口だしするのはどうも、と頬を掻きながら取り乱すウィルザードを眺める。

「……だったらルイも放っておいてくれませんか」

レイがささやかにそう言うと、アドルバードは目の色を変えて「それとこれは別！」と言い切った。結局この間は三発までルイが大入しく受け止めて、それ以後は殴りあいになっていた。收拾がつかずにレイが止めに入っただけの言うまでもない。

「とりあえずウィルの話だ、ウィルの！」

と、アドルバードが話を戻そうとしたその時。

「そういう話なら私に任せたまえ！！」

バンッ！　と大きな音をたてて扉が開け放たれる。

馬鹿馬鹿しいくらいに格好つけたポーズで扉の向こうに立っている人物に、不幸な事にアドルバードが覚えがあった。むしろそんな知り合い一人しかない。

「なんっでおまえがここにいる！」

礼儀云々はもはや忘れ去ってアドルバードが突如現れた人物を指さす。

浅黒い肌に、真つ黒な髪。南国の人間の特徴を持った男は、いつもの南国の衣装ではなく、北国用にきちんと防寒された服を着ている。

「呼んだ覚えはないぞ！ アルシザス王！！」

アルシザス　つい数ヶ月前に、アドルバードがリノルアースに扮して訪問した、記念すべき第一国目の国だ。

早々に男だとバレたものの、その後も女装してやり過ごすことを条件に騙していたことを許されたが、結果リノルアース姫として誘拐されるわ、国王の思惑絡んだ国の一大事に巻き込まれるわで散々だった。

結果、弱小国のハウゼンランドでは考えられないほどの大国であるアルシザスとの同盟を結ぶことができたわけだが。

「なんだ。カルヴァと、名前で呼んでくれてかまわないぞ？　以前のように」

「うるさい！　なんで国王のおまえがここにいる！？」

国を放ってこんな所までのこのこと　王子であるアドルバードとは責任の重さもあまりにも違う。

「必要だから来たまでだよ。同盟の件もまだ話し合いをすべきところは多々ある。それに　」

もったいぶったようなカルヴァの言葉にアドルバードは久しぶりに苛立ちを感じた。

この男と話していると体力が消耗するのはいつものことだ。

「アヴィランテの皇子が来るのだろう？」

それは利用しなければならぬからね。

その言葉はアドルバードの耳に届かない。

アヴィランテ。

最近では聞きなれたその国名に、アドルバードは不安を感じずにはいられなかった。

37：強く、なりたい……

耳を疑った。

その次には悪い冗談だろうという言葉が浮かんだが、目の前のカルヴァのらしくない真剣な顔を見たら何も言えなくなった。

何だっけ言うんだ、一体。

そんな呟きが零れ、アドルバードは自嘲的に笑った。

元来、アヴィランテなんて大国が興味を持つような国ではないのだ、ハウゼンランドという国は。

それが最近ではたくさん国から注目されてしまっている。大陸の華とも言えるリノルアースという存在、ならびにアドルバードの手腕によって。

野に咲く花のような国から、大輪の華が生まれれば確かに誰もが驚くだろう。つまりはそういうことなのだ。アドルバードもリノルアースも、小さな国で終わるような器ではない。

「ま、うちの優秀な諜報部隊だからこそ掴めた情報だがね。実際に国として話が出るのはもう少し後だろう」

カルヴァの言葉に一瞬だけ安堵するとともに、アドルバードは立ち上がる。

「……父上のところへ上げる。俺一人が抱えるにはあまりにもデカすぎるからな。その上で俺に一任されるならやるしかないけど」

父であるハウゼンランド王のいる執務室へ向かおうとするアドルバードの後ろを、当然のようにレイがついて行く。

「こらこら。客を置いていくのかね。接待しなさい。賓客だぞ？」

「そこで潰れている奴に相手してもらえ。好きなんだろう？ 恋愛話」アドルバードは沈没しているウィルザードを指差す。

「まあ、好きだがね。君のところの話にかなり興味が」

「これといって変化なし。以上。いくぞ、レイ」

はい、とレイが小さく答え、二人はさっさと部屋から出て行く。

「……扱いがひどくないかね？」

カルヴァの呟きを聞いている者はいない。ウィルザードを見下ろしたまま、カルヴァはため息を吐き出してソファに深く身を委ねた。

何なんだ何なんだ何なんだ何なんだ何なんだっ！！

怒りを吐き出したい衝動を必死で堪え、アドルバードは早足で執務室へと向かう。

どこで、何を間違えたというのか。ハウゼンランドは平和で平和としか言いようのない国で、小さな諍いこそあれ、大国がやって来て得るものなんて何一つない。こんな小国のパーティに関わっても得はない。ずっとそう思っていたはずだ。

平穏な清流だった国が濁流へと変わっていく。

アドルバードは唇をかみ締め、俯いたまま歩みは緩めない。

斜め後ろからその様子を見ていたレイの瞳が不安げに揺れた。

握り締められたアドルバードの手のひらからは今にも血が流れてきそう。

それをレイが黙って見ていられるわけがなかった。

「アドルバード様」

冷たい空気。

肌に触れる空気そのものが刃のように鋭い。

それはもう、条件反射だ。

アドルバードは迷うことなく腰の剣を抜いていた。

金属がぶつかり合う音が廊下に響き、剣を交えるその人を見てアドルバードは息を呑んだ。

「……………レイ」

その人の名前を呟くアドルバードの唇から漏れた息は安堵か、脱力か。見つめる瞳は動揺していて、レイの青い瞳を直視できなかった。

「そこまで過敏に殺気に反応するのは、どうかと思いますよ。ハウゼンランドにあなたの敵はいないでしょう」

殺気、と言われて納得する。そんな殺伐としたものにしか反応できないほど、アドルバードは精神的に追い詰められていたのだろう。

「今は、それも断言できないだろ」

アドルバードはゆっくりと剣を鞘に収め、レイの顔を見ることができずに下を睨むように見つめる。

そんなアドルバードの頬を、温かいレイの手のひらが包み込む。

「いたとしても、あなたが剣を抜く必要はない。私がすべて斬ります」

間近のレイの顔は相変わらず美しいとしか言えない。アドルバード以上に血を浴びてきたというのに、彼女には一切血の穢れが見つかからない。

何も変わらない。彼女は。

それだというのに、自分は？

彼女に誇れるだけの人間であろうと。

そう努力してきたけれど。

「 レイ」

こういう時に結局、彼女に寄りかかるのだ。
そして彼女にまた手を汚させるのだ。

情けない。

「強く、なりたい……」

レイが自分の分まで汚れずに済むように。彼女が心を押し殺す必要のないように。

大切なこの国が、人が、家族が、傷つくことのないように。

このままでいけば、ハウゼンランドは豊かになるかもしれない。
大国へと変わるかもしれない。けれどそれは 戦いが増えるということで。

それはつまり、アドルバードの周囲の人々が戦いに巻き込まれていくということだ。 。

アヴィランテの皇子がやってくる。

それはアドルバードにとってそういう世界がハウゼンランドに迫っていることの象徴に思えた。

「……何がそんなに不安なんですか？」

優しい声がアドルバードの心に染み込。

頬に触れる手も、見つめる青い瞳にあるのも、ただただ深い優しさだけだ。

「恐れる前に、状況の確認が先でしょう？ 万が一最悪の展開が待っているとしても、今からなら充分に策が練れます。その為にアルシザス王はいらっしゃったんだと思いましたか？」

優しさの中に、諭すような雰囲気滲む。甘えるな。恐れるな。自分が何を為すべきかを考えろ、と。

殴られるより利くな。

アドルバードは苦笑してレイの手に自分のそれを重ねた。

「……悪かった。もう大丈夫だ」

そう言っただルバードが微笑むと、温かな手が離れていく。

「守るよ。何もかも、俺が大切だと思うものはすべて」

この腕は相変わらず非力で、自分の身を守ることすら危ういけれど。守ろうとすることで動く何かがあるはずだ。

「共にあります」

レイがはっとするほど綺麗な微笑みを浮かべて、そう言ってくれることが、アドルバードにとってこんなにも心強い。

「行くぞ」

返事なんて確認せずに、アドルバードは再び歩き始める。随分と重荷が軽くなった。

はい、と凜とした優しい声が聞こえるのはすぐだ。その声が胸に熱く響く。

自分を確かに信頼してくれる人がいるということが、こんなにも心強い。

38：うちのお姫様に手え出したら極刑だよ？

ハウゼンランド王は温和なことで知られている。

しかしそれだけでは王は務まらないということも十分に理解している人だった。

その顔を知っているのは恐らく 伴侶である王妃、側近、そして後継者であるアドルバードだけであろう。

執務室の大きな机を前に書類とにらみ合っている父親は、王としての威厳を確かに感じさせるだけの何かがある。王座に座ればそれはなおさらだ。

「失礼します、父上」

そう断って、返事を待たずにアドルバードは部屋に入った。国王はちらりとアドルバードを見た後、すぐにまた書類に目を戻した。

「ご報告があります。そのまま聞きください」

王位後継者として接する時は少なくとも親子として会話しない。

アドルバードも『国王』の前では駒にすぎない。

国王はアドルバードを一瞥し、目が合ったことを合図にアドルバードはカルヴァから聞いたことを一つ漏らさず報告した。

「そうか」

国王の返事はそれだけで、アドルバードも察していたのだろうか、大して驚かない国王に問いかける。

「……父上は、知っていらっしやったんですか」

やはり、という言葉はあえて言うことを避けた。

国王 父は、にやりと笑ってアドルバードと向き直る。ずっと

手にしていた書類を机の山の一つへと戻した。

「知らないと思うのかい？ ハウゼンランド王であるこの私が」
ぎし、と父の座る質の良い椅子が軋む。

アドルバードはため息を吐き出して、いいえ、と答える。

「うちの影も優秀なのでね。三日前にはその情報は掴んでいたよ。うちのような国において情報は兵力や財力よりも重要な力だからね」
影、とはハウゼンランドの諜報部隊のことだ。国王のみがその隊を動かすことができる。アドルバードですらその諜報員を目にしたことはない。

情報は力。小国はいくら努力しても兵力、財力は強くなれない。強くなった時は、民に無理を強いている時だけだ。ならばどうやって大陸の中で生き残るか。

各国の内情を知ること。

「では、ルイがアヴィランテの王子かもしれないということとは？」

「随分前にデイクから報告があった」

「……知っていて、なぜ放置していたんです？」

一歩誤ればハウゼンランドを潰しかねない大きな秘密を。

アドルバードは父親を睨みつける。国王の選択として、それは正しかったのか アドルバードには判断できない。

「あくまで可能性に過ぎないからだよ。アドルバード、もしハウゼンランドがアヴィランテに対して『王子を保護しています』と言ったところで信用されると思うかね？」

「それは」

無理があるだろう。

むしろアヴィランテの王が遠い北国の小国の名前を覚えているか
さえ怪しい。

「アヴィランテの王族がハウゼンランドにやって来るなんてあの頃は想像も出来なかったことだ。おまえの功績だと、ここは手放して

褒めてやれるだろうな」

その一瞬だけ、優しい父親の目になる。

しかしながら今回の婚約者騒動にしろ、以前のアルシザス訪問にしろ 本当にこの父親は息子に試練を与えるのが好きらしい。

「 やって来るのは第二皇子のヘルダム様らしい。どうせおまへの為に開かれるパーティだ。おまえが全て取り仕切るのが筋だろう」
「 言うと思いました」

はあ、とため息を隠そうともせずにアドルバードは答える。
やって来る人間が誰か教えてもらえただけでも良しとすべきだろう。

「 頑張るんだよ。私も早くアデライードと隠居したいのでね」

ひらひらと手を振ってそうにこやかに笑うのは果たして父親か国王か。王妃の名前を出したあたり父親の面が強いようだが。

「 せめて俺が成人するまで我慢してください」

「 成人しても所帯はもてそうにないなあ。レイと一体何センチ差があるんだ？」

アドルバードの後ろで一言も話さずに待機していたレイに目を向けて父親が問う。アドルバードは姿勢を崩して躓いた。

「 ちよっ……！ なんでソレ知ってるだよ！？」

思わず敬語も忘れてアドルバードが父親に詰め寄る。

「 私の父が話した以外には考えられません」

「 正確にはディークがアデルに、そしてアデルが私にという伝言ゲーム式にだね」

レイと父親の二人に同時に答えられてアドルバードはがっくりと力をなくす。もう王妃を愛称で呼んでいるあたり父親としての顔が高い。むしろ父親として息子をからかっている。

「 別に小柄な家系ではないんだけどね。アデルが小柄だからなあ」

このままかもね？ とにつこりと父親に言われてアドルバードは蒼白になる。

「 いやでも父上は背が高いんだから！ 遺伝的に問題はっ！！ て

「いつかそしたら俺一生独身ですけど!？」

「あはは、その時は政略結婚かなー。当たり前でしょ。国王になるのに世継ぎ作らんでどうするの」

にこやかに父親は最悪の状況を語る。そのくせさらに「アデルに似て可愛いんだからいいじゃないか」まで言い出した。

「レイ以外は絶対に嫌です!! ていつかその時はリノルにやるよ王位なんてっ! あいつの方が性に合ってるだろ!？」

「だから別に私は身長なんて気にしませんけど」

「俺は気にする!!」

ぐわっとアドルバードが勢い良く言い返すのでレイも大人しく黙る。

その光景を微笑ましく見守っていた国王は嬉しそうに笑う。

「うん。愛されてるねえ、レイ？」

「恐れ入ります」

さらりとレイが答えるものだからアドルバードが代わりに真っ赤になる。

そこ返事違うだろ!？ なんで恐れ入りますなんだよ!？

「レイは別にいいんだけどね。良くやってくれてるしね。まあ、なんだ」

につこりと笑ったままだった国王の背後から嫌なオーラを感じてアドルバードは後退った。背筋に悪寒が。

「ルイはこのままだとリノルを嫁にやる気はないからね？ そのところ良く姉の君から釘さしておいてくれるかな？ うちの可愛いお姫様に手え出したら極刑だよ？」

「……公私混同、職権乱用ですが」

レイが静かにそう呟く。怖いもの知らずとはまさにこのことだろう。

「お言葉、確かにお預かりしました。ご心配なくとも手を出せるほどの度胸はありません。それよりもご子息にもご忠告お願いしたいくらいです」

「ちよつ！ レイさん！？」

まさかここでアレを言いますか！？

「あれ？ うちの愚息が何かした？ 婚前交渉は駄目だよ？」

国王の口から漏れる爆弾発言に乙女のようにアドルバードが耳まで顔を真っ赤にして否定する。

「誰がそこまでするかっ！！」

「あ、してないのか。しょうがない息子だな」

「どっちだ！！」

悲鳴のようにアドルバードが叫び、国王も大人しく追撃をやめた。アドルバードは激しい運動をした後のように肩で息をしている。

もういいよ、と国王のお許しが出たのでアドルバードは身体を引きずるように王の執務室から出た。

父親相手だというのにえらく体力を消耗する。どこぞのアホ国王を相手にするのはまた別の意味合いで。

このまま部屋に戻ってもあのアルシザス王がいるということでアドルバードも足は変わらず重かった。

39：壊れた人形のように

部屋に戻ったアドルバードを迎え入れたのはいつもの騒がしいメ
ンバーだった。もとより部屋にいたカルヴァ、ウィルザードに妹と
その騎士が加わっている。

優雅に紅茶を飲む妹の姿が一番最初に目に入って、アドルバード
は思わずため息を吐き出す。

「なんなのその反応は。愛しい妹が会いに来て嬉しくないの!？」
当然目敏いリノルアースに見咎められ文句を言われる。

「……自分で愛しいというあたりおまえ相変わらずな」

「あら違うの？」

「……違わないけど」

もはや自他共に認めるシスコンだ。否定はしない。

リノルアースは返答に若干間があったせいか、少し不服そうにア
ドルバードを睨む。

「いいけど別に。どうせアドルはレイが一番だもんねー」

リノルアースはふん、とアドルバードで遊ぶことも止めてソファ
に深く身を沈めた。その手にあるカップに追加の紅茶を注ぐルイの
姿を見て、思わずアドルバードは睨みつけてしまった。

……その視線に気がついたのか、

「アドル様？ 何かあるのですしたら早めにおっしゃってください。

地味に怖いんですけどその視線」

ルイがおずおずと言い出すと、アドルバードはつかつかと彼に歩
み寄ってその腕を捕まえると、引きずりながら（正確にはルイが大
人しくついて行っているのだが、アドルバードの個人的見解として
は）部屋の隅に行く。

「おまえ、リノルとどこまでいった？ 庭までとかなんて言い出さないよな？ 場合によっては刺す」

「刺すって何ですか。まさか腰から下げてるものじゃありませんよね？」

ルイが降参の意を表して両手を挙げながら聞く。

「それも場合によりけり」

アドルバードの目が据わっていたので、ルイはため息を零して正直に答える。

「別に、何もないんですけど」

「んなこと俺が信じるとでも？」

「とりあえず姉さんとアドル様以上のことはしてないですよ」

「そんな風に言えば俺が引き下がるとでも？」

「いや、本当ですって」

ぼそぼそそんな会話を続けていると、ふわりとアドルバードの身体が浮いた。

「うわっ!？」

急に足元が床から離れたことにアドルバードが動揺する。顔だけ動かせば、犯人はレイだった。

「いいかげんに大人になってください。アドル様。馬に蹴られて死にたいんですか？」

呆れたような顔をしてレイがアドルバードを持ち上げたままルイから引き剥がす。

「なっ！ 邪魔するなレイ！ 俺は状況確認をだなっ!！」

「アドル様の場合は尋問です。それも意味のない」

「意味ない言うなっ!！」

兄として当然のことをしているまでだ、とアドルバードが胸を張ると、レイがため息を零す。

「本当にいつまで経っても変わりませんね」

レイがそう言い残して一度部屋から出る。深い意味はないはずだ。それこそアドルバードも今さっきリノルアースに向かって似たよう

なことを言っただけだ。

けれど、レイからそう言われたということがアドルバードには重くのしかかった。

彼女に相応しい人間になろうと努力しているから余計に。

「……俺ってそんなに変わってない？ 乳幼児から進化してない？ むしろ猿？」

「ア、アドル様。姉さんはそこまで言ってませんよ？」

先ほどとは打って変わって地にめり込むほど落ち込むアドルバードをルイがささやかに慰める。リノルアースは「馬鹿ね」の一言で兄を放置だ。

「シェリーもそろそろ来る頃かしら。その馬鹿もいいかげんに立ち直ってくれる？」

その馬鹿、はシェリスネイアに惚れてしまったウィルザードだ。アドルバードが国王へ報告へ行っている間、カルヴァが相手をしていたようだが、余計に可笑しくなっている。

「なら俺は今すぐ帰るっ！」

勢い良く立ち上がって、リノルアースの座るソファの脇を走りぬけようとしたウィルザードはそのままの凄い勢いで転んだ。リノルアースが足をかけたのだ。

「あんたにも居てもらわないと困るのよ。大人しくしてなさい」

「この女狐……っ！」

「こんなに愛らしい狐なんてそうそういないわよ？ その目で見れたことを光栄に思いなさい」

ウィルザードの相変わらずの罵詈雑言もリノルアースの前ではゴミ屑のように散っていく。

「アドルも、どうせレイはあんたの為に茶淹れに行ったんだから浮上しなさい」

傍目からはレイがアドルバードを見捨てないことなんて一目瞭然なのだから、恋愛^{ビヒロ}ことでアドルバードが落ち込む姿はまるで道化師だ。

「それで、ここまで勢揃いで何をしでかすつもりかね。美しい姫君？」

ウィルザードに飽きて静かにしていたカルヴァがリノルアースを見てにやりと笑う。それは軽薄な男の顔ではない。謀略を張り巡らす国王の顔だ。

「もちろん。陛下が兄に持ってきた案件についてですわ。相変わらずお優しいことですね」

「美しいものには、と頭につくがね」

この南国の国王はハウゼンランドが　ひいてはアドルバードとリノルアース、それにかかわる人々がお気に入りだ。曰く、「美しいものは人類の宝」だとか。

「アドルバード王子、失礼いたします。シェリスネイアです」

美しい鈴のような声が聞こえ、ゆつくりと扉が開く。扉を開けたのは銀髪の騎士　レイだ。片手にはトレイにのったティーセットがある。

「揃ったわね。アドル。主役はあんたなんだからこつち来なさい」

リノルアースに睨みつけられ、アドルバードはしぶしぶと立ち上がり自分の定位置に座る。その後ろに当然のようにレイがやってきて、アドルバードの前に淹れたての紅茶を置いた。

「説明を」

リノルアースが小さく兄に命じる。どっちが主役なんだか、とアドルバードは苦笑した。

それにて物凄い面子^{メンツ}だな、と頭の片隅で笑う。

ハウゼンランドの二つの花、アドルバードとリノルアース。

アヴィランテの大輪、シェリスネイア。
大国アルシザスの国王、カルヴァ。
ネイザス王国の王子、ウィルザード。
実はアヴィランテの王子だったルイ。
その姉のレイ。

カルヴァが上機嫌なのも偶然に美形が集まったからだろう。
まるで敵無しにも思える人々を前に、アドルバードは胸を張り、
口を開く。

俺は、あの椅子に座る父のようであるだろうか。

自ずと感じられる威厳。

王族たる自信。

人を動かす　動かさせる、力。

それがなければ、ここで潰されるだけだ。

「　アヴィランテの皇子、ヘルダム様がハウゼンランドにやって
来る」

その一言に、驚いたのはシェリスネイアだけだ。

他の人間はもう知っている。だから驚くわけがなかった。

しかしシェリスネイアの動揺は、他の人間の誰よりも大きく部屋を揺さぶった。

「ヘルダムが……？」

義母兄だというのに、シェリスネイアは様もつけずにその名を呟く。その顔は心なしに青い。

しばらく沈黙がその部屋を支配し、シェリスネイアの嘲笑がその沈黙を気味悪く破った。

「最悪な男に目をつけられましたわね、王子。あの男は友好の為にこの国に來たりはしませんわ」

その顔は青いままだ。

無理をしてその強気を取り繕っているように　ウィルザードには見える。他の人間は気づいているだろうか、と思った。気づいてほしい。シェリスネイアの弱さに。そう思うと同時に自分以外が気づかないでほしいとも思う。

「そんなことは重々承知です。アヴィラがハウゼンランドから得られるものなどない」

アドルバードがいつもの情けないような様子など微塵も感じさせずに、しっかりと答える。

シェリスネイアはまだ笑う。

壊れた人形のように。

「あの男は　私と、この国を潰しに來るんだわ」

40：あんたは私のものでしょう！

シエリスネイアの言葉は、アドルバードやリノルアースには簡単には理解し難いものだった。そもそも彼らには異母兄、異母弟がない。ハウゼンランドは一夫多妻制を廃してから随分になる。

兄が、妹を潰す。

そういう国もあるのだと、理解している。けれど頭はついていない。ついていこうとしない。

「この国に来たばかりの頃、刺客に襲われたことがあったでしょう？ 言いませんでしたけど、あれはたぶんヘルダムの差し金ですわ。あれは、私を利用することよりも排除することに力を入れているから」

シエリスネイアは疲れた笑みを浮かべながら、そう説明した。

雪が見たいと、そう言ったシエリスネイアを山まで連れて行った時の話だ。レイが腕に軽傷を負った。シエリスネイアほどの人間であれば、襲われる理由が多くありすぎたので深く追求しなかったことを思い出した。

「まさか」

思わずアドルバードの口からそんな言葉が零れた。

「まさか、でしょうね。あなた方に見てみれば。アヴィラは醜い国ですもの。場合によれば、たとえ同じ腹から生まれても争うこともありますわ」

まあ、王の子を二人も授かる妃がそう多くありませんけど、とシエリスネイアは呟く。その点でシエリスネイアの母は、一時と言えど深い寵愛を受けていたことが伺えた。

「アヴィラの王は人間ではない化け物ですわ。その化け物の子供は、

所詮化け物。アヴィラという国は人間の皮を被った化け物の巣窟です。……第一皇子のサジム様も、私を利用しようと、そう考えているから生かしているだけですもの」

実際に王の子で権力を持つのはせいぜい第三皇子くらいまでだ。

それより下はあくまで予備の駒に過ぎない。そもそも姫には初めから権力など与えられないのだ。

「ヘルダムはサジム様を妬んでいる。だからサジム様の駒となつた私を始末しようと考えているんでしょう。私は姫の中では良い駒ですから」

前から匂わせていたが、そこでシェリスネイアがサジム派であることが明らかになった。

「……つまり、姫がハウゼンランドに来たから、ヘルダム様も追ってくるのだと？」

そう問いかけるアドルバードの喉はからからだった。

知っていたことだが、本当に王族の世界は汚いものだらけだ。

「刺客を放つても効果がなかったので、焦ったんでしょう。私を暗殺し、そしてその罪をハウゼンランドに被せる。そうして、最近突出してきた王子のことを押さえつけようとしているんでしょうね」

「ひいては我が国を、かな」

苦笑しながらカルヴァが呟く。

カルヴァが治めるアルシザスとの同盟は、アドルバードの力によるものだ。大陸の者ならば誰でも耳にしている。アドルバードを潰すことは、そこからアルシザスを潰すきっかけにもなるということだ。

「……悪い、巻き込んだな」

関係なかったのに、とアドルバードが小さく謝罪した。カルヴァがハウゼンランドと同盟した理由など、娯楽の一種のようなものだったのに。

「謝る必要はないだろう。前はこちらが君を巻き込んだ、今回はこちらが巻き込まれた。これで帳消しではないか」

巻き込まれたことは同盟の件で帳消しだったはずだろ、という言葉葉をアドルバードは飲み込んだ。ここは素直に頷いておこう。

「謝るのは、私の方です。私がハウゼンランドへ来なければ、このような事態は起きませんでしたわ」

シェリスネイアが唇を噛み締めて、そう低く呟いた。

そして一瞬沈黙がその場に落ち、小さくシェリスネイアが「申し訳ありません」と呟く。沈黙は、誇り高い彼女が覚悟を決めるまでに必要な時間だったのだろう。

「あんたが謝る必要がどこにある？ あんたも被害者だろうが。命狙われてるんだろ？ そんな状況で他人気遣うことなんてない」

降ってきた声はどこか怒りを含んでいるようだった。

俯いていたシェリスネイアが真っ先に見た先に、その声の主はいた。声を聞き間違えなくなるほど、この男と接していたのかとシェリスネイアは自分の行動に驚かされた。

「今更しおらしくされたってこっちの気が狂うんだよ。あんたはあんたらしく堂々としてろ」

私らしくって？

そう問おうとした口を閉じた。周囲に人がいることなんて忘れて、いつかのようにこの男に弱味を見せるところだった。

「ウィルの言うことはもつともだな。この件に関して誰かが責任を感じる必要はない。重要なのはどうやってこの危機を乗り越えるかだ」

にやりとアドルバードが笑いながらそう言う。

それだけのことで、部屋の雰囲気が一気に変わった。陰鬱な風はどこにいったのだろう。日の光が部屋全体に差し込んでいるようだ

った。

「そしてその為に、あなたの協力は欠かせませんね。シェリスネイア姫？」

優しく微笑むアドルバードに、シェリスネイアは困ったように微笑み返した。

励まされてしまったんだろう。不覚にもあの男に。

「私に出来ることならば何も惜しみません。ご協力させていただきますわ」

お願いします、と答えるアドルバードは少し頼もしい。その隣でシェリスネイアと顔を合わせないように横を見ているウィルザードも。

「で、何か案はあるか？」

皆に問いかけるようにしつつ、アドルバードの目は後ろに控えているレイに向けられていた。

レイは目だけで答え、一歩前に出る。

「一つだけ、先に危惧すべきことがあります」

真剣なレイの声に、その場の空気も引き締まった気がした。

ちらりとレイはルイを見て、口を開いた。

「ルイがアヴィランテの行方不明の皇子だと知られた場合、ルイも暗殺される可能性が」

びく、とリノルアースの身体が震えた。それが傍目にもよく分かっってしまう。

「……まあ、そうでしょうね」

当本人はさほど驚いた様子もなく、そう答える。さりげなく右手がリノルアースの肩に触れていた。心配する必要はないとも言いたげに。

「けれど、それは逆に武器にもなるでしょう？　俺に刺客の目が向けばシェリスネイア姫が襲われる危険性も減る。シェリスネイア姫を守るのと、俺が応戦するのでは安全性もかなり違います」

守られるだけの存在にはならないと、暗に言っていた。

騎士として育ったルイとしては、皇子として周囲から守られることは善しとしないだろう。

「それも確かに一理ある。それでもしおまえに何かがあつた場合、こちらが反撃する材料にもなる」

「『保護していたアヴィランテの皇子が、ヘルダム様の策略によって殺された』……内輪の争いに巻き込まれた、と？」

レイの言葉を付け足すようにカルヴァが笑う。

「本当に、君は敵に回したくないな。騎士殿。君の主より冷酷な判断をする」

幼さ故か、人格からか　アドルバードもリノルアースも少し青ざめたままその話を静かに聞いていた。ウィルザードは苦い表情で、シェリスネイアはどこか焦っているように。

「どう評価されてもかまいません。あくまで事実の確認です。そう簡単に殺される男ではないと、弟を信じていますから」

「俺としても死ぬつもりはありませんよ。腕一本くらいだったら別にくれてやりますが」

どうしてこう変なところで似てるかな、この姉弟は　とアドルバードが苦笑する。もっと素直に言葉にすればいいものを。

「ルイ」

怒ったようなリノルアースの声が低く響き、ルイは「はい？」とリノルアースの怒りに気づかず素直に返事をする。

「腕一本だろうが髪一本だろうがあんたは私のものでしょう！　勝手なことは許さないわよ！」

ルイを見上げながらそう怒鳴るリノルアースの顔を見て、ルイは思わず笑ってしまった。それがさらに火に油を注ぐ。

「何がおかしいって言うの！？　返事は！？」

「は、はい。申し訳ありませんでしたリノル様」

それはつまり、怪我をするなど言いたいんですよね？

その意地悪な質問を、ルイは黙って胸の奥にしまうことにした。

41：嫌だとは言っていない！

「皇子であることはある意味で切り札でしょう？ 命を狙われることなど日常茶飯事ですもの。このまま秘しておいた方がよろしいんじゃないかって？」

シェリスネイアの凜とした声がその場に沈黙を落とす。
その中で、兄であるルイと目が合った。苦しそうな顔で、シェリスネイアを見つめていた。

お兄様、と呼ぶのはまだ先の話になりそうね。

呼んでみたいと、ずっと思っていたのだけど。

しかし兄である彼は、皇子としてではなく騎士として生きたいと思っているようで、それは嫌というほどシェリスネイアにも伝わってくる。

だって彼は、自分を「姫」としか呼ばない。

「それを、私の口から言わせるためのセリフに思えたのですけど、違いますかしら？」

意地悪そうに微笑み、シェリスネイアはレイに目を向けた。

「あなたが聡明な方で助かります」

レイは優しく微笑んでそう切り替えした。

一枚上手か、とシェリスネイアは苦笑する。

「姉さん、それは……っ！」

「レイ！」

アドルバードとルイが同時に抗議のために声を上げる。

シェリスネイアの目からも、彼女の汚れ役を演じる様は隙がない。その容姿からも感じる冷たさを、自身でよく知っているのだらう。

「手段を選ぶ余裕がありますか？ 手札は限られているんですよ？」

ぐ、と言葉に詰まったのはアドルバードだった。

ルイは引き下がるつもりはないらしい、珍しく姉に食いかかる。

「俺を信用していると言ったのは姉さんでしょう！ その処置では信用していないと言っているのも同じです！ 俺をそこらへんの腑抜けと同じにしないでください！ 俺はルイ・バウアーです。剣聖の息子ですよ！」

「冷静な判断も出来ない人間の剣は鈍るだけだ」

「俺は冷静です、この上なく！ 何を守るべきか、守らざるべきかも理解している！」

守るべきものさえ分かっているればそれでいい。守るものの為に剣を振るうのが騎士なのだから。

ルイにとって守るべきはリノルアースのみだ。

……そのはずだ。

「……この中のどれほどの人間が、両手で数え切れないほど毒を飲まされたことがあるかしら？」

重い沈黙を切り裂く、美しい声が発した言葉はあまりにも毒々しかった。

シエリスネイアは微笑みを浮かべながら、周囲の人間を見た。

「耐性がついて並大抵の毒薬では死ぬこともなくなるほど、毒を盛られたことがあって？ 敵というのは紳士的に剣を振るってくるだけではありませんのよ？」

シエリスネイアがじつと見つめる先はルイだった。

幼い頃から何度も暗殺されそうになったシエリスネイアの身体は、毒にも慣れてしまった。一方ハウゼンランドという平和な国で育ったルイがその毒を口にすれば、いくら鍛えた騎士であろうと一瞬で冥府に下ることもあるだろう。

「アヴィラの人間のやり方は私の方が熟知しています。私がかつ

ていて協力を申し出ているのですから、余計な口出しはなさらないでくださいな。王子が狙われる以上、リノルに危険が及ぶこともありえますのよ?」

だから大人しくリノルアースだけを守っていればいい。

シェリスネイアの目はそう言っていた。

守ろうとする手を払うそのシェリスネイアの行動は、今までの彼女の生き方を表しているようで、切なくて悲しい。

「何も、シェリスネイア様に護衛をつけないとは申しませんが」
レイがたまりかねたように口を挟んだ。

周囲の目がレイに再び集中し、レイはため息を零して続けた。

「ウィルザード様、カルヴァ陛下。お二人にシェリスネイア様をお願いしたいのですが」

そう言われるのだろうと予期していたカルヴァはまるで動じずにただ頷いた。大きく動揺したのはもちろんウィルザードの方だ。

「んなつ……なんでっ!？」

「他国の王族が側にいることで牽制にもなりますし、ウィルザード様は剣の腕もたつので」

牽制の意味ではウィルザードは大して意味がない。ネイガスの国力はハウゼンランドとそう変わらないものだ。牽制の意味はカルヴァが一身に背負っているとも言える。

「我関せずで傍観しているだけで済むはずがないでしょう?」

事実さつきまで関係のない話だと、ウィルザードは暢気に紅茶を楽しんでいた。

「いやでもその、誤解される可能性も……」

「何のために二人をお願いしていると思っっているんですか。誤解されないように三人で行動していただければいいんです」

とつさに思いついた言い訳もレイにももの見事に切り捨てられた。
「確かに、ウィルが俺と親戚関係なのはこの辺りの王族なら周知だし、カルヴァとは同盟関係が知れ渡ってるな。国賓を親しい友人に託した、という形が取れるわけだ」

アドルバードが納得して何度も頷く。半分はウィルザードの恋路を協力してやるつもりで、レイの作戦に乗っているのだが。

「嫌だというのなら、陛下だけでかまいませんけど」

ウィルザードが抵抗しているのを見てシェリスネリアが不機嫌そうに申し出る。

「嫌だとは言つてない！」

誰かがフォローを入れるよりも早く、ウィルザードが即答する。

その早さにシェリスネリアも目を丸くして驚いた。その表情を見て、頬を赤く染めたウィルザードが顔を逸らす。

「……………青い春ねえ」

語尾にくだらないうと付け加えそうな口調でリノルアースはぼつりと呟いた。幸い当本人である二人には聞こえていない。

「なんだか無性に我が愛しの君に会いたくなつたので、これで失礼する。まったくもって私だけが寂しい独り身じゃないか」

ぶつぶつと文句を言いながらカルヴァは立ち上がり部屋から出て行ってしまった。

「……………連れて来てたのか」

エネロア嬢を、とアドルバードは呟きながら走り去ったカルヴァを生暖かい目で見送った。国王とその有能秘書がいない間、アルシザスの政治は誰がまとめているのか　怖くて聞けない。

「今日はもうお開きね。帰るわ」

リノルアースも飽きたようで、早々に席を立つ。

「その馬鹿、シェリーを部屋まで送りなさい」

顔を赤く染めて固まるウィルザードを冷ややかに見つめて、リノルアースがウィルザードの足を蹴る。

「いって！　おまえなんかに言われなくても分かってる！」

「あらやだ紳士ー。私に対する行動言動その他諸々もどうにかなら
ないの？」

「おまえに紳士的にしてどうする。精神の無駄遣いだ」

「ま、別にいいけど。気持ち悪いし」

ひらひらと手を振ってリノルアースは部屋から出て行く。

ふざけるなこっちだって気持ち悪いわ、と言い返ししながらシェリ
スネイアとウィルザードも部屋からいなくなり、急に五人も減った
部屋は広く感じた。

アドルバードは冷えた紅茶を飲み干して、後片付けをしているレ
イを見つめた。

「……ホント、おまえの脳内を覗いてみたくなるな」

苦笑しながらそう呟くと、レイが首を傾げてこちらを見ていた。
そういう仕草が可愛いな　なんて、そんなことを考えているこ
とさえ、こちらは見透かされていそうなのに。

「無理して汚れ役を買うことはないんだぞ？」

「……性分なので」

その台詞がアドルバードの気遣いなのだと分かるから、レイは素
直に答える。

憎しみはすべて自分に。

そうすることで、少しでもアドルバードあるじを守れるのなら。

「誤解されるぞ、そのうち」

理解してくれる人間ばかりだからこそ、彼女の信頼は地に落ちず
にいるが、普通ならば冷酷非道な人間として嫌われてしまうだろう。

「アドル様が分かっ
ていてくだされば、
それでかまいません」
そう言って微笑む彼女の姿は、
誇らしげだった。

42：お望みなら実践するけど？

ほんの少し前を歩くリノルアースの、赤みがかった金の髪を見つめながら、ルイは自己嫌悪に陥っていた。

よりにもよって、この世で一番大切な人の前で、優先順位を迷っているようなことを言われるなんて。しかもそれはほとんど凶星だった。

たぶん今のルイでは、リノルアースとシェリスネイアが同時に危険な目に遭っていた時、どちらを選ぶべきか悩んでしまう。

悩んだ末で、どちらも失うような気がした。

選択肢がリノルアースとレイだったら迷うことなどない。

レイはルイの手を借りなければならぬ状況に陥らないと思うし、そうなったとしてもリノルアースを優先するように怒るはずだ。そしてリノルアースを助けている間に自力でどうにかしてしまうだろう。

しかしシェリスネイアはリノルアースと同じくらいに下手するとリノルアースよりも、非力な少女だ。そして、実感はないまでも自分の妹で。

妹の為に奔走するアドルバードの姿を見ていたせいだろうか。

シェリスネイアを見捨てることは、たぶん出来ない気がしていた。

「……いつまでうじうじ悩んでいるつもり？」

はあ、と重いため息を吐き出し、リノルアースが問う。

ルイが俯いていた顔を上げると、リノルアースが振り返ってまっ

すぐにルイを見ていた。その瞳の強さに押され気味になる。

「なんのことですか」

ここは誤魔化してしまおうと、そう答えるとリノルアースはルイを睨んだ。

「分からないと思ってるわけ？ この私が？ あんたがシェリーと私とで悩んでることくらいお見通しなのよ！」

馬鹿じゃないの、という言葉までついてきそうなのそのリノルアースの堂々とした様子に、ルイは思わず笑ってしまう。

「笑わない！ 真剣な話をしようって時に！」

びし、と指をさされてルイも思わず顔を引き締める。

「……大体ね、」

リノルアースの細い指がルイの頬に触れた。冷たいその指に、ルイは反射的に後退った。

青い瞳がルイの目を射抜く。

その目に囚われて、ルイは動けなかった。どうしてこの人は、こんなに強いんだろうと、そんな疑問が頭に浮かぶ。

「悩む必要なんてないでしょう？」

優しい響きのその言葉に、ルイは困惑した。

いつそ怒ってくれれば、素直にリノルアースだけを守ろうと思えるのに。

「私だって、あなたかアドルかを天秤にかけられても、即座に決めることなんて出来ない。家族を想うことは罪なの？ 違うでしょう？」

そつと触れる冷たい指は、そのままルイの頬を包み込んだ。

じつと見つめてくる瞳は、少しだけ寂しさを帯びていて、たぶんリノルアースも確かな答えなど持っていないのだ。

「……それでもたぶん、俺は彼女を選べないんです」

どんなに悩んでも、選択の場面で躊躇しても、最終的に選ぶのはリノルアースだ。それだけは確かだと言える。

「その上で、躊躇してしまう自分が嫌なんです。彼女を選ぶことも出来ないのに、迷う。その結果万が一あなたに何かあったら、どうすればいいんですか？」

一瞬迷ったようにルイは手を伸ばし、導かれるようにリノルアースの頬に触れる。そのまま髪を梳き、その美しい金髪の絹のような肌触りに酔いそうになる。

今度は、リノルアースが困ったように固まった。

ただじっと、見つめ合う二人に妨げなどなく、ルイは自制も利かなくなり　華奢なりノルアースを抱きしめた。

「あなたを失うなんて、考えるだけでも気が狂いそうなのに」

リノルアースはルイの肩越しにただ天井を見つめた。

あやふやな関係のまま凍らせた二人に、それ以上の行為は許されない。そう悟って、リノルアースは少しだけ後悔した。

「……本当に、不自由な性格よね、あんたって」

苦笑しながらリノルアースは呟くと、分かっていますと怒ったような声が耳元で聞こえた。

行き場を失った手をルイの背中に回し、確かなぬくもりを味わう。苦しいくらいの抱擁に、女慣れしてないことがバレバレで可笑しくなった。

「私って、そんなに心配されるほどお淑やかだったかしら」

「俺の手を振りほどくことも出来ないくらい、非力でしょう」

「あのね、ルイは男である上に騎士じゃないの」

勝てるわけじゃないでしょう、とリノルアースは怒った。男と力勝負なんて、リノルアースくらいの年齢の少女では勝敗なんて分かりきっている。

「刺客だつて男ですよ。血を見ただけで怯えるくせに、こんな時ばかり強がるのはあなたの悪い癖です」

今の台詞、あなたのお姉さんみたいよ？

くす、と笑いながら浮かんだ感想は飲み込んだ。

「それでも随分と慣れてきたのよ？ 血生臭いことにもね」

「慣れなくていいんです。そんなもの」

きつぱりと言い返されてリノルアースはまた苦笑した。今日はいつも以上に頑なだな、と戦略を練り直す。

「とりあえず、他の男にはこんな状況許さないから安心しなさい」

誰が通るかも分からない廊下に抱き合つたままなんて 本当はルイでも許すわけにはいかないのだが。今日だけはいいかと甘い自分に笑ってしまう。

「許す許さないでどうにか出来るんですか」

ルイはやはり頑なに、どこか怒つたようにそう問いかける。

そうね、とりノルアースは呟き ほんの少し身体を離してルイを見上げる。

「お望みなら実践するけど？」

意地悪そうな笑みを浮かべたリノルアースに、いつものルイならば遠慮しますの一言で逃れるはずだった。

「どうぞ、出来るなら」

しかし今日のルイはある意味で普通ではない。そのリノルアースの挑戦を甘んじて受けてしまう。

じゃあ本気で、とりノルアースは細いピンヒールでルイの足を容赦なく踏みつけた。

「いつ……………っ!？」

骨まで響くその痛みにルイの腕の力も緩む。その隙にリノルアースはさつと距離をとった。

「これが他の男なら急所狙うんだけどね。機能不全とかになったら私としても将来的に困るから足にしたのよ。感謝しなさい」

「……女性がそんなこと堂々と言うもんじゃないでしょう」

痛みを堪えながら、ルイは指摘だけは忘れない。

急所なんて狙われたらたぶん鍛えた男でも膝をつくだろう。女性は足に凶器を隠し持つてる。

「男も女も関係ないのよ。生きるか死ぬかなんて時はなおさらね。生命力で言えば女の方が男より圧倒的に強いし」

「ええ、認めますよ。それは」

殺しても死なないだろうなんて感想を、惚れた相手に抱かせるあたりリノルアースが最強たる所以だろうか。

結局やられっぱなしか、とルイがため息を吐き出す。足の痛みもだいぶ弱まった。

この場合、仕返しは。

ルイは手を伸ばし、リノルアースの細い手首を握り締めた。

「……………なによ」

「やつぱりか細いですよね。これでよくあんな威力が出せるなあ」

いつも拳で殴られるルイはそのリノルアースの華奢な身体のに驚かざるを得ない。

「だからなんなの!？」

「いや、万が一を考えて、思い残すようなことはない方がいいなあ、と」

手首を掴んでない方の手でリノルアースの顔を持ち上げる。一瞬状況を理解していない瞳が純粹にルイを見つめ返して、ルイの瞳に宿る何かを感じ取ったのか。明らかに瞳が揺れて、抵抗を始めた。「な・に・をっ! 考えてるの!？」

甘い空気をどうにか破こうとリノルアースが睨みつけながら手を振り払おうとする。

思ったとおりの展開に、ルイは笑いそうになりながら、リノルアースの耳元に唇を寄せる。

「キス、」

たった一つの単語で、リノルアースの顔が真っ赤に染まる。

「……してもいいですか？」

声が震えた。

攻められると弱いリノルアースをからかうとその代償は大きい。

声で悪ふざけと悟られたルイは急所を攻撃されてその場に崩れた。その屍をさらに踏みつけ、リノルアースは憤慨しながら一人部屋へと戻った。

43：現に今隣に一人いますし

あのアホ国王も護衛役なんじゃないのか。

結局二人きりじゃないか、とそんな愚痴を頭の中で繰り返しながらウィルザードは大人しくシェリスネイアの隣を歩いた。すぐ隣にいるシェリスネイアはリノルアースと比べても華奢で、つい先ほどその口から零れたような凄惨な生き方をしてきたとはとても思えなかった。

誰にも寄りかからずに生きようとする彼女が切ない。

「生きにくそうだな」

気がつけばぽつりと零していた。

ただ独りで誰が敵かも定かではない状況で生きていくなんて、こんな少女が選ぶにしては過酷すぎるような気もした。

「それ、私のことかしら？」

くす、と笑みを浮かべながらシェリスネイアはウィルザードを見上げた。

「あなた以外に、ここに誰がいるんです？」

「ここにいる人間とは限らないでしょう。私の目にはあの騎士も随分と捻くれた道を選んでるように見えますわ」

騎士は二人いますけど、どちらですか。

そんな意地悪も思い浮かんだが素直に胸の奥にしまった。

「彼女にはアドルがいるでしょう。アドルは何があらうと、彼女を疑うことはないでしょうから」

「他人でもそう断言できるのだから、あの二人の関係はある意味で理想形なのかもしれませんわね」

シェリスネイアが窓の向こうの重い雲を見つめながらそう呟いた。重い雲からは今にも雪が降ってきそうだ。廊下は寒く、冬の気配が濃くなっていくことを肌で感じた。

「あなたも、もう少し人に頼ったらどうですか」

ウィルザードはそつと手を伸ばし、無意識にシェリスネイアの髪に触れようとしていた。その手を止め、ゆつくりと下ろす。

「頼れるような人間は、アヴィラにいません。どうせあと数年すれば政略結婚でもさせられるんでしょうし、そうなれば嫁ぎ先も敵の群れですもの」

だからここで誰かに甘えるなんて嫌なのだと、シェリスネイアの身体は差し伸べられる手を振り払う。

「ルイをアヴィランテに連れて行くんでしょう」

血の繋がった妹だと、今は完全に受け入れることは無理でも、彼はたぶんシェリスネイアの味方になるだろう。アヴィラではルイが守るものはシェリスネイアしかない。

「いつかここに戻る人です」

きつぱりとした返事に、ウィルザードは思わず言葉を飲み込んだ。そこまで完璧に割り切っているのかもしれない。

シェリスネイアはまるで気にした様子もなく、寒い廊下を静かに歩く。慣れないドレスだというのに、その姿には隙がない。まるでいつも優雅に着こなしているもののように、彼女に溶け込んでいた。「それなら、優しい男のところへ嫁ぐんですね。それくらいしか救いようがない」

思ってもいないことを口にして、ウィルザードは先に歩いていったシェリスネイアに追いつく。誰が惚れた女に男を薦めるか。

「救いなど求めてませんわ。それにどうせ、政略結婚だと」

「このパーティでは腐るほど王子も国王も来ますよ。姫君の量には敵いませんがね。その中に条件に合いそうなやつもいるでしょう」

しかしウィルザードの口は勝手に言葉を続ける。

なんでこんなことを言っているんだか、と苦笑するしかない。

「……近づいてくる男など、皆権力目当てですわ」

「そっじゃない男中にもいるんじゃないですか。物珍しいやつが」
もう自棄だ、とウィルザードは答える。

シェリスネイアの丸い黒い目はじつとウィルザードを見上げて、その顔を伺っている。

「そうかもしれないわね。現に今隣に一人いますし」

笑うわけでも、茶化しているわけでもない、平坦な声。

ウィルザードは自分の耳を疑った。つまりそれは自分もカウントされているということか、それとも。

「ではお部屋までお気をつけて」

気がつけばシェリスネイアの部屋の前で、シェリスネイアは優雅に礼をして部屋の中に入っていてしまった。

お気をつけるのはあんだだろう、と素で言いそうになって自分の手で口を塞ぐ。

顔が熱い。

どうしてあんな流れになったのだろう、とそんなことを繰り返してウィルザードは唸りながらその場に蹲った。

「……完全に重症だな」

頭上から声が降ってきて、顔を上げれば本来ならばもとからここにいたはずのアホ国王だ。

「……その憐れむような目やめてくれませんか」

「む。すまない。無意識に」

「……その発言もかなり失礼なんです。あんだ大国の王じゃなければ殴ってますよ」

一応ウィルザードの頭の中にも自制心という言葉は残っている。国際問題を作らないだけには脳は機能していた。

「別にかまわないがね。アドルなんぞはぼんぼん怒鳴るわ殴るわ」

「それはあいつの特性です」

とりあえずいつまでもシェリスネイアの部屋の前にいるわけには

いけない、とウィルザードはカルヴァをひっぱってその場から去る。シェリスネイアの部屋から離れた、寒い廊下の影で会話は再開された。外に出るには上着が足りなかった。

「それで、何があつたんだね？ 人生ならぬ恋愛の先輩に相談してみたまえ」

「……アドルの話によるとあんたも一方通行らしいじゃないですか。何先輩面してんですか」

「無論片思いにおいてはスペシャリストだ!!」

「……そこは誇るとこなんですかね」

冷たいウィルザードのつつこみにへこむこともなくカルヴァは実に誇らしげに胸を張っている。

確かにこれは疲れる、とウィルザードはアドルバードがいつか言っていた言葉を思い出していた。

とにかく状況整理もかねてカルヴァにかいつまんで説明した。

「……なんだ。そのまま求婚すれば良かったではないか」

「ごん。」

ウィルザードは力が抜けたように柱に頭をぶつけた。地味に痛い。

「どうしてそういう話になるんですかつ!？」

「そういう話じゃないか」

きつぱりとカルヴァに言い切られて、ウィルザードはシェリスネイアとのやり取りを何度も反復した。

「……そうなるのか？」

「そうなるだろう」

あまりにも自信満々なカルヴァに毒されたのか、そんな気がしてくるような錯覚に陥る。

しかし最後の、シェリスネイアの平坦な声に、冷静さが取り戻される。

『そうかもしれないわね。現に今隣に一人いますし』

あれはどういうつもりで言った言葉なのだろう？

希望がないと思うには冷たさもなく、希望を持つにも喜びも温かさを感じない。

「こうなれば早速求婚を」

「いやいいです。どうせ無理だし」

先急ぐカルヴァを引き止めて、ウィルザードはため息を零す。

「何故だね」

「うちではアヴィランテと釣り合いが取れませんから。政略結婚になり得ません」

求婚だの言い始める前の話だ。

ウィルザードはどこかすっきりしたような顔で、少しだけ悲しうに笑う。

「なら、せめて彼女が安らげるような男を探してやりますよ」

その方が未練が残らなくていい。

シエリスネイアは彼女の国に相応しい国に嫁ぎ、そして自分はそれなりの国の、それでも自分の国に見合った国の姫と結婚しなければならぬのだろう。

もとより出会ったことすら偶然で奇跡だ。

彼女が彼女を守ってくれる誰かを見つけるまで。

それまではせめて自分が、彼女に振りかかる火の粉を払おう。

44： おまえ、泣かないよなあ

アドルバードから呼び出された時はリノルアースが何か告げ口でもしたのだろうかとか冷や汗もののルイだった。

しかしながらそれは杞憂に過ぎず、いつもどおり いうにはいささか間抜けだがアドルバードの目的は愚痴という名ののろけだった。

「おまえの姉をどうにかしてくれ。ホントあのままじゃあいらぬ誤解をされたまんまじゃないか。俺の為にと頑張ってくれるのは嬉しいけどさ、それもなんというか……」

あなたの為に動いているのは今に始まったことじゃありませんけど、という言葉を読み込んで、ルイは自分で淹れた紅茶を口に含んだ。渋い。もう少し練習しないと、と苦笑した。

「だいたいレイは周りが見えているようで見えていないとかさあ、人づきあいというものを大切にして欲しいとか。俺の為にいろいろ犠牲にし過ぎているとか、手段を選ばないってとか」

「アドル様が止められないものを俺に止めさせようって方が無理ですよ。姉さんが従うのはアドル様だけです。百歩譲って父さんか」

溜息を零しながらルイが初めてアドルバードに反論した。いつまでもこの無自覚ののろけを聞いているのはさすがに苦痛だ。

「分かっているけど、俺の為と言われると引き下がってしまう悲しい男心？」

「引き下がってどうするんですか。それだからいつまで経っても尻に敷かれてるんですよ」

う、とアドルバードが言葉に詰まる。

主導権を握りたい男心はルイも理解できるから、なんとも言えない。

「それにそういう話ならアルシザス王になさればいいでしょう。俺にしないでくださいよ」

「いやあ……あいつに話すといろいろウザいしさ」

俺も正直ウザいんですけどね、という言葉は素直に飲み込む。相手は曲がりなりにも王子だ。自分も王子だったんだという事実をつい忘れがちになる。

「結局、こんなこと話せるのおまえくらいしかないというか」

「……可愛い妹を盗られてもですか」

意地悪な問いだと自覚しながらルイは問う。

長い長い沈黙の後で、アドルバードは納得しているようなしてないような顔で答えた。

「俺はリノルが幸せならそれでいいんだ。ただ泣かせたらぶん殴る」

「殴り合いなら俺の圧勝ですけど」

「……否定できないのがむかつく。負けても殴る。それにたぶんレイにも殴られるだろうな」

ルイは笑えない冗談に顔を歪めた。アドルバードに何発も殴られるより、レイの渾身の一撃を食らう方がかなりきつい。肉体的にも精神的にもだ。

「泣かせるつもりはありませんけどね」

泣き顔もそれはそれで可愛いんだろうけど、と照れながら笑うルイのセリフはまさにのろけだ。

「ならアヴィラなんて行かなきゃいいものを」

呆れたようなアドルバードの言葉に、ルイは苦笑するだけで言い返す言葉が見当たらない。

「たぶん、泣くぞ」

そう遠くない別れの時に。

アドルバードの言いたいことは十分に分かっていた。分かっているけれど、自分の選んだ道を変えるつもりはなかった。

「だって、リノル様は欲張りなんですよ」

だからしょうがないです、とルイは笑う。

「いつそ姉さんみたいに、いざとなったら自分達のことしか考えないような人なら、俺もハウゼンランドから離れたりしませんけど。リノル様はアドル様も、姉さんも幸せにならないと満足できないんでしょうから」

アドルバードは何も言わず、ただ苦笑した。

「その為に頑張りすぎないように、俺は簡単な手段に飛びついたんですよ」

アヴィランテという大国をただの手段としてしか見ていないルイは果たして愚かなのか賢いのか　　なんとも言い難い。

「……事情はどうであれ、泣かせた分は殴るからな」

「それはこちらのセリフです。姉さんを泣かせたらその分俺も殴りますよ？」

につこりと笑うルイは明らかに本気だ。

レイが泣くことなんてないだろ、と言おうとして　　実際に彼女が泣いている場面に立ち会ったことがないかと気づく。

そんな彼女を強いと思うと同時に、もう少し弱くなって欲しいと思う。

彼女が弱くあれるだけ、自分が強くなりたいと思う。

アドルバードは唇を噛みしめ、自分の弱さをただ恥じた。

「男同士の話とやらはもうよろしいんですか？」

若干不機嫌なのは、男同士といってレイを退席させただからだろう。性別を理由にされるのが一番嫌なのだ。

「ああ、まあ……」

本人の目の前で先ほどの話をするくらいなら、少々不機嫌のレイに付き合う方がまだ、とアドルバードはあえて素知らぬふりをする。

じ、とアドルバードはレイを見つめて、彼女の泣いた場面を記憶の中から探してみる。しかしやはりそんな記憶はなかった。

「おまえ、泣かないよなあ」

本音が思わず零れて、アドルバードはとっさに自分の手で口を塞いだ。

レイはきょとんとした顔をして、アドルバードの顔を見つめ返した。

「なんですか、突然」

あ、う、えー、とか言いながらどうにか誤魔化せないかとアドルバードは思案する。まさか泣き顔が見てみたいなんて、そんな変態みたいなこと言えるわけがない。

「アドル様？」

レイが問い詰める体勢になり、アドルバードは逃げられないことを悟った。両手を上げて降参する。

「小さい頃から一緒にいるのに、おまえが泣いたところ見たことないなあって思っただけです！」

本当の本音は最後の砦だ。決して落とすわけにはいかない。

「……そうですか？」

レイは首を傾げて問う。

「少なくとも俺の記憶には存在しない」

「……………そうですか。まあ、泣いている暇なんてありませんでした。どこかのお二人がそろって泣いてるところ、私も一緒に泣いているわけにはいきませんからね」

どこかのお二人が自分と妹のことだということくらい、嫌でも分かっってしまう。大昔のことだろ、と毒づきながらアドルバードは羞

恥で頬を赤くする。

「それに、騎士となつてからは、感情を制御することが上手くなりましたから」

さらりと言われてしまうと、アドルバードも何も言えなくなる。

彼女の母親が亡くなった時も　彼女は人前で泣かなかった。ルイも、そして父であるデークも。

泣きたかったらうに、という感想を持つことは彼女に失礼なのだろうか。

「……俺は、俺の騎士に自分の感情に鈍感になれとは言つてないぞ」
悔しさをその言葉にまとめる。

レイはただ苦笑するだけで、何も言わない。

「泣きたかったら泣いてくれ。堪えられる方が、俺は辛い。俺の前でくらは少しでもいいから弱くなつて欲しい。俺は、お前を支えられないほど弱くはないつもりだ」

アドルバードはレイを真つすぐに見つめて、少し苦しげに訴える。
何度この騎士は自分の為に涙を飲み込んだんだろう。辛くなかつたはずがない。レイはいつもきつい立場にあつた。

「泣きたいと思つたことはもう随分と無いんですけどね」

レイが苦笑しながら答える。

そんなわけがないとアドルバードはレイを睨む。その視線だけで意味が伝わつたのか　レイは念を押すように続けた。

「本当に、無いんですよ。私はあなたに嘘は言いません」

あなたに、というところを強めて言つたのはわざとだろう。こうすればアドルバードが何も言えなくなると分かつてやってるのだ。

「もし私が泣くとしたら、あなたに何かあつた時です」

だから、どんな時も無事でいてください。

そんな殺し文句にアドルバードはものの見事に撃墜された。
絶対にレイは分かつてやっているのだ。じゃなきゃこんな攻撃力

の高いセリフを、このタイミングで言わない。

「……魔性の女め」

本当に、手に負えない。

顔を真っ赤にして呟くアドルバードを、レイはさらに追撃する。

「……あなたにだけですよ?」

44： おまえ、泣かないよなあ（後書き）

大っ変お待たせしました（土下座）

家のパソコンは壊れてますが、ミニノートパソコンを購入したので、これからはあまりお待たせすることがないと思います……。

45：俺には俺のお姫様がいますし？

「あら。アドル。ドレスの試着はいいの？」

からかうような妹の声に、アドルバードは眉間に皺をよせて振り返る。

もう目前に迫ったパーティの衣装合わせをしているところだった。リノルアースがアドルバードの部屋に勝手に入っていることは最早つつこむ気にもならない。

「な・ん・で！　ドレスの試着が必要になるんだよ！　今回女装は無しだろ！？」

「いつ何時どんな事態が起きるか分からないじゃない？」

「おまえ何をやらかすつもりだ！？」

首を傾げる可愛らしい仕草も、兄であるアドルバードには効果がない。

リノルアースはにんまりと笑い

「とりあえずは、何も？」

「顔とセリフが一致してない！！　絶対何か企んでる！」

「ぎゃあ、と悲鳴を上げながらアドルバードはリノルアースを指さす。」

「アドル様、服に皺が出来ますから暴れないでください」

主の心配よりも服の心配か、と嘆きたくなるようなセリフを言いながらアドルバードはレイに上着をはぎ取られる。

「あら、それにするの？」

リノルアースも女の子なわけで、服のことには興味を持つらしい。アドルバードが着ていたのは今までの傾向とは違い、随分と大人びた衣装だった。黒く長い上着、縁には金が施され、細かな装飾は深紅。惜しむらしいことはこれを着る人間が長身ならば、もっと恰好が良いところだろうか。しかしアドルバードの赤みがかつ

た金の髪を映えさせる良い服だ。

「一応、主役ですからね。他の方々に嘗められない為にも外見は重要かと」

大陸中から同年代の姫、王子を集めたのだ。ここでハウゼンランドの王子の価値を決められる。馬鹿にされるようなことだけはあってはならないのだ。

「そうね、いいんじゃないかしら。私とおそろいっていうのも似合うけど……今回は止めた方がよさそうなものね」

双子が揃いの衣装を着るとそれは目立つ。しかしどこかで幼さが残る分、今回のようなパーティでは向かないのだ。

「どうせ今回はシェリーとおそろい着る予定だし。色や細かな装飾は変えるんだけど、デザインを同じにするの。私のは出来てるから、今急いでシェリーのを作らせてるんだから」

嬉しそうにそう説明するリノルアースは実に生き生きしている。

「そりゃあ……目立つだろうなあ」

大陸で北の姫、南の姫と証される二人が揃いのドレスで並ぶのだ。誰もが目を奪われる光景になるだろう。

「一応、私とまったく同じ形のドレスでアドル用のも作ってあるのよ？ 何が起きるか分からないし」

「おまえのじゃ少し小さいからな……ってだからドレスは着ないし……」

うつかり雰囲気の流れそうになって、アドルバードは慌てて首を横に振る。

「計画によるじゃない？」

「どうやって俺が女装するような計画が立つんだよ……今回は絶対に駄目。危険なのはシャリスネイア姫とルイ、それに俺なんだぞ。おまえが俺になってる間に何かあったらどうする？」

ヘルダム王子の目的はシェリスネイアの暗殺だ。そしてその罪をアドルバードを含めたハウゼンランドに負わせる。しかしその過程でアドルバードが危険な状況に陥ることも十分にありえる。

そうだと分かっている、リノルアースと入れ替わるなんて冗談じゃない。

「……一応、同じ衣装で少し小さめのものも用意してますが？」

レイが控えめにそう言う。

腕の中にあるアドルバードの上着を持ち上げている様は、つまり同じ服がこの世にもう一つあることを指していた。

「ほら。やっぱりレイは話が分かるわねー」

「レイ!!」

黙っているわけにはいかなと、アドルバードが声を荒げる。

「一概に、危険だとは言えないでしょう。パーティ会場で襲われることなんて万が一にもありません。会場にリノル様がいてもらって隙を作るといふことも出来るんです。その場合はカルヴァ王やウィルザード様にサポートに入っただければ……」

「駄目だ！ 何が起きるか分からないんだぞ！？ アルシザスでは乱闘にだってなっただろう!!」

過保護、とリノルアースが呟く。

「あのねえ、もしも、万が一、そういうことが必要になったら、っていう話よ？ 分かる？ 主役が会場から消えるわけにはいかない。だから私が代わる。臨機応変に対応できるようにっていう対策よ？」

「だけど」

「だ・け・ど・じ・ゃ・な・い!!」

怒ったようなリノルアースの顔が目の前にあり、アドルバードは押し負ける。

「使えるうちは使いなさい！ どうせもう少ししたら使えない手なのよ？」

ずい、と間近に迫るリノルアースの顔はびっくりするくらい綺麗だ。自分のそれともわずかに違いで始めている。リノルアースはより女性らしく、アドルバードはより男性らしく。

「可能性の段階でぎゃあぎゃあ騒ぐんじゃないの。必要になったときのための準備だつて言ってるでしようが。まったく」

自分の危険も顧みずそう言い放つリノルアースの方がよっぽど男らしい。アドルバードは苦笑しながら、ありがとう、と呟いた。

その呟きが聞こえたのか　リノルアースが満面の笑みを浮かべ、部屋を去る。タイミングを計ったかのようにルイが扉の向こうで待っていて、二人並んで歩く様は寂しくもあり嬉しくもある。

「……俺とリノルつて、入れ替わるのはそろそろ無理なのかな？」

確認するようにレイに問うと、さらりと答えられた。

「まあ、そうでしょうね」

あつさりとした返事にほんの少し嬉しくなる。

「それはつまり、俺の身長が伸びた？」

「身長というより、骨格でしょうね」

確かに少しは伸びたようですけど、と付け加えられる。最近ではリノルアースと並んでいて少し見下ろせる感じがあったから、多少は伸びたんだろうと気づいていた。レイと比べても大して変わっているような気はしなかったのだが。

「……そか」

ずっと、ほとんど一緒だったんだけどな。

嬉しいと同時にそんな感想が浮かんだ。

一日中一緒にいたのはもう随分を昔の話だ。今ではアドルバードが忙しく、食事のときに顔を合わせることもすら難しい。こうしてリノルアースが部屋を訪ねて来ない限りは。

「寂しいんですか？」

レイが優しく微笑む。ああ、こういう顔は貴重だな、と思いながら頷く。

「寂しいけど、まあ仕方ないだろ。リノルの王子様はもう俺じゃないからさ」

小さな頃から守ってきた妹の王子様はもう別にいる。ならいいかげんに妹離れしなければならんだろ。

「……向こうが兄離れ出来ないと思いますけどね」

ぼそ、とレイが呟く。アドルバードはあまり上手く聞き取れず、首を傾げて無言で問うが、レイは黙ったままだ。

大したことではないのだろう、とアドルバードもあまり気にしない。

自分よりも背の高いレイを見上げ、アドルバードは笑う。

「俺には俺のお姫様がいるし？」

レイは誰のことかと検討がつかないようで、じつとアドルバードを見つめ返す。

聡い彼女には珍しいが　自分が関わる恋愛ことには、わりと鈍い。アドルバードは苦笑しながら、レイを指さす。

「最も、俺のお姫様は護らなくても平気かもしれないけどな？」

そこまで言っただけで、レイが自分のことを言っているのだと気づいたのだろう。わずかに頬を赤くして、戸惑う。

「……お姫様なんて柄じゃありません」

その一言はレイのこの場での必死の切り返しだったのだろう。

こういふところが可愛いよなあ、なんて感想を持ちながらアドルバードは笑う。レイの白く、そして稽古で少しだけ荒れた手を持ち上げて、その手の甲にキスを贈る。

「お姫様だよ　俺にとってはね」

慣れない行動に、レイが戸惑う様子が少しだけ嬉しい、なんて言

ったら後が怖い。けれどいつも勝てないのだから、たまには優位に立ってもいいだろう。

誰も見たことのない彼女を独占するくらいには。

46：静かな嵐の訪れ

氷の結晶が空から舞い降りてくる。

頬に触れればさつと溶けて、そこにいたことさえ忘れてしまうほどに儚い。静かに静かに降りだした雪は徐々に積もり、初めて見るそれを無条件に美しいと思う。

ほんの少し前ならば知らなかったであろう小国　ハウゼンランド。

その地に足を踏み入れた南の国の皇子は自分の国とは趣の違う城を見上げて、白い息を吐きだした。

静かな嵐の訪れだった。

対面したヘルダム皇子は、黒い髪に、濃い肌。瞳の色は濃い緑でシエリスネイアより、どこかルイの方が面影があるような気がしたのは気のせいだったのだろうか。

「初めまして、アドルバード王子。急な訪問で申し訳ない」
にこやかに挨拶するヘルダムからは、悪意らしきものは感じなかった。少なくとも、今は。

「初めまして、このような鄙びた国にようこそおいでくださいました。滞在の間、どうぞ我が家と思っておくつろぎ下さい」

形式的な挨拶にはもう嫌というほど慣れた。アドルバードは微笑み返しながら、ヘルダムの笑顔の下にある謀略を見極めようとした。シエリスネイアからいろいろと聞いてはいたが　現段階での印象では、シエリスネイアの勘違いではないだろうかと思ってしまうほどの好青年だ。

「妹のシエリスネイアもお世話になっているようで。兄妹そろって

ご迷惑をおかけします」

「いえ、お気になさらず。シェリスネイア姫は私の妹の良き友人になつてくださっているようで」

それは真実だ。

アドルバードは顔に出やすい分、あまり嘘はつかないようにしている。言える範囲で会話を続けられただけで、それは慣れれば簡単だった。

「かの有名なリノルアース姫ですか。姫のお美しさはアヴィラまで聞き及んでいますよ。ぜひ一度お会いしたいものです」

「妹もパーティには出席しますから、機会があればぜひ一度ダンスでも」

何勝手なことを言っているんだと、リノルアースに知られたら怒られそうだが、社交辞令だ。ここは許してもらうしかない。

そしてアドルバードは予定されていた時間内、なんの問題もなくヘルダムとの対面を終えた。

「別に、悪い奴じゃなさそうだけどなあ」

一応報告に、とりノルアースの待つ部屋まで歩きながらアドルバードは呟く。

「……今の段階ではなんとも言えませんが、まあ、そうですね」

少し後ろを歩くレイも冷静な判断を下す。

同意を得られたことに安心して、だよなあ、と返す。

シェリスネイアから植えつけられた印象があまりにも強烈過ぎたのだろうか。本人に会ってみて少し拍子抜けだ。

それをさらりと話してみたところ。

「騙されてはいけません」

きつぱりと、そして物凄い形相でシェリスネイアに問い詰められる。

「あの男は外面だけはいいいんですから！ 油断したら危険ですわ！ あくまでも隙を見せてはいけませんわよ！？」

「は、はい」

アドルバードは勢いに負けて素直に頷く。

綺麗な顔に迫られ、その上に脅迫紛いな勢いで話されればアドルバードは簡単に降服する。

「あらでも、シェリーの印象だけで動いちゃ駄目よ？ 一応は自分としても印象も固めておきなさい。多角的に物事を判断しなきゃ失敗するわ」

リノルアースのもつともなアドバイスにも素直に頷く。

「なに、それは。私の判断が誤っているとでもおっしゃるの！？」

珍しくシェリスネイアは頭に血が上っているようだ。声を荒げること自体が珍しいというのに、普通なら食いかからないはずのリノルアースの言葉にも過剰反応する。

「そんなこと言っていないでしょうが。基本中の基本よ。同じ顔しかない人間なんて存在しないんだから。シェリーしかない部分と他の人間しか知りえない部分があるでしょう？」

冷静なりノルアースの言葉を飲み込むと、シェリスネイアも納得したのか黙る。

「レイは？ どう感じた？」

こういう時の判断は一番レイが的確だろうとリノルアースがレイを見上げる。

レイは少し考えるように沈黙し　そして口を開く。

「悪い印象はありませんね。あくまで皇子としての挨拶ですから、何とも言えませんが　とりあえず、敵意は感じませんでした。殺気も」

そう、とりノルアースが呟き思案する。

そんなリノルアースの前にことりと紅茶が置かれる。続いてシェ

リスネイア、アドルバードと 用意したのはルイだ。

立場としてはもうそんな振舞もしなくて良いはずなのに ルイは黙ってリノルアースの後ろに立つ。ちょうどアドルバードの後ろに控えるレイのように。

ハウゼンランドにいる限りは、騎士でありたいのだろう。

「……一度私も会ってみたいもんね、それは」

ここはダンスでもしてやってくれと言ったことを伝えるべきだろうか、とアドルバードが悩むが、黙っておいた。たぶん怒られるには違いない。

「遠からず、接触はあるでしょう」

レイのセリフにアドルバードは一瞬冷や汗が流れる。まさか密告しますか。

「そう？」

「ええ、あちらも興味があるようでしたので」

さらりと流したレイに、アドルバードはほっと胸を撫で下ろす。さすがに主を売るような真似はしなかったか。

「……リノル様」

少しだけ不満そうに、ルイが口を挟む。危険な目に遭わないという保証がない以上、ルイが心配するのも無理はない。

「何よ。あんたが反対しようが私の意思は変わらないからね？」

ルイを見上げながらそう宣言するリノルアースはいつもどおりといえそうだが、口調はどこか優しい。それだけで二人の関係が変化したことを周囲に悟らせている。

「……止めませんよ。ただ、俺の目の届く範囲にいてください」

ごちそうさま、と呟くシェリスネイアに思わず同意する。

普段自分も周囲を見ていないので周りの目を気にしろと言えないのが痛いところだが。

「報告も済んだし、さっさと出るか」

居たたまれなくなり、アドルバードは頬を掻きながら退出する。

シェリスネイアも共に部屋から出ようと立ち上がる。

「送りましょうか？」

生憎、今はカルヴァもウィルザードもない。おそらく来る時だけ同行したのだろう。しかしそうになると帰りが一人になってしまう。そう思つてアドルバードは申し出たのだが。

「お気になさらず。迎えが来てるでしょうから」

そう言いながらシェリスネイアが部屋から出ると、しばらく前からそこにいたのだろう。ウィルザードが壁にもたれながら立っていた。

「……話は済んだか」

ふう、と息を零してウィルザードは自然とシェリスネイアと並ぶ。惚れただのと騒いでいた時は逃げだす勢이었다というのに、大した変わりぶりだ。

「では、また」

柔らかに微笑み、シェリスネイアは優雅にお辞儀して去っていく。その雰囲気も以前とはわずかに違うような気がするのだが。

「……なにがあつたんだか」

二人を見送りながらアドルバードが呟く。

ウィルザードの様子からして想いが実つたというわけではなさそうだが。

「馬に蹴られますよ」

最近よく言われるそのセリフに、アドルバードは苦笑する。

「別に茶々入れようってわけじゃないさ。どこぞの国王とは違って」「知ってますよ」

間髪入れずにそう答えるレイに面を食らう。

ああ、そう、とか歯切れの悪く返し。なんだかレイの顔が見れずにアドルバードは顔をそらす。

現実逃避に今度レイやウィルザードに問い詰めなければな、と考える。特にレイにはたつぷりと吐いてもらおう。

「大して進展はしてないと思いますよ？」

心の中を読んだようなレイのセリフに心臓が飛び上がる。

「え？」

「変わったのは、リノル様でしょうね」

二人の雰囲気を感じ出し　そうかもな、と呟く。

そうなると聞き出すことは難しそうだ。

どちらにせよ、目の前の嵐が去るまでは　ゆっくり話すことも無理だろう。

降り出した雪は徐々に強くなり、ハウゼンランドの冬の始まりを告げていた。

47：恋なんて、知らなければ

一生、恋をすることはないだろうと　心のどこかでずっとそう思っていた。

恋なんて甘く幸せな言葉を信じられるほど、幸福な環境ではなかった。

だから困惑してる。

まさか、この気持ちが恋だともいうの？

「降り出したな」

シェリスネイアの隣で歩いていたウィルザードがぽつりと呟く。
廊下の窓の向こうを見ている彼につられて、シェリスネイアも視線を移すと、そこには白いふわふわとした塊がしんと降り始めていた。

積りそうだな、というウィルザードの声に、シェリスネイアの目が輝く。

外に出て　子供のようにはしゃぎたいという欲求が自然と湧いてくる。アヴィランテに戻れば　そして嫁いだ先によっては、もう見ることもなくなるだろう、雪。

そんなシェリスネイアの心境を見抜いてだろうか、ウィルザードがす、と手を差し出す。

「少し寄り道しますか？　お姫様」

からかうような、面白がるような声に少しだけむ、としながらも、シェリスネイアはその手のひらに自分の手を重ねた。

「少しだけ」

そんなふうに答えたのは素直じゃない自分の性格上しかたないこ

とだった。

はぁ、と吐き出す息は白く、すぐに空気のなかに溶けていく。

見上げれば空からは雪が止まることなくゆっくりと地上に落ちてくる。常緑樹はその葉を白くして、足元は徐々に雪が重なり合っていく。

わざわざ雪が降っているのに中庭に行く人間はそういないでしょうね、なんてウィルザードは厭味を言いながらも律儀について来てくれる。

「転ぶぞ」

うつすらと積もった雪の上を歩くシェリスネイアの手を、ウィルザードはしっかりと握る。彼の足取りには迷いがなく、すたすたと歩いてくが、シェリスネイアは滑るその上を少し緊張しながら踏みしめる。

「……あなたは、珍しくないのね？」

歩きなれた人間の歩き方に、シェリスネイアは確認するように問う。

「ネイガスはハウゼンランドのすぐ近くですよ。まあ、ここほど降りはありませんがね」

馬鹿なことを聞いたな、とシェリスネイアは苦笑する。分かり切ったことだったのに。

「このことのように寒いのか？」

南国育ちのシェリスネイアは、外を歩き回るのもそろそろ限界だ。きちんと防寒していないので、指先がもう冷えている。

「いいえ。ハウゼンランドは山脈があって、標高が高い分寒いんですよ。うちはここまで冷えはしません。双子なんて冬にうちに来て暖かいなんていうくらいですからね」

「そう　それじゃあアドルバード王子はアヴィラに来たら本当に茹だってしまいかもしれませんわね」

以前にアドルバードがそんなことを言っていたな、と思い出してシエリスネイアは笑う。アヴィランテは常夏の国だ。

「そりゃきついでしょうよ、アヴィラは」

そう言いながらウィルザードは上着を脱いで、シエリスネイアの肩にかける。

「寒いでしょ。戻りますか」

中庭の入口まで、と思っていたというのに、気がつけば随分と奥まで来ていた。指先が寒さでしびれているし、肩もすっかり冷えている。

「結構ですわ。あなたが寒いでしょう」

そう言って上着を返そうとするシエリスネイアの手をウィルザードはやんわりと止める。

「これくらいの寒さなら慣れてますから平気ですよ。あんたを部屋まで送る間くらい、どうってことはありません」

そう言ってウィルザードはまた手を差し伸べる。シエリスネイアが転ばないように。

その大きな手に包み込まれることを、とても自然なことのようになり始める。アヴィランテに戻ればこの手はないというのに。側にいることが心地いいと思う。もう残された時間はわずかなのに。

『あなた』から『あんた』と呼び方が完全に変わっていることに気がついて、嬉しいなんて思う。敬語であつたりなかったりするのにはもう癖なんだろうなと、そう分かるほど最近是一緒にいる。

もしこれが恋だというのなら。

気がつかないままの方が良かった。

アヴィラに帰って待っているのは国の駒としての政略結婚。

分かってたことだ。だから別に不満はない。

けれど。

どうせなら、甘い記憶なんてないまま、恋なんて知らないまま、好きでもない男のもとに義務なのだと言い聞かせて嫁ぐ方が　　ずっと、楽だったのに。

「はあああああああああ」

重たいため息は思わず自分が吐き出したのだろうか、シェリスネイアは現実に取り戻された。

しかしそれは目の前の美少女によるものだとすぐに分かる。珍しい赤みがかった金髪に、青い瞳の少女　　リノルアースは実に疲れたように頬杖をついていた。

「ど、どうなさったの？」

シェリスネイアは見たことのないリノルアースの憔悴ぶりに、少しだけ動揺していた。

リノルアースはちらりと、半眼でシェリスネイアを見る　　否、睨んでいた。

「ベーターにー。もう決まったことだし、文句言うつもりはございません事よ？　本人の意思だつて固いんだろっしー」

「なんのことをおっしゃってるの？」

自分に用意された部屋に、無断でリノルアースがいることにはもう驚かなくなってきた。彼女は神出鬼没だ。

「…………… どうかの誰かさんのお兄さんで、ヘタレで押しに弱くてなんで騎士なんてやってるんだろうと疑いたくなる人」

シェリスネイアは言葉に詰まった。

リノルアースの話す人 ルイを奪うのは紛れもなく自分だ。

「ああ、シェリーを責めてるんじゃないやなくてね？ あんなヘタレな人間のくせに大国の皇子様なんて務まるわけじゃないじゃんとか個人的には思うわけよ？ いつもなら絶対私の言うこと聞いてたくせに今回はっかりは頑なだし」

そのくせにハウゼンランドにいる間はきっちり騎士として振る舞ってるし、でも時々なんか突然不意打ちをかましてきたりするし、云々。

惚気ともいえるんじゃないだろうとかというリノルアースの愚痴を聞いた結果 シェリスネイアが導き出した答えは実に簡単だった。

「つまり さみしいのね？ あなた」

凶星だったのだろう。リノルアースは頬を赤く染めながら、ぶつぶつと抗議する。

「そついうわけじゃ……………でも、その、シェリーは今回のパーティ終わったら帰っちゃうじゃない？」

「ええ、もちろん」

「つまりアレも連れて行くわけじゃない？」

「そついうことになりますわね」

今更な問答ではないだろうかと思いつながらもシェリスネイアはきちんと答える。

「ああくそつあん時しとけば良かった……………！！」

「口が悪いですわよ、リノル。あの時って？ しとけば良かったと

はどういうことかしら？」

突然騒ぎ出したリノルアースを冷静に観察しながらシェリスネイアが問う。

「つつこまないで。頼むから。だってあいつ帰ったら戻ってこなかったりしそудもん。他の奴らから皇子としてどつかのお姫さまと結婚しろとか言われたら流されちやいそудもん。あ　っ！　想像できる自分が怖い　　！！」

自分の兄にあたる人はどれだけ信用されていないんだとシェリスネイアは苦笑する。

「心配いりませんわ。そういう人じゃないって、本当はリノルは一番知っているんでしょう？」

要は、愚痴りたいだけなのだ。彼のいない場所で、不安を吐きだしたいだけなのだ。

「分かっているわよ。それに　もし万が一、そんな風に流されやがったらこの私が全力でつぶしてやる」

大国アヴィランテ相手にも泣き寝入り無しで本気でやりそうな彼女にシェリスネイアは頬を引きつらせた。

「あ　……でも吐き出したらすつきりしたわ。ありがと、シェリー」

ぐったりとソファにもたればがらリノルアースは素直にお礼を言う。アドルバードにもこんなことは愚痴れないのだらう。

「どういたしまして」

「それで？　シェリーもどうぞ？　吐きだしたいんでしょう？」

ああ、本当にこの娘は。

どうしてこんな風に悟ってしまっただろう。

防波堤は簡単に決壊した。

心の奥底で暴れまわっていた感情が一気に押し寄せる。

「しかた、ないのよ。だって、私には選ぶ権利なんてないんだもの。政略結婚なんて珍しくもないし。でも、だから、恋なんて知らなくてよかったのに！　優しくされると嬉しいなんて、差し出される手が嬉しいなんて！　そんなものどうでも良かったのに！」
もう止められない。

吐き出された感情は間違いなくシェリスネイアの恋心だった。

「側にいられるのは今だけだって分かるのに　　気がついたら止まらないんだもの。ありのままで私でいられる人なんて今までいなかったんだもの。叶わないって、分かっているのに　　！」

ありのままの自分を、弱さや強さを、隠さなくていいということ
がこんなにも心地良いなんて知らなかった。

シェリスネイアの黒曜石の瞳から、透明な雫が流れ落ちる。

「恋なんて、知らなければ良かったのに　　」

そうすれば、不幸を不幸と気がつかないまま、生きて行けた。

47：恋なんて、知らなければ（後書き）

2009年、あけましておめでとございます。

本年も頑張って物語を綴っていきましょうと思いますので、どうぞお付き合ってくださいませ。

今年が皆様にとって良い年になりますように。

48：窓の向こうは銀世界

降り出した雪を窓越しに眺めながらリノルアースはそつと溜め息を吐きだす。頬杖をついたままのその姿は傍目から見ても悩ましい。

「リノル様？」

温かい紅茶を持ってきたルイが心配げに主人の顔を覗き込む。

反応しないリノルアースにルイはますます不審げに眉間に皺を寄せ、紅茶のセットを一度テーブルに置いて、リノルアースの頬に手を伸ばす。

「リノル様？」

もう一度、ゆつくりと名前を呼ぶ。優しく頬を撫でれば主人ははつとしたようにルイを見た。至近距離で目と目が合う。

「ル、ルイ。どうしたの？」

距離感に警戒しながらもリノルアースが作り笑顔を浮かべる。それが本物の笑顔でないことくらい、今まで仕えてきたルイにはすぐ分かった。

「それはこっちのセリフです。何かありました？」

「別に……」

「嘘がへたですね」

撫でる手を止めず、ルイは頬にかかる髪を耳にかけてやる。

最近よくリノルアースが不安げにしていることに、ルイは気づいていた。時折だがこうして甘やかすことも許してくれるようになった。

「……………恋なんて、知らない方が良かったと思う？」

ルイをまっすぐに見てくるリノルアースの目は、ゆらゆらと揺れている。

「リノル様は、そう思いますか」

目をそらすことなく、ルイはすぐにそう返した。ずるいわ、とりノルアースが苦笑する。その言葉にルイが内心でほっとしていることには気づいていないのだろう。

「幸せな恋しか見たことがないから、不幸だなんて思わなかった。ハウゼンランドは身分に関してそれほど厳しくもないし」

リノルアースはゆっくりとルイの肩に額を預ける。あまり顔を見られたくないのだろうか。ルイは頬に触れていた手を頭に移して、優しく撫でた。

「でも、そうじゃないところだってあるのよね。いくら好きでも、どうにもできないこともあるのよね。だったらいつそ 誰かを好きになるなんてこと知らないまま、顔も見ることない相手と結婚する方が楽なのかもしれない」

ああ、あなたが今考えているのは

「シェリスネイア様のことですか」

「他人行儀ね。妹なのに」

苦笑する気配に、ルイは少し困惑した。妹として扱うわけにもいかず、邪険にもできない。

「ルイは気づいてた？」

「まあ、気づかないほど鈍感でもないのです」

どこかの誰かさんと違って、人並みには。

「 とうにか、してあげたいな、とか」

いつもより控え目なりノルアースの主張に、思いがけず強く抱きしめたくなる。前回の失敗があるのでさすがに我慢するが。ふわりと包み込むように優しく抱きしめて、耳元で囁く。

「言つと思いましたよ」

吐き出してもリノルアースのようにすっきりなんてしなかった。

むしろあんな醜態を曝してしまったことの方がシェリスネイアとしては痛い。どうしようもないのだと子供のように喚き散らすだけで、結局リノルアースも困らせてしまったようだった。

自己嫌悪で俯いたままだったシェリスネイアは顔を上げる。

広がる董色のドレス。シンプルなデザインではあるものの、細かな細工が見事だとしかいいようのない一品だった。パーティ用よ、とリノルアースが手ずから持ってきたのだ。リノルアースと対になっているのだと言う。

ダンスなんてまともに練習していないけれど。

踊って欲しいと手を差し出したら、彼はその手をとってくれるだろうか。

女性からダンスに誘うなんて聞いたこともないけど。一生に一度の恋の甘い思い出として、そんなささやかな一時が欲しいと思うことくらいは許されるだろう。

どさりと目の前にたくさんの書類を置かれて、アドルバードはげ

っそりとした。

「レ、レイさん？ これはなんですか？」

思わず敬語にもなる。

「分かってますか、アドル様。パーティまであと三日です。普通の準備はほとんど終わっています」

「それは解答ではないんですけど」

レイは書類の山の一枚を手に取り、読み上げる。

「イオラス王国第五王子フィリオス様、イオラスはこれから良い交易相手となる国です。きちんと交友関係を築いておいてくださいね。イオラスは織物で有名ですから、そういった話から入ると良いでしょう。あとシエン帝国は東方の国ではかなりの力を持っていますので、要注意です。今後国単位での付き合いが行われる可能性はあまり高くありませんけど、機嫌を損ねると面倒ですので。もちろん近隣諸国の方々にはそれ相応の対応をなさってください」

うーあーとかうなされる様にアドルバードは机に伏せる。

「言うまでもありませんが、アヴィランテのヘルダム様にもご注意を」

ピンと空気が張り詰めるのが分かった。現段階でもアヴィランテからやってきたシェリスネイアもヘルダムも格別の扱いでもてなししている。

「それで、明日の夕食にお二人を招待してはどうかと陛下から言われておりますが」

「……そのときのセリフを一言一句間違えずに言ってみる」

嫌な予感がしたアドルバードが顔を伏せたままそう言う。

「『ヘルダム様が要注意なのは分かり切ってるんだから、先に手を打っておくのも賢い手だよなってことで若い者同士で親睦を深めるといいんじゃないかな。こっちはノータッチって言ってるしね？』

ということですよしく……だそうですが」

「よく覚えてたなそんな長くてアホらしいセリフ」

レイが言うからまだましだが、あの父親が口に行っているところを

思い浮かべればそのセリフが冗談まじりに言っているようにしか思えない。

「急な話だけど……まあ、一応使いを出しておけ。もう少し腹は探りたいところだし」

ヘルダムがシェリスネイアと顔を合わせるが良いかどうかは甚だ疑わしいところではあるが。

そうですね、とレイも当然のごとく賛成する。

その選択が間違っているなんて、このときは思いもせずに。

「
夕食に？」

やってきた侍女は笑顔ではない、と答える。

ふうん、とヘルダムは興味深げに笑う。

「ぜひに、とお返事しておいてください。楽しみにしてます」

作り笑顔はこれまでの人生で嫌というほどに培われてきたものだ。使いの侍女も疑った様子はなく、一礼して去っていく。

くすくすという笑いが部屋に満ちる。

窓の向こうは銀世界。降り積もる雪は止むことを忘れたかのよう
にいつまでも降りそそぐ。

「それじゃあ、少し早めにゲームを始めるかな。さて、あちらさん
はどう出てくるんだか」

曇る窓を手のひらで拭い、静かに降る白い結晶に微笑みかける。

ひどく優しい微笑みだった。

49： 大丈夫、大丈夫だから

夕食は結局、ハウゼンランドの双子とアヴィランテの兄妹のみの少人数のものとなった。アルシザスの国王を同席させるのも、ネイガスの王子を招くのも不自然なので却下となったのだ。

「シェリー。お願いだから喧嘩売らないでよ？　いつものように猫かぶっててちょうだい」

シェリスネイアは早めに部屋にやって来たので、あとはヘルダムを待つのみとなった。リノルアースは先ほどから何度も念を押している。

「平気よ。ようは話さなければいいんだもの」

きちんと席についているシェリスネイアの様子はそのセリフを裏切っている。

「全然平気じゃないし……いつそ腹痛とかで逃げる？」

「冗談！　敵前逃亡なんて絶対にごめんです！」

敵とか言ってるし、と苦笑するアドルバードの側にはレイがいる。食事が始まった際は入口のあたりに控えていることになるが。

「アドル様も、気をつけてくださいね。くれぐれも馬鹿な真似はしないように」

「……心配されるほど俺って信用ないのか？」

言われなくても分かっている、とアドルバードは呟く。

席も、本当は双子とアヴィラ側とで向い合せになる予定だったのだが、シェリスネイアの様子を見て男女で向かい合うことになった。隣なんかに座らせたら拳を振るいそうな勢いだ。

「リノル様も、ルイはいないんですからね。そのあたりを考えて行動してください」

ルイは正体がばれてしまう可能性も捨てきれないのでこの場にはいない。一目で南国出身だと分かる以上、できる限りヘルダムと顔を合わせることだけは避けなければというのが全員の見解だった。

早めに集まった三人の前には飲み物が運ばれてきた。騒いでいるから喉が渴くだろうという優しさからだろうか。

「あら」

グラスに注がれている赤い液体を見て、シェリスネイアが困ったように声を上げる。

「どうしました？」

アドルバードが一番先に気がついて問いかけると、シェリスネイアは苦笑して答えた。

「葡萄酒は苦手なんですけれど、言っていないませんでしたわね」

葡萄酒というよりはアルコールが苦手なのだろう、それなら、とアドルバードが自分のグラスを持ち上げる。

「俺のと替えますか？ まだ口もつけてませんし、ご迷惑でなければ。ただの林檎水ですよ」

「なによ、一人だけお酒じゃないって」

リノルアースが不満そうに問うと、アドルバードが苦笑した。

「腹の探り合いなのにアルコールで頭を鈍らせたくないからさ。まあ、一杯くらいなら平気だし」

いつも頼りにしているレイは背後にいるわけじゃない。念には念を、というわけだ。

「では、お願いできます？」

シェリスネイアは照れたように笑い、二人はグラスを交換する。

不作法ではあるが気にする者はいないのだからいいだろうと、誰も気にしない。

それから数分して、シェリスネイア曰く『敵』であるヘルダムがやって来た。

印象はやはり悪くない。

目と目でリノルアースも合図する。たぶんリノルアースも同じ答えに行き当たったのだろう。

二、三他愛ない会話をして、食事が運ばれ始める。

「アヴィランテの料理とはまるで違いますから、お口に合うかどうか分かりませんが」

「確かに違いますが、こちらの料理もとても美味しいですよ。城のつくりから服装から、まるで違いますからね」

とても飽きません、とヘルダムは笑う。

「シェリスネイアも、こちらのドレスを着ているんだな。とても似合っている」

突然話をふられたシェリスネイアは一瞬猫のように毛を逆立てそうになる。しかしリノルアースに脇腹をつつかれて、につこりと微笑む。

「ありがとうございます、ヘルダム様」

兄妹であるとはいえ、アヴィランテでは王子と姫の地位の差は明らかだ。ここで大嫌いなヘルダムを『様』をつけたあたりでシェリスネイアは頑張った。

ある意味ではその様子が微笑ましく、アドルバードは笑いながらグラスを傾ける。

「

っ！？」

喉が、焼ける。

悲鳴も上げることが叶わず、アドルバードはそのまま椅子から崩れ落ちた。グラスを割らないようにとテーブルに置いたあたりはまだ頭が冷静だった。

毒が入った、証拠が消えないように。

「アドルバード様っ!?!」

悲鳴に近いレイの叫び声がかろうじてアドルバードの意識を繋ぎ止める。

倒れたアドルバードに一番先に駆け寄ったのは、一番遠くにいたはずのレイだった。

「誰か医師を! 誰も動かないでください! 勝手に動いた者は誰であろうとも斬ります!」

物騒だな、という言葉が紡げず、アドルバードはただ唸るだけだ。
「アドルバード様! 吐いてください!」

レイの叫びは虚しく、アドルバードの意識は徐々に遠のいていく。
レイの細い腕にしがみつく強さは一方で増していく。

「アドルバード様!」

泣き声のような、レイの呼び声。

大丈夫、大丈夫だから。

言葉は紡ぐことができず、アドルバードは深い深い思考の底へ沈んでいく。

レイの纏う空気が変わった。

駆け付けた医師にアドルバードを任せると、いつ抜いたのか剣を構えていた。

「レイ! 駄目よシェリーは違う!」

「しかし!」

リノルアースの悲鳴に近い叫びにレイの動きも一応は止まる。その声がなければ間違いなくレイの剣はシェリスネアを斬っていただろう。

「シェリーは何も入れてなかった！ 私が見てたもの！ 落ち着きなさいレイ・バウアー！ 主であるアドルの顔に泥を塗るつもり！？」

アドルバードの名を出されて完全にレイの動きが止まる。

剣をしまい、シェリスネイアに頭を下げる。

「申し訳ありません。ご無礼を」

あまりにも突然のことで呆然としていたシェリスネイアは一連のことに反応をできず、いいえ、と答えるだけだった。

「飲み物を運んできた侍女を捕らえなさい！ 同時に厨房にいた者全員に話を聞け！」

医師からわずかに遅れてやって来た騎士にレイは堂々と命ずる。

レイはアドルバード専属の騎士だが、地味的には騎士団を動かすだけのものがあるのだ。

「俺の仕事がないな、さすが俺の娘と言うべきか」

「あなたの到着を待つていては逃げられます」

遅れてやって来た騎士団長である父、ディークに向かってレイは冷たく言い放つ。

ディークもレイの采配を信用しているから急いでこなかったのだろつ。

「もういい。殿下のところへ行け」

静かに、強く、そう命じられる。

レイは堪えていた何かが弾けたように、一礼してアドルバードのもとへ走った。アドルバードは自室へ運ばれた。毒により発熱し、昏睡状態になっているだろう。

その後姿を見送りながら、やっと現状が理解できたかのようにシエリスネイアが崩れた。

「……………私の、せい」

たぶん、自分ならある程度毒に耐性がある分これほど大事にならなかったかもしれないのに。

あの時、グラスを替えたりしなければ。

す、と大きな手がシエリスネイアの前に差し出される。
デークだった。

「お話いただけますかな？ アヴィラの姫君」

その言葉には、有無を言わせぬ威圧感があった。

50：心配はしてるけど、信じてるから

熱い波にさらわれる。

呼吸するのも難しく、ぼんやりとした意識の中で漂い続ける。

アドル様。

呼び声が曖昧な意識のアドルバードの脳内に響いた。

忘れようもない、愛しい人の声だ。

レイ、と彼女の名前を呼ぼうとするが、肝心の声が出なかった。

行かないと。彼女の側に行かないと。

レイ。

伸ばした手は虚空を掴んだ。

目が見えない。暗闇の中にただ落ちていく。感覚も徐々に鈍くなっていく。

アドル様。

もう一度声が聞こえた。応えなきゃ、と焦りだけが広がっていく。何度も何度も 呼び声だけは耳にはつきりと届く。落ちていく深い闇にアドルバードが飲み込まれないようにと、命綱にでもなっているかのような。

頼むから。

そんな、泣きそうな声

。

「……では、もとはシェリスネイア様のグラスだったのですか」

はあ、とため息を零しながらディークが頭を抱える。

「つまり、最初はシェリーが狙われたということでしょう、ディーク。何度も言うように、シェリーがグラスに触ったのはアドルに渡す時だけよ」

リノルアースが、この国一の剣の腕を持つ男にも恐れずに睨みつける。

「そう睨まんでも信じますよ。あなたたちのことはこんな小さい頃から存じ上げているのでね」

嘘を見抜くのもお手の物だ。レイほどではないが。レイは空気の読み方や即座の判断力は全て父親から受け継いだ。

がちゃ、と扉が開いて一人の騎士が書類をディークに手渡す。

ディークはその書類をさっと読み、ふう、と深く息を吐き出して、ソファに沈む。

「　　姫が狙われたというのは定かではありませんでしたが、そうなのかもしれません。殿下が飲んだ毒は南国に生えている毒草から作られたものようです。ディガリト草というものらしいのですが」

「……猛毒です。飲んだ量が多ければ死んでしまうわ」

シェリスネイアが青ざめたまま、そう呟く。

「幸い殿下が飲んだのは致死量ではありません。しかし南国の毒となるとハウゼンランドの医師でも解毒は難しい。それが命に関わら

なければいいのですが」

「……助からないの？」

リノルアースが不安げに問う。ディークは救いになるようなことは言ってくれない。そういうところは、やはり親子なのだと思われる。

「……グラスを持ってきた侍女からも詳しいことは聞き出せていないのでしょうか？ 犯人なら簡単ですわ。私を殺そうとする者で一番疑わしいのはヘルダムですもの」

震えるような声でシェリスネイアがきっぱりと言い切る。

ヘルダムはあの後部屋で待機となった。入口には騎士が護衛という形で見張っているので逃げ出すことも、証拠隠滅することも不可能だ。

「決めつけるのは良くないんじゃないかしら？ シエリー。ヘルダム様に罪を着せようとしている者の犯行かもしれないだし？」

「それでも！ 可笑しいではありませんか！ こんなに都合良く、あの男が来てからこんなことがまた起きるなんて」

シェリスネイアが命を狙われたのは、山へ行つたあの時以来一度もなかった。ハドルスとルザードによる嫌がらせはあったが、命には関係ない。

「だから、そう思わせるのが目的かもしれないじゃないの。冷静になりなさいな」

椅子にどかりと座って、頬杖をつくりノルアースは実に偉そうだ。若干不安そうではあるものの、冷静なりノルアースにシェリスネイアが声を荒げる。

「どうしてそんなに冷静なんですの！？ 王子があんな状態だといふのに！」

しん、と部屋が静まった。

ひんやりとした空気がリノルアースの周囲に纏わりつく。

「なに？ 私が心配していないとでも言いたいのか？」

リノルアースの声は冷たい。

その青い瞳がまるで氷のような鋭さをもってシェリスネイアを射抜く。

「馬鹿言わないで。正直こっちはあんたなんかの話に付き合っていないで、アドルのところに早く行きたいのよ」

まあ、今行ってもお邪魔でしょうけど、と続けながらリノルアースはため息を吐きだす。今頃はレイがアドルバードについているだろう。

「人のこと血の通っていない人間みたいに言わないでよ。そっちに思いやりがあるっていうなら、くだらない話をきっちりまとめて早く終わらせてくれない？」

苛立ちを露にしたリノルアースの声は重く、シェリスネイアはただ押し黙るしかない。ごめんなさい、と言おうとしてそれすら場違いに感じてしまっただけからは、シェリスネイアが紡ぎだせる言葉は少しもなかった。

「姫、一度部屋にお戻りください。騎士をつけますので、部屋からお出になりませんよう」

凍りついた空気を溶かしたのはディークの呆れたような声だった。シェリスネイアは力なく頷き、護衛の騎士と共に部屋から出ていく。リノルアースはその後姿をちらりとも見なかった。

「それでは、友人ができませんよ。姫」

諭すような声に、リノルアースは片眉を上げた。

「小言なんていらないわよ。友達なんて必要ないもの。私にはアドルとレイとレイがいればそれでいい」

それこそ小さな頃から何度も聞かされた言葉だった。リノルアースの視野は実際狭く、その限られた世界を守るために彼女は奮闘す

る。

「狭き世界に閉じこもるおつもりですか」

あからさまにため息を吐かれ、リノルアースはますます機嫌が悪くなる。

「アドルよりは社交的に装えるけど？　本当に信じられる人間がいれば、友達なんて意味ないじゃない」

「それだけではないけないこともあります」

そういう言い方、レイみたいだわ　親子なのだから当たり前かとリノルアースは紡ごうとした言葉を飲み込んだ。

「王子のもとへ行かなくてよろしいのですかな」

厭味でもなく、ただ急かすように微笑むディークをちらりと見る。

「……私ね、アドルの運の良さはとっても良く知ってるのよ」

もったいぶったようにリノルアースは呟く。頼杖について、リノルアースは窓の向こうに視線を投げる。つられてディークも窓の外を見た。白く靄がかかったように、細かな雪が降っている。

「だから簡単には死なないわ。心配はしてるけど、信じてるから」

駆け付けなくても、側にいなくても　アドルバードが儚くなることはない。リノルアースの中の何かがそう告げていた、双子故の確信か、どうか。

「それに、今はレイがしがみついている頃でしょうよ」

少し前に走り去ったレイがつきつきりで世話してるところだろう。

彼女も、邪魔されたくないだろう。今、たぶんきつと泣きたいくらいに辛いはずだ。

華奢な少女が、ハウゼンランドーの剣の腕を持つ大男を見上げる。

その瞳は押し負けぬほどに強い力が宿っていた。

「デイク、話したいことがあるの。他の誰にも内密に」

娘と同じように察しの良い彼は、ただ一度しっかりと頷いた。

51：信じる信じないはあなたの自由だ

「ん……」

小さく声を漏らして、レイは伏せていた顔を上げる。どうやらアドルバードを付きっきりで看っていて、そのまま寝てしまったようだ。アドルバードが倒れ、日付が変わった頃だろうか。

呼吸はまだ少し荒く、熱は下がらない。医師がグラスから毒を割り出し、ハウゼンランドにあるものでどうにか解毒剤を作ろうとしているところだ。

アドルバードの額にのせていたタオルを濡らして絞り、もう一度のせる。そんなことばかり何度も何度も繰り返していた。それくらいしか、今のレイには出来なかった。

部屋は真つ暗だった。おそらく深夜なのだろう。窓の向こうに寒そうな月が見えた。

水を替えたいのだが、頼めるような侍女はいないだろう。アドルバード付きの侍女は皆、レイと同じく先ほどまでずっと休まず動いていた。だからレイが休むようにと命じたのだ。

「アドル様、すぐ戻りますね」

眠っている侍女達を起こすのは可哀想だ。幸いにして、わずかだが熱が下がったようで、レイは自分で水を替えてこようと盥を持って立ち上がる。

深夜の城は、昼間の騒々しさをどこへ置いてきたのか、ひっそりと静まりかえっている。

こつこつという自分の足音がやけに響く。

幽霊でも出てきそうな雰囲気の中、レイはまったく動揺せずに、極力足音をたてないように、だが足早に歩く。

空気が冷たく、吸い込むごとに肺が冷える。

水を替え、アドルバードの部屋に戻ろうと来た時よりも急ぐと

「誰です」

行く先の角に、人の気配があつた。

どれだけ動揺してしようと、どれだけ急いでしようと、気配に気づかないほどレイは堕ちてはいない。

「こんばんわ」

こつ、と一歩出てきたのはアヴィランテの皇子 ヘルダムだ。

レイは思わず身構える。両手が塞がっていなければ間違いなく剣に手をかけているところだ。

レイの殺伐とした雰囲気気づいたのか、ヘルダムは苦笑して、両手を上げる。

「危害を加えるつもりはないから、警戒するのは止めてもらえるかな」

レイは無言のままヘルダムを一瞥し、殺気を感じないことから警戒を解いた。どうも、という気軽い声が耳に残る。

「アヴィランテの皇子ともあろうあなたが、こんなところでどうなさつたのです？」

アドルバードが倒れてから、シエリスネイアもヘルダムも部屋にいたはず。護衛も無しにこんな場所にいるわけがなかった。ましてこんな深夜に。

「ちょっとね、あなたにプレゼントを」

ある意味で表情の読めない笑顔で、ヘルダムは静かにレイに近づく。

水の入った盥の中にぼちゃん、と小さな小瓶が落とされる。緑色

の液体が小瓶の中で揺れていた。

「これは」

レイが何かを問おうとするが、ヘルダムはにっこりと笑って、レイの耳元に口を寄せる。

「信じる信じないはあなたの自由だ。大切な人を助けたいなら、それを飲ませるといい」

じゃあね、と最後に囁かれ、ヘルダムは去っていく。

「まっ……」

呼びとめようとレイが振り返るが、ヘルダムは振り返らずに手をひらひらと振っていた。

問い詰めても答える気はないのだろうと、レイはアドルバードの部屋まで急いだ。

「夜分に失礼します！　すぐにこの液体の成分を調べてください！
！」

アドルバードの部屋に盥を置き、そのままレイは城の医務室へ走った。眠っている医師を叩き起して小瓶を突き付ける。

「ど、どうしたのかね。急に」

「説明している暇はありません。すぐに調べてください！　もしかするとアドル様の飲んだ毒の解毒薬かもしれない」

医師は目を見張り、そして小瓶からほんの少しだけ液体をとる。それから苛立つほどに時間がゆつくりとすすみ　グラスに残っていた液体に小瓶の液体を零し、医師はじつとそれを見つめる。そのあとで専門的な検査をして、ほう、と息を吐いた。

「どこで手に入れたんだね？　確かにこれは解毒薬だ。アヴィランテでしか手に入らないはずだが」

その言葉を聞くなりレイは小瓶を医師からむしり取る。

「説明は出来ません。アドル様に飲ませてきます」

おい、という医師の質問やらを全て無視してレイは走り出した。

彼女の主のもとへ。

「アドル様」

息を切らしながらレイは小瓶をアドルバードの口元にあてがい、傾ける。しかし熱に喘ぐアドルバードがそれを飲み込むことは叶わず、液体が口から零れていく。

レイはこれ以上薬を無駄にしないようにとすぐに止め、一瞬の迷いもなく小瓶の中の液体を、一気に口に含んだ。零さないように細心の注意を払いながらアドルバードの唇に自分のそれを重ねる。

苦しげにアドルバードが息を漏らす。こく、と喉が鳴ったのを確認して、レイは唇を離れた。

すぐに効果は確認できるはずもないが　心なしか荒かった呼吸は規則的になっている。

ほ、と安堵の息を吐き出し、そつとアドルバードの髪を撫でる。

「……………良かった」

アドル様、と呟く。

不意に目頭が熱くなつて、動揺した。

瞳からそれが零れ落ちる様を見るのは嫌で、レイはアドルバードの上にうつ伏せる。

おまえ、泣かないよなあ。

そんなことをアドルバードは言っていた。

確かにそうだ。最近では泣くことなんてなかった。昔からそうだ。どんなに辛いことがあっても別に平気だった。耐えられた。

でも。

「あなたに、なにかあったら」

泣くかもしれない、なんて。

あの時は冗談だったけど。

生温かい何かが頬を濡らす。随分と久し振りの感覚にレイは戸惑うしかなかった。泣くことを耐えることは出来るけど、涙を止める術は知らない。

声を上げて泣くなんてことも出来ずに、レイはただ静かに泣いた。張り詰めていたものが一気に溢れていく。

今だけは泣く自分を許すしかなかった。

「レ、イ？」

聞き間違えるはずもない人の声。

うつ伏せていた顔を上げて、レイは声の主の顔を見る。

「アドル、様？」

アドルバードはああ、と小さく応え、レイを見て 目を見開く。

「おまえ、なんで泣いて」

動くのもまだ辛いだろくに、アドルバードは慌てた様子でレイの頬に触れる。まだ熱をもった掌に、レイは少しだけ甘えなくなった。

「馬鹿な質問しないでください」

自分の頬に触れるアドルバードの手に自分のそれを重ねて、レイは苦笑する。

「あなたに、何かあったからに決まってるでしょう」

アドルバードは虚を突かれたように目を丸くし、そしてごめん、と呟く。

「そういえば俺毒飲んだ？ どれくらい経った？」

「確かに飲みました。飲んだ日の深夜ですよ。もう日付は変わったでしょうけど」

そっか、とアドルバードが安心したように微笑む。

「まさかあんな大がかりなパーティの前にぶっ倒れて全部中止なんてなったら最悪だし」

相当な金がさらに必要になるだろう。弱小国のハウゼンランドには痛い話だ。

「自分の身よりお金の心配ですか」

呆れたように笑うレイをアドルバードは黙って見上げる。

彼女の頬を濡らしていた雫はいつの間にか渴いていた。その頬に

確かな跡が残っているだけだ。

その跡を優しく撫でる。

「……なんですか？」

くすぐったいのか、少し身を引きながらレイが問いかけてくる。

いや、と呟きかけ　アドルバードはじつとレイを見つめた。

「キス、したいな、なんて

駄目？」

いつになく良い雰囲気の流れに流されて欲望を口にする。

「駄目です」

しかしきっぱりと拒否されてアドルバードは少しへこんだ。レイはタオルを絞ってアドルバードの額から流れた汗を拭う。

「今はちゃんと休んでください。まだ熱があるんですから」

まあ、看病されるという立場も悪くないかとアドルバードは大人しくベットに沈む。

すぐにまた睡魔がやってきて、瞼が重くなる。優しいレイの手が髪を撫でて、心地良いな、なんて思う。

「今日はもう、しましたからね」

それが何のことなのか、夢の中へ旅立つアドルバードには分からなかった。

52：私が正しいと思った方を

夜半に目を覚ましたアドルバードはそのまままた眠りについた。正確には寝かしつけられた。他でもない彼の騎士であるレイに。心配させてしまったせめてもの償いだとアドルバードも大人しく従った。

眠るアドルバードを見つめて、レイは淡く微笑む。

油断できるほどの余裕もなく、レイは眠ったアドルバードの傍らでその寝顔を見つめ続けた。まだ熱の残るアドルバードの額に冷たいタオルをのせる。

漆黒の闇に光が差し込む。月が地平線の彼方へと消え、太陽が顔を出す準備が始める、そんな早朝だ。

レイは静かに立ち上がり、扉へと向かう。

「レイ？」

物音で起きたのだろうか、アドルバードがまだ夢の中にいるような、ぼんやりとした目でレイを見つめていた。ほとんど寝ぼけているんだろうな、と思いながらレイは主に向かって微笑む。

「すぐに戻ります。まだ起きるには早いですよ」

アドルバードはああ、と唸るように答え、またベットに横になった。

変なところで勘がいいな、とレイは苦笑しながら今度こそアドルバードの部屋から出ていく。

廊下のひんやりとした空気に身が引き締まるような気がした。

こつこつという自分の足音だけが響き、レイはしばらく歩いて立ち止まった。自然と腰に下げている剣に触れる。

「ああ、やっぱり来たか」

そう言って笑うのは　アヴィランテの皇子、ヘルダムだ。

解毒薬をレイに渡したときとなんら変わらぬ姿で、あの時会った場所に同じように立っている。

「なんとなく、居そうな気がしたので」

レイが答えると、ヘルダムは満足げに笑う。この男の仮面はまさしくこの笑顔なのだろう。

「王子様は大丈夫だった？　と聞く必要もないか。無事じゃないならあなたはここに来ないだろうし」

「あなたを完全に信じてすぐにアドル様に飲ませるような愚は犯しません」

きつぱりとしたレイの言葉に、賢明だねとヘルダムは笑みを浮かべて呟く。

「ならば剣から手を離してもらってもいいんじゃないかな。俺は王子を殺すつもりはないよ。今も以前も、そしてこれからも」

あまりにも断定的なセリフに、レイは戸惑う。

ヘルダムは壁にもたれたまま、レイの反応を待っていた。彼には武器がない　レイは剣からそっと手を離れた。

「どうも、と言っておこうかな。それで、あなたは何が知りたくてここに来た？」

レイを見るヘルダムの目は底知れぬ闇のように暗い。笑っているもどこか噓くさく感じるのはその目のせいだろう。

「あなたの目的は何です？」

この流れでいけばアドルバード暗殺を目論んだのはヘルダムではないということになる。もちろん、一度こちらを信用させておいて後に裏切るという可能性もあるが、二度手間になる。狙いがアドル

バードだったのなら、わざわざ解毒薬をレイに渡す必要はない。そのまま死ぬまで待てばいい。

狙ったのがシェリスネイアだった、という可能性はどう足掻いても消えない。シェリスネイアを狙ったが、的が外れた。そう考えることは可能だ。しかし少なくともアドルバードの敵ではないレイにしてみればそれだけで十分だ。万が一シェリスネイアの暗殺を計画していようと、その火の粉がアドルバードに降りかからないのなら問題ない。

「シェリスネイアから聞いているんじゃないかな。彼女を殺そうとしているのは俺だと」

飄々とした顔でヘルダムは答える。

「あなたの答えを求めているのであって、シェリスネイア様の言葉を聞きたいのではありません」

簡単に誤魔化されるレイではない。隙を与えないように、間髪入れずに言い返す。

レイから見れば、シェリスネイアの考えは偏っている。それはアヴィランテの人間はすべて悪だと考えているようにも感じるほどに

彼女はアヴィラを嫌悪している。

「あなたはどちらの言葉を信じる？」

「私が正しいと思った方を」

レイが即答すると、ヘルダムは笑みを深めた。それは仮面ではない、素直な笑顔だ。しかしそれでいて人を見透かすような笑顔だった。

「あなたのような人と話していると心地いい。シェリスネイアも懐いただろうね」

答えに困るセリフに、レイはただ黙った。その反応も面白いのか、ヘルダムは目を細める。

「主に伝える伝ええないはあなたに任せよう。ただ俺が言えるのは、俺はシェリスネイアを殺さないということだけだ」

きっぱりと言い切られた言葉に、レイは偽りは感じなかった。

「レイ？」

アドルバードの部屋に戻ろうと廊下を歩くレイを呼びとめる者がいた。鈴の音のように軽やかで、美しい声。

振り返ればそこには朝日を浴びて立つリノルアースがいた。赤みがかった金の髪がきらきらと輝いている。

「リノル様。どうなさったんです、こんな朝早く」

ようやく太陽は昇ったが、動き出しているのはせいぜい使用人くらいだろう。貴族や王族は朝の遅い生き物だ。

「目が覚めたから……レイがこんなところにいるってことは、アドルはもう大丈夫なのね？」

ええ、とレイが微笑む。アドルバードが意識を戻したのは深夜だったのでリノルアースに伝えるには朝にしようと思っていたのだ。

「これからアドル様の部屋へ？」

ならご一緒しましょうか、とレイが言うとリノルアースはただ頷いた。アドルバードが目を覚ました今、リノルアースが悩むことはないと思うのだが　　つい先ほどまで一緒にいた人物を思い出してレイはリノルアースの表情をうかがう。もしかしたら、彼女なりに何か掴んだのかもしれない。

「何か、ありました？」

静かに問うと、リノルアースは困ったように微笑む。

「隠し事できないわね、レイには」

ぴた、とリノルアースは立ち止まる。気がつけばアドルバードの部屋の前まで来ていた。

レイが扉を開け、リノルアースは当然のように先に部屋へ入る。

奥の寝台で横になっているアドルバードはまだ眠っているようだ。
そのアドルバードをちらりと見て、リノルアースはソファに座る。

「カードを見せ合いましょう、レイ。どうやって解毒薬を手に入れたのかしら？」

不敵に微笑むリノルアースの前にレイは腰を下ろす。

主が目覚めますまで、まだ十分な猶予があるだろう。

ふう、と息を吐いてレイはリノルアースと向き合った。二人とも目が合うと、一瞬だけ微笑む。

「どうぞ？」

リノルアースに促され、レイは口を開く。

いくら相手がリノルアースだとしても手札のすべてをすぐには明かさな。今ここで語るのは、リノルアースが問うただけ。

それ以上は　リノルアースの出方次第だ。

「王子の、意識が戻った？」

シェリスネイアにその知らせが届いたのは朝、目覚めてすぐだった。

ほ、と安堵の息を吐く。

「そう、良かった……」

そう呟くシェリスネイアの大きな瞳から、ぽたりと一滴の雫が落ちる。

落ちた雫にほんの少しだけ驚いて、シェリスネイアは染みの出来たドレスを見つめた。

「良かった」

もう一度呟かれた言葉はどこか空々しい。

水滴は頬を伝い、もう一つ染みを増やした。

涙の理由は、本人しか知る術がない。

53：南の人間は皆汚い

「なんというかまあ、存外に　いや、予想通りしぶといな君は」
鬱陶しいくらいに晴れやかな笑顔でカルヴァがお見舞いという大義名分を掲げてアドルバードの部屋にやってくる。

「しぶと言うな。ていうかうるさいから出てけ。病人を労れ」

「病人じゃないだろう。毒を飲んだだけだ」

「だけとか言うな」

こっちは死にかけたんだよ、とアドルバードが唸る。カルヴァは顔色の良くなつたアドルバードを見てにこにこ笑っている。

「だけじゃないか。しょっちゅうある」

「そっちとここを一緒にするなよ。そんな殺伐としたことしょっちゅう起きてたまるか」

アルシザスといい、アヴィランテといい、南国では毒はそんなに身近なものなのか。そんなにスリリングな生活を送ってるのかこの連中は。

「確かにここはのんびりとしていて実に良いな。老後の生活として理想的だ」

「十代の若人が現段階で住んでる国を老後とか言うな。悪かったな田舎で」

「いやいや、実に素敵だとも」

にこにこ機嫌よさそうに笑うカルヴァにうんざりしながら、アドルバードはため息を吐く。

「そんな調子で明日のパーティは大丈夫なのかね？　主役だろう、一応」

アドルバードはもう毒に苦しんでいるわけでもないというのに、レイのお許しが出ずにベットに縛り付けられている。

「うーん……もう熱はないんだけどなあ」

心配症というか、過保護だからなあ、と惚気のような声が漏れる。

「あのアヴィラの姫君に剣を向けたというじゃないか。相変わらず騎士殿は君のこととなると周りが見えなくなるな」

「……………そんなことしたのかあいつ」

聞いてないぞ、とアドルバードは頭を抱えながら唸る。

「姫君の嫌疑はリノルアース姫が晴らしたようだがね。正直疑わしいとは思うよ、私は」

「何言いつすんだよ、突然」

にこやかな表情が、冷徹な王の顔に変わる。アドルバードが不審げに眉を顰めた。シェリスネアが人に毒を盛るような人間には見えない。否、そう思いたくないだけなのか。

「覚えておくといい。南の人間は皆汚い。己の利益の為にしか動かんよ。リノルアース姫も、親しい友人だから思わずかばったのだろうが」

「そんな浅はかな女に見えますかしら？」

カルヴァの真剣な声を遮ったのは、美しい歌声のようなリノルアースの声だった。

扉に背を預け、不敵に微笑む。その傍らにはルイがしっかりと立っていた。

「リノル」

アドルバードが妹の名を呼ぶ。リノルアースはゆっくりとベットに近づき、ちらりと部屋の中を見回す。

「レイは？」

突然部屋にやって来た理由はそれだったのだろう、アドルバードは苦笑しながら「いないよ」と答えた。カルヴァがやって来ている時は、何を密告されるか分かったものじゃないのでレイは退出させている。

「どうせ近くで暇つぶしてるんでしょ。ルイ、探してきて」

「急用なのか？」

リノルアースのことだから、ただの暇つぶしに来たのだろうと思
っていたのだが。アドルバードは首を傾げながら問う。同様にカル
ヴァもリノルアースを見た。

「まあね」

リノルアースはアドルバードをちらりとも見ずに、ただそれだけ
答えた。

ルイが部屋から出て、少し廊下を歩くとすぐに姉の後ろ姿を見つ
けた。リノルアースの言っていたとおりかと笑いながら足を速める。

「やっぱり、貴女の主には伝えていないんだ？」

面白がるような声。ルイにはその声の主に覚えはない。

「……あなたには関係のないことでは？」

レイの返答は冷静だ。しかしどこか緊張している様子に、ルイは
警戒心を強めた。あの姉が警戒するほどの人間なんて、ハウゼンラ
ンドにいただろうか？

「どうか。俺が味方になればそちらとしては願ってもないことな
んじゃないかな？」

「それを決めるのは早計というものでしょう。それにした
って、どうやって護衛の目を逃れてここまで来ているんです？ タ
イミング良く、私が一人になる頃を狙って」

「さあ、どうやってだと思っ？ 運命が何かじゃないかな？」

声をかけるか否か考えて ルイは結局立ち聞きしているような
形に留まってしまった。人目を避けるように廊下の角で話している
二人から、ルイの姿は見えない。

「誤魔化すのはいいかげんにしてただけませんか。ハウゼンラン
ドに来た目的は何なんです？」

「聞いてばかりだな、貴女は。完全に味方についたとも思えない人
間に手の内を見せるほど愚かじゃないよ、俺は」

どちらも一步も引かないその会話は、どれほど続いたのだろうか。会話の中から、レイが話している相手を探ろうとする。

一体誰と話しているのか。

ほんの一瞬、気を緩めたその時だった。

「誰だっ!？」

レイの殺気がルイに押し寄せる。ルイが反射的に抜いた剣は、レイが斬りかかったその瞬間に痺れるほどの衝撃を受けた。

「ルイっ!？」

驚いたレイからは研ぎ澄まされた雰囲気が消え、剣が収められる。ほっと安堵の息を吐きながら、まだこの姉には敵わないかな、と思った。

「おまえ、何をして」

問い詰めるような声が途切れる。レイの色白な顔が、いつもよりも白い。否、青いと言うべきか。

「曲者はそちらのお知り合いだったのかな？ 問題ないならこっちは構わないけど」

角から顔を出した青年は、南国の人間特有の濃い肌に黒い髪。そんな特徴の人間は今ハウゼンランドに数人しかいないだろう。そしてその中でレイが警戒し、緊張を強いられるのも限られる。アルシザス王・カルヴァ、そしてアヴィランテの皇子ヘルダム。

ルイが知らないのは、後者ではない。

「これは面白いものを見つけたなあ。ねえ、貴方はハウゼンランドの人間なのかな？」

探るような眼に、ルイは背筋が凍る思いがした。レイの顔色が悪いのはたぶん同じ理由だ。

ルイは、会ってはいけない人間に会ってしまったのだ。

リノルアースはそわそわと扉を見る。

どうせレイのことだ、アドルバードから命じられて部屋を出ていたのだとしても、異変があればすぐ駆けつけることのできる距離にいるのだろうと思っていた。それだというのに、迎えに行ったルイも戻ってくる様子がない。

何かあったのだろうか。

嫌な予感が胸をよぎる。

「遅いわね」

わずかな不安がそのまま声に出た。

すぐに戻ってくるだろ、と事情を知らないアドルバードはのんきなものだ。事情を知らせなかったのはもちろんリノルアースとレイなのだが。

「顔色が悪いな、リノルアース姫。可憐な顔が曇ってしまったては太陽が蔭るようなものだよ？」

いつもどおりのカルヴァの口調だが、そう語る顔は真剣そのものだった。

そうよね、あなたは南の人間だものね。

リノルアースは苦笑して、手の甲に贈られるキスを受取る。

「生憎、太陽は私ではありませんよ？」

「何を言うのか、そんなに輝かしいのに」

「そういう口説き文句は本当に惚れてる方になさったらどう？」

「しているが効果がないのだ」

まったく何が悪いのだろうな、とカルヴァは真剣に悩む様子が可笑しい。

につこりと微笑みながらリノルアースは呆れた様子でこちらを見て

いる兄を見る。

この国を統べる太陽は私じゃない。

真の太陽は、いつだって輝きを失わないから。

54： あの人、私の全てです

「彼は、私の弟です」

す、とレイがルイの前に立つ。ルイより背が低い為に全てを隠すことはできないが……一種の牽制なのだろう。

「へえ？ 随分と似ていないね」

ヘルダムの探るような目は相変わらずだ。狙いを定める獣のような鋭さがどこか感じられた。

下手に嘘をついても見破られるだろう、レイは直感的にそう思った。

「白と、黒ですからね」

それでも誤魔化すように話題を逸らす。

「砂漠の民の言葉だったかな？ なるほど、面白い名付け方だねえ」
「明かすべきか、明かさざるべきか 平静を装いながらもレイは考えていた。未だにヘルダムの狙いは掴めていない。シェリスネイアの命なのか、アドルバードの命なのか、それともまるで別のものなのか。」

「拾った犬猫につけそうな名前だよねえ」

くすりと笑う目が笑っていないかった。背筋に冷たい何かが這った感覚が気味悪い。ルイは思わず一步後退った。

「どこまで、知ってるんです？」

静かに問うレイの声がやけに響く。

隠すことはもう叶わないと、ルイも本能で悟っていた。

「たぶん、ほとんど かな？ だてに長く生きていないしね？」

君達には負けなくらいには、と笑うヘルダムは若く見えるものの、二十四歳くらいだったはず。レイが立ち向かうにも経験が足りなかった。

「……ルイ、先に戻りなさい。アドル様にヘルダム様が来ることを伝えるように」

せめて心構えを作る余裕くらいは必要だろう、とレイが小さく命じる。ヘルダムは聞こえたその声を流し、ただ目を細めて傍観するだけだ。

「え、姉上……！？」

敵かもしれない男を、という顔でルイは姉を見る。しかし揺るがないレイの瞳に大人しく頷く。今部屋にはアドルバードとカルヴァ、そしてリノルアースがいる。たとえ乱闘が始まろうとこちらが有利なはず。

ルイは一礼してその場を去る。

わずかな沈黙の後、レイはじつとヘルダムを見た。

「先に、言っておきます。我が主を傷つけるとあれば誰であれ容赦はしません。そして」

一瞬言葉に詰まった後で、レイは睨むようにヘルダムを見た。

「あれは私の弟です。この国一の男の息子であることもお忘れなく。何かあればそれ相応に」

静かな　そう、とても静かな殺意にヘルダムは微笑む。

「それは、脅しのつもりかな？」

「いいえ。念を押しているだけです」

脅しにならないということくらい、レイにも分かる。いくらヘルダムが腕の立つ人だとしても　ここで命を奪うことはそう難しくないだろう。しかしその後を考えれば、そんなこと実行することはできない。大国を前にハウゼンランドは無力に等しい。

それに、もし　ヘルダムがルイの真実をあの一瞬で探り当てた

としたら、その時はハウゼンランドが罪を負う可能性も捨て切れな
い。

「いいね、貴女のその性格は清々しくて。貴女がそこまでするほど
の人なのかな、あの王子は」

レイは部屋に向かって歩き始める。返事がないことを気にする様
子もなく、ヘルダムも後ろをついてきた。

「あの人、私の全てです」

振り返ることもなく、レイは呟く。

その答えにヘルダムは何も言わずに、ただ優しく微笑んだ。

「なんでそんなことになってるんだ？」

慌てて戻ってきたルイにヘルダムの訪問を告げられて、アドルバ
ードは青ざめる。

「アドルの解毒薬をヘルダム様からいただいたからでしょー？ ま
だ接触してきているのは初耳だけど」

リノルアースがため息を吐きだしながら答える。

「俺はその事実すら知らん！」

おいてけぼりか！ とアドルバードは怒りながら机を叩く。

「え、え、と、ですね。姉上はたぶんアドル様の身の安全を考えて、
何も言わなかったんじゃないかなー、と弟の俺は推測するんですが」

「そんなことは俺でも分かるわ！ 弟だからってデカイ顔するなむ
かつく！！」

俺がいつデカイ顔したっていうんですか、と泣きごとを言うルイ
をリノルアースはじつと見る。

「それじゃあ、あんたのことはバレたと思っていいのかしら？」

レイに隠し事をされていたアドルバードは怒りのあまり使い物にならないようだ。リノルアースはそんな兄を放って、その場を整え始める。ヘルダムが来る前に整理しておかなければ。

「おそらく、気づいていると思います。立ち聞きした内容からいつでも、完全に敵というわけでもなさそうですが」

「自分に益があると思えば形だけでも味方となるだろう」

カルヴァがいつになく真剣な顔で呟く。

「レイは一人で探ろうとしていたわけね、ホントあの人には驚かされるわ……」

「だからなんて全部一人で抱え込もうとするかなあ俺はそんなに頼りないのかそれは身長のせいかなチビだからなのかレイの奴いつもいつもいつも勝手に動いて勝手に解決してたり助かるんだけどそれってどうよっていうかあ！」

「そのチビうるさい」

ぶつぶつとアドルバードが愚痴っているのに嫌気がさしてリノルアースが手ごろなクッションを兄に向って投げる。

「おまえの方がチビだろ！？」

「私が言ってるのは心の方よ心の！ チビで狭くて最悪ねー！！」
「なにおう！？」

そこらへんにしてくださいよ、というレイの制止も聞かずに双子は言い争いを始める。レイはそんなことのために猶予をくれたわけではないだろうに。

わずかな間激しい言い争いが続いたあと、リノルアースがこぼんとわざとらしく咳払いする。

「まあ、しかたないわね。アドルのためにここでもう一つ教えておいてあげましょ」

本当はレイがいる場で、と思っていたのだけど。そう前置きしてリノルアースは続ける。

ふざけていた雰囲気はどこにいつてしまったのだろう　リノルアースが静かに目を閉じ、その青い瞳がまた姿を現した時には部屋

はしんと静まり返っていた。

リノルアースの唇がゆっくりと動く。

アドルバードは耳を疑った。

「アドルに毒を盛ったのはシェリーよ」

嘘だろう、という言葉はリノルアースの静かな瞳が言葉にさせなかった。

「分かるわね？ 少なくともシェリーは敵なの。このことをよく考えて、ヘルダムを見極めるのね」

カルヴァはやはりな、と小さく呟いていた。

アドルバードは言葉に詰まって、そして近くにいたルイを見た。

彼も知らされていなかった 知らせたくなかったのだろう、リノルアースは 青ざめた顔で、ただ茫然と立ち尽くしていた。

「アドル様、戻りました」

レイのその綺麗な声が耳に届くまで、アドルバードの世界は止ま

っていた。

ゆつくりと開く扉の向こうには銀髪の騎士と
んで立っていた。

南国の皇子が並

55：王座を手に入れる。そのために？

ヘルダムが部屋にやって来て、妙な沈黙が部屋を支配する。

レイがずっとアドルバードのもとへと戻り、耳元で「大丈夫ですか？」と静かに問う。

心配するな、という意味で一度頷く。

「そちらはアルシザス王、カルヴァ様かな？　こうしてお会いするのは初めてですね？」

緊張するハウゼンランド側のことなど気にならないのか、ヘルダムがにこやかにカルヴァに挨拶する。

「ああ、お会いできて光栄だ。ヘルダム皇子」

カルヴァも外交面のままで握手を交わしている。

ヘルダムは笑顔を崩さないまま、いいなあ、と呟く。

「やはり貴方は人を集める何かがあるんですね。アドルバード王子。魅力的な人がたくさんいる」

褒めているのか、そうではないのか　図りかねてアドルバードはただ苦笑する。

「俺の力ではありませんよ」

「いや、たぶん引き寄せる力があるんでしょう」

きっぱりと言い切られてアドルバードは言葉に詰まる。にっこりと笑うヘルダムに早くも押され気味だ。

「　とある、国の話です」

静かにヘルダムが口を開いた。
笑顔の仮面は張り付いたまま、その表情の奥は読み取れない。ア

ドルバードはただ黙って話を聞くことにした。リノルアースも今のところは口を挟むつもりはないらしい。

「国はとても大きかった。王様にはたくさんの息子と娘がいた。どれも違う女に生ませた子供で、お互いに兄弟だなんて意識はなかった。王様は次から次へと若い妻を迎え入れて、子供は増えていく一方だった」

淡々と語られるその話がアヴィランテのことであることは容易に分かった。

「息子が八人まで増えたところで、生まれた息子はどんどん変死するようになった。一人は病気で、一人は落馬で、一人また一人と実際は他の息子の後盾が暗殺しているなど、暗黙の了解で知られていた。そのうち男の子が生まれた場合は密かに逃亡させたりしているようだった」

ヘルダムはその時に一瞬ルイを見たようで、リノルアースやアドルバードの肝は冷えた。しかしヘルダムはそのまま語り続ける。

「おのずと子供たちの中で権力は一番最初の息子に集中した。彼は権力を駆使して生まれてくる男の子を殺し、女の子は駒として生かした。成長するにつれその独裁はひどくなり、もはや裏で動かす力は王様も超えていた。国はどんどん腐敗していった。他の息子も黙っているわけではなかった。しかし力ない者は叩き潰されるだけだった。そこで、二番目の息子は考えた」

ぎし、とヘルダムが深くソファに沈む。

その深い緑色の瞳がアドルバードを捕らえた。

「従順な　または興味のない風に装って、徐々に周囲から埋めてしまおう、とね」

現在アヴィランテ内の勢力は第一皇子サジム派と、表面下で動くヘルダム派がある。サジム本人もヘルダムを中心に据えようとする動きには気づいているだろうが、本人が動いているという確たる証拠は掴んでいないはずだ。気づかれないようにしか、ヘルダムは動いていない。

「……それが、あなたの本音ですか。ヘルダム皇子？」
アドルバードは静かに口を開いた。

「　王座を手に入れる。そのために？」

続いた問いに、ヘルダムは笑った。

「アヴィランテを浄化するために、かな」

随分と偉そうな大義名分だけど、と付け加えられる。だけどこれがヘルダムの本心なのだろうと、アドルバードは本能で悟っていた。
「外国勢力を味方につけるにも、うちでは力不足だと思いますけどね。アルシザスとはとかく」

「アルシザスを味方につけようと考えればこちらが最短ルートだった、と言えいいかな。将来成長するであろう国でもあるしね」

アルシザスが目的だった、と隠さずに言うあたりがいつそ清々しい。

「そもそもシエリスネイアがこの国に足を踏み入れなければ、俺も来ることはなかったけれどね」

びく、とその言葉に反応したのはルイだった。しかし口を開くことなく、黙り込む。

「シエリスネイア様を、殺すおつもりですか」
弟の中に浮かんだ疑問を、レイが口にした。

まさか、と笑うヘルダムは相変わらず心の内が読めないが、一番接触しているレイとしては偽りはないのだろうと感じた。

「以前にも言わなかったかな？ 俺は誰も殺す気はないよ。無益に血を流すのは本意じゃない。あの子を殺そうとしているのは俺じゃないしね」

シエリスネシアが暗殺の危機にあるということを隠すつもりはないらしい。

リノルアースがふうん、と呟く。しばらく無言で観察していたが、それもそろそろ終わりのようだ。

「では、誰がシエリーを殺そうっていうの？」

「それが貴女の地なのかな。麗しのリノルアース姫。君の兄君はシエリスネシアに殺されかかったんだと思うけど？」

その言葉にアドルバードとルイの表情が固まる。上手い切り返しにカルヴァヤリノルアースは面白そうに微笑んだ。

「そこまで知っていたらっしゃるの。そうよね？ その節は解毒薬をどうもありがとうございました。……けどそれとこれは別よ。実行したのは確かにあの子だけど、裏で操ってる人間がいるんだから」

違うかしら？ と小首を傾げて問うリノルアースの姿は実に可愛らしい。

「シエリスネシアはサジム派だよ」

答えるヘルダムの声は驚くほどに平坦だ。

ただ張り付いた笑顔だけがそのまま、それがある意味で不気味にも思えた。

「彼女は、サジムの駒だからね。そうしなければ彼女の母親が生きていけない。彼女が王子に毒を盛ったのもあちらから指示があったからだろう。そして俺に罪をなすりつけるなり、俺も後で殺そうと考えていたのかもしれない」

それは、あの美しい少女からは想像できない言葉だった。ここに

ウィルザードがいなくて良かったとアドルバードは思う。

「……なぜ？」

ルイが静かに問う。それは少し意味の掴めない問いだ。なぜシェリスネイアはサジムの駒なのか。なぜ母は生きていけなくなるのか。なぜ彼女は毒を盛ったのか。その全てが含まれているようで、その全てが関係のない言葉のようだった。

ヘルダムの深緑の瞳と、ルイの緑色の瞳がぶつかった。

「彼女の母は狂っている。その上病んでしまった。もし声高に俺の味方につけば、彼女の母はサジムに簡単に殺されてしまうよ。」

あんなのでも、一応親だからね。彼女にも肉親の情はある。親を守ろうとするなら、俺にはつけない」

「……本心では、ないと？」

ヘルダムの言葉に、ルイの表情が見る見るうちに曇っていく。問いかける声さえいつももの彼ではないようだった。

「優しい子だからね、本心ではないだろう。ハウゼンランドへ来たのも、あわよくば彼女を味方につけようと思ったからだ。あの子の利用価値は高い。だからサジムもある程度自由にさせているし、今まで生かしてきた」

じ、とヘルダムの瞳がルイを観察するように見つめる。

リノルアースはその瞳に少し動揺し、誤魔化そうと口を開きかけた。

「妹を、救いたいと思うのなら俺につくことだね。ヴィルハザード」
しかしリノルアースの言葉はヘルダムの声に遮られる。

ヴィルハザード。

聞いたことのない名に、ルイの瞳が揺れた。

ヘルダムはにっこりと微笑みながらルイの顔を見つめた。

「アヴィランテ帝国第九皇子、ヴィルハザード。
の名だろっ？　　ルイ・バウアー」

君の本当

56：この世で一番綺麗な宝を手に入れる為に

ヴィルハザード。

それが、ルイの本当の名前。

初めて聞いたその響きに、リノルアースは言い表せない違和感を覚えた。

先ほど紡いだそうとした言葉はどこかへ飛んで行ってしまった。何を言えばいいのかわからずに、リノルアースはただルイを見上げる。

一瞬揺らいだ瞳は、今はただまっすぐにヘルダムを見ている。

「俺の名前はルイ・パウアーです。それだけで十分だ」

はつきりとしたその声に、ヘルダムは驚いたように目を丸くする。すぐに大きく笑い始めた。

「欲がないな。皇子に戻れば手に入るものはたくさんあるだろうに」
「皇子として、アヴィランテには行きます。だけど俺が自分の名と認めるのは一つだけです。それ以外はただの記号でしかない」

ふうん、とヘルダムは微笑む。その瞳はしっかりとルイを捕えていて、他は何も見えていないようだ。

「敵になるというなら、殺すよ？」

明らかに不利な状況で、ヘルダムは不安なんてものは微塵も感じさせずにそう言い放つ。

「敵にはなりません。俺は、アヴィランテの皇子という肩書が欲しいだけです。条件さえ合うのならあなたの駒にもなりますよ」
「肩書、ね。なんの為にそんなものが必要なのか」

これほど強い力を持つ地位はそうないだろう。たとえばアヴィラン

テでは皇子であつても下に言いづけられる程度のものだとしても、他国にはそれなりに使えるものだ。

ルイはちらりとリノルアースを見た。

目が合つてリノルアースは思わず赤くなる。

「この世で一番綺麗な宝を手に入れる為に」

二人の様子を見て何かを悟ったのか、ヘルダムは満足そうに頷く。
「悪くないね。そういう青臭いのも。安心するといいよ北国の麗しい姫。彼にある程度働いてもらつたら君のもとに帰そう」

べ、別に、と口ごもりながらリノルアースは赤くなる。

「話はまとまったと考えていいのかな、アドルバード王子？」

ずっと黙つて観察していたアドルバードはため息をこぼして、一度頷く。

「俺には決定権はあるようでないので。敵でないのが分かったから十分ですよ」

その様子を見てヘルダムはくすくすと笑う。

「思いがけない駒も手に入つたし、こちらとしても十分だなあ。ここでアルシザスと同盟でも組めればなおいいんですが」

ちらりとヘルダムはカルヴァを見る。カルヴァは冷やかな笑顔を浮かべて、ヘルダムを見る。

「あなたが王座に座つたその時には、考えましょう。今の腐つたアヴィランテと繋がつても我が国には益がない」

想像していたとおりの回答だつたのだろう、ヘルダムはため息を吐きだしながらも頷いた。

「貴方も南の人間ですね」

そう呟きながらヘルダムは立ち上がる。

「シェリスネイアを頼みます。あの子を死なせるわけにはいかない。サジムはそろそろ本気で動き出すでしょうから」

「なぜ、シェリスネイア様が狙われるんです？」

部屋から出ようと扉へと向かうヘルダムに、レイが問いかける。
ヘルダムはゆっくりと振り返り、そして笑顔のない真剣な表情で答えた。

「使えない駒は必要ない　俺を殺せないシェリスネイアはもう用無しということだよ。まして彼女は自由を知ってしまったからね。これから国に戻っても使いにくくなるだけだ。その彼女に残された使い道は、国際問題の種になることくらいだ」

ハウゼンランドにいる間に、何者かに殺される。

それはつまりシェリスネイアを預かっているハウゼンランドの責任になる。そしてもしその罪をハウゼンランドの人間に着せられてしまったら　。

「守ってやって」

そう言い残してヘルダムは静かに部屋から出ていく。
その後ろ姿を部屋に残った者達はただ黙って見つめていた。

降り始めた雪を、シェリスネイアは見上げながらただその場に立ち尽くす。

冬の庭は物悲しい。すべての植物は静かな眠りにつき、降り積もる雪に白く染められていく。

手をのばして触れた雪は一瞬で消えていく。

つい先ほどになって部屋から出ることが許された。王子はもう起き上がれるほどに回復したらしく、パーティには支障ないだろう。

「……ヘルダム、でしょうね」

シェリスネイアが盛った毒はそう簡単に解毒できるものではない。決心が揺らいで毒の量が少なくなってしまったことも要因の一つ

かもしれないが　こんなに早く回復したのは、間違いなく解毒薬がアドルバードの手に渡ったからだ。

ほっとしたような、残念なような、苛立ちのような　複雑で汚い心がシェリスネイアの中で溢れ出す。

サジムには失敗が伝わっただろう。

たぶん、ハウゼンランドにいる間に殺される。

その方がいい。もうこの手を汚したくない。このまま生かされても、シェリスネイアはどんどん汚れていくだけだ。

さあ殺せばいい。

こんなにも無防備でいるんだから。

降り積もる雪の中に倒れて、そのまま真白に染められて　そうして果てられたなら、なんて美しい死に様だろう。

「　何、してるんです？」

呆れたような声に、シェリスネイアの肩が震えた。

振り返ればきっちり厚着してあるウィルザードが立っていた。

「あ、あなたこそ……」

動揺するシェリスネイアの側までウィルザードはつかつかと歩み寄る。そして片手に持っていた厚手のマントをふわりとシェリスネイアにかける。

長いこと立ち尽くしていたせいで冷えた身体はその一枚で随分と温まる。

「俺は一応あんたの護衛を任されてるんですけどね。まったく、南の人間がそんな甘い防寒で　風邪ひくでしょう」

確かにシェリスネイアはドレスに上着を一枚着ただけだ。

シェリスネイアを探していた、というより外にいることはすぐに分かったようだ。その証拠にウィルザードはシェリスネイアの為のマントを持っていたし、自分も完璧に防寒している。

「雪なんて、そんなにいいもんですかね」

わざわざ見に来るほど、とウィルザードが呆れたように笑う。

「いつも見ている人には、なんてないものかもしれないけど」

シェリスネイアは舞う雪に手を伸ばし、触れてはまた消える雪を見て微笑む。

「私は、好きです。白く、美しく、潔い。静かに積もり、そして自然と溶けていく。こんな風に生きられたら、幸せだろうと」

シェリスネイアのか細い手を、ウィルザードの大きな手が包み込む。

「……………」

シェリスネイアが不思議そうにウィルザードを見上げる。

ウィルザードはただ真剣な顔で、シェリスネイアを見下ろしていた。

「雪のように、一瞬で消えていく命が幸せだと思うほど、あんたは不幸なのか」

シェリスネイアは何も言えなかった。

ただウィルザードの瞳に吸い込まれるように、目が離せなかった。

残念だったな、とウィルザードが意地悪そうに微笑む。だがその瞳はどこか寂しげだ。

「あんたは雪になれないよ。触れても消えない。それが何よりの証
拠だ」

57：けれど願わくば

「ヘルダム様」

アヴィランテから連れて来た従者の一人が静かに一つの手紙を差し出してくる。その従者はアヴィランテにいる仲間との連絡を任せていたはず。

何があった、と問うのは避け、ヘルダムは黙って手紙を受け取った。

手紙の内容はそう長くない。

ヘルダムは一瞬だけ目を見開き、そして小さく吐息を零す。

渡された時と同じように静かに封筒の中にしまい、そしてそのまま暖炉へと放り投げた。

ぱちぱちと音をたて、手紙は簡単に灰になった。

その手紙が燃え尽きるまで、ヘルダムは黙ったまま見つめていた。

優しいあの子は、たぶん泣くだろう。

鏡に映る自分の姿を見て、シェリスネイアは一つ決意する。

董色のシンプルなドレスはシェリスネイアの美しさを引き立て、装飾品はそれぞれ主を飾ることに誇りを持っているかのように輝きを放つ。北国のハウゼンランドに合わせて結いあげた髪には白い薔薇が咲き誇っている。

アヴィランテでは見たこともないような自分の姿に、シェリスネイアは苦笑した。

衣装も、生活も、城の形も 何もかもが違うこの国とも、もうすぐお別れだ。

初めての恋も、ここでお別れ。

鏡に手をつき、シェリスネイアは微笑む。

「私は 幸せだったわね」

たとえこのまま尽きる命でも、幸せだと思える瞬間は幾度もあった。そしてそのほとんどはこの国に来てから与えられた。

散るのならこの国で散りたかったけれど それは大事な友人に迷惑がかかる。それは許せない。

「シェリスネイア様、ウィルザード様がいました」

今日のエスコートを申し出てくれたウィルザードに、シェリスネイアは素直に甘えた。その為に迎えに来てくれたのだろう。

もう夕暮れだ。太陽は西の彼方へと沈み、パーティが始める。あちらこちらの姫君が己を最高に着飾って来る。

けれどその中でも一番美しいのはシェリスネイアだろう。もしくは このドレスと対になるドレスを着た北国の姫君か。

「お待たせしましたかしら？」

迎えに来たウィルザードに微笑むと、一瞬遅れてから「いや」と返ってきた。

綺麗だの一言くらい言えればいいのに、と苦笑しながらシェリスネイアは差し出されたウィルザードの手をとる。たぶん迷いなくそんなことを言う人ならばこんなに惹かれなかっただろう。

雪のように、潔く消えてしまいたい。

けれど願わくば この人の心の中には永久に消えぬ雪の結晶と
なりますように。

「結局 こうなるのか」

朝早くに妹に起こされたアドルバードは、眠気も吹き飛ぶ己の完璧な姿を見て愕然とする。

「仕方ないでしょう。リノルが危険かもしれないなら、念を入れた方がいいわ。私のフリして側にいてくれれば安心だし」

そう胸を張って言い返すリノルアースは黒い衣装に、金の縁取り、真紅の装飾を施した男物の服を着ている。そう、本来ならばアドルバードが着るはずだったものとまるつきり同じ、リノルアースのサイズに合わせたものだ。多少の身長差は踵の高い靴でカバーされてしまった。

対するアドルバードはリノルアースの着るはずだった シェリスネイアと揃いのドレスを着ている。薄紅色のドレスはシンプルだが、着る人間の美しさを十分に引き立てる。髪を飾る赤い薔薇がドレスの質素さをフォローしていた。真冬のハウゼンランドで生花を髪に飾ること自体が贅沢だろう。

「シェリーには白い薔薇を贈ったの。黒い髪に映えるでしょうねえ」
にこにこ楽しそうに笑うリノルアースからは、上手く感情が読

み取れない。

随分とシェリスネイアを気遣っているようだが、本来の彼女ならば千倍返しするに等しい相手だ。リノルアースのもとからルイを奪い、兄のアドルバードには毒を盛ったのだから。

「 気に入ってるよな、おまえ」

シェリスネイア姫のこと、と口にしなくても双子の妹には分かる。「 ええ、まあ。似た境遇だしね。……似てるけど、私よりずっと可

哀想だわ。本人がそんな同情求めてないから言わないけど」

それより、トリノルアースが真面目な顔でアドルバードを睨む。

「計画！ 一言一句間違いに覚えていてるんでしょうね！？ 私がレイを借りていくんだからフォローはないと思いなさいよ！？」

何を隠そう朝早く起こされたのは昨日の夜のうちにリノルアースとレイによって話し合われた内容を頭に叩き込むためだ。おかげでもう夕暮れになる今も眠い。

「計画って何でもないだろ……なんせ親玉は遠い南の空の下だし」「手下は山ほど潜んでるでしょーがっ！！」

それも国としてはどうなんだろう、と思いつながらアドルバードは乱れたドレスの裾を直す。

「分かってる。守るよ。おまえの数少ない友達だもんな」

アドルバードは微笑みながらリノルアースの頭を撫でる。

「……その格好で言われてもときめかないわ」

残念ね、と言いつつもリノルアースの頬は心なしか少し赤い。照れ隠しかとアドルバードは苦笑する。

「それに、ヘルダム皇子からも言われてるからな」

昨日、静かに「守ってやって」と言い残したヘルダムの姿を思い出してアドルバードは付け足す。

「そうね……ヘルダム皇子の方がルイよりよっぽどお兄さんらしかったわね」

「半分血は繋がってるんだから、兄だろ」

兄ではないようなリノルアースのセリフをアドルバードはやりわりと注意する。

「本心はあまり分からない人だけど、悪人でないのは確かね」

リノルアースの確信めいたセリフに、アドルバードは首を傾げる。その仕草は女装している状態だと本当に可愛らしいものだ。

「妙に言い切るな」

「似てたからね」

何に？ というアドルバードの問いをリノルアースはさらりと無視した。

「守ってやって」とそう言ったあの瞬間の顔は、リノルアースのよく知る兄の顔だった。

こほん、とリノルアースはわざとらしい咳払いをして、『アドルバード』の仮面の準備をする。

「では、行きましょうか？ お兄様？」

そう言って手を差し出すのはリノルアースだ。

アドルバードは一瞬だけきよとした顔になり、次の瞬間には不敵に微笑み返す。

「エスコートお願いしましょう。お姫様？」

58：あの子は少し特別だね

ハウゼンランドの双子の王子と姫が会場に入った瞬間に、周囲がざわめく。

王子にエスコートされる姫は可憐で愛らしく、シンプルな薄紅色のドレスがその美しさを少しも邪魔しない。真紅の薔薇が赤みがかった金の髪を飾り立てていた。

王子は黒い上着は金の縁取りが施され、赤い装飾がやはり彼の髪色をより映えさせていた。

よもやその二人の性別が逆だとは誰も思っまい。

リノルアースが扮したアドルバードは本物よりも数倍愛想よく姫君達に笑顔を振りまいては黄色い歓声を浴びている。

「おいこら。俺の印象が悪くなるだろうが。俺は軽い男じゃないぞ」
ぼそぼそとリノルアースに扮したアドルバードが抗議する。しかしそう言いながらも顔は笑顔だ。

「うるさいわね。少しくらいサービスしても罰は当たらないわよ。でもこれ気分いいわ。普段人を目の敵にしてお姫様方が見事に騙されてきゃあきゃあ」

笑顔で手を振るリノルアースが言っていることは腹黒い。頼むからその姿で問題は起こすなよとアドルバードは心から祈るのみだ。

「御機嫌よう、北国の王子と姫君」

につこりと笑いながらヘルダムが挨拶にやって来る。

「ご機嫌麗しく、ヘルダム皇子」

微笑み返す偽リノルアースに、ヘルダムが一瞬固まる。そしてちらりと偽アドルバードを見た。

「何か？」

につこりと笑いながら偽アドルバードが答える。

「……心臓に悪いから、そういうことは事前に申告して欲しいなあ。気持ち悪いくらいにそっくりだ」

「気持ち悪いとは心外ですね」

リノルアースが笑顔のまま答える。内心ではかなり怒ってるかもしれない。

「知りあいには分かりやすいかもしれないよ、騎士の配置が逆だ」

直すんだね、と注意を受けて、偽アドルバードの隣にルイ、偽リノルアースの隣にレイが立っていたことに気がつく。

「あ、ついいつもの癖で」

ルイがわたたと慌て始めるが　リノルアースは平然としてアドルバードと向き合う。

「どうせだから、一緒に踊ろうか？　リノル」

突然リノルと呼ばれたアドルバードは硬直し、そのまま引きずられるようにダンスする人の中に連れて行かれる。

一応女装して他国にまで潜入したアドルバードは女の方でも踊れる。しかしリノルアースは　。

「え、ちょ、おまえ平気なのか？」

こそこそと耳打ちしながらアドルバードはリノルアースと向き合う。

「誰だと思ってるの？」

不敵に微笑む『自分』に冷や汗が流れながら、アドルバードはリノルアースのリードでダンスを始めた。

「あら。双子でダンスしていらっしゃるのね」
少し遅れてやって来たシェリスネアの隣には当然のようにウィルザードがいた。

騎士二人とヘルダムのところには一直線にやってきたシェリスネイアだが、周囲の注目は双子の比ではない。漆黒の髪に白い薔薇は映えていた。ドレスは細かな装飾がリノルアースとは異なるが、大まかなデザインは一緒だ。二人並んだ姿は見ものだろう。

「いつも最初のダンスはそうですよ。お二人はダンスは？」

レイがさらりと流しながらそう問いかける。

遠目で見ている分には本物にしか見えない双子に、今はフォローする必要はない。

「……え、ええ。まあ。その、私ダンスは苦手で。今の曲は速くて無理そうですわ」

苦笑しながらシェリスネイアはダンスしている紳士淑女を見る。

「足踏まれるのも嫌だしな」

からかうようなウィルザードをキツと下から睨みつけながら「そこまで下手じゃありませんわ」とシェリスネイアが言う。

「あなたは、どちらで踊るのかしら？」

シェリスネイアがレイを見上げて問う。

「どちらも踊れますが　今夜はあくまで護衛ですから」

レイが苦笑しながら答える。しかし周囲の姫君の中にはレイを狙うかのように熱い視線を送っている。

「残念ですわね。主に何も知らない姫君達が」

くす、と笑いながらシェリスネイアは周囲の姫君を窺い見る。アドルバードの為とは言え、牽制にレイは男であるように振る舞ったままだ。

「あらシェリー。踊らないの？」

にこやかに微笑みながらダンスを終えたリノルアース（に扮したアドルバード）が近寄って来る。

「お、踊りますわ、もちろん」

笑う偽リノルアースは暗に「苦手なの？」とからかっているよう

だ。負けず嫌いのシェリスネイアが踊ると言いだすのが分かり切っているように。

「まあ、このくらいの速さだったら大丈夫だろ」

半ば呆れたようにウィルザードがシェリスネイアに手を差し出す。

「踊っていただけますか？」

物語の王子様のようにウィルザードが微笑む。

シェリスネイアは一瞬硬直し　赤く染まった頬を誤魔化すことも忘れて、ウィルザードの手に自分のそれを重ねる。

「お、踊って差し上げますわ」

初々しい二人を見送って、アドルバードとリノルアースが休憩に入る。隙を見て誘ってくる王子を偽リノルアースはにこやかに笑いながら断っている。

「その格好はシェリスネイアの為だろう？」

微笑みながらヘルダムはアドルバードに問う。

「まあ、いざという時にこっちは戦力になりますから」

こっち、とアドルバードの格好をしたリノルアースを指す。

「できれば、目を離さないようにして」

真剣な表情でヘルダムはアドルバードを見る。その深い緑色の目に射抜かれたように、アドルバードは動けなかった。

「なぜです？」

レイが不審げに問いかけると、ヘルダムはいつもの笑顔を忘れたように静かに呟く。

「……シェリスネイアの、母が亡くなった」

突然のその言葉は、あまりにもあつさりしていて、現実味がなかった。

「シェリスネイアを縛りつけていた枷が消える。サジムは本当にあの子を殺すだろう」

母という存在がなければ、シェリスネイアはサジム派につくことはなかったかもしれない。ヘルダムについたかもしれないし、どちらにもつかなかったかもしれない。そのことをサジムも分かっている。

「随分と、気にかけてますね？」

一番最初にルイが口を開いた。

賑やかなパーティの会場で、これらの会話は目立つものではない。もとより周囲を気にして声は小さめになっている。

「アヴィランテの王族は、家族の意識が低いと聞きましたが？」
続けて問うルイに、ヘルダムは苦笑した。

「俺にとって、あの子は少し特別だね」

そう言いながらヘルダムはウィルザードと一緒に踊るシェリスネイアを見る。

その瞳はとても優しい。その奥にある感情を、ルイもよく知っている。ハウゼンランドではよく見る瞳だ。

家族を想う、優しい目。

59：それでも あなたに出会えて良かった

最初は、ただの勘違いだった。

もう随分と昔だ。

十年くらい前のことだろうか。

「お兄様っ!？」

アヴィランテの王宮の、東の宮にある小さな庭だった。散歩していたヘルダムの後ろから、そんな声が聞こえた。

振り返った先には 愛らしい五歳くらいの女の子がいた。黒い髪は艶やかで、黒く大きな瞳が印象的だった。一目で将来は美しい女性になるだろうと分かるような、そんな女の子だ。

着ている服は上等なもので、ヘルダムはたぶん半分血の繋がった妹だろうと思った。

「お兄様!？ お兄様なのでしょう!？ お母様がいつもおっしやっていた! お兄様は綺麗な緑色の目をしていたって!」

少女は嬉しそうにヘルダムを見上げて、はしゃぐようにそう言っていた。

「お母様がずっと悲しそうにしていたから、だからシェリスネイアはお兄様を探していたんです! ここまで遠くにきたのは初めてで、だからお兄様を見つけたんですね!」

勢いに押されそうになりながらも、ヘルダムは彼女の探す『お兄様』が自分ではないと悟っていた。自分には同じ母を持つ兄弟はいない。アヴィランテでは同じ母を持たない限り兄妹の意識は生まれない。

そしてシェリスネイアという名にも覚えがあった。

最近父のお気に入りだという姫君の名と一緒に。確か、この子の母親は上に皇子も産んでいたはず その皇子が生きているか死ん

でいるかは覚えていないが。

「シェリスネイア、だね？」

ヘルダムはシェリスネイアと目線を合わせるようにしやがんだ。

「はい！ 私の名前はシェリスネイアです！ お母様がつけてくださりました！」

はきはきとした、元気な子だな、とヘルダムは優しく微笑んだ。

「ごめんね。俺は君の探してるお兄さんじゃないよ。僕の名前はヘルダム。お兄さんとは違う名前だろう？」

シェリスネイアに分かるように、優しく説明するとシェリスネイアの顔はどんどん曇っていった。

「お兄様じゃ、ないの？」

がっかりした顔は、先ほどまで嬉々として笑っていたから余計に悲しそうだ。

「半分はお兄様かなあ。俺のお母様と君のお母様は違うからね」

慰めるようにシェリスネイアの頭を撫でる。

「シェリスネイアにはお兄様がいたって、お母様がずっと悲しそうにおっしゃるの。お兄様がいればって、ずっと、おっしゃってるのだからシェリスネイアが探してあげようって……」

大きな瞳に涙を溜めながらそう言うシェリスネイアを見て、一人前に兄のような気がしてきた。

アヴィランテという国でなければ、もっと早く、兄としてこの子と出会えていただろう。

「じゃあ、手伝ってあげるよ。二人で探そう？」

この小さな女の子の涙を止めたくて、ヘルダムはそう微笑んだ。大きな瞳がなお大きく見開かれ やがて満面の笑顔になった。

たぶん、お兄様と呼ばれたあの瞬間に、ヘルダムはシェリスネイアの兄になっていたのだ。

どうにか一曲踊ってきたシェリスネイアは、一瞬嬉しそうに微笑み、そのあとすぐにその笑顔は翳った。

「どうした？」

ウィルザードはシェリスネイアをダンスの輪から連れ出し、注目する王子達を牽制するかのようについでに影を作った。

「なんでも……少し、疲れただけです」

それが嘘だというのはすぐに見抜けたが、ここで注目を浴びるシェリスネイアを尋問するのは難しそうだ。

それならとウィルザードはバルコニーに出る。シェリスネイアも手をひかれ大人しくついて来た。寒い人目は避けられる。

「……どうした？」

もう一度シェリスネイアを見下ろして問う。

「疲れたただだと、申しませんでした？」

独りにしてくだ

さらない？」

話すのも億劫だと言いたげにシェリスネイアは無理に笑う。

共に踊っている間はとても楽しそうに笑っていたと思うのだが

女は本当によく分からない、とウィルザードはため息を吐きだす。

「俺が、あんたの望むように動くと思うか？」

どうにか言えた言葉は甘さの欠片もない。いつもいつも憎まれ口ばかりになってしまふのは習性なのか、と苦笑する

「思いませぬわ。あなたは本当に、いつも私の予想にないことばかりなんですもの」

だからこそ、惹かれたのだろうけど。シェリスネイアは心の中でひっそりと呟く。

「なら、できない相談だ」

こんなシェリスネイアを独りになんて出来ない

ウィルザード

の本能がそう告げていた。

そうでしょうね、とシェリスネイアが儂げに笑う。

そう言って吐き出す息は白い。雪こそ降っていないものの、いつ振り出しても可笑しくないほど気温は低い。

風邪をひいてしまう。そう思うと反射的に身体は動いていた。上着を脱いでシェリスネイアに着せようと　そう動いた腕を、そつとシェリスネイアが止める。

「　あなたに出会わなければ、決意がこんなに揺らぐことはなかったでしょうね」

何のことだろう、とウィルザードはシェリスネイアを見下ろした。シェリスネイアは寄りかかるようにウィルザードに寄り添い、淡く微笑む。その黒曜石の瞳が濡れているように見えるのは、錯覚なのだろうか。

『どうした』と三回目の同じ質問を紡ごうとした、その唇に柔らかい何かが重なる。目の前に　数センチの差もない距離に、美しい顔があった。

重なり合ったのはほんの一瞬だった。

けれどウィルザードには長く長く感じた一瞬だった。

「それでも　あなたに出会えて良かった」

ぬくもりが去ったあとの、切ない目にウィルザードは射抜かれた。言葉を紡ごうとしても、驚きと衝撃で何も出てこなかった。悲しげに笑うシェリスネイアの顔だけが目に映る。

「ありがとう、ウィルザード」

そう言って微笑みながら、シェリスネイアは「さようなら」と続ける。

さっと身をひるがえす、そのシェリスネイアを捕まえようと手を

伸ばした。行かせてはいけない、彼女を独りにしてはいけない、そんな本能がウィルザードの中で警鐘を鳴らす。

「
シエリスネイア！！」

叫びはシエリスネイアをつなぎ止める楔とはならず、彼女は逃げるようにバルコニーから去っていく。捕らえようと伸ばしたウィルザードの手がその場に残したのは、シエリスネイアの髪に飾られていた白い薔薇一輪のみだ。

シエリスネイア、と叫んだ声が耳に残る。

もう、思い残すことなんてない。
もう十分だ。

十分に私は幸せだった。

60：俺が言うべきことですから

涙が零れ落ちないように、シェリスネイアは顔を上げて走った。
華奢な靴ではそう速くも走れないが、それでも全速力で走った。

今ウィルザードに捕まってしまったら、揺らいだ決心が崩れてしまいかもしれない。

一緒に踊れた。

甘い恋だと思いい出にもできる。

幸せだ。

心残りは、もうないと思えるほどに。

唇を噛みしめてシェリスネイアはパーティ会場から抜け出る。

人目のない場所に　そう思いながら走った。パーティから抜け出す人間はまだそう多くない。会場から出てしまえばもう人気はなにに等しかった。

「　そんなに慌てて、どこに行くの？　シェリー」

凜とした声がシェリスネイアの身体を止める。まるでそう約束していたかのように、リノルアースが壁にもたれて立っていた。

「……リノル、どう、して」

シェリスネイアが驚いて目を丸くする。

リノルアースはどこか頼もしい様子でにっこりと笑う。

「あの馬鹿が何かしたのかしら？　それとも　何か企んでるの？」
図星をつかれて、シェリスネイアは困惑した。咄嗟に誤魔化すだけの余裕が今はない。

「そ、それは」

「これはこれはシェリスネイア姫。お待ちしておりましたよ」

何か紡ごうとしたシェリスネイアの言葉を遮り、下品な笑みを浮かべた男が暗闇か姿を現す。

「おやおや。ヘルダムを連れてくるように指示があつたはずですがね？　しょうがない方だ。まあ、そちらの姫でも十分に価値は」

「彼女に手を出したら、私が許しませんわ！」

リノルアースを眺めにやりと笑った男に、シェリスネイアは毅然と言い返す。

「私がここへ来たのは　あなたを始末する為よ」

シェリスネイアがリノルアースをかばうように立ち、懐から短剣を取り出し、その切っ先を男に向ける。

アドルバードに毒を盛ったことは失敗し　そしてサジムの遣いから、密書が届いた。

曰く、パーティの喧騒に紛れてヘルダムを誘い出せと。

そこでヘルダムが殺されるだろうということくらい、シェリスネイアにはすぐに理解できた。

彼は私を嫌っているだろう。

幼い頃、あんなに良くしてくれた相手に向って牙をむいているのだから。自分と、自分の母の保身のために。

この平和な国に、争いを持ち込ませたりしない。

ここの穏やかな日々を、侵したりしたくない。

なら私は罪を負おう。そして故郷でサジムに殺されることになる
うとも。

「噛みつくということですか。あの方に」

ひんやりとした声がシェリスネイアの背筋を凍らせた。

だがもう引き返せない。ヘルダムを殺す手助けをすることも

この双子を傷つけることも、もうシェリスネイアには無理だ。

「初めから、サジム様に飼われていたつもりはありませんわ」

「あなたの母君がどうなっても良いのですか？」

びく、とシェリスネイアの握る短剣が震えた。シェリスネイアはもうその母がこの世にいないことを知らないのだ。

「シェリー……いや、シェリスネイア姫」

背後の声を聞いて、シェリスネイアが驚いて振り向く。

『シェリー』と呼んだ声は間違いなくリノルアースだったのに、
『シェリスネイア姫』と言った声はアドルバードのもので。

振り返った先にいたのは、凜々しく笑うリノルアース　いや、
アドルバードだろう。

「……アドルバード、王子？」

確かめるように声をかけると、アドルバードは少し照れたように
笑う。

「不本意ながら。ヒーロー登場のようにかっこ良くはなくて申し訳
ないです」

そう言いながらアドルバードはシェリスネイアを背にかばう。そ
の背中には思いのほかたくましく、頼もしい。ドレスの中に隠してい
た剣を出し、アドルバードはリノルアースの姿のままで男と向き合
う。

「　まあ、あなたのヒーローは俺じゃないので、勘弁してくださ
い」

くすりとアドルバードは笑う。

「あなたの出番も、まだでしょう」

シェリスネイアを背にかばっているアドルバードの言葉に、返す
ように静かな声が聞こえた。その瞬間に、目の前の男が低く唸って

倒れる。

月夜に、鮮血が静かに散る。

「レイ。美味しいところを持つてくな」

ぶず、と不貞腐れたようにアドルバードが呟くと、倒れた男の向こうから銀髪の騎士が現れる。

「私はあなたの騎士として当然のことをしたまでですよ?」

「そうです。それにそんな恰好で真正面から挑むのは無謀ですよ、アドル様」

そう言いながら姿を現したのは、ルイだ。偽物のリノルアースの側にいたのはルイだから、最初から潜んでいたのだろう。

「怪我は、ないみたいね?」

優しい声が聞こえ、シェリスネイアは来た道を振り返る。アドルバードの姿をしたリノルアースが、微笑んでいた。かつらをつけたままだから、二人を見分けるのは声と表情のみだ。

「リノル……」

無事で良かったわ、とリノルアースは微笑みながら、シェリスネイアに歩み寄る。そのリノルアースの後ろにはウィルザードがいて、胸がちくりと痛んだ。

ウィルザードはシェリスネイアを見つめて、何も言わない。

「……シェリー、あのね」

リノルアースはシェリスネイアの手をとり、じっと見つめてきた。その瞳はとても深く澄んだ青だ。故郷の空の色に、海の色にも似てる。

リノルアースが紡ごうとした言葉が、シェリスネイアとウィルザード以外には分かったんだろう。しんと静まりかえって、リノルアースが俯く。

「あなたの」

「リノルアース様」

リノルアースの言葉を、ルイが遮った。

「俺の口から、言います」

あなたが負う必要はない、とルイがリノルアースに優しく微笑む。
「これは、俺が言うべきことですから」

この場にヘルダムはいない。それならば 母の死を伝えるのは
兄である自分の役目だろうと、ルイは笑う。

強がり、とりノルアースが呟いた。シェリスネイアの手を離さな
かったのは、彼女なりの優しさだったのかもしれない。

「……何が」

あったというの。そう問おうとした声は、ルイの優しく厳しい声
に遮られる。

「シェリスネイア」

初めて、ルイは兄として口を開いた。

名前を呼ばれて、自然と緊張した。目の前のルイはハウゼンラン
ドの騎士としてではなく シェリスネイアの兄として立っていた。

「母上が、亡くなった」

その声に、シェリスネイアは深く突き落とされた。

61：たった一人、妹と思えた存在だからね

かくん、と膝が折れてシエリスネイアはその場に座り込んだ。

「う、そ」

リノルアースはまだ手を握っていてくれる。そのぬくもりが優しいのに、どこか辛い。力が抜けて、もう立ちあがることも叶わないような気がする。

ルイはシエリスネイアを労しげに見つめながら、何も言わない。

「嘘、でしょう！？　だつて、そんな　！」

ルイを見上げることもできず、シエリスネイアは地面を睨むようにして叫んだ。

「　嘘ではないよ、シエリスネイア」

シエリスネイアの言葉を否定したのは、優しく厳しい声だった。姿の見えなかったヘルダムが、真剣な表情でシエリスネイアに歩み寄る。

「嘘ではないんだ。嘘であるなら幸せなんだろうけどね」

ヘルダムはリノルアースの手からシエリスネイアの手を取る。その大きな掌に、シエリスネイアは懐かしさを覚えた。

「表向きは病死と伝わってるけど　それが怪しいことくらいは分かるね？」

優しい優しいヘルダムの声に、渴いていたはずの涙が溢れそうになる。

彼はいつも、シエリスネイアに優しい。

「……どうして、そうなんですか。いつもいつもっ！　私はあなたを裏切つて、サジムについていたのに　！」

地に向かつてそう叫びながら、シエリスネイアは縋りつくようにヘルダムの手を握り締める。握り返してくれるそのぬくもりが余計に痛い。

「それが、正しい選択だと俺も思ったからかな。シエリスネイア、

俺は、君がこうして生きていてくれて嬉しいんだ。たとえ俺の敵となっていたとしても」

ヘルダムは片膝をつき、シェリスネイアと目線を合わせる。もう堪え切れないほどの涙が黒曜石の瞳に溜まっていた。

「たった一人、妹と思えた存在だからね」

溜まった涙はその言葉で溢れ出した。

困ったな、とヘルダムは笑いながらウィルザードを振り返る。

するりと手は離れ、シェリスネイアはその手を追うように顔を上げる。

「慰めるのは、俺の役目じゃないと思うんだけどなあ」

そう言った先は明らかにウィルザードで　シェリスネイアは顔が紅潮するのが分かった。何を言い出すのだとヘルダムに掴みかかりたくなる。

「ウィルザード様。そのまま、姫を連れて行っていただけですか。アドルバード様、主役がいつまでも場を離れているわけにもいかないでしょう」

ひんやりとしたレイの声に、シェリスネイアはびくりと怯えた。その場の空気の変化に気づいたウィルザードはさっとシェリスネイアのところへ駆け寄り、その華奢な手を掴む。

「加勢は必要かな？」

ヘルダムが微笑みながら問う。レイは振り返りもせず、剣に手をかけながら「いいえ」と答えた。

「いつまでもパーティの注目株が消えているわけにはいかないでしょう。皆様はお戻りください」

レイの冷静な判断に、誰もが頷いた。

「姉さん、いけますね？」

「誰に言ってる？」

レイが笑いながらルイと目を合わせる。

その緊迫した空気に、シェリスネイアは敵が潜んでいることを悟る。そして自分がウィルザードや他の人に連れられて、安全な場へ逃れようとしていることも。

「アドルバード様、会場ではカルヴァ陛下を見つけて、出来るだけそばにいてください」

それはどちらの『アドルバード』に向けた言葉なのだろうか
おそらく両方なんだろうな、とシェリスネイアは思う。

「……リノルアース姫は具合が悪いので部屋に下がった、ってことにしといてくれ」

周囲に注意しながらその場から立ち去ろうとしていた王族メンバーに、本来の主役であるはずのアドルバードが言い放つ。

「……いいわよ。別に絶対必要な存在ではないもんね」

アドルバードの姿をしたままのリノルアースはそう簡単に請け負う。アドルバードは苦笑して「任せた」と妹の肩を叩いてレイのもとへ戻る。

「何を考えて 戻ってください、危険です」

レイが本気で怒りながらアドルバードを睨む。

いつもならそこで引き下がるであろうアドルバードも、睨み返し
ながら剣を握りなおす。周囲の敵は姿を現さないものの、すぐにでも襲いかかってくるだろう。

「冗談。惚れた女を危険な場所に残して引き下がれって？ 無理な話だ」

邪魔だな、と言いながらアドルバードは鬘を取って投げ捨てる。

ドレスもいつそ引き裂いてしまいたいところだが それはさすがにリノルアースに怒られるだろう。アドルバード用に作ったもの
とはいえ、新品なのだ。

「あなたを守るのが私の仕事なんですから、当然です」

「ああ、そうだよな！ おまえはいつもいつもそればかりだよな
！ 嬉しいけど、俺のことも少しは考えろよ。おまえが危ない目に遭ってるのに、俺だけ安全な場所でのんびりダンスか！？」 冗談じ

やない！」

そのアドルバードの叫び声を皮切りに、周囲に潜んでいたであろう敵が一斉に姿を現した。何人かは抜け出した四人に付いていっただろうが、会場の警備は万全だし、その短い道中に襲ったとしても数人ならヘルダムとウィルザードでどうにかなるだろう。

「だからそれが私の仕事で、使命でしょう。それなのに守る対象がわざわざ危険な状況に飛び込んでくるなんて、人の苦勞を増やして何が楽しいんですか、アドル様」

口調こそは穏やかだが口数が多い分、レイもけっこう怒っている。その証拠に言いながら容赦なく向かってくる敵を斬り伏せている。

「誰も楽しんでなんかないだろ！ おまえが戦うっていうなら、俺も一緒に戦うって言うてるだけで！ いつも俺第一に自分の危険を顧みないのをやめろって言うてるんだよ！」

アドルバードも怒りを敵にぶつけているので、いつもより手加減していない。

痴話喧嘩なら余所でやってくださいよ、と呟きながら容赦なく敵を倒していく。

「そういう性分なので」

「だったらその性分直せ！」

一人、また一人とアドルバードとレイは喧嘩しながら倒していく。十数人いたはずの敵は、アドルバードとレイが言い争っている間にほとんどが地に伏せている。

「こんな女が嫌なら今からでも探してきたらどうです？ ちょうど大勢いらっしゃっていますし」

そう言いながらレイが斬ったの最後だった。

ルイはどこからか縄を持ち出して斬り伏せられ屍と化した男たちを縛りあげていく。

「なんでそうなるんだよ！ 俺は他の女なんてどうでもいいって！」
まだ気が高ぶっているんだろう。アドルバードはレイと向き合いながらそう叫んで、そのあとでしまったと顔を真っ赤に染めた。

レイはくす、と笑って剣を収める。

「なら、悪い女にひっかかったと諦めてください」

レイの笑顔に何もかも負けた気がしてアドルバードは唸りながら、ぐしゃぐしゃと頭を搔く。

「悪い女なんかじゃないよ、おまえは！」

ただそれだけは訂正して、アドルバードは悔しさを誤魔化した。

62：この地に立つ以上、この国に従え

逃げる者を見逃してくれるほど、敵方も優しくはない。

会場へ戻る四人は予想通り敵に襲われたが、ウィルザードとヘルダムの力量を軽く見ていたのだろうか、現れた敵はわずか三人だ。ほとんどを任せてしまったなと苦笑しつつ、ウィルザードは背にシエリスネイアをかばって剣を抜く。残った人間の实力を考えれば心配は無用だろう。

「リノル、多少は自衛できるだろ。シエリスネイアと物陰に隠れてる」

ウィルザードとヘルダムで壁を作りながら、ウィルザードが指示する。リノルアースは形だけ腰に下げていた剣を抜き、シエリスネイアを背にかばった。

「多少とは失礼ね。小さい頃私に負けたこともあるくせに」
「うるさい」

リノルアースは幼い頃はアドルバードと同じように剣の稽古を受けていた。十二歳になった頃にやめたが、そこらへんの姫と比べれば異常だろう。

「シエリスネイア、目を瞑ってるといい。すぐに終わる」

そちらの姫もね、とヘルダムは優しく笑い、敵へと剣を向ける。

リノルアースは「馬鹿にしないで」と剣を構える。人が斬られる場面には、もう何度も出くわした。人が、斬り殺される場面にも。その時の断末魔さえまだ覚えている。

だからといって恐れはしない。今日の前で剣を握る二人はどちらかと言えばシエリスネイアを守るために剣を振るうのだろうか。そのおまけに守られる自分だとしても、自分のために振られる剣に違いはない。

ヘルダムの振るう剣には迷いがなかった。冷酷なアヴィラの皇子らしく、致命傷になると分かっているにもそのまま剣を振り下ろす。

ウィルザードの剣はアドルバードに似ていた。たぶん、リノルアースやシェリスネシアの前で人を殺すことには躊躇いがあるのだろう。決着は確かにすぐについた。

ウィルザードとヘルダムがそれぞれ一人を斬り伏せ、最後の一人に剣を向ける。

「くっ……」

すでに勝敗は決した。敵の男は唇を噛み、ヘルダムを睨みつけた。「サジムの差し金か。悪いがこの命、簡単にくれてやるわけにはいかないのね」

ちやき、と剣を構えなおすと、男は一步後退った。

「俺は、雇われただけだ！」

「だから見逃すとても？　言っておくが金で動く人間を雇い直すつもりはないよ？」

金の切れ目が縁の切れ目だからね、とヘルダムは冷たい微笑みを浮かべて、続ける。

「つく人間を間違えたね。アヴィランテの王座に座るのは俺だ」
完全に戦意を喪失している男に、ヘルダムは剣を振り上げる。

「っ！　やめろ！」

キンツと甲高い音が響いた。

ヘルダムが振り下ろした剣を、ウィルザードが防いだのだ。

最悪の情景を思い浮かべていたリノルアースとシェリスネシアは、真っ青な顔でほっと息を吐きだした。

「……ここで、邪魔する？」

「もう敵意はないだろう。この男を殺す必要はない。捕らえればいい話だ」

ウィルザードとヘルダムは睨みあいながら低く話す。今のヘルダムの目には、シェリスネシアに向ける愛情の欠片も見当たらない。「甘いよ、その程度じゃ。敵は排除する。そうしなければ殺されるのはこちらだ」

「馬鹿を言つな。ここはハウゼンランドだ。この地に立つ以上、こ

の国に従え」

真剣な表情のウィルザードとしばしにらみ合い　ヘルダムはため息を零して剣をおさめた。

ウィルザードも一つ息を吐き出し、手頃な布で男の手首を足首を縛った。そう時間を置かずに警護の騎士が来るだろう。

「　ああ、ご無事でしたか」

ルイが剣を手に握ったまま駆けてくる。その少し後ろには何やら不機嫌そうなアドルバードと、いつもと変わらぬレイがいた。

「先に行かせた意味はなかったですね。こちらに来たのは三人だけですか？」

ちらりと倒れている男たちを見てルイがウィルザードに問う。

「ああ。残るよりは安全だったろうよ。もう終わったのか？」

「どこかの二人が頑張ってくれましたからね」

はあ、とため息を吐きながらルイはアドルバードとレイを見る。

レイは向こうに残してきた騎士を呼んで、後始末を任せるつもりのようなのだ。

「お怪我は？」

ルイがリノルアースのもとに駆け寄り、優しく微笑みながら問う。
「ないわ」

リノルアースも柔らかく微笑み返す。その二人を少し羨ましげに眺めていると、脇から手を引かれる。

「何もお熱い二人と一緒にいることないだろ」

呆れたような声に、少し泣きたくなかった。結局自分の覚悟なんてなんの意味もなかった。守られて、ただ立ち尽くしていただけだ。

それが情けなくて、口惜しくて、ウィルザードの顔を見れずただシェリスネイアは俯いた。

どうした、と問おうとウィルザードが口を開くと

「まったく、良いとこのお姫さんやら王子やらがこんなところに居やがって。とつとと戻れ」

騎士を何人か引き連れ、騎士団長であるディークが犬を追い払うかのように王族連中にしっし、と散らし始める。

「父上」

レイが突然現れたディークに呆れながら、報告をと近寄る。

そばにきた娘を見下ろしながら、ディークは同じように早く行けと目で言う。

「おまえもだ。王子の護衛だろうが」

実の娘さえ追い払う父に、周囲は苦笑しながら立ち去り始める。

「他言無用ですよ」

レイは一言父に言い残して、アドルバードと共にその場を去る。

その手にはアドルバードが投げ捨てたはずの鬘である。

ディークは苦笑しながら、王城で暴れた輩共の後始末を引き受けた。

すべては未来ある若者のために。

「アドル様」

先を歩くアドルバードの手を掴み、レイは引き留める。

「なんだよ。まだ何か」

「ありませんが、その姿のまま戻られるつもりですか？」

え？ とアドルバードは自分の格好を見下ろす。ドレスは少し汚れてしまったが、砂や草は払った。今からリノルアースと着替えるにも時間がないから、女装を続けるのも仕方ない。

そう言おうとしてレイを見て、その手に赤みがかった金の髪の毛の鬘があることに気づく。

「あつ！」

咄嗟に頭に触れば髪は短い。それどころか髪に飾っていた赤い薔

薇までどこかにやってしまった。

「……気づいてなかったでしょう。私が結い直しますから、一度部屋に」

レイが呆れたようにため息を零して、アドルバードの頭にとりあえず鬘を乗せて手で梳く。部屋に行くまでに誰かに見られてもいいようにだろう。

不用意に近づいた甘い香りにときめいてしまった。
赤く染まった頬を隠すように、アドルバードは俯いた。

63： 踊って、いただけますか？

目立たないようにそれぞれ時間差で会場に戻ると、やはりそれぞれ注目度は高い。シエリスネイアは群がって来るだろう王子を避けるために、それはある意味で言い訳だった。ウィルザードの側から離れないようにその腕をとる。

「シエリスネイア」

周囲の視線にうんざりしながらため息を零していると、頭上から声が落ちてくる。

未だに慣れない、ウィルザードが自分を呼ぶ声。

「……一応周囲の目もあるのですから、呼び捨ては困るのですけど？」

照れ隠しにそう指摘すると、言われるまで気づかなかったのだらう。ウィルザードが「ああ」と手で口を隠す。

「なら、人の目が気にならないとこに？」

女慣れしてない男のセリフじゃないわ、とシエリスネイアは赤くなってしまう頬を隠すようにウィルザードから顔を背ける。

「ここでできないお話かしら？」

「俺としてはかまいませんけど？ さっきあんたが俺に」

きゃあ、と悲鳴を上げそうになりながらウィルザードの上着を強く握ると、ウィルザードはその先を言うつもりなどなかったのだらう。悪戯が成功したときの子供のように無邪気に笑う。

「それじゃあ」

行きましようか？ と形だけは紳士的にウィルザードが会場を抜けだそうとする。

ざわ、と周囲の空気が変わった。

入口を見れば、銀髪の騎士にエスコートされて入場するリノルア

ース 否、アドルバードの姿がある。

二人の姿を詩人はなんと表現するのだろうか。

相反する色のように思える金と銀は、並び立つことでお互いをより一層輝かせていた。

その中身を忘れて、思わず魅入っていると、その二人はゆつくりと近づいてきた。

「御機嫌よう、ウィルザード。女嫌いはいつ治ったのかしら？ さつきまでいなかったんだから、またすぐにとんずらなんて冗談やめてよ？」

につこりと微笑みながら、アドルバードはリノルアースの姿でそう言う。

違つと分かっているのに、ぞぞぞ、と鳥肌がたった。

「き、気色悪いからやめてくれ。頼む。本気で」

髪を結び直し、新しい薔薇を飾りつけたアドルバードは間違いなく見た目はリノルアースそのものだ。

「俺の可愛い妹に気色悪いなんて、あんまり口が過ぎるぞ剣の錆にするぞウィル？」

あはは、と顔だけは笑いながらアドルバードに扮するリノルアースがルイと共にやってきた。

「……面と向かって可愛い妹とか、俺言わないし」

ぽつりと本物のアドルバードが呟くと、につこりと笑ったままのリノルアースが無言で威圧してくる。

「シェリスネイア姫は注目の的なんだから、会場からあんまり連れ出さないでくれる？ さつきからダンスを申し込みたい紳士は大勢いるみたいだしね？」

そう言いながらリノルアースはシェリスネイアに手を差し出す。

「とりあえず、まずは一曲どうですか？」

に、と笑うリノルアースと目が合ったシェリスネイアは、つられて笑う。

「足を踏んでも怒らないかしら？」

「さあ、どうでしょうね？」

くすくすと笑いながら少女達は手をとる。中身を知らなければきちんと男女に見えるから不思議だ。

「どうせなんだからさ、レイと踊ったら？　じゃないと今にまたダンスの申し込みが殺到するよ？」

すれ違いざまにリノルアースはアドルバードの耳元で囁く。

「……踊ったらって」

性別がまるで逆なんですけど。

しかし周囲を見れば確かに今か今かとチャンスを探っている王子達の姿が目に入る。今は隣にレイがいるから牽制になっているが、それもいつまでもつか。

「どうします？」

レイが静かに問ってくる。リノルアースの囁きもレイには聞こえていたのだろう。

いや、出来れば逆の立場だと嬉しいんだけど　そう言おうとして逆の場合を想像する。自分より背の高いレイとダンスを　やはり絵にならず、ため息を吐く。

するとレイはアドルバードの前に跪き、その手を取って口づけを落とす。

「　踊って、いただけますか？　姫」

きゃあ、という黄色い声が聞こえたのは気のせいではないだろう。レイは姫君からの注目を集めていたのだから、この行為はまさに乙女の夢の具現だ。

くそ、と完敗したことを悔しく思いながらレイの手をとる。

「いつかおまえの身長を越して、同じことしてやる」

ゆっくりスローテンポな曲に身をまかせながら、ぽつりと呟く。

レイはくすりと笑いながら完璧なリードをしてみせた。

「楽しみにしてますよ」

「……あれですかね、俺はダンスはおあずけですか」

楽しそうに踊るリノルアースとシェリスネイアを見ながらルイが悲しそうに呟く。

「それは、無理だろ。あの格好だし」

ウィルザードが可哀想な生き物を見るように、控え目に呟く。

リノルアースはアドルバードの格好のままだ。さすがに今踊ろうとすれば、見た目は男同士になってしまう。

「まあ、いいんですけどね……」

はあ、とため息を吐き出してルイが肩を落とす。

「心残りを作っていくのは、お勧めしないけどね」

突然隣に立っていたヘルダムに、ルイは飛び上り声を上げそうになった。咄嗟に口を両手で塞いで堪える。

「お、驚かさないでくださいよっ！」

「気付かなかったのはそっちだろうに……君は、俺達と共にアヴィランテへ行くんだろう？」

呆れながらヘルダムはルイに問う。

ルイは一瞬困ったような顔になり　そして真剣な面持ちで頷く。

「それが、最善でしょうから」

「なら、やり残したことはない方がいいと思うけど」

それはリノルアースと踊ってこいということだろうか、とルイはまたちらりとリノルアースとシェリスネイアを見た。

「……いいんです。いずれ、戻って来るんですから」

それまで楽しみにとっておくのも悪くはない。

ふう、とヘルダムはため息を吐き出して、ルイを見つめる。

「実際ね、心底信用できる人間はそう多くないんだ」

どの人間に、どんな裏があるかまでは把握できない。たとえば信頼していた人間が裏切ることありえる。それがアヴィランテだと、ヘルダムは苦笑する。

「敵はまだアヴィラで胡坐をかいている。働いてもらうよ？」

我が弟」

弟、と呼ばれたことに驚きながら、ルイは笑う。

「こき使われることには、慣れてますよ」

予想外の返答だったのだろうか、ヘルダムは驚いたように目を丸くした。そしてちらりとリノルアースを見て、納得したように笑う。
「なるほど」

そう呟いたあと、顔を見合せて兄弟でひそかに笑い合った。

64： 五年。いえ、三年よ

ほんの少しの、寂しさに似た雰囲気を残して、パーティーは表面上何事もなく終わった。パーティーの裏側で大国の皇子皇女の命が狙われたなんて、ほとんどの参加者は知る由もない。

中には酒を飲む王子連中もいるようだが、場所と食料だけは提供してハウゼンランドの王子ことアドルバードは参加を辞退した。

淑やかな王女様方は大人しく部屋へと戻ったようだ。明日からは帰国ラッシュが待っている。

その中にはもちろん、アヴィランテから来たシェリスネアとヘルダムが含まれていた。遠方の国であるから帰国も早いのは当然だ。その二人とともに、ルイもハウゼンランドを去る。

「こんなところか」

ふう、とため息を吐き出してルイは荷物をまとめた。

暇を見て実家には戻り、荷物は用意してきた。今は騎士団にある自分の部屋で出立の準備をしていた。

死んだ母への挨拶もすませた。父と姉はどうせ別れの場にいるだろう。いなくてもそれはそれで構わない。

持っていくものはそれほどない。ただの騎士から皇子へと変貌する過程で必要なものはそれほどないだろう。

「……………ルイ」

声をかけられ、ルイは顔を上げた。

扉を開けたまま、そこに立っていたのはリノルアースだ。パーティーで着ていた薄紅のドレスのまま。髪は結わずに下ろされていた。

数時間前まで、その姿でいたのはアドルバードだ。声がわずかに低めだったのはわざとだったのだろうか。

「騙されませんよ、リノルアース様」

からかうつもりだったのだろう。アドルバードのふりをするなんて、こちらに失礼だ。いくらなんでも惚れた相手を間違えることなんてない。

くす、とリノルアースは笑ってルイの傍に寄って来る。

「こんな所に来て　怒られますよ」

夜に、騎士団の宿舎にリノルアースが来たなど　騎士団長である父に知られた日には説教が待っているだろう。

「怒られるのはルイだもの」

私じゃないわ、とリノルアースは笑いながらルイの隣に立つ。

こうして並ぶと、リノルアースは本当に華奢だ。ルイが長身のせいもあるのだろうが　随分と小さい。強く抱きしめたら壊れてしまっんじゃないだろうか。

「飲みには参加しないの？」

今頃騎士団の連中も飲んで馬鹿騒ぎをしている頃だ。ルイも依然に何度か参加したことがある。騎士団の人間がいつも通りいればリノルアースはここまで入れないだろう。

「準備がありましたからね」

これです、と荷物を指してルイは笑う。

「……仲間に、さよならも言わずに行くつもり？」

リノルアースはまとめられた荷物を見つめながら問いかける。ルイがもとはアヴィランテの皇子で、そして明日アヴィランテへ発つことを　騎士団の人間は知らない。知っているのは騒動に巻き込まれた人間だけだ。

「どうせ、戻ってきますから」

言えばおそらく無理やり酒の肴にされるだろう。明け方まで飲みにつき合わされるのはごめんだ。

「　その時には、立場が違っわ」

「違います。何も」

リノルアースの静かな呟きをルイはすぐに否定する。素早い否定

にリノルアースは少し驚いたようだ。

らしくないな、とルイは笑う。今夜のリノルアースは言葉に力がない。

不安、なのだろうか。不安に、思ってくれるのだろうか。自分という存在が一時とはいえ無くなることを。

「俺はどこにいても、ルイ・バウアーです。これだけは何度でも誓います。必ず、あなたのもとへ戻ります。リノルアース様」

そっと小さな手を持ち上げて、その指先に口づける。

窓から差し込む月明かりだけが憎い演出だ。それはまるで物語のワンシーンのようで、絵画のように美しい光景だった。

リノルアースはじつとルイを見つめ、そして口を開く。

「前に……言ったわよね？ 五年。いえ、三年よ」

その凜とした声に、ルイは顔を上げた。

ルイがリノルアースの顔を見つめると、そこにはいつも通りの強い眼差しがあった。

「三年しか、待てないんだから。いくらなんでもそれ以上お父様達が黙っていてくれるとは思えないし、どうせなら若くて綺麗なうちに結婚したいし」

リノルアースの小さな手がルイの手を握り締める。そのぬくもりがいとおしくてルイは頬の筋肉が緩んだ。

そんな未来を描いてくれているのか、と。

姫は十五歳で結婚することもある。五年後は 嫁いき遅れとも言われるかもしれないし、リノルアースほどの美貌のものなら三年後でも婚約しないのは異常と言われるだろう。それでもたぶん、何歳でも花嫁衣裳のリノルアースは綺麗だろうな とルイは思わず想像して微笑む。

「だから、さつさと問題を片付けて、早く帰ってきなさい」
はい、と考えるよりも先に答えは出た。

噛みしめるようにその言葉を胸の中で反芻し、そしてしっかりと頷く。

「はい。リノルアース様」

そう誓って、もう一度リノルアースの手に口づける。今度は手の甲に。

「……それで、何か感想はないの？」

リノルアースが不貞腐れたように呟く。

ルイが首を傾げて「何がですか？」と言うと、足を踏まれた。

「ドレス！ あんたの為だけに着たのよ！？ 綺麗だとか見惚れただとかとにかくなんか気の利いたこと言えないのこの口は！？」

足を踏んだ上にリノルアースはルイの頬を千切れんばかりに引っ張った。

「いはいつ！ いはいれすりのるひやまつ！」

「うるさい！ 当然の報いよ！ 鬱陶しい口説き文句はごめんだけどたまには褒めたっていいでしょうが！！」

それでもかとルイの頬を引っ張り、そしてぱつと放す。痛む頬を撫でながらルイは抗議すべきか否か考え、やめた。

「……正確には、このドレスを着たりノル様を見たのって俺だけになるんですね」

各国の王子が見惚れていたのはアドルバードで、本物のリノルアースではない。

「そうよ？」

「最高の贅沢ですね、あなたを独占できるなんて」

大陸の花とも謳われるその人を、とルイは微笑む。真正面から褒められたリノルアースは顔を真っ赤にして黙り込んだ。

「リノル様？」

褒めたのに、とルイがリノルアースの顔を覗き込もうとすると今

度は鉄拳が飛んできた。

「な、なんでですかっ!？」

「あ、あんたね！　タチが悪いのよ！　自覚がないからなお悪い！」
どうして怒鳴られるのか分からないままのルイはどうか飛び出してくるリノルアースの鉄拳をかわし、ついにその手を掴む。

捕まったりリノルアースはバランスを崩してルイの胸に倒れこんだ。そのままリノルアースとルイは倒れこみ　結果的にはリノルアースがルイを押し倒したような形になった。

「いたた」

ルイは背中を打ちつけ、小さく呻く。一方リノルアースはルイをクッション代わりにしたおかげで無傷だ。

大丈夫ですか、と問いかけようとしたルイの視界が金色に染まった。

それは赤みがかった、綺麗な金色だ。ルイが何度も目で追ってきた色。

言葉は喉の奥に飲み込まれた。ルイが言葉を紡ぐ前に、その唇に柔らかい何かが重なる。

「　　っ！」

見開いた目に映るのは綺麗な顔だけだ。

状況を把握している間に、ぬくもりは去った。

リノルアースはルイの上に乗ったままその顔を見下ろす。

「浮気したら、ただじゃ済まないと思いなさい」

そう言い残してリノルアースはさっさと部屋から去って行った。まるで嵐のようだ。

ルイは混乱した脳を整理して　天井を見上げたまま、唇から去ったぬくもりを思い出して赤くなる。

こんなの。

「　　やり逃げじゃないですか」

65：叶えてみせる

脱いでしまうのは少しもつたない気がして シェリスネイアはパーティに着たドレスのまま、ぼんやりと夜が更けるのを待っていた。

朝になれば、明日になれば この国ともお別れだ。あの騒々しい双子とも、それに付き添う美しい騎士にも。

そして、初めての恋とも。

もう、二度を会うことはないだろう。彼と自分は、似ていても住んでいる世界が違う。

きゅ、と唇をかみしめて涙を堪えた。

浮かんでくる欲望を握りつぶすように目を瞑った。

これではいけない。

このままではあの汚れた国に帰れない。

ふう、とため息を吐き出してシェリスネイアは立ち上がる。突然部屋から出ようと歩きだした主人を見てあわてた侍女に「散歩よ」と笑って部屋から出た。

廊下は部屋の中よりもずっと気温が低い。南国育ちのシェリスネイアには刺すような寒さが、今はちょうど良かった。それくらいの方が余計なことを考えなくて済む。

窓の向こうは故郷とはまるで違う世界が広がっている。振り積もる雪が夜の世界を白く浮かび上がらせていた。

「雪のように」

跡形もなく消えてしまえたら 何度そう願っただろう。

なのにあの双子は見事にシェリスネイアの計画を潰してしまった。その上、シェリスネイアの罪を見てみぬふりをしている。

故郷に戻ればあるのは身内同士の醜い戦争だけ。

そしてたぶんシェリスネイアはヘルダムとルイに守られて、大切にされて サジムから隔離されるだろう。しかしサジムも裏切り者を許すような人間ではない。しばらくは安心できない日々が続くだろうなとシェリスネイアは苦笑した。

「シェリスネイア」

突然聞こえた声に、シェリスネイアはびくりと震えた。

いつまで経ってもその声に名を呼ばれるのは慣れない。他の誰とも違う、ほんの少し特別な感じの響き。

「……何してるんだ、こんな場所で」

慌てたように駆けよってくるのは シェリスネイアが一番会いたくて会いたくなかった人だ。

「少し、散歩をしていただけですわ。あなたこそこんな時間に、どちらに行かれるつもりなのかしら？ ウイルザード」

もうパーティーは終わった。あとはそれぞれ余韻に浸っていることだろう。

「散歩ねえ……それにしたってまだ着替えてなかったのか」

風邪ひくぞ、とウィルザードは慣れた様子で上着をシェリスネイアの肩にかける。断るタイミングを逃して シェリスネイアは頬を赤く染めながらそのぬくもりに包まれた。

「こんなドレスを着るのも今日で最後ですもの。少し、もったいなくte」

アヴィランテとはまるで作りの違うドレスに最初は戸惑ったものの、慣れるとその美しさには年頃の乙女同様、心躍るものがある。

「まあ、確かにもつたいないか」

ウィルザードが柔らかに微笑みながら、シエリスネイアを見つめる。

その視線にいたたまれなくてシエリスネイアは視線を床に落とした。そんなシエリスネイアをじっと見つめて　ウィルザードは口を開いた。

「……アヴィラには、キスが挨拶なんて習慣はないよな」

その声にシエリスネイアの肩がびくりと震えた。むしろそんな習慣があるのは北の方で　それも挨拶程度は頬にキスと決まっている。

あのあと、どうにか追及から逃れたというのに、こんなところで捕まってしまうなんて。

「あのキスの意味、聞いてもいいか？」

最後だったから。

それで最後にするつもりだったから。

下手すれば死ぬかもしれない賭けだったから。

淡い恋の名残が欲しかった。

何もないままこの想いを枯らしてしまうのは、どこか寂しかったから。

シエリスネイアは床を見つめたまま、熱くなる頬をこの冷たい空気が冷やしてくれないだろうかと願った。

「理由なんて、聞いてどうなさるおつもり？」

口調だけは弱々しくならないように虚勢を張った。いつもどおり

の自分を演じなくてはすぐに足もとから崩れてしまいそうだった。
「どうせ、もう会うことはないでしょう?」

自嘲的に笑うシェリスネイアの顔は、ウィルザードには見えない。
ウィルザードは手を伸ばし　シェリスネイアの小さな手を掴む。
シェリスネイアの視界でその二つは繋がれていた。

何の用だとシェリスネイアが顔をあげると、ウィルザードは苦笑した。

「まあ、聞かなくても分かるけどな」

繋がれていない手がシェリスネイアの頬に触れた。壊れものを触るような優しいそのぬくもりに、シェリスネイアは縋りつきたくなる。

「俺が好きだろう?　シェリスネイア」

なんて傲慢で、なんて不敵な笑みだろう。

何故か涙があふれてきて、シェリスネイアの黒い瞳が濡れた。

「だが、あなたなんて」

否定しようとしたのに、ウィルザードはまるで本気にしてくれない。

「好きだろう?」

続けられた同じ問いに、シェリスネイアの涙腺は崩壊した。

頬に触れる手が優しくその涙を拭い、それでも止まらない涙を唇が掬いとった。目元におりる優しいキスに、シェリスネイアは酔うように目を閉じる。

唇におりたぬくもりを、シェリスネイアは拒まなかった。

誰も来ない寒い廊下で、ウィルザードに抱きしめられながらシェリスネイアはどうにか泣きやんだ。

誰かに見られたらなんていう心配は、どういうわけか吹き飛んでしまっていた。

「ネイガスに来ないか。国王妃でもないし、もしかすると公爵あたりになるかもしれないけど。今までのような暮らしはさせられないし、アヴィラよりずっと寒いけど」

ウィルザードが優しく髪を撫でながらそんなことを呟く。

「争いとか、そういうことのまるでない暮らしをしよう。どこかの領地にでも引っ込んで 子供を育てて、晴れた日にはのんびりと日向ぼっこなんかして、雪が降ったら手をつないで散歩したり そういうありきたりで幸せな」

なんて贅沢な夢だろう そう思えばシェリスネイアの瞳にはまた涙が溢れてくる。

サジムがいる限り、そんな生活は送れないだろう。しかしいつか、そう遠くない未来にヘルダムが王座に座る時が来たら 叶うだろうか。そんなささやかで贅沢な夢が。

否、たぶんあの双子なら言つのだろう。

「叶えてみせると」

ただ自分の大切な人達が最高に幸せな未来を手に入れるために大國さえも動かす彼らならば。

いつか、とシェリスネイアは呟く。

「いつか アヴィラの情勢が整って、その時の国王陛下からのお許しがあつたなら」

微笑むシェリスネイアと見て、ウィルザードは困ったように笑う。
「そう長くはないでしょう。それまでにあなたは少しでも私が嫁げ

るような、大きな男になっていてくださいな」

「難しい注文だな」

苦笑しながら、ウィルザードはシェリスネイアの額に口づけを落とす。

たぶん

叶わないほど贅沢な夢ではないはずだ。

66：この屈辱は三倍にして返してやる

空はよく晴れていた。見上げれば冬独特の薄い青が広がっている。

まだ人が起きだすには早い時間に、アヴィランテへと向かう者達はハウゼンランドを発つことになった。遅くまで騒いでいた王子王女、一部の騎士達はまだ夢の中にいることだろう。

「この国での短くも充実した日々のこと　私は生涯忘れませんわ。改めて言わせてくださいな。ありがとう、リノル。アドルバード王子」

思わず見惚れてしまいそうなほど綺麗な笑顔でシェリスネイアは感謝を述べた。

「いつかまた来ればいいわ。歓迎するわよ？」

リノルアースが悪戯そうに笑うと、シェリスネイアもつられて微笑み返す。

「そうね、今度は厄介事がないときに」

それでのんびりしましょう、とシェリスネイアはくすくすと笑う。まったくだと言いたげにリノルアースもアドルバードも顔を見合わせた。

「厄介事を持ってきたのはどこのどいつよ、もう……。国に戻ったら大変だろうけど、元気で」

それはリノルアースとしては不器用ながらも最高に優しい言葉だった。シェリスネイアも分かっているのだろう、リノルアースに微笑み返した。

「シェリスネイア」

行くよ、とヘルダムが声をかける。後ろ髪を引かれるようにシェリスネイアはウィルザードを見つめ　淡く微笑んだ。

「待つて、いて良いんでしょう?」

あなたを。

シェリスネイアの言葉に、ウィルザードは少し照れながら一度頷く。

「……今のこと、シェリスネイアをネイガスに行かせるつもりはないからね?」

ヘルダムが背筋が凍るような笑顔で低くウィルザードに囁く。当面の敵はこの人か、とウィルザードは苦笑しながら腹を括った。

「では、俺も行きますね」

ルイがアドルバードやレイに簡単に挨拶を述べ、二人とも驚くほどにあっさりを見送った。やはりディークは見送りに来ていない。

「……リノルアース様」

最後にルイはリノルアースの前で止まる。

リノルアースは俯いて、ルイの顔を見ないようにしているようだった。先ほどから一度も目が合っていない。

昨夜の襲撃に近いキスのせいか、それとも別れが辛いのか。

どちらにしてもルイが遠慮する理由ではない。奪われたままというのも男として問題だろう。

「リノル様」

優しくリノルアースの頬に手を伸ばしながらもう一度名前を呼びびく、とリノルアースが怯えたように震えた。

どうしてこの人はこういうときに、こんな可愛くなるかな、とルイは苦笑した。これは拳一発では済まされないことになりそうだ。

それでもここで引き下がるつもりはない。

「 仕返しです」

半ば強引にリノルアースの顎を上げ 青い瞳と目が合う。そのまま反論を聞かずに唇を重ねた。

「んなっ！」

アドルバードの声が聞こえたが、途中で途切れた。おそらくレイに口を塞がれているに違いない。邪魔にこないのもレイがアドルバードを止めているからだろう。

心の中で姉に感謝を述べつつ ゆっくり十秒数えて、離れた。

「 っルイ！！！」

リノルアースが顔を真っ赤にして手を振り上げるが、それを大人しく食らう必要はないだろうと受け止める。アドルバードあたりからは二、三発殴られる覚悟はあるが。

「 やられたからやり返したまですよ。うちの家の教えの一つですから」

リノルアースは怒っているのか激しい照れ隠しなのか分からない顔でルイを下から睨んだ。

「この屈辱は三倍にして返してやる」

不吉なセリフだなあ、とルイは内心で汗を流しながら平静を装った。

「どうぞ？ 同じ手段なら喜んで受けますか？」

「あんたを喜ばせるもんですか！ あらゆる手段を駆使してあんたの評判を地の底まで落としてやるから！」

「あー……それはアヴィラの問題が片付いてからにしてみられますか。一応俺ハウゼンランドの後ろ盾があってこそアヴィラに戻れるんで」

そこが一つの『ルイ』の価値でもある。

「当たり前でしょう。そこまで馬鹿じゃないわ。問題片付いても縁談なんてこないように悪い噂をたつぷりと流してやる」

理解があるあたりはリノルアースだな、と思いながらルイは後半のセリフをきちんと理解して微笑む。

「……何笑ってるのよ」

リノルアースの頬はまだ赤く、下から睨まれてもあまり迫力が無い。

「いえ。約束、忘れないでくださいね？」

平手を受けたまま握っていたリノルアースの手を持ち上げて、ルイはその指先に口づける。

「っ……もうっ！ いいかげんにとつと行きなさい！」

照れた顔をこれ以上見られたくないのだろう、リノルアースはルイを突き飛ばしてヘルダムやシェリスネイアのもとへ追いやる。

くすくすと笑いながらシェリスネイアの隣に立つと、呆れたような声の下から聞こえた。

「……お熱いことですね。お兄様？」

兄と呼ばれたことに少しまだ慣れないが　ルイは兄の顔でシェリスネイアの頭を撫でた。

「お互い様、でしょう」

敬語がまだ抜けないのは大目に見てもらおう。これからいくらでも直す時間はある。

シェリスネイアは照れたのか黙り込む。本当にそういうところはリノルアースと似ているな、とルイは微笑んだ。

「そろそろ出発してもいいかな？」

待ちくたびれたようなヘルダムの声が合図になって、馬車に乗り込み始める。

ルイは一度だけ振り返ってリノルアースに微笑んだ。泣き出しそうな顔を無理やり笑顔に変えているリノルアースに、いとおしさが込み上げてくる。

戻ります、必ずあなたのもとに。

心の中でそう確かに誓い　馬車の中へと入る。

馬車が動き出し見えなくなるその時まで　ルイとシェリスネイアは小さな窓の向こうの愛しい人を見つめ続けた。

「てつめえふざけんなルイ　！！　人の目の前で妹の唇奪つていくなあああ！！　待てこの野郎一発ぶん殴ってやる　！！」

もういいだろうとレイがアドルバードの拘束をとくと、もう小さくなった馬車に向かってアドルバードはさんざん罵詈雑言を吐いた。

賑やかで騒々しい、切ない別れの朝になった。

67：あなたがいたからこそ

それからほどなく ハウゼンランドはいつも通りの、静かで平穏な日々が続いた。

遠いアヴィランテの国王の崩御の知らせとともに、王座を巡る内戦についての噂が流れついたのは、冬も終わり春を迎えた頃となった。

高齢のアヴィランテ王の崩御と同時に第一皇子サジムが即位することになり、それに反旗を翻したのがヘルダムによる一派だ。国王の崩御自体も高齢による老衰となっているようだが、毒殺という噂さえ流れていた。

結局数か月たってもアヴィランテの王座は空のまま、内戦が激化しているという。

ルイやシェリスネアから便りはない。もちろんヘルダムからも王の『影』の情報によれば、現在はどうか状況はヘルダムに有利らしいということだけ。国内の勢力に加え、外国からの協力を得たヘルダムの勝利はもはや目前にあるらしい。物騒な話の中に、北の小さな国にいた第九皇子ヴィルハザードの帰還はすっかり小さな話題となっていた。

「リノルアース様、お手紙が」

そう言いながら侍女に渡される手紙のほとんどは、一度か二度会ったことがある程度の王子からの求婚だ。いつもはその手紙の束を

受け取らずに暖炉に放り込むのだが　最近では宛名の字を確認することにしている。万が一、侍女さえも見落として『彼』からの手紙があるのではないかと。

しかしそんな淡い期待はいつも裏切られる。

「……燃やして」

ふう、と一度ため息を零してリノルアースは一枚も手紙を残すことなく手紙の束を侍女に渡す。束はそのまま炎の一部となった。

分かつてはいたことだが、ルイがいなくなってからリノルアースはすっかり大人しくなった。ルイの今置かれている状況を考えれば気が気じゃないのだろう。

「……俺、なんか今回地味だなあ」

まるで噂通りの淑やかなお姫様のようになっているリノルアースを遠目に見て、アドルバードはぼつりと呟いた。

「そうでもないですよ」

隣を歩いていたレイは即座に否定してくる。その自信はいつたいどこから、とアドルバードは苦笑した。

「アドル様には、たぶん人を惹きつける何かがあるんでしょう。今回のことも、あなたがいなければ違う方向に進んでいたかもしれない」

「違う方向？」

ほとんど状況に流されるままに問題解決まで進んだアドルバードにしてみれば、随分と過大評価されているように感じる。

「ええ。例えば　シェリスネイア様はおそらくもつと危険な目に遭っていたでしょうし、場合によれば命を落としていたでしょう。ヘルダム様がハウゼンランドに来ることもなかったかもしれない。そもそも、アドル様がアルシザスと同盟を結んだという功績があっ

たからこそ、シェリスネイア様がこの国にやってきたわけですから」
レイはどこか励ますようにどこか柔らかに微笑んで続けた。

「あなたがいたからこそ、起きた出来事なんですよ。全部」

そう言われればそうなのだろう　そうでないとしても、レイに言われると無条件に嬉しいと思ってしまうのだ。

窓の向こうのよく晴れた空を見つめて、遠い南国に思いを馳せる。

「早く、帰って来るといいな」

誰のこととは言わなかった。

レイも誰とは聞かずに、「そうですね」とだけ答える。

「帰ってきたら一発殴らないといけないしな」

「……まだ根に持ってるんですか」

しつこいですね、とレイが呆れたように言う。この件に関してはレイにも妨害されたので少しばかり恨んでいる。

目の前で妹の唇が奪われて、しかも今現在悲しませたまま放置しているのだ。

「当然の報復だろ」

ふん、とそっぽを向いてアドルバードはすたすたと歩を速めた。

とりあえずレイが帰って来るまでに筋力をつけておこうと心に決める。やり返されるのはまっぴらだ。

それから、さらに数か月　。

「リノル様っ！」

侍女の一人が慌てた様子で部屋に駆けよって来た。
ちょうどリノルアースの部屋にいたアドルバードとレイも驚いて
駆け込んできた侍女に注目する。
その手には、一通の手紙があった。

「……………」

リノルアースの青い瞳が期待に輝く。
どこかほっとしたようにアドルバードは微笑んだ。

待ちに待った知らせは、ようやくその手に届いた。

「……………燃やして」

リノルアースは一読すると、侍女にそう言って手渡した。
「え、リノル様？」

侍女がきょとした顔で慌ててリノルアースに問う。いつもは
忠実に暖炉に放り込むはずの動作がさっぱりだ。

「リノル？ それルイからの手紙じゃ」

「そうよ。どこぞの大馬鹿者からの手紙よ」

侍女が一向に動かないのを見て、リノルアースは手紙を奪いとり、
自ら暖炉に放り込んだ。

「……………何か、危険なことでも？」

迂闊に他人に知られてはいけないようなことでも書いてあったの
か、とレイが真剣な顔で問いかけてくる。

「いいえ。まったく。全然」

「では」

なぜ、とその場にいた者全員の疑問をレイが口にしようとする、リノルアースは憤慨し始めた。

「だってあの馬鹿、自分のことを顧みずにこっちの心配ばかり！しまいには姑のような小言ばかりよ！？こっちがどれだけ心配したと思ってるのよ！」

あまりにもリノルアースらしい理由に全員が呆れる。

「手紙を書く暇があるくらいならとっとと事件片付ろってのよ馬鹿！」

そう返事に書いてやる、とリノルアースは机に向かう。

元気を取り戻したらしい様子にアドルバードはほっと安堵し、邪魔にならないように部屋から出た。

『必ず、戻ります』

手紙の最後はそう締めくくられていた。

嬉しさを誤魔化す為の行動だったなんて、たぶんアドルバードとレイにはお見通しなのだろう。

68：血の縁を上回る出会いもある

アヴィランテは育った場所とはまるで違って、いつも生暖かい風が頬を撫でた。その風の中に鉄錆のような匂いが混じっていることに慣れてしまっている自分に吐き気を感じる。

この手が何度血に濡れようと、ためらうことなくただ目の前の敵を斬り続けた。

それがいつか望む未来を手に入れることになるだろうと信じているから。

「思った以上の働きをしてくれるね、ヴィルハザード」

殺伐とした空気の中でヘルダムは笑いながら話しかけてくる。未だに慣れない『ヴィルハザード』という名前に反応が鈍くなるばかりだ。

「……褒め言葉として受け取っておきますよ、兄上」

ヘルダムを兄と呼ぶことには随分と慣れた。兄弟であるということとを強調する必要がある分、それは欠かすことの出来ない事柄だった。たとえば些細なものなのだとしても。

「平和ボケした国で育ったわりに剣の腕は確かだ。君の養父に感謝しておくべきなのかな」

「ハウゼンランドを馬鹿にするのはやめてください。父はあの国で一番強い人だったんですよ」

馬鹿にしているわけじゃないよ、とヘルダムは笑う。平和であることを求めている彼にとってハウゼンランドはある意味で理想なのかもしれない。

「かれこれ半年経つか。待たせたね」

ヘルダムはいつもの通りの笑顔を少しも崩さずに立ち上がる。

剣を片手に、振りかえり仰ぐのはアヴィランテの王宮だ。王都のほとんどがヘルダムの手に落ちた今、王宮にどう攻め入るべきか考えていたのであって。

「何をするつもりです」

策もなしに王宮へ入ればいくら優勢であろうとも状況は一気に転がる。城攻めは難しいなんてことは大昔の人間でも分かっていることだ。

「総大将を叩くんだよ。これ以上内戦を長引かせるわけにはいい」

ルイはぎり、と歯ぎしりして立ちあがり、ヘルダムの胸倉をつかむ。

「馬鹿なこと言わないでくださいっ！ 無策で行って勝てると思ってるんですか！ 万が一あなたを無くしたら　っ！」

「無駄に考えるよりも、行動が重要だ。見ればわかるだろう？ 民も兵も内戦で疲れ切ってる。これ以上長引けば民が減る一方だ。策を考えている間に国から人がいなくなってしまう。民あってこそその国だ。違うのか？」

確かにほとんど休まることのない戦いの連続で、兵は疲れているし、内戦の中にさらされ続けている民に活気はない。

戦は長引けば長引くほど民に苦痛を強いる。それを分かっているヘルダムは良き王になれるのだろうか。

しかし。

「……あなたの口から、そんな綺麗事を聞かされるとは思ってませんでしたよ」

ハウゼンランドにいる王子ならばまだしも。

そんな言葉が思わずルイの口から零れて、ヘルダムと顔を見合せて笑う。

「伝染っちゃったかな。可愛い王子様のお人好しが」

それがまるで嫌なことではないかのように、ヘルダムはくすくすと笑う。

「全軍の指揮は將軍に任せる。東の裏門から侵入、陽動して。俺とヴィルハザードが正門から堂々と侵入するから」

にこやかな表情のまま告げられたその無謀な作戦に、周囲はどよめいた。

「いくらなんでも危険です！　せめてもう少し護衛をつけるべきだ！」

「正門からなんて　！　狙われに行くようなものですぞ！」

誰もが異を唱える中、ルイだけは黙ってヘルダムを見た。

彼にはなぜか、心の底からの自信があった。

下手に人数を増やした方が目立つ。王宮の抜け道を通って行くから侵入さえできれば問題ない。淡々と、そして笑顔を崩さずに語るヘルダムに周囲も徐々に納得し始めた。

「行くぞ。これでアヴィランテは生まれ変わる」

正門からの侵入は驚くほどあっさり上手くいった。

それもヘルダムの考え通りだったのだろうか　そんなことを考えながらルイは静かに彼の背中を守る。

「お兄様」

人の姿を気にしながら進んでいくなか、美しい声が耳に入る。

驚いたのはルイだけではなかった。ヘルダムも硬直し、突然現れ

た少女の姿に目を丸くする。

「シェリスネイア！ 何をしてるんだこんなところで！」

物陰から姿を現したのは大陸の華と謳われる美少女 シェリスネイアだ。内戦が始まってからというものの、シェリスネイアは安全な地方に送ったはずだった。他の姫は後宮に閉じ込められたままだが。

「こちらの道は駄目ですわ。案内します」

「シェリスネイア」

動揺しているヘルダムに代わってルイが静かに問うと、艶やかな微笑みが返ってくる。

「私、王宮の中は熟知してますわよ？ 小さい頃から誰かさんを探しまわっていましたので」

有無を言わせないシェリスネイアの表情に、ヘルダムも黙り込む。ルイは遠い北国の主を思い出した。

全てが終わったら、手紙を出そう。

たぶんすぐには帰れないけれど。

「 来たか」

しんと静まり返ったその部屋には、王座に座る青年がいるだけだった。

王座のすぐ後ろにあった隠し扉から出てきた人間に、青年 ジムは少しも驚くことなく、振りかえることもなかった。

シェリスネイアは怯えたように一歩後退った。

かちゃ、と腰の剣に触れてルイが一歩前に出た。この男を殺すことで全てが終わるなら、自分が血に塗れることは問題ではない。

「ルイ」

しかし肩を掴まれ、後ろにやられる。

今まで『ヴィルハザード』と呼んできたヘルダムは、この場になってルイの名前を口にした。肩越しに振りかえるヘルダムはぞっとするほど無表情で、その右手には剣があった。

「これは、俺が被るべき罪だ」

そう言つてヘルダムはサジムの前に立つた。

持ち上げられた剣がサジムの首筋に狙いをつける。

「やはり、おまえだけは思い通りにならないな」

サジムは何か可笑しそうに笑いながら、ヘルダムを見上げた。剣を抜く様子も立ち上がる様子もない。

遠くで戦いの音が聞こえた。裏門から侵入した仲間と城にいた兵との戦いだろう。

「シエリスネイア、見ない方がいい」

ルイがシエリスネイアを背に隠そうとして 拒まれた。

「あなたがたが犯す罪から、私だけ目をそらすつもりはありませんわ。私も共に負います」

凜とした言葉を聞いてサジムが笑う。

「殺すなら殺せばいい。しかしアヴィランテは何も変わらない。お前たちの中に同じ血が流れ続ける限り、アヴィランテが浄化される時など訪れはしない」

サジムは自嘲的な、退廃的な微笑を浮かべてヘルダムを見上げた。不吉な予言のような言葉に、ヘルダムは少しも動揺していなかった。

「血のみが全てを示すわけではない。血の縁を上回る出会いもある」
そう冷静に言い返しながらヘルダムは剣を振り上げた。覚悟を決めたようにサジムは口元に微笑を残したまま目を閉じる。

シエリスネイアは背けそうになる自分を無理に抑えつけて目を見

開いた。これからの罪から、少しも目をそらさないように。

振り上げられた剣が、サジムを斬った。
赤い血がヘルダムの身体を染めた。

「……そういう出会いが、あなたにはなかったのだろうね」

少しだけ寂しそうな呟きだけを残して、ヘルダムは静かになった
兄を見た。

外で繰り広げられる戦いの音が、どこかひどく遠いところに感じた。

69：どうか、安らかに

そこは花に溢れるところだった。

内戦は終結し、アヴィランテは徐々に変わりつつある。

ルイは心配をかけただろうと、一段落がついたことを伝える為にもリノルアースに手紙を送ったが『手紙を書く暇があるなら一分一秒でも早く帰れるようにギリギリ働け』とだけ書かれた返事が戻ってきた。そんな言葉も照れ隠しだと分かるようになっていたので、それだけで思わず微笑んでしまった。

「思い出し笑いですか？」

隣を歩くシェリスネイアが微笑みながら問いかけてくる。

「少し、リノル様のことを」

「お手紙がきていたではありませんか。お元氣かしら？」

「……だと思えます」

戦が終わって、昔の感覚が戻ってしまっているのだろうか。直そうと思っているのにも関わらず時々敬語が出てきてしまう。

「なんですか、それ」

「一文しか書いてなかったから」

答えるとシェリスネイアはふ、と笑う。彼女らしいですわね、という呟きに、ルイはただ頷いた。

「……ここですわ」

シェリスネイアが一つの墓石の前に立ち止まった。

寵愛の深い妃なれば大きな廟でも造られるのかもしれない。しかしシェリスネイアの母　ルイの生みの母は、質素ともいえる小さな墓石だった。その墓石を囲うように花が咲いているのはシェリスネイアによる采配なのだろうか。

この小さな石の下に、会うこともなかった母が眠っている。

「……………母上」

こう呼ぶのが正しいのだろう、素直にそう思った。

自分を産んでくれた人だというのに、こうして墓石を前にしても肉親の情はこれといって湧いてこなかった。

しかしこの地に眠る人は、死ぬその時まで自分の帰りを待っていたのだろう。

「ただいま、戻りました」

墓石をそつと撫でながらそう呟く。

養母といい生母といい　つくづく母親には早く死なれる運命なのだろうか　と苦笑しつつ、用意していた花束をそつと地に置いた。

「どうか、安らかに」

それ以上長くいる理由はなかった。

それだけ言う　とルイは立ち上がってシェリスネイアを見る。妹は少しだけ悲しそうに笑いながら隣に並んだ。

二人はゆっくりと歩きながらその場を去った。

おそらくもうこの地に来ることはないだろう　と心の隅で思いながら。

時は瞬く間に流れて消えた。

ルイはアヴィランテの情勢を整える為に奔走し、ヘルダムは新王としてやるべきことがやまほどあった。シェリスネイアはその二人

を影ながら支える日々が幾月も続いた。

対してアドルバードは相変わらずあちらこちらの国々を訪問し、次期国王としての経験を重ねていた。レイはその傍らに常にあったし、リノルアースはそんな兄をからかいながらも支えることで時は過ぎ去った。

寂しさが忙しさで紛れるほど。

離れている時はそう短くなく。

愛しただけは時と同じように積み重なっていった。

ハウゼンランドの冬の始まりはただただ穏やかだ。

雪の気配をほんのりと感じさせる冷たい風が頬を撫でる。

花や草木はしんと静まり返って次に訪れる遠い春を待ちわびて眠りにつき、温室の中で大事に育てられた花だけが季節を知らず咲き誇っていた。

「　　よう、久しぶりだな」

長い黒髪を結びあげ　　リノルアースから贈られたドレスに身を包むシェリスネシアに気安く声をかけるのはネイガスの王子だ。

「お久しぶりですわね、本当に」

厭味たつぷりににつこりと微笑みながらシェリスネシアは振り返る。ウィルザードの頬がひく、と引き攣った。

「随分と待たされましたわ。兄は納得させることができたのかしら？」

兄馬鹿ぶりではヘルダムはアドルバードにも引けを取らなかった。ルイと言えば好きなようにすればいいの一言で、主に説得しなければならなかったのは大国アヴィランテの国王陛下だ。

「どうにか納得したんじゃないか。手紙はそっちにいったら？」

「ええ、もちろん頂きましたけれども。今の今までほったらかしに

されていたわけですし」

「俺の苦勞も考えてほしいところなんですけどね？ お姫様」

小国のネイガスが大国アヴィランテの まして大陸で知れ渡るほどの美姫を手に入れるにはどれほどの苦勞があっただろうか、それはシェリスネイアでも分かる。

ただ少しくらいの意地悪は許されるだろう。それだけ待たされたのだから。

「分かっているつもりですわよ？ ウィルザード」

そう微笑みながら少し背伸びをしてウィルザードの頬にキスを贈る。

久し振りのキスに頬を赤く染める未来の夫を見てシェリスネイアは幸せそうに微笑んだ。その笑顔に、かつて感じた仄暗さも憂いもなかった。

赤みがかった金の髪を繊細に結いあげ、真っ赤なドレスに身を包む。青い瞳は澄んだ空の色で、白い肌は新雪のように瑞々しい。

誰もが目を奪われる美しい姫君がそこにいた。

今日行われるパーティの主演の一人だった。

「リノルアース様」

低い声がその名前を呼ぶ。

しかしリノルアースは振り返りもせず窓の向こうの景色を睨むように見つめていた。

「……リノルアース様」

今度はもつと近くで声が聞こえた。

もう何度も何度も空耳じゃないかと思うほど、思い返した声だ。ふわりと後ろから包み込まれる。力強い腕は、幻ではなかった。

「ただいま帰りました」

耳元で聞こえた生の声に思わず泣きそうになった。

「遅い。待ちくたびれたわ」

涙をこらえて精一杯に憎まれ口を叩く。ふ、と笑う気配が懐かしくていとおしかった。

腕の中で振り返りながら、待ちわびた人の顔を見る。最後に会った時よりも少し大人びていたが、何一つ記憶と違いはなかった。

「……………ルイ」

頬に触れながら名前を呼ぶと、嬉しそうにルイは微笑んだ。

「綺麗になりましたね、リノル様」

「……………当たり前でしょう、何年経ったと思ってるの」

少女らしい丸み帯びた身体はどちらかと言えばしなやかになりもう十分に大人の女性といえるようになった。

「覚悟しておきなさい、アドルが一発殴るって言ってたから」

「……………まだ根にもってるんですか？ しつこいなあ」

くすくすと笑いながらルイは自分の頬に触れるリノルアースの小さな手を包みこむ。

これからは、と呟くと、リノルアースが見上げてくる。指を絡ませて、額と額をくつつける。

「ずっとお傍に、リノル様」

ハウゼンランドの双子は、十八歳となった。

70：それはまるで、何かの祝福のように

長い銀の髪を結わずに背に流している女性を見つけて、ヘルダムは片手を上げる。

ヘルダムに気がついた女性は青いドレスの裾を持ち上げて優雅に礼をする。遠目にその姿を見ている人々の誰もが目を奪われるほどに美しい女性だ。

「久しぶりだね、シリリア領主殿」

「お久しぶりでございます、アヴィランテ国王陛下。領地を授かる名誉を頂きながら、ご挨拶にあがらなかった非礼をお許しください」
丁寧な口調は相変わらずで、しかしその奥底には芯の強さを感じさせた。彼女が守るべきものの為ならば一国の王に剣を向けることも厭わない人間だということは知っている。

ヘルダムは鷹揚に笑いながら「いいんだよ」と答える。

「あれはもともとヴィルハザードの為の領地だったんだ。彼を十六年間保護してくれた貴女にはそれ相応の礼を尽くさないかね。国も安定したし、ヴィルハザードにはもつと良い領地を与えた。そもそも、シリリアは大して良い地ではないんだ」

本当は貴女の父君にあげたかったんだけどね、とヘルダムが苦笑すると、つられて女性も笑う。本来アヴィランテの皇子であるヴィルハザードを保護していたことに対する恩賞は、当然のごとくその養父に与えられる予定だった。しかしその当本人は「そんなもんいらん。やるなら娘にやってくれ。俺には必要ない」とあっさりと辞退してしまったのだ。

「アヴィランテとしては大した土地ではないが　貴女には良き力となっただろう？　名目だけの領地だとしてもね」

実際ハウゼンランドに住む人間にアヴィランテの領地は管理出来ない。それを分かっていてヘルダムは領地管理の為の役人まで派遣している。報告は一応送られてくるが、いちいち指示を出すような

こともないような、何もない地だ。

そんな土地の領主でも、ハウゼンランドでは絶大な力となる。そこからへんの一貴族よりも上かもしれない。

「婚約おめでとう、バウアー嬢」

「ありがとうございます」

ふわりと微笑む彼女を、もはや男と見間違えるものはいないだろう。

もとから美しい人ではあったが、どこか女性らしさが以前よりも増しているような気がした。

「それで、そろそろ始まる時間だと思っけど……主役はどこに行きたんだい？」

この場合はハウゼンランドの双子の誕生日を祝う席だ。リノルアーヌは先ほど会場で見たが、兄の方はどこにもいない。挨拶もまだなただけだね、とヘルダムが困ったように笑うと、レイは苦笑する。

「今頃、痛みを堪えてベットの上で暴れているのではないでしょうか」

「痛み？」

ヘルダムが首を傾げる。レイはただ真面目な顔で「はい」と頷く。

「お会いすれば分かりますよ。では私は主役を迎えに行きますので」

そう言うレイは踵を返し、背筋をぴんと伸ばして歩いて行く。

その姿に何人の男性が目を奪われているか、本人は気付いているのだろうか。

その背中を見送りながら、ヘルダムは懐かしむようにハウゼンランドを初めて訪れた冬を思い出す。

窓の向こうから雪の気配は感じない。澄み渡った空がどこまでも広がっている。今夜はたぶん綺麗な星空が見えるだろう。故郷のアヴィランテほど強くない日差しはただ人々に優しい。

それはまるで、何かの祝福のように。

「いっ…… たたたたたたたたっ！！」

レイがアドルバードの部屋に入ると、彼女の主は膝をついて床に蹲っていた。

しかしアドルバードは怪我をしているわけではなく、病にかかっているわけでもない。

「……当たらずとも遠からず、ですか」

ふう、と呆れたようにため息を吐き出してレイはアドルバードのもとへ歩み寄る。アドルバードは足をさすりながらレイを見上げた。

「何か言ったか？」

「いいえ。特に。アドル様、ご衣裳が汚れてしまえますよ」

そう言いながらレイはそっと手を差し伸べる。

昔なら迷いなくとった手を「大丈夫だ」という一言で断る。十八歳にもなつて女の手を借りて立ち上がるというのは アドルバードの無駄なプライドが許さない。

「もう始まりますから、移動したいのですが 大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だっ！ 痛みなんてのは根性でどうにかなる！」

きつとレイを睨みあげ、アドルバードは痛みに顔をしかめながら立ち上がる。

濃紺の上着に金の縁取りの施された衣装は、アドルバードの赤みがかった金髪をより美しく演出した。青いドレスのレイと並べば、まるで初めから揃えたかのように隙のない美が完成した。

「…… やつと、か」

そう呟くアドルバードの身長は、レイよりも少し高い。急激に伸びた身長は身体中に成長痛をもたらしたが、その痛みすらアドルバードには誇らしい。

「そうですね、随分待たされました」

「そうだな、待たせた」

悪い、と苦笑して、二人は手を重ねる。ゆっくりとレイをエスコートしながらアドルバードは会場へ向かう。背が伸び始めた頃は歩調を合わせるということも知らなかったから、レイは少し足早になっていた。けれどもうそんなへまはしない。

入口には美しく着飾ったリノルアースが待っていた。

「遅いわ、アドル」

「悪い」

苦笑しながらリノルアースの手をとった。双子の誕生日なのだ、入場はリノルアースと共にしなければならぬ。

名残惜しく思いながらもしばしの間レイと別れる。レイはやんわりと微笑みながら優雅に一礼した。

「十八歳、おめでとうございます。アドルバード様、リノルアース様」

それは淑女の礼ではなく、騎士の礼だった。胸に手を当て腰を折るレイに双子は目を丸くしながら、顔を見合せて微笑む。ドレス姿でも、その方が彼女らしいと思ってしまったことに笑うしかない。レイはそのまま、先に会場へ行ってしまった。

華やかな音楽が流れ始める。

双子が一步足を踏み入れれば、割れんばかりの拍手が起きた。

誰もがリノルアースの姿に見惚れ、アドルバードの姿に魅了されていた。

紳士はどうやってリノルアースをダンスの輪に連れ出すか考え、淑女はアドルバードから誘いはないものかとそわそわしている。

「人気だねえ、王子様もお姫様も」

くすくすと笑うヘルダムの隣でレイはただ冷静にアドルバードを見つめた。その隣に立つレイは少しばかり苛立っているようだ。そ

のルイにもまた淑女からの期待の視線が集まっていることに、本人は気付きもしない。レイとしてはルイとヘルダムが良い牽制になってくれているので余計な誘いを断らずに済んでいる。

「何で婚約発表が最後の最後なんですか。男どもが気安く触ってるし」

「……手の甲の挨拶くらい寛容になれ。しばらく会わない間に随分器の小さい男になったな」

ぶつぶつと怨念のように呟いているルイに呆れてレイはため息を吐き出す。このパーティの最後のダンスで踊った相手が、婚約者に選ばれる。それがハウゼンランドの昔からのやり方だ。だからこうしてレイも大人しく待っているのだ。

「久しぶりなんですから、余裕だってなくなりますよ。……予想以上に綺麗になってたし」

数年ぶりの再会だが、弟は変わっていないらしいとレイは微笑む。双子は社交辞令の為のダンスが延々と続き、それが終われば挨拶へと行く。その様子を見ているだけであつという間に時は過ぎた。

最後のダンスの音楽が始まる。

誰もが王子と姫を見ていた。リノルアースの周囲には紳士の群れが集まっている。そんな群れを掻き分けてルイはリノルアースに手を差し出していた。

アドルバードは淑女達の期待の眼差しを背に受けながら、迷うことなく一人の女性のもとへと向かった。

いつだったか、言いたかったセリフだ。

あの時はアドルバードがドレスを着ていて、レイは騎士服だった。それが今とは別の意味で絵になっていた。

アドルバードは青いドレスの女性の前に跪き、祈るように声を出す。

「
踊っていただけますか？ お姫様」

見上げた彼女は、嬉しそうに微笑んでいた。

70：それはまるで、何かの祝福のように（後書き）

長い間ご愛読ありがとうございました。

これで「可憐な王子の騒がしい恋の嵐」は完結となります。

思えば長い付き合いでした。

勝手に動き出すし勝手に流れを変えるし、とても書きにくい奴らの集まりでしたが、それすら楽しんで書いていたのだと思います。

ここまで自分の生み出したキャラ達が動いてくれる話も他にありませんでした。

最後はずっと考えていたとおりの最後になりました。

可憐な王子様は可憐とは言えなくなり（笑）

でもたぶんこれからもいろいろな面倒ごとに巻き込まれることでしょう。

今後、連載という形での続編は予定しておりません。

「可憐な王子シリーズ」といえなくなりましたし（笑）

短編などで番外編を書くことはあると思いますので、どうぞそのときはまたお会いできると嬉しいです。

最後に。

ここまで読んでくださった方々、応援のお言葉を下さった方々に最大の感謝を込めて。

ありがとうございました。

2009、4月

青柳朔

追記

連載はしません、と宣言させていただいて約一年が経過しました。皆さまの続編希望の声もあり、かつ彼らがまた暴れ始めたこともあり、勝手ながら前言を撤回させていただきます。可憐な王子シリーズ、続きます。

願わくばこれからも皆さまを楽しませることのできる物語でありますように。

2010年3

月 青柳朔

【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（1）（前書き）

本編は完結しておりますが、サイトでやっていた人気投票記念の小説です。

（ちなみに一位はレイです）

【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（1）

長い間見下ろしていた青い瞳が、少しずつ少しずつ近づいてくる度に、少なからず動揺していた。

幼さの残っていた顔立ちはどんどん逞しくなり、少年らしさは徐々に消えていく。その代わりに掌は大きくなり、骨ばってきたような気がする。少年と青年の狭間にいるその人は、この一年と少しで急激な成長を始めた。身長はまだまだ伸びるに違いない。

たぶん、私が見上げるようになるのもそう遠くない未来なのだろう。

「アドル様、起きてください」

レイは寝台の上で寝がえりを打つ主の肩を揺らしながら声をかける。

昨晚遅くまで書類とにらみ合いを続けていたことを知っている分、少し可哀想な気もするのだがこれも仕事のうちと心を鬼にする。

「んー……」

開けられたカーテンから差し込む光に眩しそうに目を細め、青い瞳がレイを捕らえた。

「……もう、朝？」

まだ半分くらい夢の世界に浸っているのだろう、ぼんやりとした声に幼さが残っていてレイは思わず微笑んだ。

「朝です。起きてください、アドル様」

うん、と唸りながら布団の中から手が伸びてくる。以前より逞し

くなつたその手をレイは追うように見てみると、肩に届くほどまでに伸びた銀の髪にさらりと触れてきた。いつもなら一つに束ねているのを、面倒でおろしたままだったことを今さら思い出す。

「まだ、寝てれば良かったのに……おまえも俺につきあつて夜遅くまで起きてたんだから」

アドルバードは見上げたままそう呟く。髪に触れていた手がレイの頬まで伸びてきて優しく撫でるように触れる。

「仕事、ですから。目が覚めたなら着替えてください。アドル様」

レイはアドルバードに動揺を悟られないように平静を装い、さりげなく距離を置いた。

「服は？」

「いつもの場所に用意してありますよ。朝食を用意させますね」

寝台の上で座りながらアドルバードはじつとレイを見ていた。その視線に気づきながらもレイは無視して部屋から出て行く。

「……身長越してからなんて、言うんじゃなかったかなあ……」

アドルバードは髪をかき上げてぽつりと呟く。

その呟きは、レイの耳には届いていない。

アドルバードの身長が急に伸び始めてからだろうか、時々レイがどきりとするような仕草を見せるようになったのは。

ふう、とレイはため息を吐き出してレイは少し寝坊した主のために朝食の準備を頼む。

アヴィランテの姫やら王子に巻き込まれたごたごたを片付けて以来、アドルバードに課せられる仕事は増えた。国王もアドルバード

を後継者として本格的に育てることにしたのだろう。

弟であるルイは未だに遠い南国、アヴィランテで尽力している。長く続くかと思われた内戦は予想よりも短く、現在はヘルダムを国王として新体制を整えている真つ最中だ。

ヘルダムが国王となったことで、新たに領地と領主を選び直された。その中に何故かレイの名前まであった。

曰く、「弟であるヴィルハザードを保護してくれた一族に対するそれ相応の返礼」であるらしいが、その真意は定かではない。かくしてレイは北国の一騎士に過ぎなかったはずが、南国アヴィランテの女領主という地位を得た。

その影響はそれなりに大きい。十五歳から今まで静かだった求婚の声は最近増え始めている。もちろんアドルバードの専属の騎士であるレイの結婚にはアドルバードの許可が必要となるし、アドルバードが自分以外の男で許可を出すはずもない。おかげで十五歳の時よりは断りやすく助かっている。

国際的なハウゼンランドの地位は徐々に高くなり、弱小国という呼び名はそろそろ似つかわしくなくなることだろう。大陸でもそれなりに知られた国となった。

「アドル様、ご用意できましたよ」

寢室の扉を開けて声をかけると、アドルバードは既に着替えて待っていた。赤みがかった金の髪はきらきらと輝き、濃紺の上着はその髪を映えさせていた。身長は今165cmほどだろうか。並ぶとレイは随分と目線が近くなったと思う。

「おまえは？」

「もう既に頂きました」

「……どれだけ寝てないんだよ」

昨夜　というよりも今日の早朝までアドルバードの仕事を手伝っていたレイは、今まで眠っていたアドルバードよりも早く起きて彼を起こしに来ている。必然的に睡眠時間はアドルバードよりも短

い。

「慣れてますから平気ですよ？」

「慣れるなよ……肌荒れるぞ」

寝起きで頬に触れてきたのはその確認だったのか、とレイは納得しながら苦笑する。

「……あまりそういったところは気にしていませんから」

「綺麗なんだから少しは気にしろ」

もったいない、という呟きに少しくすぐったくなりながら形だけ「はい」と答えておく。肌荒れを気にするような性格なら初めから騎士になんてならないということに、この主はいつになっただら気づくだろう？

朝食をとるアドルバードの給仕をしながら、ちらちらとこちらを見てくるアドルバードの視線に気づいてレイはため息を零す。

「どうかしましたか、アドル様」

見ていることに気づかれていたとは思っていなかったのだろうか、アドルバードは慌てて平静を装うが、完全に失敗している。

「い、いや、その　また面倒なこととか起きてないかな、って」

「面倒なこととは？」

首を傾げてレイが問いかえすと、アドルバードはもごもごと口籠りながら視線が泳ぐ。

「ほら、その。求婚とか。最近増えてきてるみたいだったし。断るなら俺の名前を勝手に出していいんだからな」

ああ、とレイは合点して頷く。

「今はありませんよ。もちろん普通に断るのが難しいのならアドル様の名をお借りすることもあるでしょうが」

「……実際、いったい何件あった？」

こちらの様子を窺うようなアドルバードの言葉にレイは思わずおかしくなりながら笑うのを堪えた。

「どこから数えればいいのか知りませんが、少なくとも最近では十数件はきてますね。父が教えていないものの中にはあるでしょうが

ら、もう少し多いかもしれませんけど」

レイの回答に、アドルバードはあからさまにむっとしてパンを勢いよく千切る。行儀が悪いですよ、とやんわりと注意してレイはくすくすと笑う。

「あと七c m……っ！」

パンを握りつぶさん勢いでアドルバードは唸る。すぐ傍にいるレイにもそれは聞こえているのだが、本人としてはそんなことを気にしている余裕はないらしい。

こういうところは以前からまるで変わらないな、とレイは嬉しくなりながらアドルバードを見つめる。

小さな頃から見守り続けてきた男の子は、こんなにも大きくなっ
てしまった。自分の背中を追いかけてきた頃の記憶もあるだけ、その
背中が大きくなっていくのは嬉しくもあり切なくもある。

たった二歳、年長なだけなのに、とレイは苦笑する。

『小さい』時期が長すぎたのだろうか、もしかしたら自分が甘やか
し過ぎたのかもしれない。おそらくアドルバードがアルシザスに
行き、自分で成長する機会がなければこんな状況にもならなかった。
想いを殺したまま、アドルバードに良い縁談を持ちかけただろう。
その覚悟があつたのは事実だ。

『覚悟しておいてね？』

逃がさないから』

アルシザスでリノルアースに言われた言葉を思い出す。

もしかしたらこうなることまで彼女の中で組みこまれた計画だっ
たのだろうか。だとすれば相当な策士だとしか言いようがない。

大事に大事に守っている間は、レイはアドルバードへの想いを告
げようとは思わなかっただろう。けれど主は間違いなくレイの手を
離れ、無理難題を解決し始めている。もちろんそれらには手を貸し
てきたが、アドルバードの力はたぶんレイでは補いようのないも
のだ。

人を惹きつけ、人を動かす。

もう騎士として隣にいらなくても大丈夫だと思えるほどにアドルバードは成長している。

これからは、おそらく

「逃げられそうには、ないですね」

くすくすと笑いながらレイは呟く。

アドルバードは不思議そうに首をかしげてレイを見上げていた。

【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（2）

幼い頃から続いていた関係が恋になった瞬間があったとすれば、やはりあの時だったのだろう。

レイ、何かあったのか？ 最近なんか変だぞ。

隠し通せていると思っていたところにきた、アドルバードの問いはレイをかなり動揺させた。それでも幼いアドルバードに自分の問題を話すわけにはいかないと一瞬にして表情を作る。

「何もありませんよ」

わずかに微笑んで答えると、アドルバードは納得していないようだった。む、とした顔でさらに距離を詰めてくる。

「誤魔化すなよ、騙されないからな。いったい何年おまえと一緒にいると思ってる？」

ああ。

いつの間にこの人は、こんなにも成長していたのだろう。自分の作り出す仮面は誰にも見破れないと思っていた。平静を装えば誰もが納得すると思っていた。言葉を重ねて誤魔化すのは得意

だ。

こんな、一番弱り切っている時に、どうしてこの人にはそれがバ
レてしまったんだろう。

『レイ、覚悟はしておけ。これ以上求婚を断り続けるのは難しいか
もしれない』

難しい表情で父はそう言った。何件も持ち上がった縁談を父は娘
を思つて潰してくれた。しかし弱小貴族のバウアー家にはあまりあ
るほどの家からの求婚を断り続けるには理由がある。

それがないレイには、もうこれ以上逃げるのは難しかった。

だから何も言わずに頷いた。好きでもない男に嫁ぐことには嫌悪
感があるし、何より嫁げば剣を握り続けることは出来なくなるだろ
う。それはレイにとつては生きがいを失うことに等しかった。

何がいけないというのだろう。

ただ私は私のままで、今までと同じようにアドル様やリノル様と
共にいたいだけなのに。

彼らの傍らにいて、彼らの成長を手助けしたいだけなのに。

そのささやかなようで贅沢な願いは到底叶えられるものではない
ということも、賢いレイは知っていた。

あとどれくらいの間、こうしていられるだろう。そんな考えに囚
われながらアドルバードに仕えていた。

まだ十三歳のアドルバードは真つ直ぐにレイを見ていた。

もう誤魔化すことなんて出来ないことくらいは、簡単に察せるく
らいに強い瞳でこちらを見るアドルバードに、目頭が熱くなった。

「……アドル様」

呟いた声はまるで自分のものではないみたいに艶めかしい。
湧き出る感情は数多あり、かつ複雑だった。しかしその複雑な感情はすべてアドルバードという存在で繋ぎあわされる。

傍にいたい。共にありたい。この一生を、この人の傍で終えたい。いとおしくていとおしくてたまらなかった。

王妃なんて大それた地位は望まないから、だからどうか。

この一生をこの人に捧げることをお許しください。

この人のために生きて、この人を守るために剣をふるい、この身を盾にすることをお許しください。

許しを乞うのはただ一人でいい。

自分の中で覚悟が決まった瞬間に、レイは自分の長い銀髪を握り締め、間髪入れずに抜いた剣で斬りおとしていた。

幼い頃よく真似て遊んでいた。

騎士がたった一人に仕えようと、剣の誓いをたてるシーンが頭の中を駆け巡る。

「この身をもって、あなたをお守りします」

アドルバードの前に跪き、恭しく剣を掲げる。この剣の重みがなくなれば誓いは受け入れられる。もし消えなければ。その時は覚悟を決めて、短髪の女でもかまわないという男のもとへ嫁ごう。

「アドルバード様」

自然とそう口にしていた。アドルバードは茫然として立ちつくしていた。

アドルバードは知らないだろう。剣を受け取られるまで、どれほどレイが緊張していたかを。剣の重みが消えた瞬間に、どれほどほっとしたかを。

多くは望まない。この命が尽きるその瞬間まで、傍にいらればいい。

そう、思っていたはずなのに。いったいいつからこんなにも欲深くなつたのだろう。

「レイ」

昔を思い起こしていると、鈴の音のように愛らしい声がレイの名前を呼んだ。

はっと現実に取り戻されれば、目の前にはリノルアースが不貞腐れたように立っている。

「もう。珍しいわね、ぼんやりしちゃって」

すみません、と謝りながら自分でもらしくないと思う。アドルバードは今頃他国の大使と会談している頃だ。送り迎えだけで良いと言われたので傍を離れたところ、リノルアースに捕まったのだ。

「別にいいのよ。レイはたまにそうやってボーっとした方がいいわ」
「少し、昔のことを思い出して……」

苦笑しながら呟くと、リノルアースが目を輝かせて問い詰める。

「あら、昔っていつのこと？」

以前ならからかう対象だったルイがいなくなって暇なのだろう、リノルアースの目はレイを逃がしてくれそうにない。

「剣の誓いをたてた時のことです」

さらりと答えると、張り合いがなくてつまらなかったのかリノルアースがふうん、と呟く。

「あの頃は大変だったんでしょ？ デイクが言ってたけど、実は剣の誓いをたてたのと同じ日にルザードからも暗に求婚をほのめかされたって言ってたし」

「それは初耳ですね」

「どうせ剣の誓いを優先して断ることになったから、話すまでもないと思っただんじゃない？ あいつは本気でレイが好きだったのねえ」
ルザードの想いが真剣なものであったのはそれこそ数年前から気づいていた。だから今さら驚くほどのことでもなかった。

「結局、アドルとルザードが仲悪かったのってレイを取り合っていたのが原因だものねえ」

それも初耳だな、と思いながらレイは紅茶を飲む。

アドルとルザードはそれこそ小さな頃から仲が悪かった。性格が合わないのだろうと思っていたのだが、原因は自分だったのか。

「……………」となると、アドル様は」

そんなに昔から、恋心を抱いていたということになるのだろうか？

「アドルなんてちっちゃい時からレイ一筋じゃない。知らなかったの？」

知らなかったわけではない、小さな頃　それこそ物心つく前から異常なほどに懐かれていたから、好意は抱かれていることくらいは知っていた。

「……………」正直、年下の子供に懐かれている程度の認識しかありませんでしたね」

「あら、じゃあレイってアドルに惚れたのはつい最近なの？」

思いがけぬ方向に話が転がり始めレイは逃げ道を探すが、リノルアースの目は獲物を捕らえた猛禽類の目よりも鋭く光っている。

「……………」自覚したのは、それこそ誓いをたてた時で」

追撃はあるだろうかと警戒していると、予想外にもリノルアースは紅茶を優雅に飲みながらふうん、と呟く。

ほっと胸を撫で下ろしていると、ちょうどアドルバードを迎えに行く時間になっていた。

「時間ですので、失礼しますね、リノル様」

リノルアースは微笑みながらどうぞ、と言う。アドルバードと同じ青い瞳が真っ直ぐにレイを見つめてきたので、レイは首を傾げて「何か？」と問う。

「うっん。ただ、やっぱりアドルは全面的に負けてるんだなあって」
「負けてる？」

リノルアースは頬杖をつきながら艶やかに微笑んだ。誰もがため息をついて見惚れてしまいそうな美しい笑顔だ。

「先に惚れた方が負けって言うでしょ？ アドルはずっと前からレイが好きだったんだから、これはもう一生勝てないわね」

どう返せばいいのか分からず、レイははあ、と呟いて部屋から退出した。

アドルバードという存在がなければ生きていけないと、そう思えるほどになった感情を持つてしても、まだこの勝負に勝っているのだろうか？

【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（3）

「レイ」

アドルバードが講義を受けているはずの部屋まで急ぐと、少し前からアドルバードがやってきた。

「……アドル様」

「珍しいな。おまえが遅れるなんて。先生まで驚いてた」

おかげで少し長引いたんだぞ、とアドルバードは笑う。いつも講義が終わる時間ぴったりに迎えに行くせいだろう。

「リノル様に捕まってしまいました」

ここはリノルアースを言い訳に使わせてもらおうと苦笑すると、アドルバードは何の疑いもなく「だろうな」と笑った。

「大変かもしれないけど、付き合ってやって。あいつもルイがいなくなつて寂しいだろうからさ」

そう言うアドルバードの顔はしっかりと『お兄ちゃん』だ。

それが少し微笑ましくてレイはアドルバードの横顔を見つめる。

「……何？」

アドルバードはその視線に気づいたのか、少し照れたようにレイを見上げながら問う。

「あ、いえ……てつきりルイのことは反対するのかと思っていたので」

あっさりとこのシスコンが妹をルイに渡すとは思っていなかっただけに、二人の仲を容認するようなセリフには少しばかり驚かされる。

「前にも言っただろ。リノルが本気でルイを好きなら、俺が反対なんかしても無駄だよ。どこぞの馬の骨にやるよりはルイにやった方がましだと思うし。やっぱりリノル元気ないからさ、早く帰ってき

てくれた方がいい」

それに、とアドルバードが呟いてから少し黙りこんで俯いた。急にアドルバードが立ち止まったので、レイも合わせて止まる。

「アドル様？」

レイが不思議そうに問うと、心なしか頬の赤いアドルバードはレイを直視できずに呟いた。

「あいつからしても、同じだろうしさ」

その言葉の意味することを考えて　レイは納得した。

可愛い妹を渡す相手の、姉をもらい受けるのだから　まあ痛み分けになるのだろうか。

「……　ルイはアドル様ほどシスコンではありませんけど」

「それはおまえが気づいてないだけだろ！？　あれもそこそこやばいレベルだよ！　あいつの初恋はおまえだぞ！？」

「それを言うならリノル様の初恋も私になりますが」

「それはそれ！」

姉弟の間で初恋のことをを笑話として話せるだけの関係になっているから、ルイにはもはやレイに対する恋情は欠片も残っていないのだろう。確かに普通の姉弟よりは親しいと思っっているが　それは血の繋がりの無さを補うためのもののように思っていたし、もともと家族の結束は強い一家だ。

「どちらにせよ、ルイは私がどこに嫁ごうが異論は挟まないと思いますが」

「……いつも思っけど、レイってルイのこと信頼してるよな」

会話が少し違う方へと流れたことに首を傾げつつ「はい」と素直に頷く。

「しっかりした弟ですからね。昔から」

「……しっかりしてるか？」

アドルバードが不審げに問うてくる。レイは苦笑しながら「しますよ」と答えた。

「少なくとも小さい頃あなたやリノル様が脱走して私を困らせてい

る間、ルイは大人しく家の中で待っていましたからね。昔からどちらかというとアドル様達の方が手のかかる弟妹のようなもので、」
懐かしげに昔を思い出しながら話していると、アドルバードの機嫌が明らかに悪くなっていた。空気の変化に気づいてレイは言葉を途中で切る。

「……………アドル様？」

どうかしましたか、と問おうとすると、アドルバードは仏頂面のままですたすと歩き始める。

「俺は、今も昔もおまえの弟なんかじゃない」

後を追おうとしたレイの足がぴたりと止まる。アドルバードはそんなことおかまいなしにそのまま歩いて行ってしまう。その拳はぎゅっと握りしめられていて、痛そうだった。

やってしまった、と思っただけでは遅い。

レイは口元を手で押さえ、歩き去って行くアドルバードの背中を見つめるしか出来なかった。

弟だなんて、思っていない。今はもう。

それでもアドルバードの機嫌を損ねた原因が分かってしまったと、レイは一步も動けなかった。傷つけたことは確かだった。

「……………やつちやた、って顔ね」

廊下で立ちつくしているレイのところに、呆れ顔でリノルアースがやって来た。

「アドルが私のところに来たわよ。むつれっ面。おおまかなことは聞いたけど、レイはそんなに落ち込むことじゃないんじゃないの

？」

レイの隣に並び、窓の向こうを見ながらリノルアースが問う。

「アドル様を傷つけたのは事実で……」

「傷つくほうが可笑しいじゃないの。レイとアドルはまだ恋人でもないのに。怒る権利はまだアドルには無いのよ？ 大体、昔の話じゃないの」

ま、他の男に比べられたのが嫌だったっていうのもあるかもしれないけど？ リノルアースはレイを見上げながら意地悪そうに笑う。
「余裕ないのよ、レイにはまた求婚がたくさん来てるし。早く身長が伸びないかって内心で焦ってるんでしょうね。変な条件つけたのは自分のクセに」

これ以上のペースで身長が伸びても辛いだけだろうに、とレイは苦笑する。急激に伸びた身長はもれなく成長痛をもたらした。今でも時々のだうちまわるほど痛がっているくせに、それでもアドルバードが目指す身長にはまだ届いていない。

「アドル様が私を一途に見ていてくれた間、私は『弟』としてしか見てなかったんですね」

レイは窓の向こうの青空を見つめながら呟く。

アドルバードがレイに恋している間、レイは手のかかる弟としてしかアドルバードを見ていなかった。その事実がアドルバードの小さな頃からの恋を否定してしまったような気がする。

「恋の始まりなんて、深く考える必要はあるの？」

落ち込んでいるレイの隣でリノルアースは呆れたように呟く。

レイはリノルアースを見つめてただ黙る。リノルアースはどこか大人びた表情で続けた。

「大切なのは今でしょう？ 恋した期間なんて、今の思いの深さには関係ないんじゃないの？」

いつも諭すのは自分の役割だけれど、とレイは苦笑する。恋愛にかけてはリノルアースに勝てるわけがないのだ。

「……アドル様は？」

「部屋から追いだしたから、今頃中庭あたりでいじけてるんじゃないかしら？」

そして部屋から追いだした後でわざわざフロアーしにレイを探してくれたのだろう。

レイはくすりと笑いながら「ありがとうございます」と頭を下げて踵を返す。

「アドル様？」

中庭に行くと、アドルバードの姿は見つからなかった。どこにいるのだろうと歩きまわり 薔薇の垣根に囲われた芝生に寝そべりながら空を見上げている主を見つける。

「……服が汚れますよ、アドル様」

第一声がこんなことになってしまうのは、過去からの習性なのだろうか。レイはアドルバードを見下ろしながら声をかける。しかしアドルバードはレイから顔を背けるように横を見る。完全に不貞腐れているようだ。レイは呆れながら苦笑する。

ここでどんな言葉を尽くして弁解しても、この主には無意味だろう。

ならば。

「……何故そんなに捻くれてるのか知りませんが、こんな女が嫌なら約束は忘れてくださって構いませんよ」

自分でも予想以上に平坦な声が出た。

ぴくりと、アドルバードの表情が固まる。

「けれどその場合、アドルバード様の騎士を続けるつもりはありませんから、どうぞ誓いにそって私を殺してください」

すっとアドルバードの横に跪いて撫でるように呟く。

アドルバードと結ばれて　自分が王妃になるのではないなら。他の女がその場所にいるのをどこよりも近くで見せつけられるくらいならば。剣の誓いを破った罪人として、アドルバードに斬られる方がいい。明確に口にしていないものの、レイが言ったのはそういうことだった。

どれも嘘ではない。

以前ならばアドルバードがどんな女性と結婚しても、傍で守れるのならそれでいいと思っていた。けれど今はもう無理だ。

「ふざっ……けるな!!」

アドルバードは勢いよく起き上がり、レイの手首を掴んで叫ぶ。

「誰がおまえを手放すか！　おまえはどうか知らないけどな！　こっちはずっと前からおまえだけ見てきたんだよ！　それを今さらやっとな手に入るかもしれないって時に諦めるわけあるか馬鹿!!」

予想通りの展開に、レイは苦笑した。

こうすればアドルバードなら怒るだろうと思った。怒って、こう言ってくれるだろうと。

しかしレイの upper body は後ろへと崩れた。アドルバードの肩越しに綺麗な青空が見えて、そこで初めてアドルバードに押し倒されたのだと気づく。

「アド

」

呟こうとした主の名前は、唇を塞がれたことによって声にはならなかった。

【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（４）

呼吸が、上手く出来ない。

以前より重くなったアドルバードを押しつけることはたやすいことではなく、またすぐに反応する余裕もなかった。恋愛面での不意打ちにはいつも弱い。

「んっ！」

唇がわずかに離れた隙に息を吸う。耳に届くのはお互いの吐息だけだ。

青い瞳と間近で目が合い、心臓が一度大きく波打った。青い瞳が再び目を閉じようとしていることに気づき、渾身の力でアドルバードを突き飛ばした。

ふざけるな。

羞恥の後に湧き上がったのは純粹な怒りだった。

身長を気にして、くだらないプライドを守ろうとして、何年もこちらを待たせているのはどの誰だ。それでもそれがこの人の願いならと主従関係で満足しようとしているというのに。

それなのに。

「っ！……最悪です、アドルバード様」

怒鳴ろうとしたのにも関わらず、一瞬にしてその心も冷めた。

悪かった、悪かったとは思っている。けれどこんな不意打ちのよう襲われるのは心外だ。そんなに安い女だとも思っているのだろうか。

弟なんて思っているわけじゃない。思えるわけがない。好きだと伝えたわけでもない。けれど、想いは確かに伝わっていると思

っていた。

しかしアドルバードはこちらの想いを疑った。
こちらの想いを家族への愛情と同じなのだと、アドルバードは思ったということだ。

胸が苦しくなつて、言葉に詰まる。これ以上この場にいるのも耐えがたく、静かに踵を返す。アドルバードは言い返すこともなく、突き飛ばされたまま茫然と見上げたままだった。

「 休暇をください」

アドルバードのもとから去ったその足で、国王陛下の執務室へと向かった。許可を得て部屋に入ってから一番にそう言った。部屋には偶然父であるディークがいる。国王陛下はきょとした顔でこちらを見ていた。

「……突然だねえ、レイ？ でも休暇の許可は馬鹿息子にもらうべきじゃないのかい？」

君の主は私ではなく馬鹿息子のはずだよね？ とからかうように、どこか諭すように微笑む。

「その馬鹿息子様からは許可が下りないような気がしましたので。国王陛下の権限で休暇を頂きたいのです」

馬鹿息子という言葉をもつくりそのまま、きっぱりと即答すると国王は面白そうに笑った。

「どうしてそこまで必要なんだい？」

「貞操の危機を感じるので」

至極真面目な顔で即答すると、国王陛下は年も考えずに大爆笑し

た。

「いいよ、許可しよう。どうせだから好きなだけ休むといい」

「ありがとうございます」

レイは綺麗にお辞儀をする。

「殿下も持った方だな。あれでも年頃なんだし」

くつくつと笑いを殺そうと努力しながら父が呟く。娘が身の危険を訴えているというのに笑うところだろうか。

「レイのおかげで忍耐力が培われたねえ」

父と一緒にあって国王陛下まで笑い始める始末だ。これでこの国は大丈夫なのだろうかと疑問に思うところではある。

面白がる大人達は放置して退出しようと扉へと向かうと 開ける前に扉は勝手に開いた。

「笑いごとではないでしょう！」

そう怒鳴りながら入ってきたんは王妃であるアデライドだった。双子の母親とは思えないほど王妃様は若々しい。髪はいつまでも艶やかで、もともと童顔なのかとてももうすぐ四十歳になると思えない。

「女の子を襲うような子供に育てた覚えはなかったのに！ あなたがあんまりアドルをいじめるから性格が歪んでしまったのではないの！？ しかもそれをデイクと一緒に笑うなんて何事ですか！！」

鬼の剣幕で怒鳴る王妃を前に父も国王陛下も小さくなる。やはりこの国の男は女性に勝てないのだろうかとぼんやりと考えていると、腕をつんつん、とつつかれる。

「悪い方向にいつちゃった？」

そこには可憐な姫君が少しだけ申し訳なさそうに立っていた。王妃を連れて来たのも彼女だろう。

「いいえ、本気の喧嘩ではありませんから」

少なくとも、私は。

「そう？ ……なら、いいんだけど」

あまり納得していなさそうなりノルアースの髪を優しく撫でなが

ら、王妃の説教が始まった部屋から逃げ出す。

「お茶でもどうですか？ リノル様。温室でゆっくり」

リノルアースは少し悩むようなそぶりを見せ やんわりと微笑んだ。

「いいわよ、レイも一緒ならね」

もちろん、レイは答えながらリノルアースと共に花の咲き乱れる温室へと向かう。

怒りはある。

それと同じくらいの悲しさもある。

けれどその感情で想いを見失うほど、自分は愚かではなかった。

紅茶を飲みながらも、リノルアースはまだ窺うようにレイを見ている。

自分のせいで喧嘩させてしまったという罪悪感があるのかもしれない、そんなことを気にする必要はないのに。怒りも悲しみも同じだけあるのに、頭は冷静だった。適確に原因を突き止めようと働いている。

「今まで、あまりにも近過ぎたんですよ」

そう切り出すと、リノルアースがきょとんとした顔でこちらを見た。

「近過ぎたから、相手の想いに深く悩むこともなかったんでしょう。どうせ傍にいるのだから、と」

「……アドルのこと？」

リノルアースの青い瞳がレイを真っ直ぐに見詰めてくる。レイは苦笑して「私のことでもありますよ」と呟いた。

「プライベートと仕事の区別がなかった。一日の大半傍にいたのに」「でもそれは、私とルイだって同じでしょう?」

「いいえ、異性として節度が保たれる程度には距離がありましたよ」緊急時の他にルイがリノルアースの寝室に入ることはなかったし、着替えの時は当然別室で待機していた。入浴の際は危険な時でない限り送り迎えさえしていなかった。

「レイとアドルに節度がなかったということではないと思うけど?」

「それはそうですが、私が悪かったんでしょうね、その点は」

レイは腰から下げている剣に触れながら苦笑する。幼少の頃よりこの国で一番の剣士に育てられ、男にも負けないほど自分の腕を鍛え上げた。

「守る立場だから、油断していたんです。守られる立場の人間が何を考えているかも、分かっているようで分かってなかった。私がアドル様に負けるわけがないという意識もどこにあったのでしょうか」
「対一で、普通に剣で競うのであれば今でもアドルバードに負けることはないだろう。しかしそれだけでは片付かない感情が自分の中にあることをすっかり忘れていた。」

「……そういうことは、アルシザスで学習したんじゃないの?」
同じようなことがあったはずよね、と呆れたようにリノルアースが呟いた。痛い言葉にレイは苦笑するしかない。

「学んだと思っていたんですけどね」

幼い頃を知っていると厄介だ。小さな子供が大人の男になったということに気づくのがどうしても遅れてしまう。

「しばらく、距離を置いた方が良さと思います。家も随分と放置したままですし」

ティーカップをかちゃん、と置いてレイは決心を口にする。

リノルアースはそんなレイをじっと見つめたまま頼杖をしてため息を吐く。

「そうね」

それがいいのかもね、呟いた声はどこか遠い。

父は相変わらず多忙で、同じように自分も家に帰る余裕はない。

出来た弟は出来る限り家に戻っているいろしてくれていたようだが

その弟も今は遠い異国の空の下だ。使用人に任せきりというわけにもいかないだろう。

「会えない時間が想いを募らせるっていうしね……本当かどうかは定かじゃないけど」

リノルアースの吐く言葉の後半はほとんど彼女の不安を声にしたものだったのだろう。

会えない辛さは、たぶんきっと彼女が良く知っている。

【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（5）

「まあ！ お嬢様！？」

馬で一人屋敷に戻ると、古参の使用人の中年の女性が驚いたように声を上げる。

「あらあらまあ！ どうなさったんです！？ 珍しいこともあるものですねえ！ 坊ちゃまはよくお帰りになっていらしたんですけど、お嬢様がお帰りになったのはいったいどれくらいぶりでしょうねえ！！」

こちらが口を挟む余裕もないくらいにおしゃべりなその女性は、それこそレイやルイが小さな頃からこの家で働いてくれている人だ。「今夜は御馳走にしましょうね。お嬢様のお好きなものにしますから」

大変な歓迎ぶりに、実家だと言うのに少し気が引けた。普段あまり帰って来なかったことを改めて申し訳なく思う。

「ただいま、久しぶりだな、マーサ」

「あら、覚えていてくださったんですねえ。城でのお勤めが忙しくて私の名前などすっかり忘れたものと思っておりましたよ」

懐かしい小言に苦笑しながら、レイは上着を脱いでマーサに預ける。

「それにしてもよく王子がお休みをくださいましたね？」

ぎく、として思わず身体が固まる。小さな頃からレイを知っているマーサはその一瞬の変化を見逃さなかった。

「もしかして……無断欠勤ですか！？ いけませんよ！ お仕事はきちんとですね！」

「いや、無断ではない。国王陛下からお休みはいただいたから」

「お嬢様がお仕えしているのは陛下ではなく王子でしょう？」

正論を返されて思わず言葉に詰まる。

「……旦那様のお話だと婚約も間近とのことでしたけど。何かおありに？」

いつの間に婚約どうのこうの話がこちらまで伝わっているんだと呆れつつ、レイはマーサから逃げるように自室へと向かう。マーサがそんなレイを逃すわけもなく、ぴつたりと後ろをついてくる。

「困りますわお嬢様！ このマーサはお嬢様の花嫁姿を楽しみに生きておりますのに――！」

そんな孫の結婚を待ちわびる祖母のようなことを言わなくても。

レイは呆れながら立ち止まり、そして振り返る。身長の高いマーサはレイが見下ろさなければ目が合わない。

「しばらくアドル様とは距離を置きます。もし来訪があっても取り次がないように」

「まあ……倦怠期ですか？」

「……恋人でもないのにどうしてそんな単語が出てくるんですか」溜息を吐き出しながらレイが呟くと、マーサは笑いながら「冗談ですよ」という。

「でも、何かお悩みならマーサにも言ってくださいね？」

優しい笑顔にレイも思わず微笑む。母が死んでからは、マーサが母親代わりだったと言っても過言ではないだろう。

「……傍に居すぎたから、少し離れるだけです」

「左様ですか」

マーサはにっこりと笑ってその場を去っていく。小さな背中なのに、どうしてこんなにも頼りがいのある姿なのだろうとレイは不思議に思った。

「ふざけるな！　どうして俺に断りもなくレイに休暇なんて　！
！」

城内のどこを探しても見つからない騎士を探すアドルバードに、
リノルアースがそつと真実を教えるとアドルバードは父の執務室へ
殴りこみへ行った。

「だってレイが欲しいっていうから」

「だってじゃないでしょう！！」

「娘は貞操の危機にあると言っていたんですがどういことですか
ね、殿下？　どこまでやったんですか」

「どこまでもやってない！！」

突き飛ばされなければ、そのまま突っ走ったかもしれないけ
れども！！　　というか突っ走ってた自信はあるけど！

内心ではかなり焦りながらアドルバードは凶悪な中年男二人に食
いかかる。

「俺はレイにまだ話すことが　　！！」

「……女性を押し倒して、何を話すのかしら？　アドルバード」

ひんやりとした声に、アドルバードの身体が硬直する。その人は
いつもならここにはいるはずもなく、そしてその声は明らかに怒っ
ている　　！！

「は、母上！？」

「そんな子供に育てた覚えはありませんよ、アドルバード。女性に
は優しくとあれほと言いかせて来たのに……　　！　　最近大きくなっ
てきたからって態度まで大きくなつてはいけませんよ！」

助けを求めようと妹を見るが、リノルアースは頑張れとアイコン
タクトするだけで助け舟は出してくれそうにない。

「いや、これは俺とレイの問題で　　」

「恋人でもない女性を押し倒すことは確かに問題ですね？」

あう、とアドルバードは言葉に詰まる。

いつもは穏やかな母親の目が笑っていない。

「確かにね、アドル。時に恋は強引な手管も必要かもしれないけれ

ど？　それも女の子としてはときめくポイントではあるんだけども？　今回ばかりはレイを怒らせたんだもの、間違いだったのよ！」
うっ、はい、ええ、とかとりあえず相槌を打ちながらアドルバードはその場に自主正座する。

確かに　レイが怒るなんてどれくらいぶりだろう。怒らせた。その事実もまたアドルバードには重い。

「…………でも、弟扱いはないだろ」

むす、と思いだしてアドルバードは膨れる。しかも実の弟以下と言われたのだ。おまえは俺のことが好きだったんじゃないのかよ、と愚痴も零したくなる。

「馬鹿アドル」

アドルバードの呟きを聞いていたのだろうか　突然リノルアースが呟いた。

「なんでだよ！　悪いのは俺だけか！？」

「レイも悪いわよ、ええもちろんレイも悪いわ！　でも謝りに行ったのにあんたが膨れて、レイを不安にさせて、しかも押し倒したなんてあんたは最低よ！！」

我慢できなくなったのか、言い返すリノルアースの迫力はこの場の誰よりも凄まじい。

「不安にだつてなるでしょうが！　明確な言葉もないのに求婚は増えるわあんたはチビのまんまだわ！　しかも別に深い意味もないセリフにあんたは激怒するし！！」

「チ、チビのまんまではない！　ちゃんと成長してるよこれでも！！」

「黙りなさいこのヘタレ！　身長なんて気にして馬鹿じゃないの！？　どうせ伸びるもんは伸びるし伸びないもんは伸びないのよ！」

正座しているアドルバードの前で仁王立ちになって説教を始めるリノルアースに、大人達は全員傍観者になることを決めたようだ。アドルバードも言い返しているようだが、明らかにリノルアースが優勢だった。

「しばらくレイとは離れて良く考えなさい！　今回はプライベートと仕事の切り替えが出来なかったことが敗因！　あんたが自分で主従を続けることにしたんだから、そこらへんはちゃんと守りなさいよ！」

ふん、と言うだけ言ってリノルアースはどかどか行儀悪く歩きながら部屋から出て行った。

もはや茫然としてその姿を見送るアドルバードを見て、国王陛下はにっこりと笑って決断する。

「　　でことで、しばらくレイはお休みね？」

家に戻ると、平穏な　どこか物足りない生活が続いた。

自室で本を読み、母の墓へ行ったり、片づけをしようとしてマーサに怒られたり　この家にいるときは必ず父かルイか　母がいた。使用人はいるものの、家族の単位で一人きりでいると、随分と大きな家を感じられた。大した屋敷でもないというのに。

「お嬢様、お客様ですよ」

部屋にいたマーサがそうレイを呼びにきた時も、アドルバードとは取り次ぐなと言ってある以上なんの警戒もなく客間へと向かった。

「　　久しぶりだな」

そこにいる人を見て、レイは目を丸くする。

「……ルザード、様？　どうなさったのですか」

「城への出入りは禁止されているが、おまえに近づくなどとは言われていないからな。こちらに帰っていると聞いて会いにきただけだ」
シェリスネイアの一件での処罰ではそのとおりだ。そんなこともあったな、とレイは懐かしくなった。

「……まだ、あんな男がいいのか」

少し躊躇った後に零れた言葉に、レイは思わず苦笑した。あんな男、が指すのは間違いなくアドルバードなのだろう。

「まだ何も。私にはアドルバード様だけです」

「相変わらずだな」

「ええ」

レイの答えに顔を顰めるルザードを前に、当本人は平然と微笑む。
「アレのどこがいいんだか」

不貞腐れたルザードの言葉にレイはなお微笑む。反発し合うわりにルザードとアドルバードはどこか似ている。

「どこが、なんて。人を愛するのに明確な理由が必要ですか？」

ルザードはそう微笑むレイを見つめて　ふう、とため息を零した。

「……ずるずる引きずるのももう飽きた」

低く呟く言葉は、どこか覚悟を決めた人のそれで。

真っ直ぐにレイを見つめる瞳は、以前のような軽薄は雰囲気はない。根は真面目な人なのだと知っていたから、レイはこれといって驚くこともなかった。

「俺は、おまえが好きだったよ。レイ・バウアー」

どこか悲しげに、切なげにルザードは呟く。本当に、という小さな呟きはレイの耳に届くことはなかった。

「……知っていましたよ」

だろうな、とルザードは苦笑する。すつ、と立ち上がりながらレイの傍へと歩み寄る。

「その警戒心のなさ、少し直した方がいいぞ」
そう言うのが先か否か。

柔らかい唇が、レイの額を掠める。

「　　っ！」

反射的に身を引いたレイを、ルザードは少し悲しげに、どこか悪戯に成功した子供のように笑う。

「これで最後だ。これくらい許されるだろう」

そう呟く顔は泣きだしそうな子供のようにも見える。レイは咄嗟に何も言えないまま　部屋から出て行くルザードの背中を見つめるだけだった。

【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（6）

「どここに行くつもりかしら？ アドル？」

ひんやりと背筋が凍りそうな妹の声に、アドルバードは思わず立ち止まる。

「い、いや、ちょっと散歩に……」

自分でも目が泳いでいるのが分かった。これでは最強の妹に気づかれないわけがない。

「……散歩？ へえ？ それにしては随分荷物があるような気がするんだけど？」

「す、少し遠くまで行こうかなあとですね」

「それは散歩？ 行き先はバウアー家かしら？」

リノルアースにしては直球すぎる質問にアドルバードは硬直した。そしてまずいと思った時にはもう遅い。

「アドル？ レイとは距離を置くように言ってたわよね？ 言うこと聞けない子は嫌いよ？」

明らかに妹が言う言葉じゃないだろうと思いつつ、アドルバードは抗議すべく振り返ってリノルアースを見下ろす。

「そんなこと言ってももう一か月以上経つぞ！？ いいかげん会いたくもなるだろうが！」

主に俺が。そんな心の声までは声にしない。

リノルアースはじつと兄の顔を見上げ、そして聞こえるか聞こえないか微妙なくらいの小さな声で呟いた。

「……まだ、たった一か月じゃないの」

その小さな呟きは確かにアドルバードの耳に届いた。

切ないような悲しいようなその呟きに、アドルバードは胸が締め付けられるような気持ちになった。

そうか。……そうだよな。

おまえは、いったいどれほど会えていないのだろう。どれほど声が聞けていないんだろう。会いたいからと会える距離に、その人はいない。

「悪い」

ぎゅ、とリノルアースを抱きよせて呟く。間違いなく今の自分は無神経だった。

まだ一か月。そう言えるほどに、リノルアースは彼を待ち続けているのだ。今までも、そしてこれからも。

「……アドルが謝ることではないと思うけど」

「うん、でもごめん」

背が伸びた自分の腕の中で、リノルアースは不安になるほど華奢だ。優しく髪を撫でてやると、リノルアースは珍しく甘えるようにすり寄ってくる。

愛しい人が傍にいないことがこんなにも苦しいなんて。そんなこと、今までまるで知らなかった。

しばらく休暇をくれと言ったものの。

レイはどれほどこの状態を続けたいのか分からなかった。

もう一か月以上が経っている。自分としては一、二週間で戻るつもりだったのに、一週間経った頃にリノルアースから帰還拒否の手紙が送られてきた。

『アドルのために、しばらくそうしてなさい』

そう書かれた手紙は、つまりはレイのためでもあるのだろう。

しかしその『しばらく』がどれほどなのか、困り果てている。

怒りなんてもうどこかへ行ってしまった。今はむしろただ会いたい。傍にいたい。そんな願望だけが身体の中で悲鳴を上げている。

「……駄目だな、本当に」

苦笑まじりに呟いて、窓の向こうを見る。

まるでもう彼の存在が身体の一部みたいだ。無いと苦しい。呼吸も上手く出来ない。声が聞きたい。あの綺麗な赤みがかった金の髪に触れたい。欲は際限なく湧き出て、自分の心を締め付けるように渦巻いている。

これが、弟への感情なわけありますか。

これが恋であると、以前のレイならば迷いなく断言することは難しかったかもしれない。だってこれが初めて持つ感情だから。比較するものがないから、間違いなく恋心であると決めつけるには経験が足りなさすぎる。

でも、今はもう自信を持って言えるだろう。

例えばこれが主従関係の延長線上の想いなら。これが家族愛の派生であるのなら。

会えないという、ただそれだけでこんなに胸が苦しくなるわけがないのだ。

傍にいないという、ただそれだけで、泣きそうになることがあるなんて。そんなことを、知らなかったのだから。

「お嬢様、お届け物ですよ」

マーサがノックをしつつ、大きな荷物を抱えて部屋に入ってきた。
「荷物？」

「ええ、リノルアース姫からですね」

添えられてたメッセーじカードの差出人の名を見ながらマーサが答える。

「リノル様が？ いったい何を……」

送られてきた箱は全部で三つほどある。その中の一番大きな箱を開けて、レイは絶句した。

「あらまあ！ なんて素敵なおドレスでしょう！！」

マーサが嬉しそうに頬を赤く染めて歓喜の声を上げる。箱の中にはそれは美しい 深紅のドレスが入っていた。裾には透かしが施されていて、中にある紫色の布が透けるようになっていた。透かしの模様は薔薇のようだ。触るだけでも高級品だと分かるそれに、レイは冷や汗を流した。

今まで、確かにドレスを着る機会は何度もあった。騎士になる前は夜会に出ることもあったし、騎士になってからも時折ドレスを着た。

しかしレイの好みはシンプルなもので、色合いはいつも緑や青といった地味なものだった。それでもレイの銀髪を充分に際立たせるものだったので、注目の度合いは強かった。赤やピンクなんて色はレイが苦手とする色だ。嫌いというわけではない。ただ自分には似合わないだろうという意識が強いだけで。

「あら、こちらは靴と、髪飾りですよ！ なんて素敵なお贈り物でしょうねえ！」

そう言ってマーサがとり出した靴も髪飾りも、ドレスに合わせた逸品なのだろう。下手をすればバウアー家の年の収入の三分の一は吹き飛ぶ。

「な、何を考えて　！」
どうにか冷静さを戻したレイは、添えられていたカードを開く。
綺麗な字はまさしくリノルアースのものだ。

『王子の婚約者として、これを着て城へ来ること』

その下にはあと一か月後の日付が記されていた。

「　　ねえ、お父様」

リノルアースは微笑みながら父の執務室で紅茶を飲む。

「どうしたんだい、愛娘」

「アドルバードは今一六九ｃｍまで伸びたわ。あと一か月で五ｃｍ
近く伸びると思う？」

まるで賭けをするようなリノルアースの声に、国王は笑みを深める。
この娘は実に自分に似てしまったなあ、と嬉しく思う反面少し
将来が不安だ。

「成長期だからなあ、伸びるだろうね」

「そう？　そうよね？　良かった。それじゃあ外堀から埋めてい
かないと」

不穏なセリフに苦笑しつつ、書類に目を通しながら問う。

「何を企んでいるんだい、愛娘？」

まるで秘密の作戦を企てているような声に、リノルアースがふふと笑う。

「逃げられないようにしてるの」

「何となく予想はついているけど、何がだい？」

顔をあげてリノルアースを見た父に、つこりと極上の笑みを向けながら、リノルアースは呟く。

「綺麗な綺麗な、月の姫を」

逃がさないと、もう宣言はすんでいるけれどね。

【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（7）

リノルアースが策略を巡らせる中　アドルバードは誰の陰謀か、他国訪問の仕事が入り、近隣の国へと旅立った。護衛にとつけられたのはデイクだ。精神的な意味で重苦しいことこの上ない。

「なんですか、殿下。気力がありませんな」

「長いこと補充してないから。……詳しくつつこむなよ」

つつこまれるとさすがに恥ずかしい。あまりにも会えないから、元気がないなんて　本人の耳にでも入ったら憤死できる。

「そのわりには、あまり愚痴を聞いていない気がしますかね」

「……リノルはもつと長いこと我慢してるのに、俺がぎゃあぎゃあ騒げるかよ」

ぼそ、と呟くと、デイクは目を細める。

「良い兄君ですな」

「シスコンって言いたいなら言え。遠まわしなのがなんか余計にむかつく」

「厭味で言つたつもりはないんですがね。素直に成長なさって嬉しい限りです。うちの娘はあんなだし、息子もあんなですし」

二人とも少し腹黒いところがあるからな、とアドルバードは言いながらデイクを見る。口ではそう言いながらデイクがレイとルイを心から愛していることを知っている。あの姉弟が素直と言える性格ではないのは確かだが、デイクとしてはそんなことは問題ではないはずだ。

「リノルアース様もアレですから、素直なのは殿下だけですな」

「……ちよつと複雑な気分になるな、それ」

素直と言われながら、同時に単純なのだと言われている気がしてくるのは何故だろうか。

「良いことですよ、それでバランスがとれているんでしょうから」

くすくすと笑いながらディークは言う。褒められているととても
良いのだろう たぶん。

「娘を頼みますよ、アドルバード様。アレは家内が残した忘れ形見
なんでね」

今までアドルバードとレイの関係を茶化してばかりだったディークからは予想も出来ない言葉だった。思わず言葉を失って、ディークを見上げる。身長も随分伸びたというのに、ディークの背を越せる日は遠そうだ。

「……幸せにするって、確約はできないけど」
ディークの言葉をようやく理解した脳を働かせて、アドルバードは呟く。

「それでも、俺はレイを不幸にはさせたくない。俺が出来る限りのことは何でもしたいって思うよ」

慎重に選ばれた言葉に、ディークは目を細めた。

「それで、いいんですよ」

他国の訪問は一週間と少しで終わった。

最近では王子としての仕事も増えている。外交にも慣れたもので、着実にアドルバードは周囲が認めるほどのハウゼンランドの『後継者』になっている。

「あー……帰ったらすぐに何かパーティがあるんだっけ？ めんどくさいなあ」

馬車の中でぼやきながら窓の向こうを見る。

時期的にパーティやら夜会の多いシーズンだ。貴族連中は張り切って社交界に乗り出す。それはもちろん城でも例外ではなく、たまにはこうしてパーティを開くこともあるのだ。

「まあ、それも殿下の務めですからな」

「分かっているよ……レイみたいなこと言うな」

会いたくなるだろ、という言葉は飲み込んだ。親子だからだろうか、アドルバードの言葉に対する反応がやっぱり似ている。

城に戻るとすぐに着替えさせられた。

パーティが始まるまでもはや秒読み状態で、リノルアースは珍しく青いドレスを着て準備するアドルバードを待っていた。リノルアースが着るドレスはいつも薄紅か、赤か 暖色系の色を好む。もちろん青いドレスでも充分に可愛らしいのだが、どうしたものかとアドルバードは少し心配になった。

たぶん、本人に聞いても「なんでもないわ。気分よ気分」とさうりとかわされるだけだろう。

用意されていた臙脂の上下を着て、リノルアースと並ぶ。

また少し背が伸びたのだろうか。ヒールを履いているはずのリノルアースが随分と小さい。最近節々が痛いのは成長痛のせいだと言われたので、身長は確実に伸びているはずだ。あまり実感はないけれど。

「……ふうん。牛乳の効果はあったのかしら」

アドルバードをまじまじと見つめてリノルアースが呟く。

「おまえな。他に何か言葉はないのか。なんでよりによってソレなんだ」

「背の高いアドルってなんか生意気だわ。小さいままでも良かったのに」

不吉なことを言うなよ、とアドルバードは呟きつつ、華奢な妹の

手を取る。

二人並んで会場まで行くと、それは人々の注目を集めた。特に背の伸びたアドルバードは貴族の令嬢達から熱い視線を浴びることになって、ようやくリノルアースの苦勞を知ることになる。なるほど、惚れてもない相手から熱烈なアピールをもらってもあんまり嬉しくない。

一曲リノルアースと踊った後で、不機嫌そうな妹を不思議に思つて問いただす。

「どうしたんだよ、おまえこういう場では作り笑いを欠かさないくせに」

「どういうイメージなの、それ。……まったく、来いって言ったのに、遅刻かしら」

後半はアドルバードにはまるで理解できない呟きだった。誰のこただろうと首を傾げるしかない。リノルアースは不機嫌そうにしたまま「まさかすっぱかすつもりかしら」と苛立ちながら呟く。

「おい、いったい何の話」

アドルバードがさらに問い詰めようとしたその時だった。

ざわ、と周囲の空気がざわめく。

どうしたものかと顔を上げ、周囲の注目を集めている先に目を向けて　息を呑んだ。

まだ長いとは言えない銀の髪を綺麗に結いあげ、目を奪われるほどに鮮やかな深紅のドレスを着た長身の女性が、少し息を切らした様子でそこにいた。

ドレスと同じ深紅の髪飾りは銀の髪を温かみある色へと変えていた。白い肌に深紅の色が映えている。情熱的な赤なのに、何故か彼女が身に纏うと朝焼けのような優しさと胸を打つ神々しい印象を持つ。

見間違えるはずがない。

どんな姿をしていても、どれほどの間会っていなくても。自分が、彼女を人混みの中で見つけられないわけではない。

「 レイ」

感嘆のため息とともに呟かれた名前は、ひどく懐かしくて甘い響きだった。

【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（8）

周囲の目など気にせずに、気がつけば駆けだしていた。

一人残されたリノルアースは苦笑しつつ兄の背中を見送った。

会いたかった会いたかった会いたかった会いたかった！

彼女の周囲に集まり始めた男達が邪魔で仕方ない。触るなど大声で叫びたいけれど、身体はそれよりも正直に彼女のもとへと急いだ。大きな会場をこの時ほど恨めしく思ったことはない。

彼女は少し会場を見回して、そしてすぐにこちらと目があった。

その瞬間に照れたように、嬉しそうに微笑むものだから相変わらず始末に悪い。

「失礼」

ダンスに連れ出そうと集まる男の群れの中からすつと抜け出す。ドレスの裾がふわりと揺れて綺麗だ。

「レイ！」

それほど長い距離ではなかったはずなのに、千里も走ったような気がした。

アドル様、とその唇が名前を呟く前に、強引に引き寄せた。

「っ！」

腕の中の彼女が息を呑む。

周囲が騒がしいことなんて気にならない。騒ぎたければ騒げばいい。

「アド、アドル様！」

慌てたように腕の中でレイがもがく。

そんなささやかな抵抗すら許さないと強く抱きしめっていると、レイも観念したように力を抜いた。

「……移動しましょう、それに、顔を見せてください」

そう諭されるように言われて、そう言えば顔はあまり見ていなかったな、とようやくレイを解放する。周囲から集まる視線が痛いくらいだが、それはもう無視しよう。

「エスコートの仕方もお忘れですか？ アドルバード様？」

何なら私がエスコートしますけど。

レイが苦笑しながらそう言う。見惚れていたなんて、そんな正直に言うことも出来なくて誤魔化すように恭しく、それこそ花嫁を連れ出すように、病める時も健やかなる時も一緒になんて誓いに行くように、そつと手を差し出す。

二人が会場から堂々と抜け出したその後で大きな騒ぎとなったことは言うまでもない。

近くの部屋まで移動し、バルコニーに出ると、少し冷たい風が頬を撫でた。

「寒くないか？ 上着貸そうか？」

ドレスはどうも寒そうに見えて仕方ない。実際に着てみるとそうじゃないということは分かるけれども。

「平気ですよ。……久しぶりにコルセットで締め付けられているので少々辛いところですが」

「……どこかに座った方がいい？」

コルセットで締め付けられている苦しみを充分に知るだけに、レイに対する気遣いも増えるというものだ。

「大丈夫です。お久しぶりです、アドルバード様」

ふわりと微笑みながらそう言うレイに、また抱きしめたい衝動に駆られて必死で堪える。

「久しぶり。……それと、ごめん、かな」

「それは、こちらこそ、ですね。お互い様なので水に流しましゅう？」

喧嘩別れしたことなどないので、お互いにぎこちないのは仕方ないだろう。レイの方から出された提案に、アドルバードも素直に飲む。そもそもお互いにもう怒りなんてないから喧嘩なんて続ける意味がない。

「これだけ会わなかったのって、初めて　かな」

物心つく前からレイは傍にいた。小さな頃から彼女がいないと手に負えないほどに泣き喚くことが多かったらしいので、数日と置かずには会っていた。

「アルシザスの誘拐事件以来ですね。あの時は今よりずっと短い期間でしたけど」

「……懐かしいな。会いたかったけど、少し冷静にもなれたかも」
傍にいたことが当り前過ぎて見えなくなっていたものが確かにあった。離れたことで見つけられた想いもあった。

たぶん　リノルアースが伝えたかったのは、そういうことなのだろう。

「そう、ですね。再確認できました」

苦笑しながら呟くレイを見下ろしながら、アドルバードが意地悪げに笑う。

「何を？」

「……気づいていらっしやるようなので、言いません」

レイは照れたように顔を逸らす。ズルイ逃げ方だなあ、と苦笑しながら、今まで気づかなかった目線の違いに気づく。

「……あれ？」

慣れないドレスを着ているせいで、レイは踵の低い靴を履いている。実際の身長に限りなく近い状態なのだろう。

「どうしました？」

じっと見つめていると、レイが不思議そうにこちらを見る。お互い真っ直ぐに見つめあって、いつもにない違和感に気づいた。

「……もしかして、俺、レイのこと抜いた？」

「……そのようですね」

レイも驚いているのか、呆然として呟く。本当にわずかな差だが、レイを見下ろしている。肩のラインはほとんど差がないようだから、たぶん一、二センチくらいの差なのだろうが。

「あ、じゃあこれからいつでもキスでき」

思わず本音が零れると、レイが冷ややかな目で睨んできた。思わず本音の途切れる。

「……ご不満ですか、レイさん」

「そうやって女心が理解できないから今回のようなことになるんですよ。いつでもってなんですかいつでもって。そんなに安いものですか。そうですか。そんなに安い女ですか。ええ別にかまいませんけど私は」

「ええええええいや、違う。違うから！！全然そういう意味じゃないから！！ た、ただ今までよりも少しやりやすくなるなあってそれだけで！」

「やりやすいですか。へえ」

「ああああああの！ 誤解してません！？ なんか激しく誤解してません！？」

心なしか一歩距離が開いた気がするんですけども！！

慌てて弁解をしているとレイは呆れたように笑う。

「……また喧嘩しても仕方ありませんね」

どうやら本格的に機嫌を損ねずに済んだようで、ほっと安堵する。逃がさないようにとレイの腕を掴み引き寄せると、困惑したように見つめられた。そういう顔をされるといろいろと弱いので気づかないふりをした。

「別に安いとかそういうんじゃないから。……ただ主従だったのが恋人だって大声で言えるようになったのが嬉しいってこと」

「……アドル様が妙なことにこだわらなければもっと早くにこうなっていたんだと思いますけど」

「そこは言わない約束……」

いつまでも根に持たれ続けるんだろうかとアドルバードは肩を落

とす。まだあまりない身長差で、こうして密着していると相当近い。そんなことに今さら気づいて動揺した。

「……後悔は、しませんか？」

レイは腕の中で静かに呟いた。

「後悔？　なんで？」

「ハウゼンランドは一夫多妻制ではありませんよ。私を選んでしまったらそれきりです。本当に　本当に、私でいいんですか？」

レイの声は、今ならまだ戻れると言っているようだ。戻ってほしいと彼女は思っているのだろうか。

「何度言わせる。俺はおまえ以外はいらない」

ずつとずつと昔から　それこそ彼女がこちらを向いてくれる前から、ただ一人を見て来たのに。それを今さらになつて、やっと手に入ったその時になつて手放すなんてありえない。

「俺は今までもずつとおまえ一人つて決めていたんだぞ。それが今さら覆ると思うか？」

抱きしめる腕に力を込めると、レイは安堵したように息を吐いた。「覆さないください。これからも」

まだ少し怯えたように背中腕を回るレイがいとおしかった。

身分の差を彼女でも不安に思っただろうか。剣だけでは戦えないような場所にまで連れ出すから。

「……約束する」

ぎゅ、と強く抱きしめて、こちらの体温も想いも何もかも　こうして触れ合う肌から伝わればいいのと思う。

それからどれほどの時が経っただろう。

かつてこれほどまでに甘い時間が二人の間に流れたことはあっただろうか。いや、あるわけがない。

「……………レイ」

小さく名前を呼ぶと、レイは顔を上げてなんですか、と答える。

「えー……………と。その……………」

「なんですか」

口籠もるアドルバードに苛立ったのか呆れたのか、レイはまた同じ問いを繰り返す。

「……………その……………キス、してもいい？」

「……………」

沈黙が重い。

しかしながらついにようやくと、恋人同士になったのだからもちろんアドルバードとしてはそういう欲も湧いてくるわけで。

加えてここ数か月も会えない日々が続いたのでレイ欠乏症はかなり末期だ。

ふう、とレイが呆れたようにため息を吐く。アドルバードはその反応にびっくり、と怯えた。レイを怒らせることに関しては今回のことで完全にトラウマだ。

「アドル様」

「は、はいっ!？」

す、とレイの手がアドルバードの頬まで伸びてくる。ひんやりとしたその手のぬくもりに、あまり長いこと外に居すぎただろうかと思っただ。

「ここは、確認をとるところではないと思いますけど？」

そのセリフが最後まで言われるか否か　少なくとも、その言葉にアドルバードは言葉を返せなかった。

唇に重なる熱に、一瞬だけ驚かされる。そしてすぐにそれを認識すると、放さないようにとレイの頭を支える。冷たい唇が熱を運び、お互いが同じ温度になるまで　『初めて』の恋人としてのキスは甘く甘く脳髓を刺激した。

かくして王子の十八歳の誕生日を前に、ハウゼンランドではその恋人のことで騒ぎになった。

それが王子の騎士であり、アヴィランテの女領主になった人であると噂が広がるまで、そう長い時間はかからなかった。

【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（8）（後書き）

これで人気投票記念の小説も終了です！！

今のところその他の番外編を書く予定はありませんが、いつかリノルメインの本編完結後の話は書きたいなーと目論んでおります（笑

ご愛読ありがとうございました。

ご感想など、一言でもいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8060d/>

可憐な王子の騒がしい恋の嵐

2011年5月8日14時10分発行